

小美玉市

館野遺跡 並木新田台北遺跡

(仮)常磐道石岡小美玉スマートICと
茨城空港を結ぶ道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和3年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

小美玉市

たて の
館 野 遺 跡
なみきしんでんだいきた
並木新田台北遺跡

(仮)常磐道石岡小美玉スマートICと
茨城空港を結ぶ道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和3年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県水戸土木事務所による（仮）常磐道石岡小美玉スマートICと茨城空港を結ぶ道路整備事業に伴って実施した、小美玉市館野遺跡と並木新田台北遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、館野遺跡においては、縄文時代の竪穴建物跡や袋状土坑などが確認でき、当遺跡における縄文時代中期の集落跡の一端が明らかになりました。また、並木新田台北遺跡においては、古墳時代の竪穴建物跡などを確認し、小規模な集落が営まれていたことが明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、小美玉市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理 事 長 柴 原 宏 一

例　　言

1 本書は、茨城県水戸土本事務所の委託により、公益財團法人茨城県教育財團が平成 30 年度に発掘調査を実施した、茨城県小美玉市竹原字館野 209 番地 3 ほかに所在する館野遺跡^{かんやせき}、及び平成 29 年度に発掘調査を実施した、茨城県小美玉市大谷字並木新田台 518 番地ほかに所在する並木新田台北遺跡^{なみきしんたんじやく}の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成 29 年 5 月 1 日～ 6 月 30 日

平成 30 年 1 月 22 日～ 3 月 31 日

平成 30 年 4 月 2 日～ 8 月 31 日

整理 令和 2 年 4 月 1 日～ 12 月 28 日

3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

平成 29 年度

首席調査員兼班長 駒澤 悅郎 平成 29 年 5 月 1 日～ 6 月 30 日

首席調査員兼班長 奥澤 哲也 平成 30 年 1 月 22 日～ 3 月 31 日

次席調査員 内堀 団 平成 29 年 5 月 1 日～ 6 月 30 日

次席調査員 塙 厚宜 平成 30 年 1 月 22 日～ 3 月 31 日

調査員 宮内 良隆 平成 29 年 5 月 1 日～ 6 月 30 日

調査員 海老澤 稔 平成 30 年 1 月 22 日～ 3 月 31 日

平成 30 年度

首席調査員兼班長 駒澤 悅郎

次席調査員 斎藤 貴稚

次席調査員 盛野 浩一 平成 30 年 4 月 2 日～ 7 月 31 日

調査員 仙波 亨 平成 30 年 8 月 1 日～ 8 月 31 日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長小林和彦のもと、首席調査員斎藤貴稚が担当した。

5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

首席調査員 斎藤 貴稚 第 1 章～第 3 章第 3 節 2(1), (2) 編集、3(1)～第 4 章第 3 節 2,

第 3 節 3(1), (2) 編集、4(1)～第 4 節

埋蔵文化財の保存処理いしかわ 第 3 章第 3 節 2(2), 第 4 章第 3 節 3(2)

6 館野遺跡から出土した鉄製品関連遺物の化学分析については、埋蔵文化財の保存処理いしかわに委託し、その成果は、第 3 章第 3 節 2(2) に掲載した。

7 館野遺跡の第 6 号堅穴建物跡から出土した鉄製品 1 点（錐）の保存処理については、埋蔵文化財の保存処理いしかわに委託した。

8 並木新田台北遺跡から出土した木製品 1 点（部材）の樹種同定については、埋蔵文化財の保存処理いしかわに委託し、その結果は、第 4 章第 3 節 3(2) に掲載した。

9 本書の作成にあたり、館野遺跡の縄文時代早・前期の土器形式について、栃木県茂木町教育委員会生涯学習課埋蔵文化財調査員中村信博氏にご指導いただいた。

本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅴ系座標に準拠し、館野遺跡についてはX = + 24,080 m, Y = + 43,960 mの交点、並木新田台北遺跡についてはX = + 24,040 m, Y = + 41,760 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系（測地成果 2011）による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3, …0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 HG - 遺物包含層 SD - 溝跡 SI - 壑穴建物跡 SK - 土坑 P - 柱穴

土層解説 ローム - ロームブロック 粘土 - 粘土ブロック 粘 - 粘性 緩 - 緩まり K - 搅乱

含有量 A - 多量 B - 中量 C - 少量 D - 微量 ○' - 極めて

粘性・締まり A - 強い B - 普通 C - 弱い ○' - 極めて

サイズは「大・中・小・粒」で、炭化物については「材・物・粒」で表記した。

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は館野遺跡が250分の1、並木新田台北遺跡が300分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩		炉・火床面・繊維土器断面		須恵器断面
	窯部材・粘土範囲・鉄滓範囲・黒色処理		墨・煤		
●土器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 ■木製品 - - - 硬化面	●土器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 ■木製品 - - - 硬化面				

4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色図」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物一覧の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm, cm, gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物一覧の備考欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6 壑穴建物跡の「主軸」は、炉・窯を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告する遺構の調査年次は以下のとおりである。また、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

館野遺跡…………… 平成30（2018）年度調査 SI 1～18, SK 1～122, SD 1～6, HG 1
欠番 SK66・68・98・111

並木新田台北遺跡…………… 平成29（2017）年度調査 SI 1～12, SK 1～41, 遺物集中地点1

目 次

序	(1) 土 坑	81
例 言	(2) 溝 跡	89
凡 例	(3) 遺構外出土遺物	90
目 次	第4節 総 括	91
館野遺跡・並木新台北遺跡の概要	第4章 並木新台北遺跡	97
第1章 調査経緯	第1節 調査の概要	97
第1節 調査に至る経緯	第2節 基本層序	97
第2節 調査経過	第3節 遺構と遺物	99
第2章 位置と環境	1 繩文時代の遺構と遺物	99
第1節 位置と地形	(1) 土 坑	99
第2節 歴史的環境	(2) 遺物集中地点	102
第3章 館野遺跡	2 弥生時代の遺構と遺物	104
第1節 調査の概要	堅穴建物跡	104
第2節 基本層序	3 古墳時代の遺構と遺物	107
第3節 遺構と遺物	(1) 堅穴建物跡	107
1 繩文時代の遺構と遺物	(2) 樹種同定	132
(1) 堅穴建物跡	4 時期不明の遺構と遺物	133
(2) 土 坑	(1) 土 坑	133
(3) 遺物包含層	(2) 遺構外出土遺物	136
2 古墳時代の遺構と遺物	第4節 総 括	137
(1) 堅穴建物跡	写真図版	PL 1 ~ PL26
(2) 化学分析	抄 錄	
3 時期不明の遺構と遺物	付 図	

挿 図 目 次

第1図 館野遺跡・並木新台北遺跡周辺分布図	第18図 第4号土坑・出土遺物実測図	28
第2図 基本事層図	第19図 第5号土坑・出土遺物実測図	29
第3図 館野遺跡調査区設定図	第20図 第6号土坑・出土遺物実測図	30
第4図 第4号堅穴建物跡実測図	第21図 第6号土坑出土遺物実測図	31
第5図 第4号堅穴建物跡出土遺物実測図	第22図 第7号土坑・出土遺物実測図	31
第6図 第5号堅穴建物跡実測図	第23図 第9号土坑・出土遺物実測図	32
第7図 第5号堅穴建物跡・出土遺物実測図	第24図 第10号土坑・出土遺物実測図	33
第8図 第7号堅穴建物跡実測図	第25図 第10号土坑出土遺物実測図	34
第9図 第7号堅穴建物跡・出土遺物実測図	第26図 第11号土坑実測図	34
第10図 第7号堅穴建物跡出土遺物実測図	第27図 第11号土坑出土遺物実測図	35
第11図 第9号堅穴建物跡実測図	第28図 第22号土坑・出土遺物実測図	35
第12図 第9号堅穴建物跡出土遺物実測図	第29図 第38号土坑・出土遺物実測図	36
第13図 第10号堅穴建物跡実測図	第30図 第38号土坑出土遺物実測図①	37
第14図 第10号堅穴建物跡・出土遺物実測図	第31図 第38号土坑出土遺物実測図②	38
第15図 第10号堅穴建物跡出土遺物実測図①	第32図 第44号土坑・出土遺物実測図	39
第16図 第10号堅穴建物跡出土遺物実測図②	第33図 第54号土坑・出土遺物実測図	40
第17図 第13号堅穴建物跡・出土遺物実測図	第34図 第54号土坑出土遺物実測図	41

第35回	第61号土坑実測図	42
第36回	第101号土坑実測図	42
第37回	第101号土坑出土遺物実測図	43
第38回	第1号遺物包含層実測図(1)	44
第39回	第1号遺物包含層実測図(2)	45
第40回	第1号遺物包含層出土遺物実測図	46
第41回	第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)	47
第42回	第1号遺物包含層出土遺物実測図(2)	48
第43回	第1号遺物包含層出土遺物実測図(3)	49
第44回	第1号堅穴建物跡実測図	52
第45回	第1号堅穴建物跡掘方・出土遺物実測図	53
第46回	第2号堅穴建物跡実測図	54
第47回	第2号堅穴建物跡・出土遺物実測図	55
第48回	第2号堅穴建物跡出土遺物実測図	56
第49回	第3号堅穴建物跡実測図	57
第50回	第3号堅穴建物跡出土遺物実測図	58
第51回	第6号堅穴建物跡・出土遺物実測図	59
第52回	第8号堅穴建物跡実測図	60
第53回	第8号堅穴建物跡・出土遺物実測図	61
第54回	第11号堅穴建物跡実測図	62
第55回	第11号堅穴建物跡掘方実測図	63
第56回	第11号堅穴建物跡出土遺物実測図	64
第57回	第12号堅穴建物跡実測図	65
第58回	第14号堅穴建物跡実測図	66
第59回	第14号堅穴建物跡掘方・出土遺物実測図	67
第60回	第15号堅穴建物跡実測図(1)	68
第61回	第15号堅穴建物跡実測図(2)	69
第62回	第15号堅穴建物跡出土遺物実測図	70
第63回	第16号堅穴建物跡実測図	71
第64回	第17号堅穴建物跡実測図	72
第65回	第17号堅穴建物跡掘方・出土遺物実測図	73
第66回	第18号堅穴建物跡・掘方実測図	74
第67回	土坑実測図(1)	81
第68回	土坑実測図(2)	82
第69回	土坑実測図(3)	83
第70回	土坑実測図(4)	84
第71回	土坑実測図(5)	85
第72回	土坑実測図(6)	86
第73回	溝跡実測図	89
第74回	遺構外出出土遺物実測図	90
第75回	前期前葉から後葉の土器編年図	92
第76回	前期前葉から後葉の土器	92
第77回	中期の海岸線の様子	93
第78回	中期中葉の堅穴建物跡	93
第79回	古墳時代の堅穴建物跡配置図	95
第80回	基本土層図	97
第81回	並木新田台北遺跡調査区設定図	98
第82回	第1号土坑・出土遺物実測図	99
第83回	第8号土坑実測図	99
第84回	第9号土坑実測図	100
第85回	第10号土坑・出土遺物実測図	100
第86回	第17号土坑実測図	100
第87回	第17号土坑出土遺物実測図	101
第88回	第18号土坑実測図	101
第89回	第19号土坑実測図	101
第90回	第1号遺物集中地点実測図	102
第91回	第1号遺物集中地點・出土遺物実測図	103
第92回	第9号堅穴建物跡実測図	104
第93回	第9号堅穴建物跡・出土遺物実測図	105
第94回	第9号堅穴建物跡出土遺物実測図	106
第95回	第1号堅穴建物跡実測図	107
第96回	第1号堅穴建物跡・出土遺物実測図	108
第97回	第2号堅穴建物跡実測図(1)	109
第98回	第2号堅穴建物跡実測図(2)	110
第99回	第2号堅穴建物跡出土遺物実測図	111
第100回	第3号堅穴建物跡実測図	112
第101回	第3号堅穴建物跡・出土遺物実測図	113
第102回	第4号堅穴建物跡・出土遺物実測図	114
第103回	第5号堅穴建物跡実測図	115
第104回	第5号堅穴建物跡・出土遺物実測図	116
第105回	第6号堅穴建物跡実測図	117
第106回	第6号堅穴建物跡掘方実測図	118
第107回	第6号堅穴建物跡出土遺物実測図	119
第108回	第7号堅穴建物跡実測図	120
第109回	第7号堅穴建物跡掘方実測図	121
第110回	第7号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)	122
第111回	第7号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)	123
第112回	第7号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)	124
第113回	第8号堅穴建物跡実測図	125
第114回	第10号堅穴建物跡実測図	126
第115回	第10号堅穴建物跡掘方実測図	127
第116回	第10号堅穴建物跡出土遺物実測図	128
第117回	第11号堅穴建物跡・出土遺物実測図	129
第118回	第12号堅穴建物跡実測図	130
第119回	第12号堅穴建物跡・出土遺物実測図	131
第120回	土坑実測図(1)	133
第121回	土坑実測図(2)	134
第122回	土坑実測図(3)	135
第123回	遺構外出出土遺物実測図	136
第124回	中期の堅穴建物跡(1)	138
第125回	前期の堅穴建物跡(2)	139
第126回	前期前葉から中葉の土器	139

表 目 次

第1表	鮑野遺跡・並木新田台北遺跡周辺遺跡一覧	9
第2表	第4号堅穴建物跡出土遺物一覧	14
第3表	第5号堅穴建物跡出土遺物一覧	17
第4表	第7号堅穴建物跡出土遺物一覧	19
第5表	第9号堅穴建物跡出土遺物一覧	21
第6表	第10号堅穴建物跡出土遺物一覧	26
第7表	第13号堅穴建物跡出土遺物一覧	27
第8表	縄文時代堅穴建物跡一覧	27
第9表	第4号土坑出土遺物一覧	28
第10表	第5号土坑出土遺物一覧	29
第11表	第6号土坑出土遺物一覧	31
第12表	第7号土坑出土遺物一覧	31
第13表	第9号土坑出土遺物一覧	32
第14表	第10号土坑出土遺物一覧	34
第15表	第11号土坑出土遺物一覧	35
第16表	第22号土坑出土遺物一覧	35
第17表	第38号土坑出土遺物一覧	38
第18表	第44号土坑出土遺物一覧	39
第19表	第54号土坑出土遺物一覧	41
第20表	第101号土坑出土遺物一覧	43
第21表	縄文時代土坑一覧	43
第22表	第1号遺物包含層出土遺物一覧	50
第23表	第1号堅穴建物跡出土遺物一覧	53
第24表	第2号堅穴建物跡出土遺物一覧	56
第25表	第3号堅穴建物跡出土遺物一覧	58
第26表	第6号堅穴建物跡出土遺物一覧	59
第27表	第8号堅穴建物跡出土遺物一覧	61
第28表	第11号堅穴建物跡出土遺物一覧	64

第29表	第14号竪穴建物跡出土遺物一覧	68
第30表	第15号竪穴建物跡出土遺物一覧	70
第31表	第17号竪穴建物跡出土遺物一覧	73
第32表	古墳時代竪穴建物跡一覧	75
第33表	土坑一覧	87
第34表	溝跡一覧	90
第35表	道構外出土遺物一覧	90
第36表	第1号土坑出土遺物一覧	99
第37表	第10号土坑出土遺物一覧	100
第38表	第17号土坑出土遺物一覧	101
第39表	縄文時代土坑一覧	102
第40表	第1号遺物集中地点出土遺物一覧	103
第41表	第9号竪穴建物跡出土遺物一覧	106
第42表	第1号竪穴建物跡出土遺物一覧	109
第43表	第2号竪穴建物跡出土遺物一覧	111
第44表	第3号竪穴建物跡出土遺物一覧	113
第45表	第4号竪穴建物跡出土遺物一覧	114
第46表	第5号竪穴建物跡出土遺物一覧	117
第47表	第6号竪穴建物跡出土遺物一覧	119
第48表	第7号竪穴建物跡出土遺物一覧	124
第49表	第10号竪穴建物跡出土遺物一覧	128
第50表	第11号竪穴建物跡出土遺物一覧	130
第51表	第12号竪穴建物跡出土遺物一覧	131
第52表	古墳時代竪穴建物跡一覧	132
第53表	土坑一覧	135
第54表	道構外出土遺物一覧	136

写真図版目次

PL 1	調査区遠景（北西から） 第1号遺物包含層	
PL 2	第4号竪穴建物跡	
PL 2	第5号竪穴建物跡	
PL 2	第7号竪穴建物跡	
PL 2	第9号竪穴建物跡炉遺物出土状況	
PL 2	第9号竪穴建物跡	
PL 2	第10号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL 2	第10号竪穴建物跡	
PL 2	第13号竪穴建物跡	
PL 3	第4号土坑遺物出土状況	
PL 3	第5号土坑	
PL 3	第6号土坑	
PL 3	第7号土坑	
PL 3	第9号土坑上層断面	
PL 3	第9号土坑	
PL 3	第10号土坑遺物出土状況(1)	
PL 3	第10号土坑遺物出土状況(2)	
PL 4	第11号土坑	
PL 4	第22号土坑	
PL 4	第38号土坑遺物出土状況	
PL 4	第38号土坑	
PL 4	第44号土坑	
PL 4	第54号土坑遺物出土状況	
PL 4	第61号土坑	
PL 4	第101号土坑遺物出土状況	
PL 5	第1号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL 5	第1号竪穴建物跡	
PL 5	第2号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL 5	第2号竪穴建物跡	
PL 5	第3号竪穴建物跡	
PL 5	第6号竪穴建物跡	
PL 5	第8号竪穴建物跡	
PL 5	第11号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL 6	第11号竪穴建物跡	
PL 6	第12号竪穴建物跡	
PL 6	第14号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL 6	第14号竪穴建物跡	
PL 6	第15号竪穴建物跡	
PL 6	第16号竪穴建物跡	
PL 6	第17号竪穴建物跡	
PL 6	第18号竪穴建物跡	
PL 7	第10号竪穴建物跡、第38号土坑出土土器	
PL 8	第10号竪穴建物跡、第10号土坑、第1号遺物包含層出土土器	
PL 9	第5・6・38号土坑、第1号遺物包含層出土土器	
PL10	第4・5・7・9・10号竪穴建物跡出土土器	
PL11	第4・6・9・11・38・54号土坑、道構外出土土器	
PL12	第4号遺物包含層出土土器	
PL13	第5・9・10号竪穴建物跡、第6・10・54号土坑、第3号遺物包含層出土遺物	
PL14	第2・8・11・15・17号竪穴建物跡遺物出土土器	
PL15	第1・2・6・11号竪穴建物跡遺物出土遺物	
PL16	調査区遠景（北西から）、調査区全景	
PL17	第1号土坑遺物出土状況	
PL17	第8号土坑	
PL17	第9号土坑	
PL17	第10号土坑	
PL17	第17号土坑	
PL17	第18号土坑	
PL17	第19号土坑	
PL17	第1号遺物集中地点遺物出土状況	
PL18	第9号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL18	第9号竪穴建物跡	
PL18	第1号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL18	第1号竪穴建物跡	
PL18	第2号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL18	第2号竪穴建物跡	
PL18	第3号竪穴建物跡	
PL18	第4号竪穴建物跡	
PL19	第5号竪穴建物跡	
PL19	第6号竪穴建物跡	
PL19	第7号竪穴建物跡遺物出土状況	
PL19	第7号竪穴建物跡	
PL19	第8号竪穴建物跡	
PL19	第10号竪穴建物跡	
PL19	第11号竪穴建物跡	
PL19	第12号竪穴建物跡	
PL20	第9号竪穴建物跡、道構外出土土器、古墳時代前期土器集合	
PL21	第1・3・7・12号竪穴建物跡出土土器	
PL22	第1・2・7・10号竪穴建物跡出土土器	
PL23	第3・7・10・11号竪穴建物跡出土土器	
PL24	第5・7号竪穴建物跡出土土器	
PL25	第4・6・7・11号竪穴建物跡出土土器	
PL26	第1・4・7・9・10・12号竪穴建物跡、道構外土遺物	

館野遺跡・並木新田台北遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

館野遺跡と並木新田台北遺跡は、小美玉市の南西部に位置し、^{そのべがわ}園部川左岸の標高約25mの舌状台地上に立地しています。(仮)常磐道石岡小美玉スマートICから茨城空港を結ぶ道路整備事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成30年度に館野遺跡の4,713m²、平成29年度に並木新田台北遺跡の3,275m²について発掘調査を行いました。



館野遺跡の調査の内容と成果

今回の調査では、縄文時代の竪穴建物跡6棟、袋状土坑12基、遺物包含層1か所、古墳時代の竪穴建物跡12棟などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器、金属製品などです。

今回の調査によって、縄文時代と古墳時代の集落跡であることがわかりました。縄文時代前期以降に集落が営まれ、特に中期になると有段式の竪穴建物や袋状土坑などの特徴的な施設が構築されます。その後、再び集落が営まれるの



館野遺跡 調査区遠景（東から）

は古墳時代前期以降で、最も集落が拡大したのは後期になります。大半の竪穴建物跡の覆土中から鉄滓^{てっさい}が出土しており、調査区域外に製鉄関連の工房跡^{こうぼうあと}の存在がうかがえます。



伏せた状態で出土した縄文土器
(第38号土坑)

並木新台北遺跡の調査の内容と成果

今回の調査では、縄文時代の土坑7基、弥生時代の竪穴建物跡1棟、古墳時代の竪穴建物跡11棟などを確認しました。弥生時代後期の竪穴建物跡からは、櫛描文や羽状縄文が施文された弥生土器の広口壺が出土しました。古墳時代前期の竪穴建物跡からは、北陸地方や近江地方の影響を受けた土師器の甕^{おうみ}をはじめ、畿内と東海地方の影響を受けた土師器の壺と高坏^{たかつき}が出土しました。また、貯蔵穴からほどぞ継ぎの凸部を有する炭化した木製品も出土しました。

今回の調査によって、当遺跡は縄文時代前期の台地縁辺部を中心とした小規模な土地利用にはじまり、古墳時代前期になると、他地域との交流や影響を受けた地域の拠点的な集落が広がり、古墳時代後期と弥生時代後期にも小規模な集落が営まれていたことが明らかになりました。



並木新台北遺跡 調査区遠景（東から）

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成28年1月21日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに（仮）常磐道石岡小美玉スマートICと茨城空港を結ぶ道路整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成28年3月18日に現地踏査を実施した。平成28年12月22日及び平成29年10月4日に並木新田台北遺跡、平成29年2月24日及び10月4日に館野遺跡の試掘調査を実施し、両遺跡の所在を確認した。平成29年1月4日及び10月23日に並木新田台北遺跡、3月13日及び10月23日に館野遺跡について、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に並木新田台北遺跡及び館野遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成29年1月25日及び11月29日に並木新田台北遺跡、3月22日に館野遺跡に関して、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。平成29年2月6日及び12月15日に並木新田台北遺跡、平成30年2月13日に館野遺跡について、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成29年3月15日及び12月18日に並木新田台北遺跡、平成30年2月19日に館野遺跡について、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、（仮）常磐道石岡小美玉スマートICと茨城空港を結ぶ道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成29年3月23日及び12月20日に並木新田台北遺跡、平成30年2月21日に館野遺跡について、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、それぞれ発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財團法人茨城県教育財團を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成29年5月1日から6月30日まで及び平成30年1月22日から3月31日まで並木新田台北遺跡、平成30年4月2日から8月31日まで館野遺跡の発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

並木新田台北遺跡の調査は、平成29年5月1日から6月30日までの2か月間と平成30年1月22日から3月31日までの3か月間、館野遺跡の調査は、平成30年4月2日から8月31日までの5か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

平成29年

工程	期間		5月	6月
	調査 表達	土構	準備 撤去 確認	
遺構調査				
遺物洗浄 注写				
撤収				

平成30年

工程	期間		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
	調査 表達	土構	準備 撤去 確認							
遺構調査										
遺物洗浄 注写										
撤収										

■ 並木新田台北遺跡 ■ 館野遺跡

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

館野遺跡は、茨城県小美玉市竹原字館野 209 番地 3 ほかに、並木新台北遺跡は、茨城県小美玉市大谷字並木新田台 518 番地ほかに所在している。

小美玉市は、茨城県の中央部に位置し、標高 20 ~ 30 m の洪積台地と、巴川、園部川水系の沖積低地からなっている。台地は、東茨城南部台地と呼ばれ、涸沼川、巴川、園部川、恋瀬川など比較的連続した谷底平野をもつ河谷によって細分された東茨城台地の一部である。東茨城南部台地は、巴川や園部川とその支流が樹枝状に入り組んだ複雑な地形によって形成されている。市域の北部を縱断する巴川は、鉾田市を経由して北浦に流入している。また、台地の南部を西から南へ流れる園部川は、霞ヶ浦の高浜入りに流れ込んでいる。

東茨城南部台地は、第四紀洪積世に堆積し、粘土、砂、砂礫からなる見和層を基盤に、その上に粘着性の高い青灰色から灰色の火山灰質粘土層である常総粘土層。さらに褐色の関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている¹⁾。

両遺跡は、小美玉市の南西部、霞ヶ浦に注ぐ園部川の左岸に張り出した標高約 25 m の舌状台地上に立地している。遺跡が立地する台地の縁辺部は、樹枝状に入り込んだ谷津が発達した環境であるため、水利の便に富み、人々の生活活動の舞台として土地利用されたものと考えられる。調査前の遺跡の現況は、畠地、山林である。

第2節 歴史的環境

館野遺跡及び並木新台北遺跡が所在する園部川左岸に張りだした台地上、また、当遺跡から南に位置する石岡台地の縁辺部の標高約 22 ~ 24 m の東大橋地区（石岡市）は、古くから人々の生活が営まれてきた地域である。ここでは、『茨城県遺跡地図』に登録されている当該地域の主な遺跡を中心に、時代ごとに概観する²⁾。

旧石器時代は、館山遺跡³⁾でナイフ形石器や石核などが出土し、館山遺跡に隣接する椎原平古墳群⁴⁾や権現山古墳⁵⁾では、槍先形尖頭器、ナイフ形石器、搔器、削器などが出土している。

縄文時代の遺跡は、草創期から晩期にかけて各時期の遺物が確認されており、霞ヶ浦へ流入する河川沿いや、霞ヶ浦沿岸などの水辺に遺跡が多く分布している。市内の草創期の遺跡は極めて少なく、園部川右岸の殿坂館跡⁶⁾から押塗繩文系土器群の可能性がある土器片が採取されている。上郷遺跡⁷⁾では、早期後半の条痕文系土器を伴う屋外炉と陥し穴が確認されている。隣接する石岡市の東大橋逆井遺跡⁸⁾（38）からは、前期前半の炉跡をはじめ、前期後半にかけての土坑が、さらに、殿當遺跡⁹⁾からは、前期前半から後半の堅穴建物跡と陥し穴、炉穴などが確認されている。中期の遺跡は、中期前半の堅穴建物跡と土坑などが確認された石川遺跡¹⁰⁾をはじめ、小曾納川右岸の台地上に立地し、中期中葉（阿玉台式・加曾利 E 式）の土器が出土している五日市遺跡¹¹⁾、沢目川流域に立地し、中期中葉から後期前葉（堀之内式）の土器が分散する天神遺跡や東山遺跡¹²⁾など、巴川、園部川水系の沖積低地などをのぞむ台地上へと広がり、急激に増加していく。

弥生時代の遺跡は、市境の恋瀬川下流域の台地上に立地する新田遺跡¹³⁾から中期末葉の堅穴建物跡が確認され、巴川左岸の台地上に立地する塔ヶ塚古墳群¹⁴⁾から後期（二軒屋式）の完形の土器が出土している。市域における遺跡の分布は少ないが、巴川、園部川水系の台地縁辺部に立地しており、縄文時代と同じ様相がう

かがい知れる。

古墳時代の遺跡は、市域全体に広がり、主に巴川、園部川水系の台地上に集落跡や古墳が集中して分布している。遺跡の近くには各河川が開削した沖積低地が見渡せ、台地先端部に多くの古墳が立地している様子が見られる。巴川右岸の台地上に立地する泥塹塚古墳群は、後期の小型の前方後円墳2基と円墳6基（うち1基湮滅）が確認され、市域の古墳群の中でも数が多く、巴川水系における中核的な古墳群と考えられる。園部川水系の主な古墳としては、館野遺跡から南西約1.1kmに全長67mの前方後円墳1基と円墳2基（うち1基湮滅）からなる羽黒古墳群（20）がある。近隣には、前期中葉から後葉の集落跡である竹原小学校遺跡¹⁰（18）と羽黒遺跡（21）が所在しており、当該古墳群との関連がうかがい知れる。また、園部川左岸の微高地に立地し、並木新田台北遺跡に隣接する並木新田台北遺跡¹⁰（3）からは、前期の堅穴建物跡8棟と後期の堅穴建物跡2棟が確認されている。当遺跡から西約600mの場所に岩屋権現古墳（4）があり、筑波山麓から産出する雲母片岩を使用した後期の箱式石棺を確認している。

奈良・平安時代は律令制の下、常陸国茨城郡に属し、『和名類聚抄』に記されている田余郷、白川郷、立花郷、生園郷、山前郷、石間郷に比定されている。両遺跡が所在する竹原地区、大谷地区は、生園郷に含まれる。竹原地区にある羽黒遺跡からは、奈良・平安時代の堅穴建物跡3棟が確認され、直刀の柄頭と鉄鎌、坏底部に「大家」と墨書きされた須恵器が出土している。当該地域は、奈良・平安時代の土器が広範囲に分布しており、「大家」の文字が字「大谷」の地名と関連付けられるとすれば、生園郷における有力な集落の一つであったと考えられる。

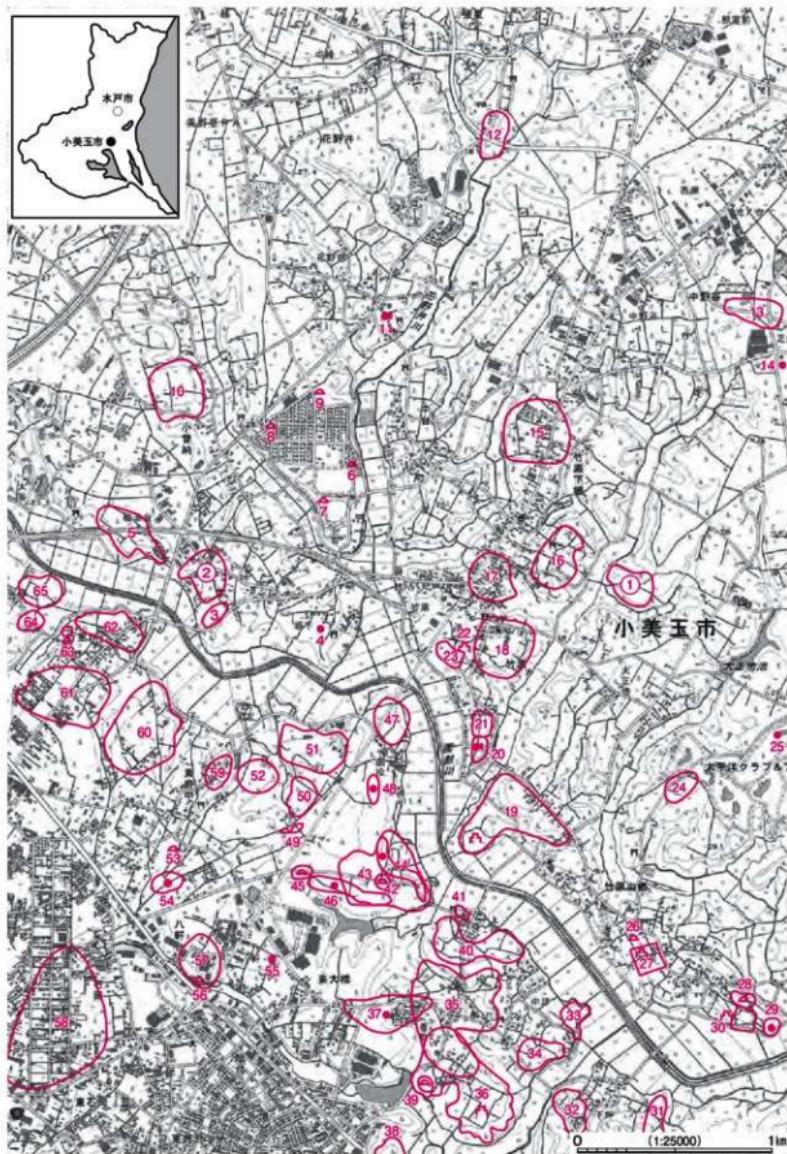
中世は、常陸平氏の勢力下に入り、潤沼川流域に立莊された小鶴莊の南域と接する茨城郡の公領部として残り、南郡に包括されたと考えられる。その後、南郡は下河辺氏の支配下から府中の大掾氏の支配下に入り、戦国時代末期には、水戸の江戸氏と大掾氏との抗争が激化し、当城は主戦場となった。大掾氏は府中城防衛の拠点として竹原城を築いたが、江戸氏を倒した佐竹氏によって大掾氏も滅ぼされ、以後は佐竹氏の蔵入地となつた。中世の城館跡は、園部川左岸の台地縁辺部に多く築かれている。大掾氏の府中城の支城として築かれた竹原城跡（19）や弓削砦跡¹⁰（22）などがある。また、市北西部には、江戸氏が大掾氏攻略のために構築した片倉砦跡や小田氏の支城であった鶴田城跡や羽鳥館跡がある。

*文中の〈 〉内の番号は、第1図及び第1表の該当番号と同じである。

註

- 1) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 石岡』1981年3月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 小玉秀成・本田信之『船山遺跡発掘調査報告書—旧石器・縄文・弥生時代編』玉里村教育委員会 1999年3月
- 4) 伊東重敏『推測古墳群 玉里村権現山古墳発掘調査報告書第1集』玉里村教育委員会 1994年3月
- 5) 小林三郎編『玉里村権現山古墳発掘調査報告書』玉里村教育委員会 2000年3月
- 6) 玉里村史編纂委員会『玉里村の歴史－豊かな霞ヶ浦と大地に生きる－』玉里村 2006年2月
- 7) 小美玉市教育委員会『上郷道路』『栗又四ヶ経道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』小美玉市埋蔵文化財調査報告第2集 2014年10月
- 8) 岩川貴之『原大橋逆井道路 一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財團文化財調査報告第425集 2018年3月
- 9) 近江原成陽『駿昌遺跡 主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財團文化財調査報告第420集 2017年3月

- 10) 小野政美・前島直人『石川遺跡 石川塚 旧百里原海軍飛行場掩体壕群 茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財報告書 1』茨城県教育財团文化財調査報告第320集 2009年3月
- 11) 美野里町史編さん委員会『美野里町史 上』美野里町 1989年3月
- 12) 小玉秀成『新田遺跡から出土した弥生時代の遺構、遺物』『小美玉市史料館報 第9号』小美玉市玉里史料館 2015年3月
- 13) 千種重樹『塔ヶ塚古墳群』美野里町教育委員会 1996年3月
- 14) 井博之『竹原小学校遺跡出土の古墳時代前期の埴輪と土師器』『小美玉市史料館報 第4号』小美玉市玉里史料館 2010年3月
- 15) 海老澤松・佐々木義則・野坂俊之『並木新田台遺跡』美野里町教育委員会 1988年3月
- 16) 千種重樹『茨城県美野里町弓削砦跡』美野里町教育委員会 1995年5月



第1図 館野遺跡・並木新田台北遺跡周辺分布図(国土地理院 25,000分の1「石岡」)

第1表 館野遺跡・並木新台北遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	館野遺跡	○		○				34	中坪遺跡	○		○	○	○		
②	並木新台北遺跡	○	○	○				35	東大橋原遺跡	○	○	○	○	○		
3	並木新台遺跡			○				36	東大橋要害				○			
4	岩屋櫻現古墳			○				37	東大橋古墳群			○				
5	船玉台遺跡	○	○					38	東大橋逆井遺跡	○						
6	中台経塚				○			39	香取塚群				○			
7	中台権現堂経塚群				○			40	鍬下遺跡	○	○	○	○			
8	小曾納経塚						○	41	上坪古墳群			○				
9	花野井遺跡						○	42	根古屋塚群				○			
10	五行台遺跡	○	○	○	○			43	根古屋遺跡	○	○	○	○			
11	明生塚古墳			○				44	根古屋古墳群		○					
12	出崎遺跡			○				45	傾城塚群				○			
13	皿久保遺跡	○						46	傾城古墳群			○				
14	大塚古墳			○		○		47	曲松遺跡	○	○	○	○			
15	金子谷遺跡			○	○			48	曲松古墳群		○					
16	日光遺跡	○	○	○				49	曲松台塚群				○			
17	後遺跡	○		○	○	○		50	柏山遺跡	○						
18	竹原小学校遺跡	○	○	○	○			51	柏山北遺跡	○		○				
19	竹原城跡					○		52	東府中柏山遺跡	○			○			
20	羽黒古墳群			○				53	東府中塚				○			
21	羽黒遺跡		○	○	○			54	東府中掩蔽塚群							
22	弓削砦跡					○		55	八軒台掩蔽塚							
23	弓削遺跡	○						56	八軒台塚				○			
24	十三遺跡	○						57	上人塚遺跡	○		○				
25	十三塚			○		○		58	大塚遺跡			○	○			
26	一字一石経塚						○	59	出シ山遺跡	○						
27	高原城跡						○	60	長者遺跡	○	○	○				
28	平古墳群			○				61	行里川台遺跡	○	○	○				
29	君ヶ崎古墳群			○				62	行里川遺跡	○	○	○				
30	富士館跡						○	63	行里川塚群				○			
31	下坪遺跡	○	○		○	○		64	荒金台遺跡	○	○	○				
32	白旗遺跡	○			○	○		65	荒金遺跡	○		○				
33	寺久保下遺跡				○											

第3章 館野遺跡

第1節 調査の概要

当遺跡は、小美玉市の南西部に位置し、園部川左岸の標高約25mの舌状台地上の東部・西部の縁辺部と台地上の平坦部に立地している。調査面積は4,713m²で、調査前の現況は畑地、山林である。

調査の結果、堅穴建物跡18棟（縄文時代6・古墳時代12）、溝跡6条（時期不明）、土坑121基（縄文時代13・時期不明108）、遺物包含層1か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に60箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、土師器（壺・高台付椀・壺・壺・甕）、須恵器（蓋・甕）、土製品（土器片錐・土器円盤）、石器（石錐・打製石斧・磨製石斧・スタンプ形石器・石匙・磨石・敲石・敲砥石・凹石）、金属製品（鎌）、製鉄関連遺物（炉壁・鉄滓・製鍊滓）などである。

第2節 基本層序

調査区東部（D 9h0区）の斜面部に1区テストピットを、調査区西部（F 4b2区）の台地上に2区テストピットを設定し、基本土層（第2図）の堆積状況の観察を行った。

第1層は、ロームブロックを少量含む暗褐色を呈するソフトローム層への漸移層である。粘性は普通で、締まりは弱く、層厚は10～22cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は8～23cmである。

第3層は、暗褐色を呈するソフトローム層である。黒色粒子を微量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は5～18cmである。

第4層は、褐色を呈するソフトローム層である。黒色粒子・ガラス質粒子を微量含み、粘性・締まりともにやや強く、層厚は13～38cmである。

第5層は、褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子・ガラス質粒子を微量含み、始良Tn火山灰（AT）を含む層に比定され。粘性はやや強く、締まりは強く、層厚は10～28cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。赤色粒子を微量含み、始良Tn火山灰（AT）を含む層以下の黒色帶であることから、第2黒色帶上層に比定される。粘性・締まりともにやや強く、層厚は10～28cmである。

第7層は、褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を微量含み、第2黒色帶下層に比定される。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は14～18cmである。

第8層は、褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を微量含み、粘性はやや強く、締まりは強く、層厚は8～20cmである。

第9層は、褐色を呈するハードローム層である。鹿沼軽石を少量含み、粘性はやや強く、締まりは強く、層厚は4～17cmである。

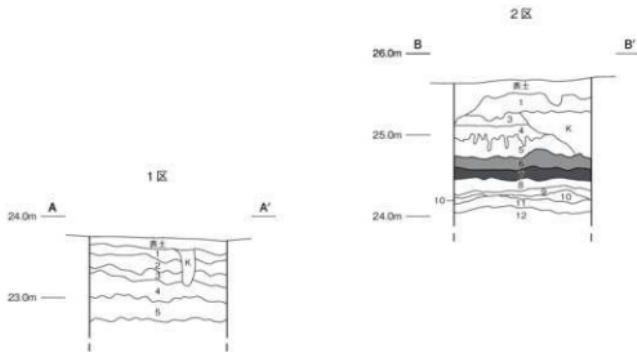
第10層は、黄褐色を呈するハードローム層である。鹿沼軽石を多量に含み、粘性はやや弱く、締まりは強く、層厚は2～17cmである。

第11層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性はやや強く、締まりは強く、層厚は10~20cmである。

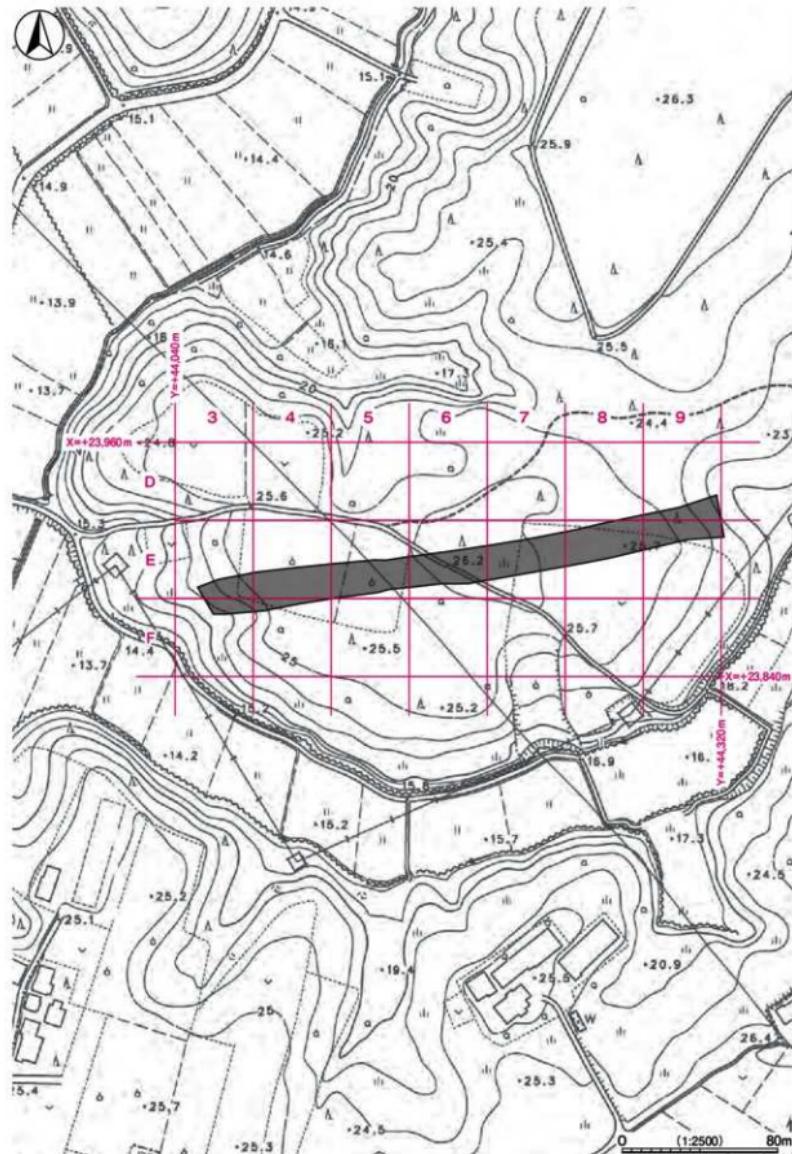
第12層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとともにやや強い。第12層の下層は未掘のため、層厚は不明である。

1区の第5層より下層は、常総粘土層と考えられる。層厚は未掘のため不明である。

遺構は、第1層の上面で確認した。



第2図 基本土層図



第3図 館野遺跡調査区設定図（小美玉市都市計画図 2500 分の 1）

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡6棟、土坑13基、遺物包含層1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴建物跡

第4号堅穴建物跡（第4・5図 PL 2）

位置 調査区東部のE 715区、標高25mの台地平坦部に位置している。

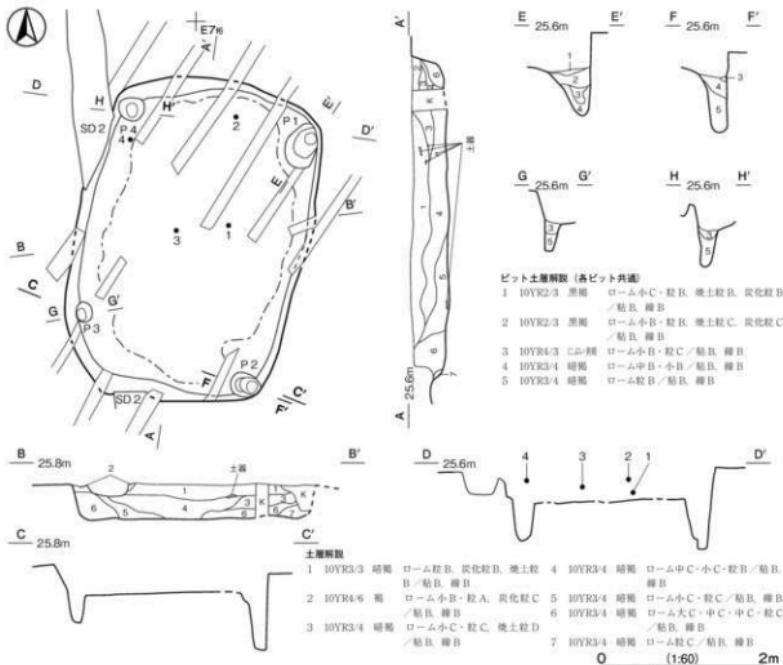
重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.98m、短軸2.90mの隅丸長方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は30~36cmで、外傾して立ち上がっている。

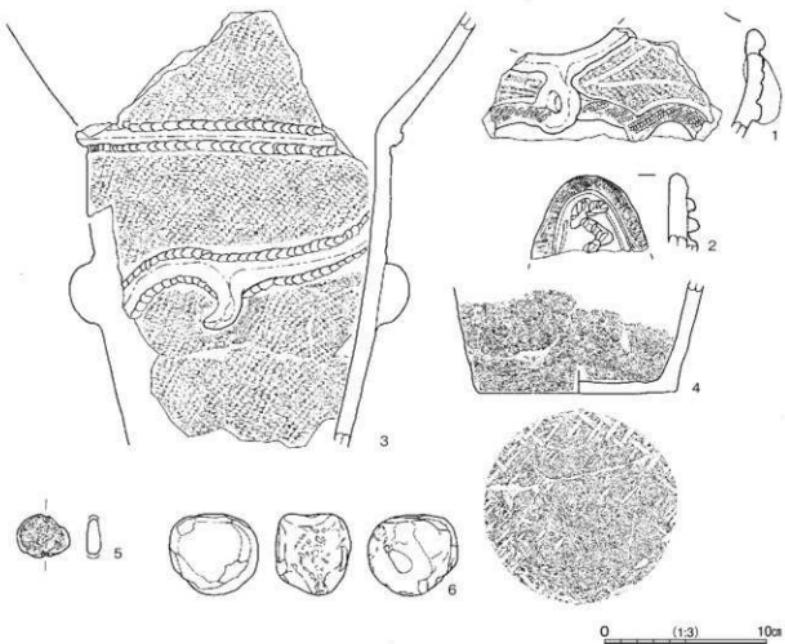
床 平坦で、全体的に踏み固められている。

ピット 4か所。P1~P4は深さ35~65cmで、コーナー部に位置していることから主柱穴である。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第4図 第4号堅穴建物跡実測図



第5図 第4号堅穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片 558点（深鉢 557, 浅鉢 1), 土製品3点（土器片錐1, 土器片円盤2), 石器5点（打製石斧2, 敲砸石1, 刃片2)が出土している。1・3は中央部の覆土中層から、2は北東部。4は北西部の覆土上層から、5・6は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも破片の状態で、埋め戻し過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第2表 第4号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	脚高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(7.0)	-	長石・石英・漂母	にぶい緑	普通	縄文の外縁を斜めに走る斜文(縦)の裏文。口縁部と斜面部に沿って波線文(横)。底面に沿って波線文(横)。	覆土中層	PL10
2	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英	にぶい緑	普通	口縁部と斜面にキザミ目。半円状の区画内に陰文によるS字状の文様。	覆土中層	PL10
3	縄文土器	深鉢	-	(27.0)	-	長石・石英・漂母	にぶい赤茶	普通	底部に沿って斜突文。斜帶による被光文。頭部と側面部に単列縄文RL(縦)の施文。	覆土中層	30%
4	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	122	長石・石英・漂母・赤色粒子	にぶい緑	普通	側部下端無文。焼付着。底面に割れ痕。	覆土上層	40%

番号	部種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
5	土器片錐	27	34	0.9	(8.2)	長石・石英	緑	側部片 側縫方向の両端にキザミ目	覆土中	

番号	部種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	敲砸石	50	55	48	185.6	チャート	円錐の周縁部に多方向からの砥面により棱をもつ	覆土中	

第5号竪穴建物跡（第6・7図 PL 2）

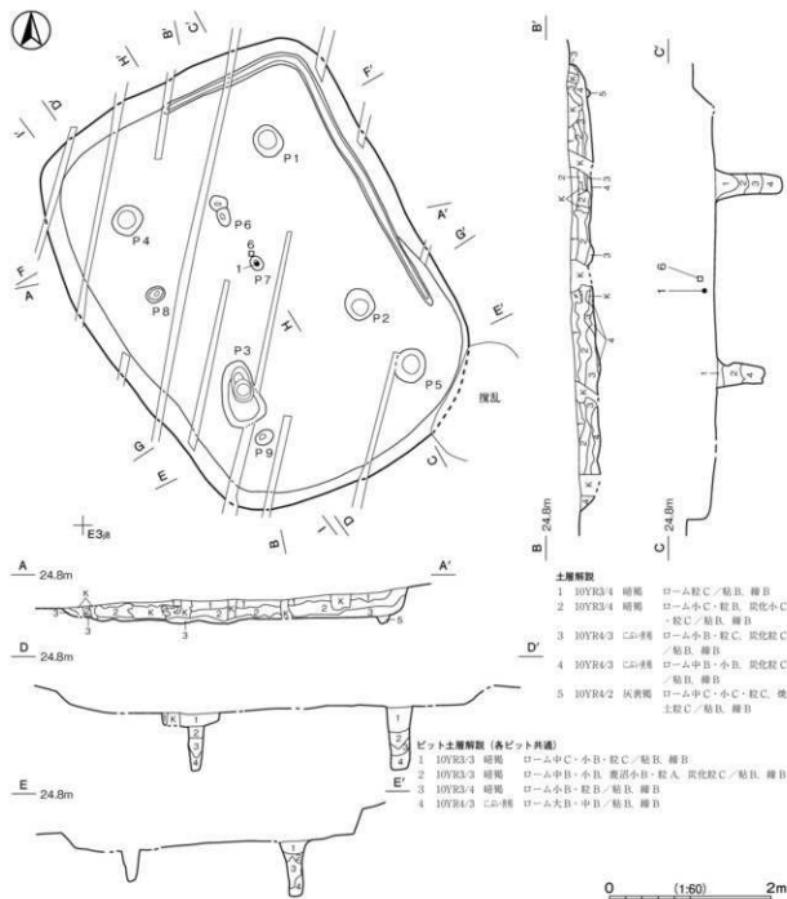
位置 調査区西部のE 38区、標高25mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸5.48m、短軸4.12mの隅丸長方形で、主軸方向はN-26°Wである。壁高は21~23cmで、外傾して立ち上がっている。

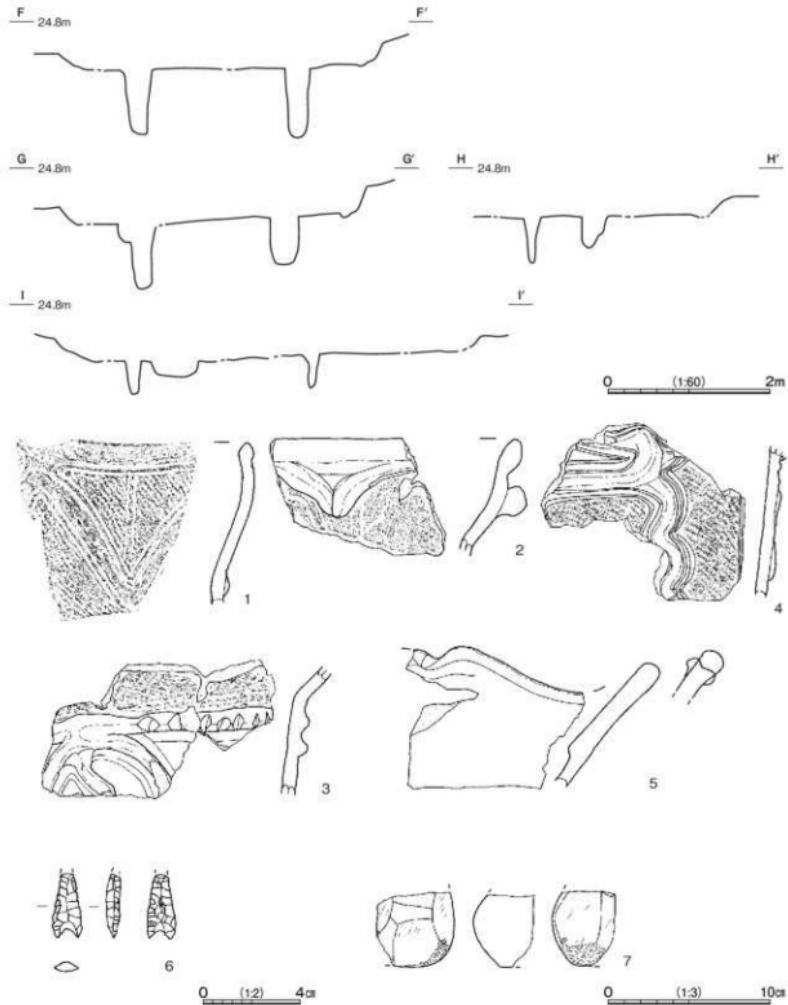
床 平坦で、硬化面は確認できなかった。北壁下から東壁下にかけて壁溝が巡っている。

ピット 9か所。P 1~P 4は深さ58~82cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P 5~P 9は深さ17~54cmで、補助柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることや不規則な堆積状況から、埋め戻されている。



第6図 第5号竪穴建物跡実測図



第7図 第5号堅穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片419点（深鉢417、浅鉢2）、石器9点（石錐1、敲石1、砥石1、剥片6）が出土している。1は中央部の覆土中層、6は覆土上層から、2～5・7は覆土中層から、それぞれ出土している。いずれも覆土中から散乱して出土していることから、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第3表 第5号堅穴建物跡出土遺物一覧

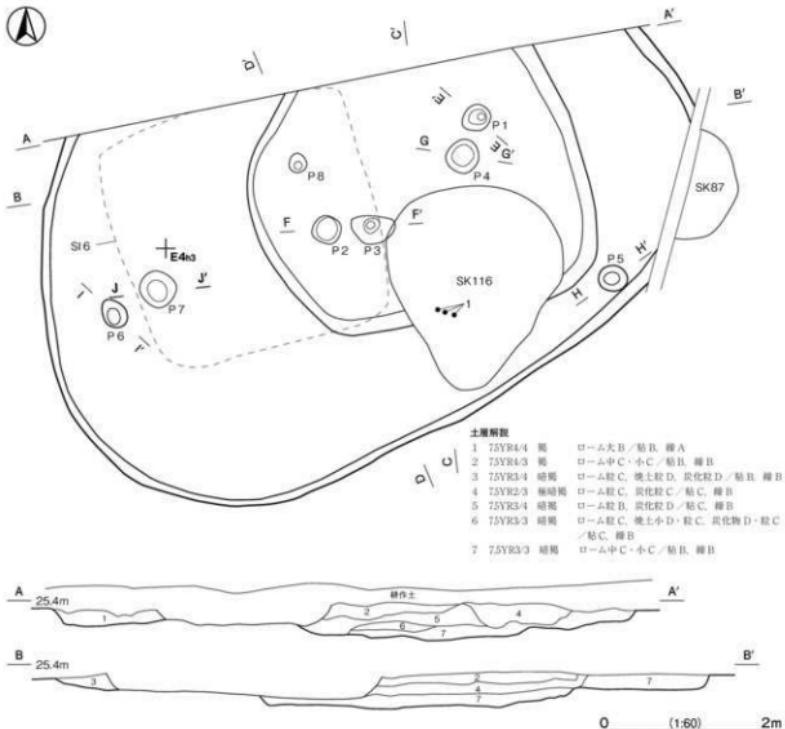
番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[30.0]	[10.0]	-	灰石・石英・赤陶 赤色粒子・細繩	にぶい楕	普通	葉巻によるV字溝、陰唇に沿って半周的溝文、汎用内单頭文、単頭文	覆土中層	10% PL10
2	縄文土器	深鉢	-	[7.3]	-	長石・石英・雲母	灰楕	普通	葉巻によるV字溝、汎用内单頭文、単頭文	覆土中	5% PL10
3	縄文土器	深鉢	-	[8.0]	-	長石・石英・雲母	にぶい赤楕	普通	葉巻によるV字溝、単頭繩文	覆土中	10%
4	縄文土器	深鉢	-	[10.9]	-	長石・石英・雲母	にぶい赤楕	普通	葉巻によるV字溝、陰唇に沿って半周的溝文	覆土中	5% PL10
5	縄文土器	浅鉢	-	[8.8]	-	長石・石英・雲母 黑色粒子	にぶい楕	良好	葉巻によるV字溝、内面に横方向の槽	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	石鏨	(26)	1.2	0.5	(1.4)	チャート	基部中央は彎入 両面押圧削面 一部欠損	覆土中層	PL13
7	敲石	(46)	(49)	(4.0)	(150.0)	砂岩	縁部に微細な敲打痕 一部欠損	覆土中	

第7号堅穴建物跡（第8～10図 PL 2）

位置 調査区西部のE 4 g3区、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6号堅穴建物、第87・116号土坑に掘り込まれている。



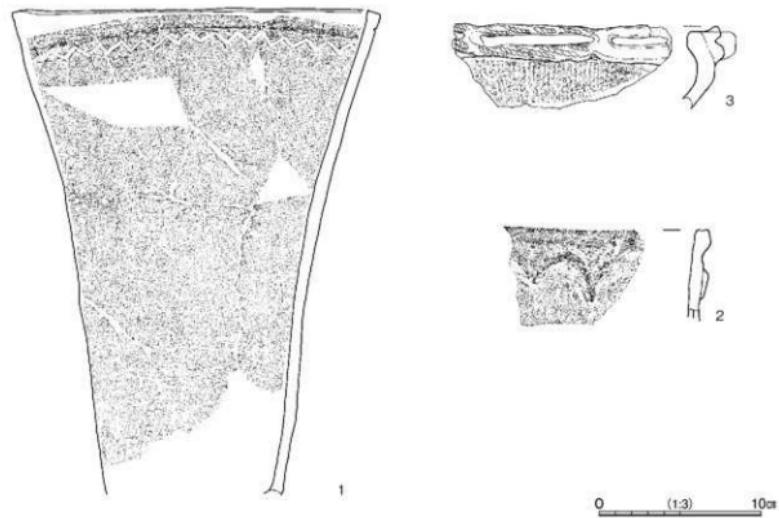
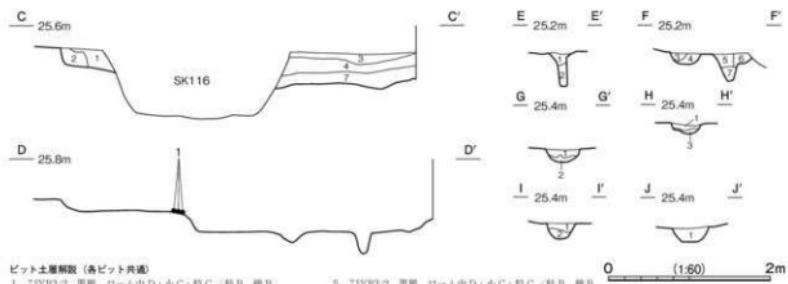
第8図 第7号堅穴建物跡実測図

規模と形状 二段の掘り込みをもつ有段式竪穴建物跡である。北部が調査区域外へ延びているため、上段は長軸 8.48 m、短軸 4.95 m、下段は長軸 4.08 m、短軸 3.15 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定され、主軸方向は N-69° E、壁高は 8 ~ 16 cm で、上段・下段ともに外傾して立ち上がっている。上段と下段の高低差は 14 ~ 23 cm である。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

ピット 8か所。P 1 ~ P 8 は深さ 10 ~ 36 cm で、性格は不明である。

覆土 7層に分層できる。第 1・2・7 層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



第9図 第7号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第10図 第7号竖穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片 203点（深鉢 201、浅鉢 2）、土製品 1点（土器片円盤）、石器 2点（磨石、剥片）が出土している。1は南部の上段床面から第116号土坑の覆土上層にかけて出土した破片が接合されたものである。1は本跡の出土遺物と同時期であることから本跡に伴う遺物である。2～5は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも破片の状態で、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第4表 第7号竖穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考	
1	縄文土器	深鉢	21.0	(20.0)	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口縁部外側に山形沈窓文が巡る	上段床面	80%	
2	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	長石・石英・雲母 朱色粒子	にい／黄褐色	普通	口縁部外側に横面三角形の確認 口縁部内側に朱色粒子	覆土中	5% PL10	
3	縄文土器	深鉢	(25.6)	(5.1)	—	長石・石英・雲母 黒色粒子	にい／橙	普通	口縁部外側に山形沈窓文と網目文 口縁部内側に朱色粒子	覆土中	10% PL10	
4	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	長石・石英・雲母	にい／褐	普通	縫帶による区画文	縫帶に沿って半載竹管文	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
5	土器片円盤	25	2.5	0.9	7.08	長石・石英・雲母	にい／赤褐色	胎部片 周縁部粗面に研磨	覆土中	

第9号竖穴建物跡（第11・12図 PL 2）

位置 調査区西部のE 4 h5区、標高25mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第110・122号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.94m、短軸4.10mの梢円形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は8～14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉周辺から西壁にかけて踏み固められている。

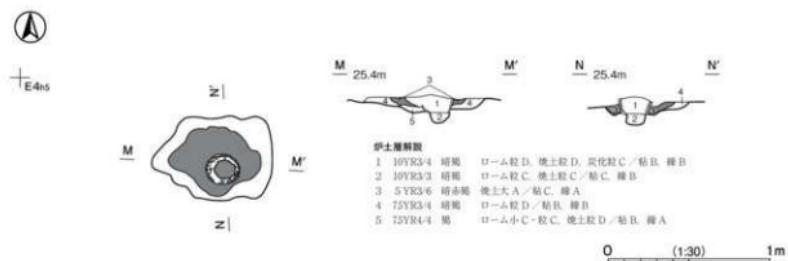
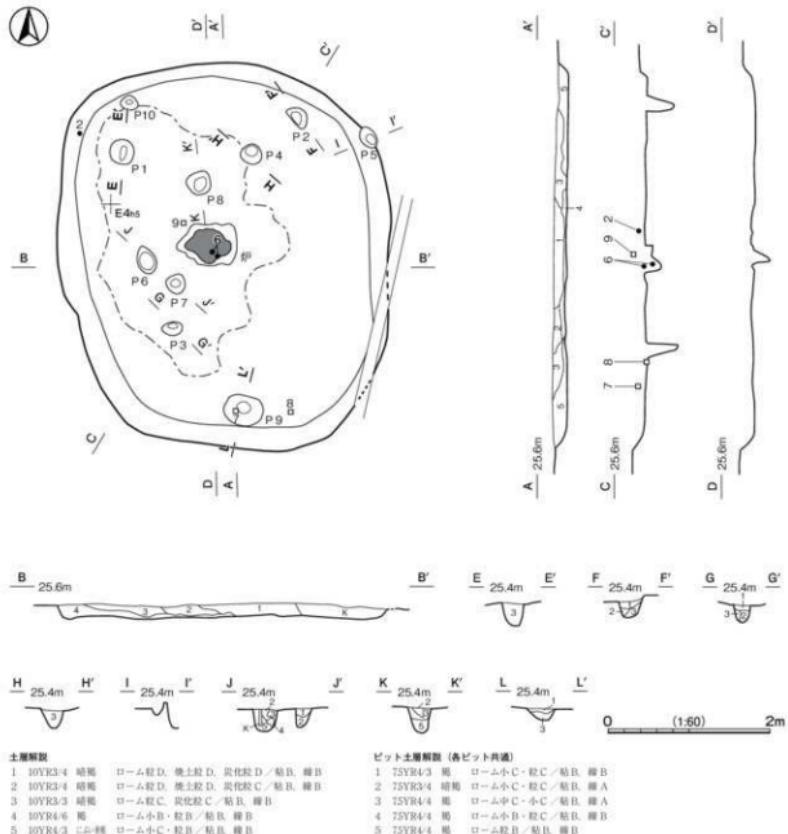
炉 中央部に付設されている。長径75cm、短径50cmの梢円形の土器埋設炉で、中央部に口縁部及び胴部下半を欠いた6が設置されている。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 10か所。P 1～P 3は深さ28～40cmで、位置と形状から主柱穴である。P 4～P 10は深さ14～38cmで、性格不明である。

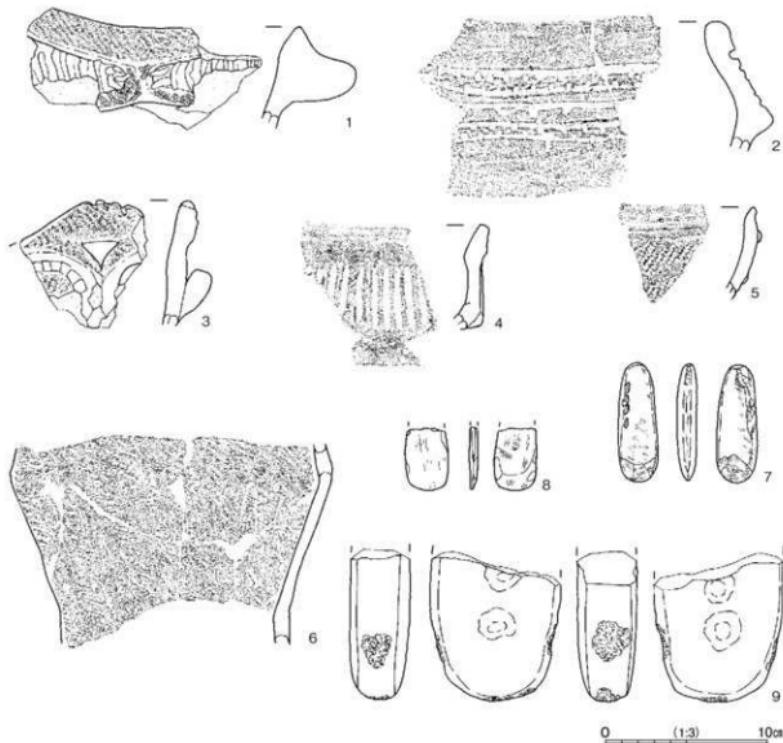
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片 300点（深鉢）、土製品 1点（土器片円盤）、石器 7点（打製石斧 1、磨製石斧 2、磨石 4）が出土している。1・3・4・5は覆土中から、2は北西部壁際、7は南部の覆土下層から、6は土器埋設炉の炉体土器である。8は南部の床面から、9は中央部の覆土上層からそれぞれ出土している。いずれも散乱した状態で出土しており、埋め戻す過程で投棄されたもの、あるいは混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 11 図 第 9 号堅穴建物跡実測図



第12図 第9号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5表 第9号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(8.8)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部に沿って互交斜文と沈線による連續コの字状文	覆土中	5% PL10
2	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁に沿う單面縦文LR(縦)を伴う既燒器と胴部を只焼する既燒陶器による区画文。区側内に沈線文を併用。表面に付着した小石の跡がある。	覆土下層	5%
3	縄文土器	深鉢	-	(7.9)	-	長石・石英・赤玉子	にぶい橙	普通	表面に付着した小石の跡がある。	覆土中	5% PL10
4	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縫上端部無文。隆帶に凸凹な沈線を光煩文。	覆土中	5%
5	縄文土器	深鉢	-	(6.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縫上端部無文。隆帶に凸凹な沈線を光煩文。	覆土中	5%
6	縄文土器	深鉢	-	(12.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に間隔を空けて単脚縦文LR(縦)を施文。	却	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	磨製石斧	73	24	1.2	38.4	流紋岩	極小型 細かな自然縞 刃部は表裏から研ぎ出す	覆土下層	PL13
8	磨製石斧	(38)	27	0.5	(11.0)	砂岩	極小型 基部欠損 刃部は表裏から研ぎ出す	床面	
9	磨石	(9.2)	80	36	(391.9)	安山岩	表裏に凹み 表裏に研磨痕 滑部・舞面部に微細な敲打痕	覆土上層	

第10号竪穴建物跡（第13～16図 PL 2）

位置 調査区西部のE 4 g8区、標高25mの台地平坦部に位置している。

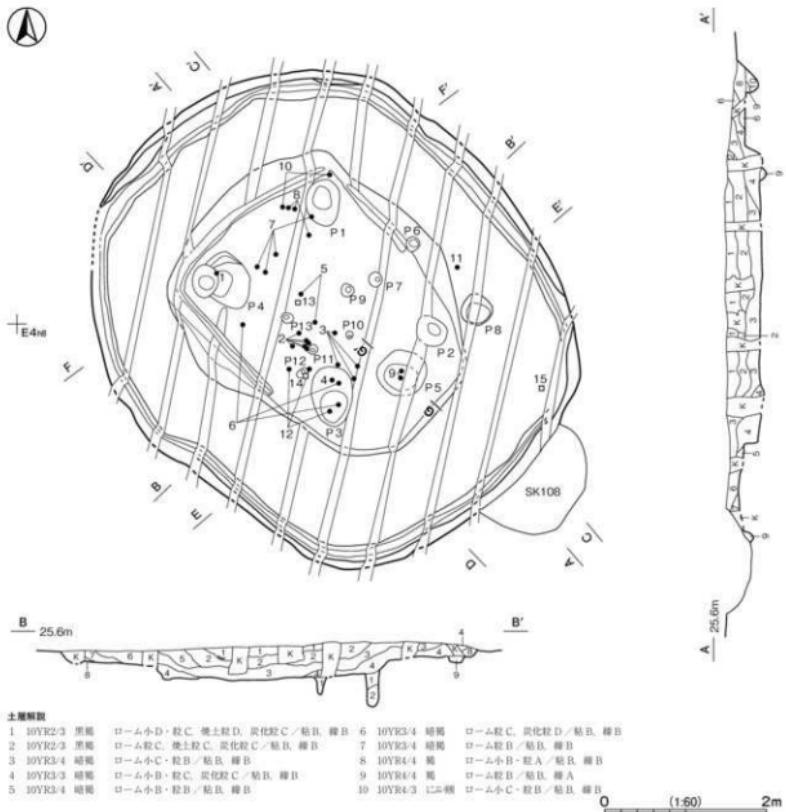
重複関係 第108号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 二段の掘り込みをもつ有段式竪穴建物跡である。上段は長軸6.11m、短軸5.31mの隅丸長方形で、主軸方向はN-41°-Wである。壁高は10～16cmで、外傾して立ち上がっている。下段は長軸3.45m、短軸2.85mで、上段との高低差は18～22cmである。壁は直立している。

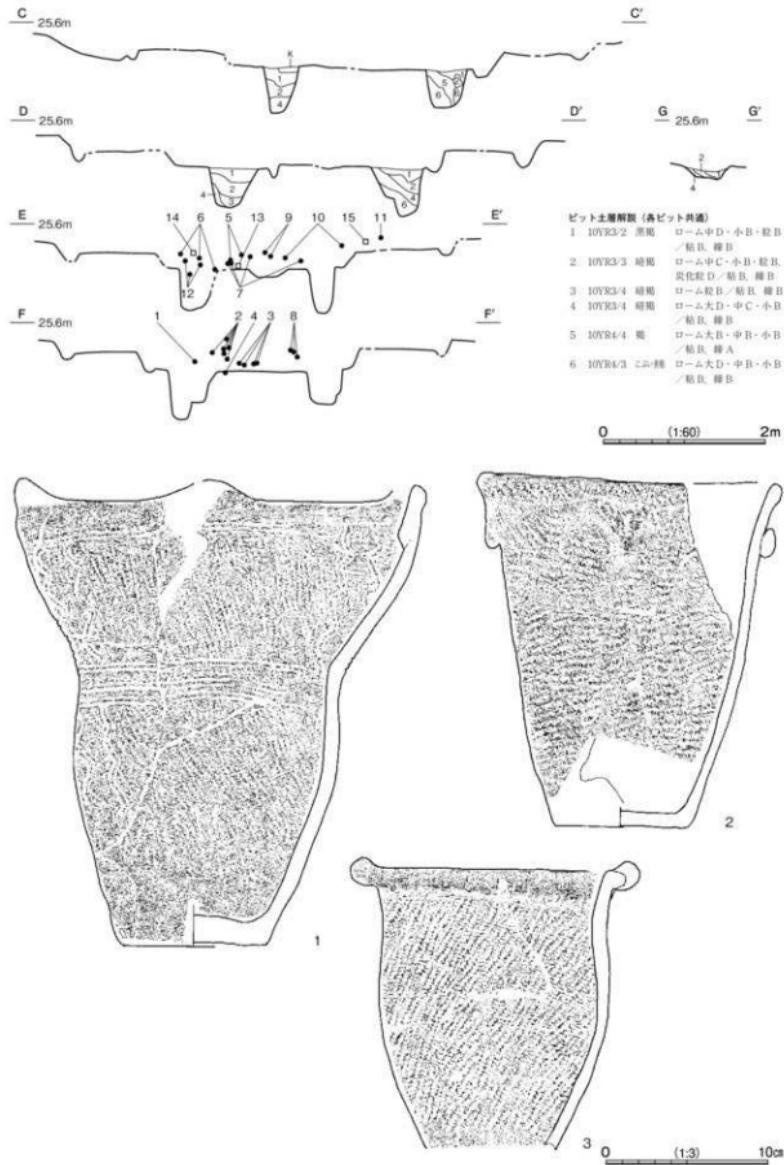
床 上・下段ともほぼ平坦である。上段の壁下には南東コーナー部を除いて壁溝が巡り、下段は部分的に壁溝が確認できる。

ピット 13か所。P1～P4は深さ74～82cmで、下段の各コーナー部に位置していることから主柱穴である。P5～P13は深さ8～67cmで、性格不明である。

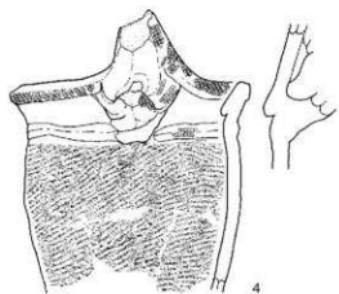
覆土 10層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第13図 第10号竪穴建物跡実測図



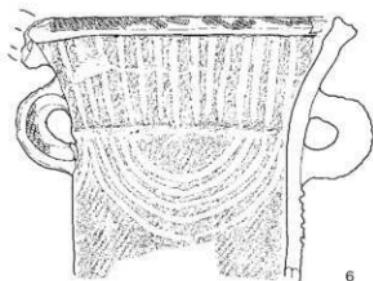
第14図 第10号堅穴建物跡・出土遺物実測図



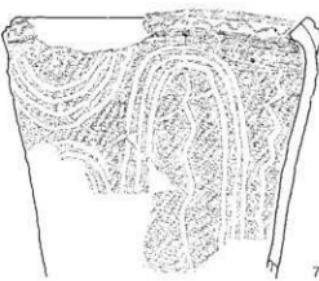
4



5



6



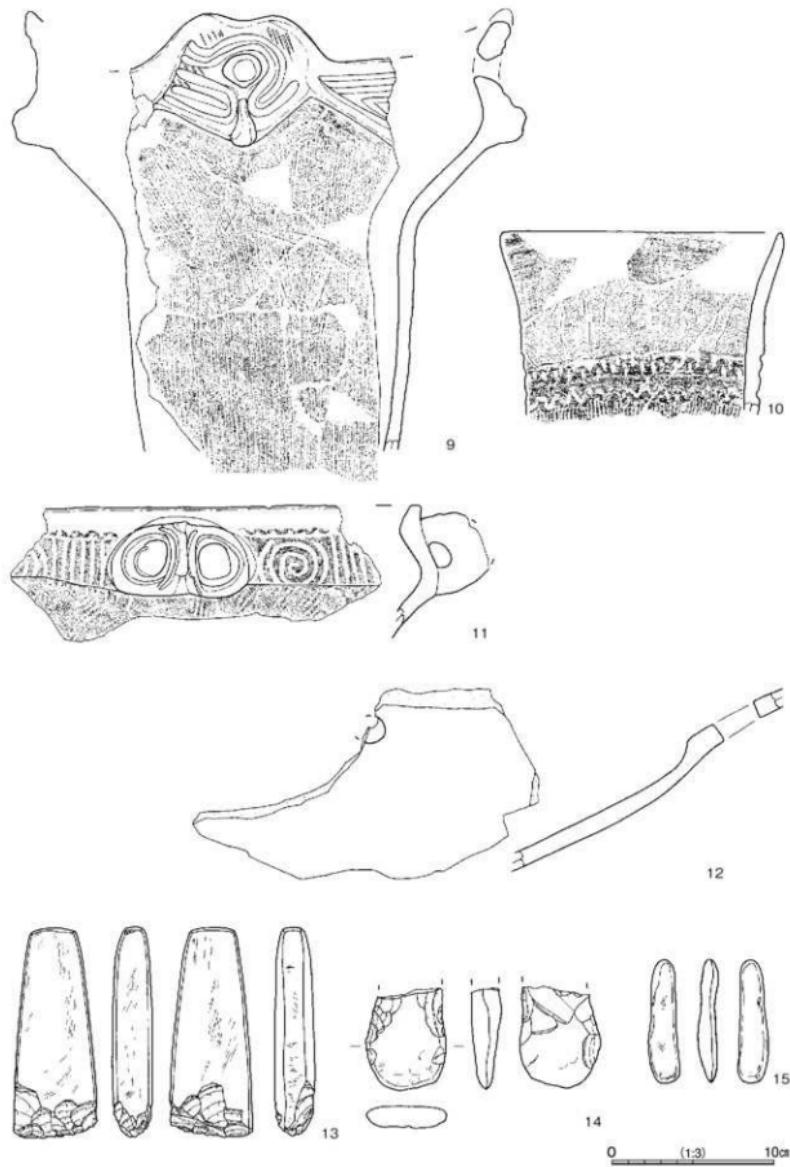
7



8

0 (1:3) 10cm

第15図 第10号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



第16図 第10号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

遺物出土状況 繩文土器片 862 点（深鉢 858、浅鉢 4）、石器 17 点（打製石斧 2、磨製石斧 7、凹石 1、磨石 3、砥石 2、敲石 1、剥片 1）が出土している。3・4・12 は下段の中央部の覆土下層から、5 は下段の中央部、7・8・10 は北部、9 は南東部、14 は南部の覆土中層から、いずれも破砕した状態で出土している。1・6 は残存率の高い大型破片で覆土上層から、11・15 は上段の覆土中層から、13 は中央部の床面から出土している。いずれも破砕された状態で出土しており、ある程度埋め戻された凹地状の部分に一括投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第6表 第10号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[24.5]	(28.8)	9.0	磨石・石斧・雲母・赤色粒子	にぶい	普通	口縁と頸部に半載仕賈文一帯、腹部に單線繩文	覆土上層	50% PL 8
2	縄文土器	深鉢	[18.0]	21.4	8.0	長石・石英・雲母	にい・赤褐色	普通	口縁と頸部に半載仕賈文一帯、腹部に單線繩文	覆土上層・中層	60% PL 8
3	縄文土器	深鉢	16.2	(17.9)	-	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口縁に沿って現状の様子を伴う新規繩彫文	覆土下層	70% PL 7
4	縄文土器	深鉢	13.5	(17.4)	-	長石・石英・雲母	にい・赤褐色	普通	口縁に沿って現状の様子を伴う新規繩彫文	覆土下層	40%
5	縄文土器	深鉢	-	(16.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にい・黄褐色	良好	印子繩彫に単線繩文RL(横幅)を施す、口縁上層	覆土中層	60%
6	縄文土器	深鉢	[20.4]	(16.5)	-	長石・石英・赤色粒子	明褐色	普通	印子繩彫に単線繩文RL(横幅)を施す、口縁上層	覆土上層・下層	60% PL 8
7	縄文土器	深鉢	[18.0]	(16.0)	-	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	口縁に沿って現状の様子を伴う新規繩彫文	覆土中層	30% PL 7
8	縄文土器	深鉢	24.7	(23.6)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にい・黒	普通	印子繩彫に単線繩文RL(横幅)を施す、口縁上層	覆土中層	40% PL 8
9	縄文土器	深鉢	[29.6]	(27.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	印子繩彫に単線繩文RL(横幅)を施す、口縁上層	覆土中層	30% PL 10
10	縄文土器	深鉢	[17.2]	(11.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にい・黒	普通	印子繩彫に単線繩文RL(横幅)を施す、口縁上層	覆土中層	10%
11	縄文土器	深鉢	[20.4]	(8.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にい・黒	普通	印子繩彫に単線繩文RL(横幅)を施す、口縁上層	覆土中層	5% PL 10
12	縄文土器	浅鉢	-	(11.8)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にい・黒	良好	印子繩彫に字孔、口縁部が厚く、外・内面磨き	覆土下層	20%
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土地点	備考		
13	磨製石斧	13.0	5.0	2.6	301.8	砂岩	定角式 全面研磨 両側縁に横刃部欠損	床面	PL13		
14	磨製石斧	(6.3)	(5.0)	(1.8)	(69.5)	砂岩	両側縁に微細な横刃部 両刃部は表裏から研ぎ出す	表面研磨	覆土中層		
15	磨製石斧	7.6	2.0	1.3	4.9	角閃岩	極小型 両刃部は表裏から研ぎ出す	表面研磨	覆土中層	PL13	

第13号竪穴建物跡（第17図 PL 2）

位置 調査区西部のE 5 h1 区、標高 25 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 4.65 m、短軸 3.95 m の楕円形で、主軸方向は N - 30° - W である。壁高は 6 ~ 10 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

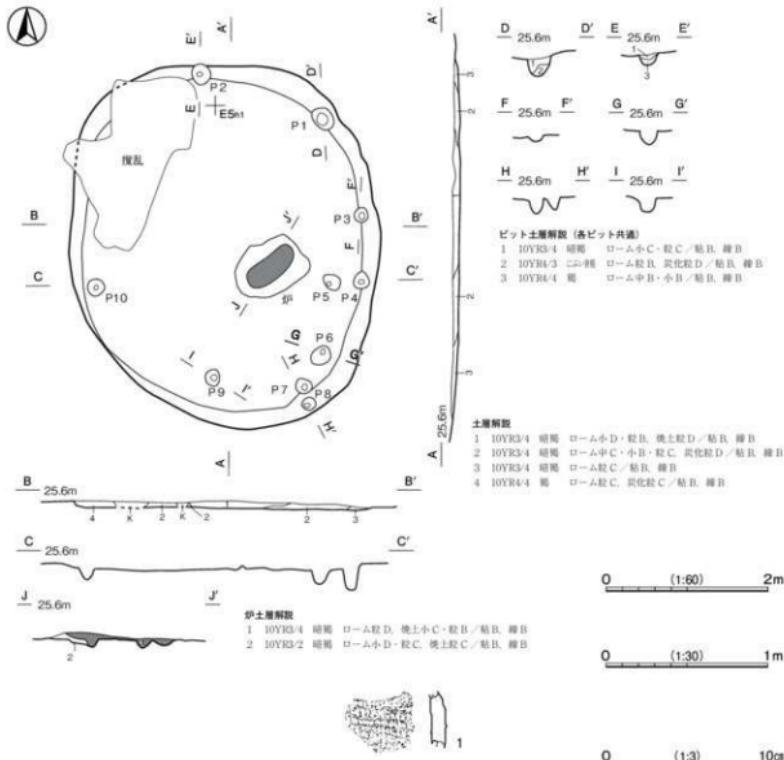
炉 中央部やや南東側に位置している。長径 89 cm、短径 62 cm の地床炉である。第 1 層上面が炉床面であり、火熱を受け赤変硬化している。

ピット 10 か所。P 1 ~ P10 は深さ 9 ~ 24 cm で、性格は不明である。

覆土 4 層に分層できる。規則的に堆積していることから自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器片 9 点（深鉢）が出土している。1 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第17図 第13号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第7表 第13号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・黄母・余白鉢	に赤い褐	普通	腹部に単弦縄文 RL(縦)を施文	覆土中	

第8表 縄文時代堅穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模 長径×短径(m)	標 高 (cm)	床面	壁構	内 部 施 設			覆 土	主な出土遺物	時 期	備 考
								柱穴	出入口	竪窓				
4	E 7.5	N - 14° - W	圓角長方形	3.98 × 2.90	30 ~ 36	平坦	-	4	-	-	-	人為 塗膜、陶片、土器 円錐、打撲石等、燒石等	中期中葉	本跡→SD 2
5	E 3.8	N - 26° - W	圓角長方形	5.48 × 4.12	21 ~ 23	平坦	一部	4	-	5	-	人為 塗膜、浅斜、石器 鐵石等	中期中葉	
7	E 4.6	N - 69° - E	圓角長方形	8.48 × (4.95) 7.85 × 3.15	8 ~ 16	平坦	-	-	8	-	-	人為 深斜、深鉢、土器 円錐、鐵石等	中期中葉	本跡→SI 6 SK87 - 116
9	E 4.6	N - 10° - W	橢円形	4.94 × 4.10	8 ~ 14	平坦	-	3	-	7	1	人為 深斜、土器 鐵石等	中期中葉	SK110 - 122 → 本跡
10	E 4.8	N - 41° - W	橢円形	6.11 × 5.31 3.45 × 2.86	10 ~ 38	平坦	全壇	4	-	9	-	人為 深斜、土器 鐵石等	中期中葉	本跡→SK108
13	E 5.6	N - 30° - W	橢円形	4.65 × 3.95	6 ~ 10	平坦	-	-	10	1	-	自然 深鉢	中期中葉	

(2) 土坑

第4号土坑 (第18図 PL.3)

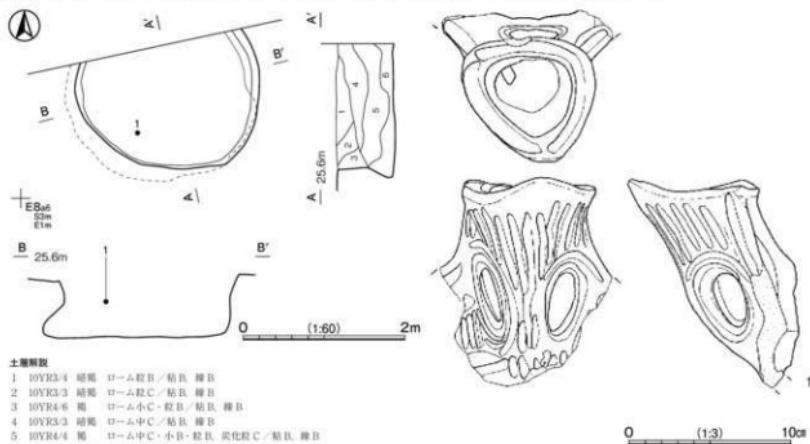
位置 調査区東部のE 8a6区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びており、開口部は東西径226m、南北径156m、底面は東西径240m、南北径164mしか確認できなかった。平面形は円形と推定でき平坦である。確認面からの深さは74cmである。壁はオーバーハンプグして袋状を呈している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 繩文土器片37点(深鉢)が出土している。1は西部の覆土中層から出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第18図 第4号土坑・出土遺物実測図

第9表 第4号土坑出土遺物一覧

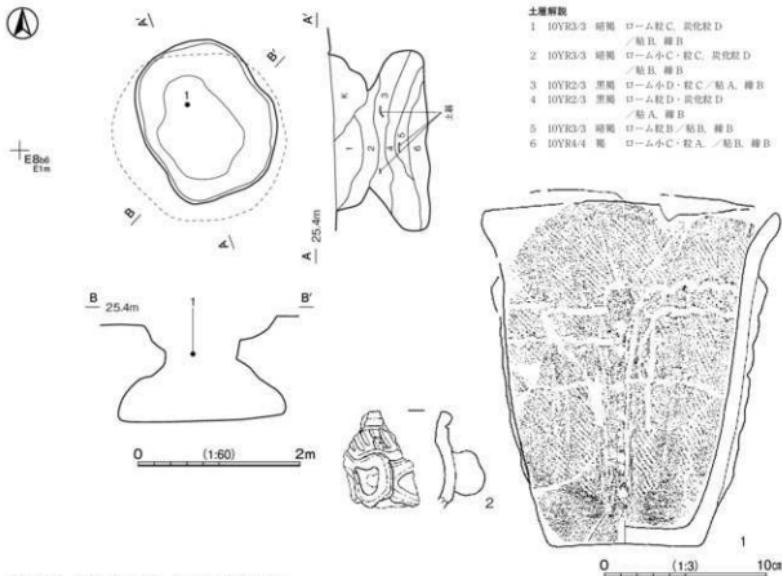
番号	種別	器種	口径	都溝	底溝	胎土	色調	焼成	文様の特徴	ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(129)	-	長石・石英・漂母・赤色粒子	にぶい緑	普通 焼成	1か所草札の中空把手 草札に沿って沈縄文の 施土 保存者		覆土中層	10% PL.11

第5号土坑 (第19図 PL.3)

位置 調査区東部のE 8a6区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は長径194m、短径164mの楕円形で、長径方向はN-16°-Wである。底面は径20.8~22.0mの円形で平坦である。確認面からの深さは122cmである。壁はオーバーハンプグして袋状を呈し、底面から高さ74~82cmのところでくびれ、上位は外傾している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第19図 第5号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片37点(深鉢)、石器2点(磨石、剥片)が出土している。1は北部の覆土中層から、2は覆土中からそれぞれ出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第10表 第5号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	厚径	底径	断土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[178]	22.1	9.1	長石・石英・雲母	に赤い斑	普通	器内に無鉢縄文(縦) 断面上位に2本の波状鉢文の残存 4段位に筒状文の残存	覆土中層	80% PL 9
2	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母	に赤い斑	普通	筒状文を除いて区画 壁面に突起 区画内に筒状文を残す	覆土中	

第6号土坑(第20・21図 PL 3)

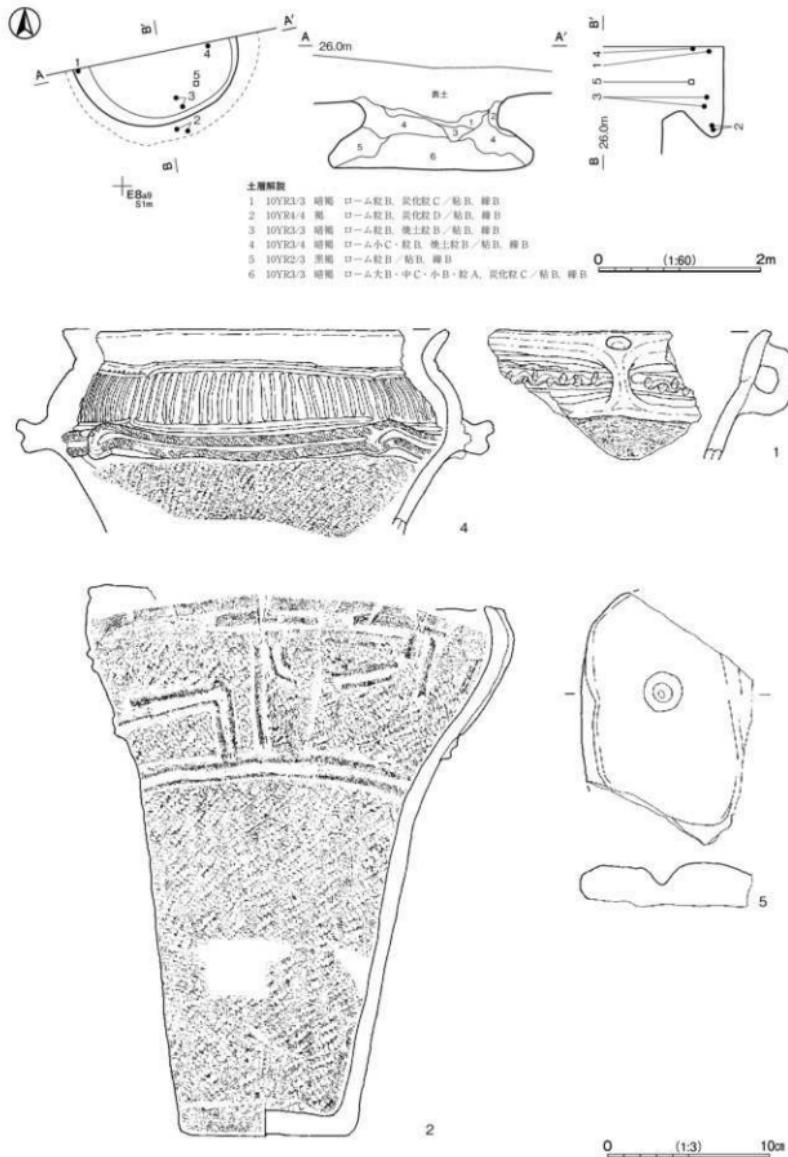
位置 調査区東部のD 8 j9区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部の大半が調査区外へ延びており、開口部は東西径が2.07m、南北径が0.84m、底面は東西径が2.43m、南北径が1.04mしか確認できなかった。平面形は開口部・底面共に円形と推定できる。底面は平坦で、確認面からの深さは88cmである。壁はオーバーハングして袋状を呈し、底面から高さ52~64cmのところまでくびれ、上位は外傾している。

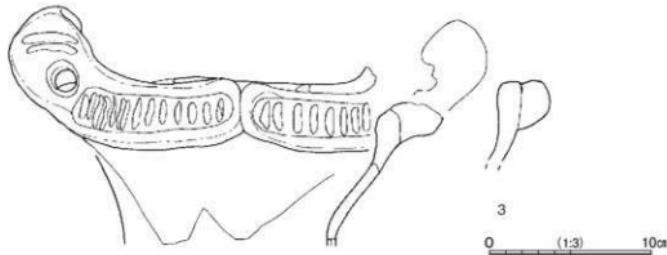
覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片127点(深鉢)、石器1点(凹石)が出土している。1は西部、2・3は南部の覆土下層から、4は東部、5は南部の覆土中層からそれぞれ出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第20図 第6号土坑・出土遺物実測図



第21図 第6号土坑出土遺物実測図

第11表 第6号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(8.0)	-	長石・石英・雲母	にいび青白	普通	口縁部と胴部に陰文で人面（区画内交叉し利支文）による連續式弦文の施文 口縁部に把手貼付	覆土下層	PL11
2	縄文土器	深鉢	23.5	34.0	10.3	長石・石英・雲母	にいび赤褐	普通	口縁部に重ね縁文（人面）の施文 口縁部に把手貼付	覆土下層	90% PL.9
3	縄文土器	深鉢	19.8	(14.8)	-	長石・石英・雲母	にいび青白	普通	口縁部に重ね縁文（人面）の施文 口縁部に把手貼付	覆土下層	30%
4	縄文土器	深鉢	[24.0]	(12.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にいび青	普通	口縁部に重ね縁文（人面）の施文 口縁部に把手貼付	覆土中層	20% PL11

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	凹石	(154)	(106)	(27)	(630.0)	緑色凝灰岩	表面に平坦な砥面 凹み痕1か所	覆土中層	

第7号土坑（第22図 PL.3）

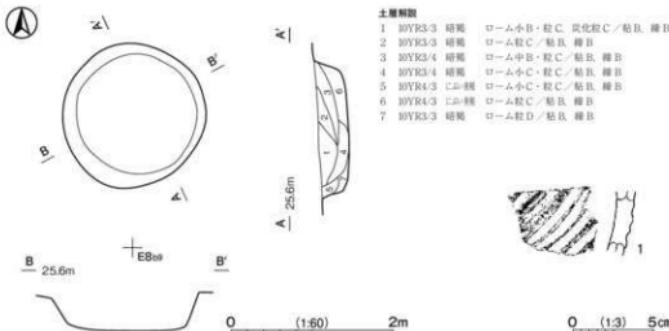
位置 調査区東部のE 8a9区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.80mほどの円形で、底面は平坦である。深さは46cmで、壁は外傾している。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片24点（深鉢）、石器1点（剥片）が、覆土全体から破片の状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器及び他の土坑の時期や配置状況から中期中葉と考えられる。



第22図 第7号土坑・出土遺物実測図

第12表 第7号土坑出土遺物一覧

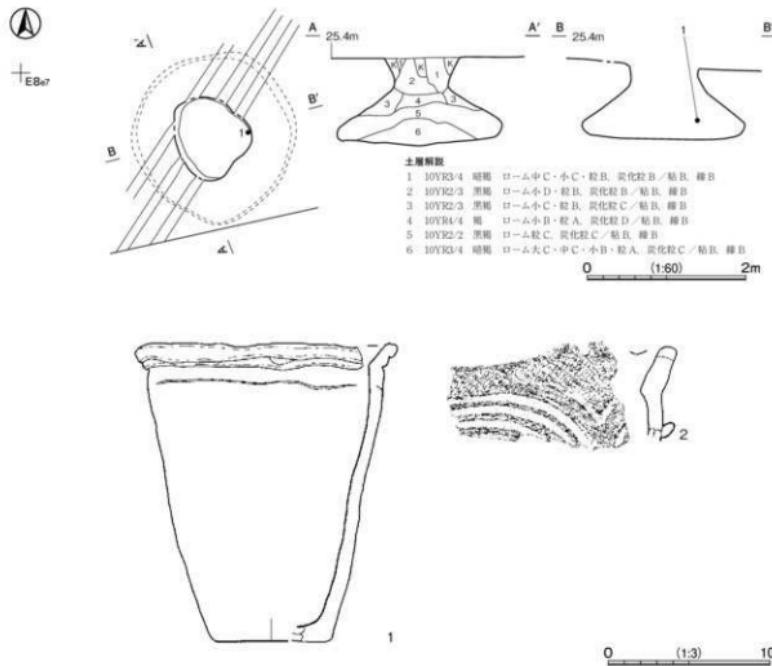
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	にいび青白	普通	背削れ隆帯貼付 太い沈溝文の施文	覆土中	

第9号土坑（第23図 PL 3）

位置 調査区東部のE 8e7区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は径1.03mほどの不整円形で、底面は径2.05～2.12mの円形で平坦である。確認面からの深さは110cmである。壁はオーバーハンプグして袋状を呈し、底面から高さ74cmのところでくびれ、上位は外傾している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第23図 第9号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片52点（深鉢）、石器1点（磨石）が出土している。1は東部の覆土下層から、2は覆土中からそれぞれ出土している。これらは、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第13表 第9号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	最高	底深	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	縩文土器	深鉢	150	18.5	7.0	長石・石英・雲母 に赤・青葉	普通	普通	口部が開く 制部無文	覆土下層	90%
2	縩文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母 灰黄褐	良好	口部に縩目繩文 RL(横)の施文 口縁部にV字状の施み貼付 口縁から施みに沿って比較	覆土中	PL11	

第10号土坑（第24・25図 PL 3）

位置 調査区東部のE 710区、標高25mの台地平坦部に位置している。

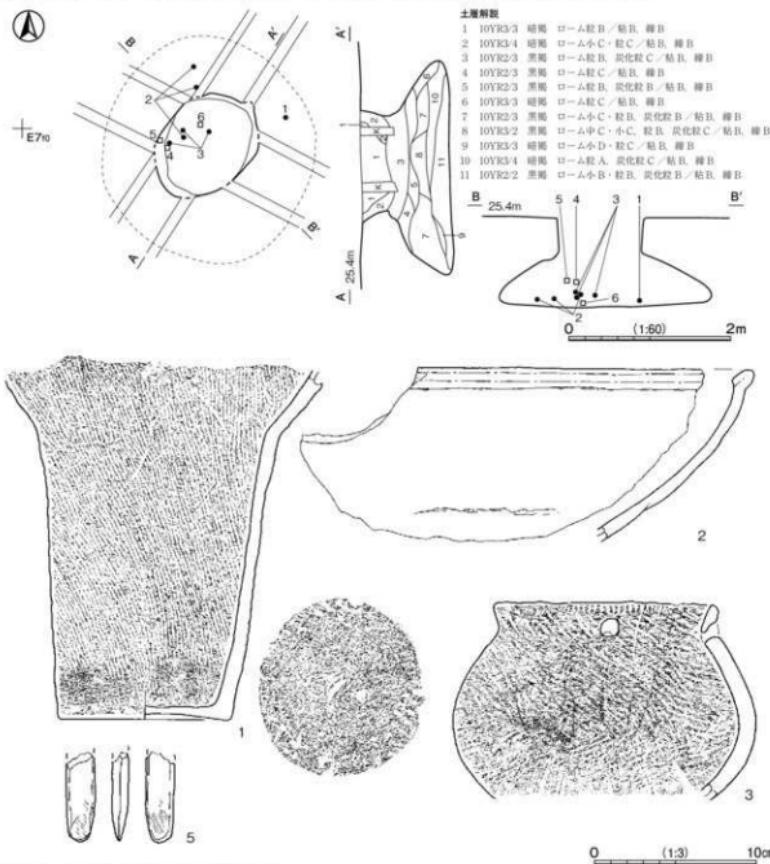
規模と形状 耕作による搅乱を受けているが、開口部は長径1.48m、短径1.08mの不整橢円形で、長径方向はN-30°-Eである。底面は径2.60~2.84mの円形で平坦である。確認面からの深さは110cmである。壁はオーバーハンプグして袋状を呈し、底面から高さ64~76cmのところでくびれ、上位は外傾している。

覆土 11層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

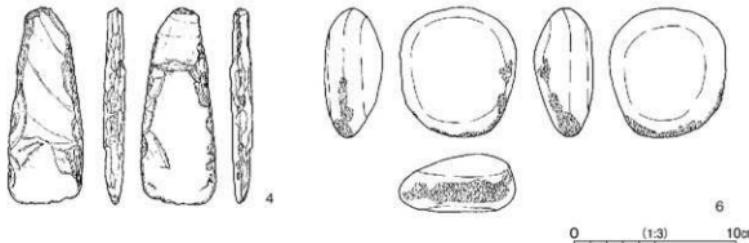
遺物出土状況 繩文土器片66点（深鉢63、浅鉢2、壺1）、石器3点（磨製石斧2、磨石1）が出土している。

1は東部、6は中央部の底面から、2は中央部から北部にかけて、3は中央部の覆土下層から、4・5は西部の覆土中層からそれぞれ出土している。これらは、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第24図 第10号土坑・出土遺物実測図



第25図 第10号土坑出土遺物実測図

第14表 第10号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土地点	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(219)	10.5	長石・石英・赤色粒子	に赤い斑	普通	側部に無鉛繩文L(縦) 底部に散物付底	底面	70%
2	縄文土器	浅鉢	[408]	(107)	-	長石・石英・密母・繩目	に赤い斑	良好	脇部は開き平壠面作成 内面に桃	覆土下層	15%
3	縄文土器	壺	13.5	(122)	-	長石・石英・紫母	に赤い斑	普通	口間にキザミ目 口縁部に丁村の穿孔 側部に無鉛繩文L(縦) 他の口部と側部並列位置 脇底部下に蓋穴	覆土下層	60% PL 8
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土地点	備考
4	磨製石斧	12.1	4.6	1.4	108.7	角閃岩	撥形	側縁部を微細な敲打調整 刃部は表裏から研ぎ出す		覆土中層	PL13
5	磨製石斧	(5.6)	(1.9)	(1.0)	(44.1)	角閃岩	極小型	基部欠損 刃部は表裏から研ぎ出す		覆土中層	PL13
6	磨石	8.0	7.2	3.7	287.7	砂岩	全面削り調整	側縁部及び中央部に微細な敲打痕		底面	

第11号土坑（第26・27図 PL.4）

位置 調査区東部のE7号区、標高25mの台地平坦部に位置している。

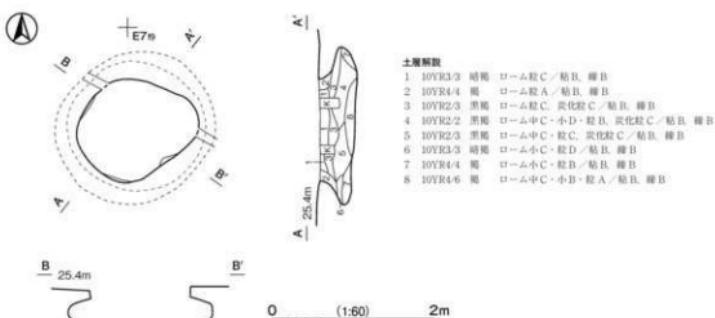
規模と形状 開口部は、長径152m、短径124mの楕円形で、長径方向はN-83°-Eである。底面は径2.00mほどの円形で平坦である。確認面からの深さは48cmである。壁はオーバーハングして袋状を呈している。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片28点（深鉢）、石器1点（磨製石斧）が、覆土全体から破片の状態で出土している。

遺構を埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第26図 第11号土坑実測図



第27図 第11号土坑出土遺物実測図

第15表 第11号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英・雲母 に赤色粒子	青褐色 に赤色斑点	普通	腹部に半載竹簡による平行沈綱文と粘節沈綱文	覆土中	
2	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母 に赤色斑点	青褐色 に赤色斑点	普通	口縁部を斜面で区画 区画内に山形沈綱文と押引き刺突文の施文	覆土中	PL.11

第22号土坑（第28図 PL.4）

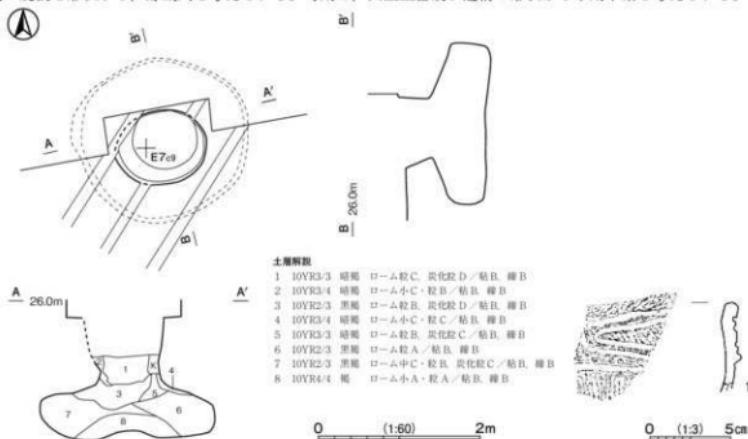
位置 調査区東部のE 7 b8区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びており、開口部は、長径1.14m、短径0.92mの楕円形で、長径方向はN-79°-Wである。底面は径2.18mの円形で平坦である。確認面からの深さは135cmである。壁はオーバーハンジングして袋状を呈し、底面から高さ64-74cmのところでくびれ、上位は直立している。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片29点（深鉢）が、覆土全体から破片の状態で出土している。遺構が埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器及び遺構の形状から中期中葉と考えられる。



第28図 第22号土坑・出土遺物実測図

第16表 第22号土坑出土遺物一覧

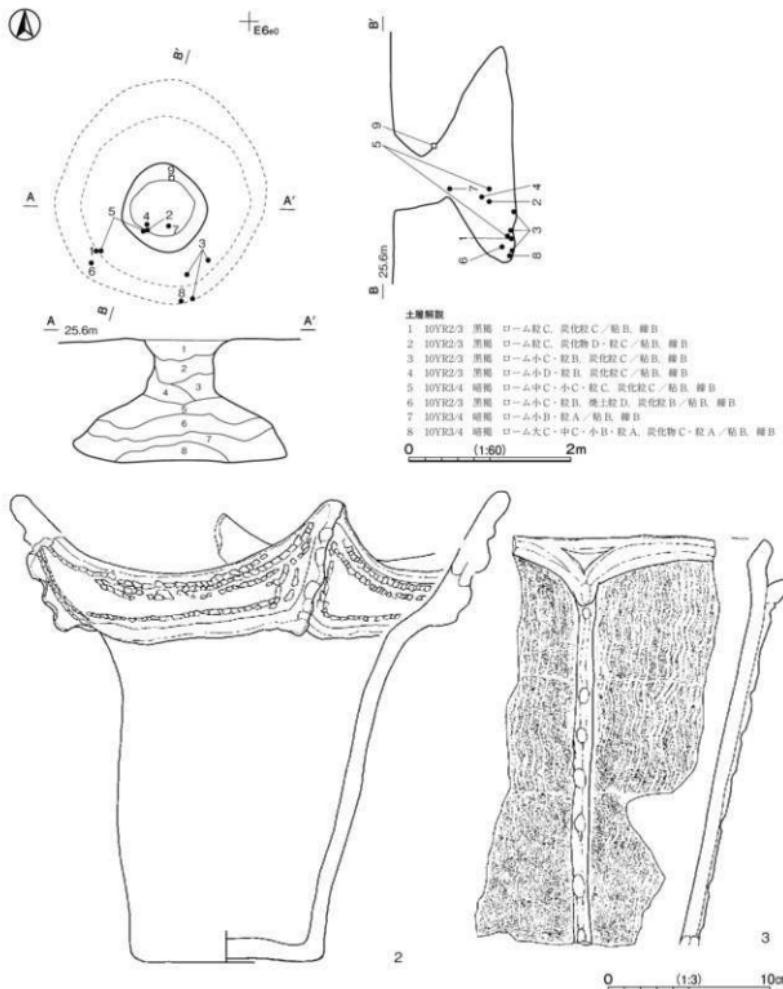
番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・雲母 に赤色斑点	青褐色 に赤色斑点	普通	口縁部による区画文、縁部上に網目構造文（縫）、区画内側縫縫大（縫）、上縁部に沿って波状文、斜筋部網目文（縫）の施文	覆土中	

第38号土坑（第29～31図 PL 4）

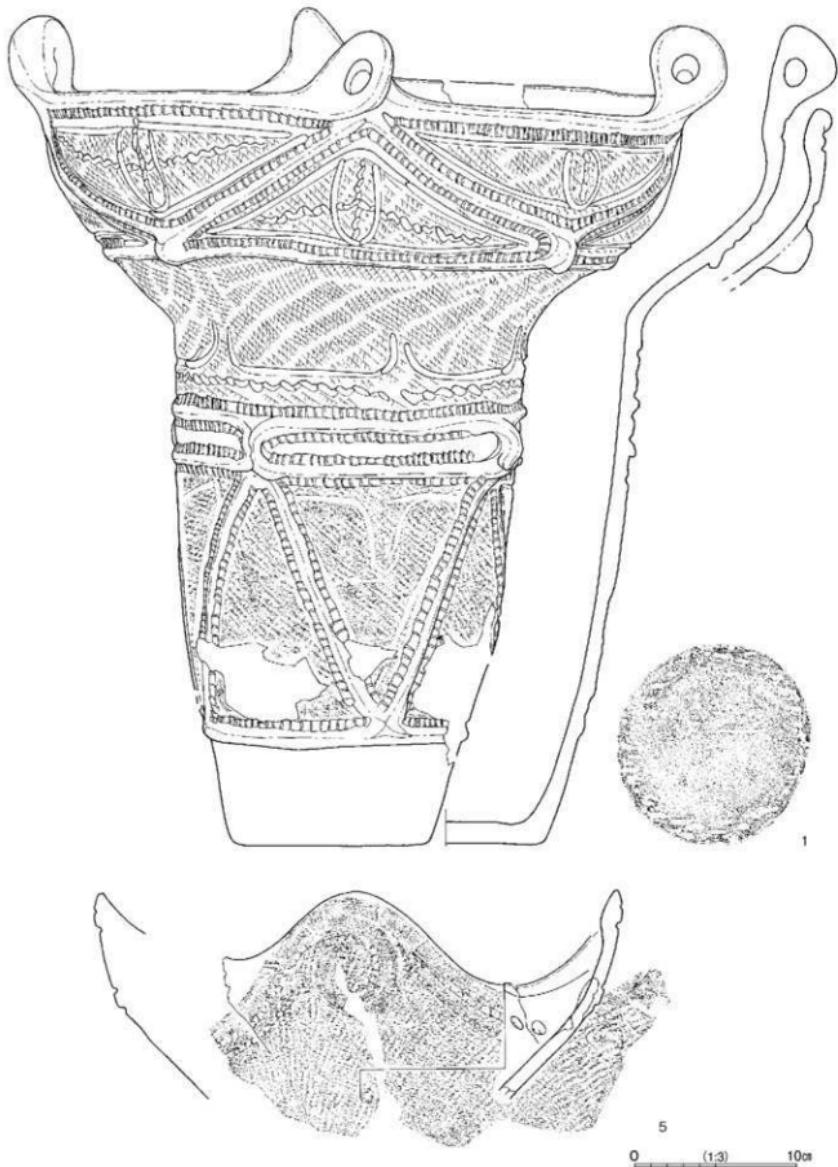
位置 調査区東部のE 6e9区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は径1.05～1.09mの円形で、底面は径2.76mほどの円形で平坦である。確認面からの深さは146cmである。壁はオーバーハンプグして袋状を呈し、底面から高さ84cmのところでくびれ、上位は外傾している。

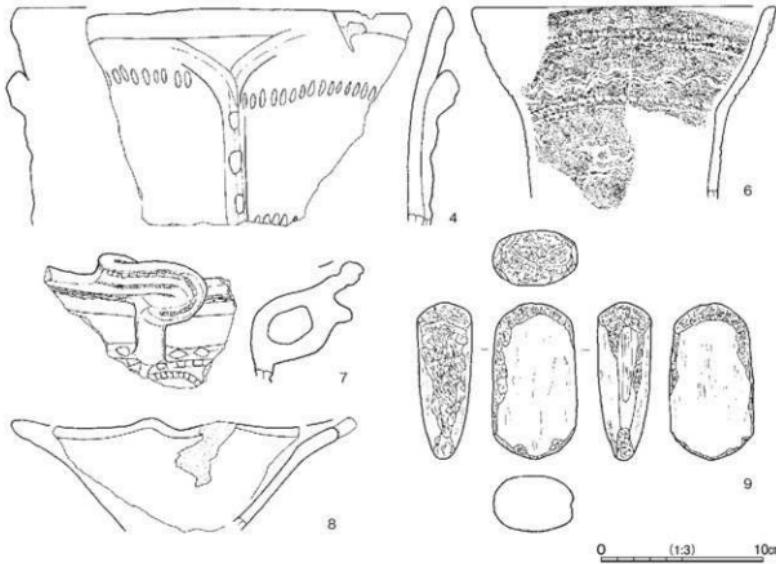
覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第29図 第38号土坑・出土遺物実測図



第30図 第38号土坑出土遺物実測図(1)



第31図 第38号土坑出土遺物実測図(2)

遺物出土状況 繩文土器片191点（深鉢190、浅鉢1）、石器7点（打製石斧3、敲石1、砥石2、石核1）が出土している。1は南西部の底面からほぼ完形で倒立で出土していることから、遺棄されたか廃絶して間もない時期に投棄されたものと思われる。2は中央部の覆土中層からほぼ完形で横位で出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと思われる。3・8は南部の底面から、6は南西部の覆土下層から、4・7は中央部の覆土中層から、9は中央部の覆土上層から、5は南西部の覆土下層と中層からそれぞれ破片の状態で出土している。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期前葉と考えられる。

第17表 第38号土坑出土遺物一覧

番号	種 别	器種	口径	高さ	底径	胎 土	色 調	焼成	文様 の 特徴 は か	出土位置	備 考
1	縄文土器	深鉢	378	518	124	灰石・石英・雲母・ 黒色粒子	にい・黄青	普通	円錐形4段位で世界最古の口縁部を有する縄文器をもつて居 住構造・貝の付加と縄文文様(縄文土器の底面と表面の代表	底面	95% PL.7
2	縄文土器	深鉢	230	(288)	118	灰石・石英・雲母・ 黒色粒子	にい・棕	普通	4段位の波状口縁・口縁部隣接部で区画化・口縁部周辺に沿って爪痕文・口縁部無	覆土中層	90% PL.9
3	縄文土器	深鉢	[240]	(254)	-	灰石・石英・雲母・ 黒色粒子	普通	上部にV字形の凹みがあり底部に隆起部下・接 触部に爪痕文	底面	15% PL.11	
4	縄文土器	深鉢	[294]	(135)	-	灰石・石英・雲母・ 赤色粒子	棕	U字形にV字形の凹み及び底部に隆起部下・接 触部に爪痕文	覆土中層	5%	
5	縄文土器	深鉢	-	(129)	-	灰石・石英・雲母	灰褐色	魚文・半輪文・重輪・斜輪文・口縁部に凸出部に接 触部2段位の爪痕文の底面	覆土下層・ 中層	30% PL.11	
6	縄文土器	深鉢	[188]	(118)	-	灰石・石英・雲母	にい・棕	普通	縄文部に半輪竹箇による押手貼付・口縁部頭部 に横帯文を有する押手貼付	覆土下層	30%
7	縄文土器	深鉢	-	(83)	-	灰石・石英・雲母	にい・赤褐色	普通	口縁部に横帯文を有する押手貼付	覆土中層	5% PL.11
8	縄文土器	浅鉢	[205]	(70)	-	灰石・石英・雲母	にい・赤褐色	普通	内面に有段	底面	30%

番号	部 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
9	敲石	97	52	34	270.0	砂岩	四縁部に微細な敲打痕及び片側面に砥面をもつ 磨製石斧を軸	覆土上層	

第44号土坑（第32図 PL 4）

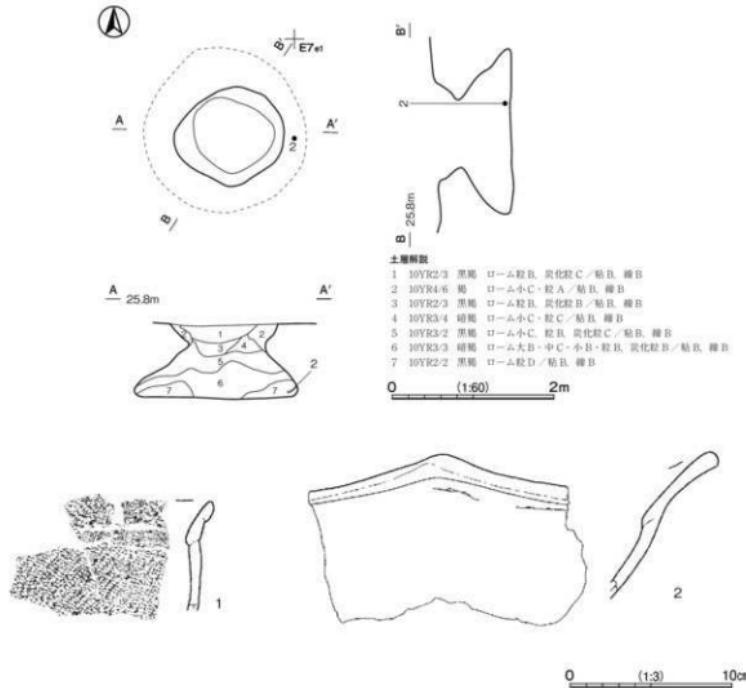
位置 調査区東部のE7丘区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は長径1.39m、短径1.22mの楕円形で、長径方向はN-88°-Eである。底面は径2.05mほどの円形で平坦である。確認面からの深さは93cmである。壁はオーバーハンプグして袋状を呈し、底面から高さ64cmのところでくびれ、上位は外傾している。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 繩文土器片85点（深鉢84、浅鉢1）、石器2点（打製石斧、台石）が出土している。1は覆土中から、2は東部の覆土下層から破片の状態でそれぞれ出土していることから、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第32図 第44号土坑・出土遺物実測図

第18表 第44号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	船土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[25.0]	(6.8)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口部に單輪窓文RL(横)、胴部に單輪窓文RL(縦)の施文	覆土中	
2	縄文土器	浅鉢	[40.0]	(10.6)	-	長石・石英・雲母・細繊	にぶい褐色	普通	波状口縁 内面に右段 外・内面に横方向の崩き	覆土下層	

第54号土坑（第33・34図 PL. 4）

位置 調査区東部のD 915区、標高24mの台地縁辺部に位置している。

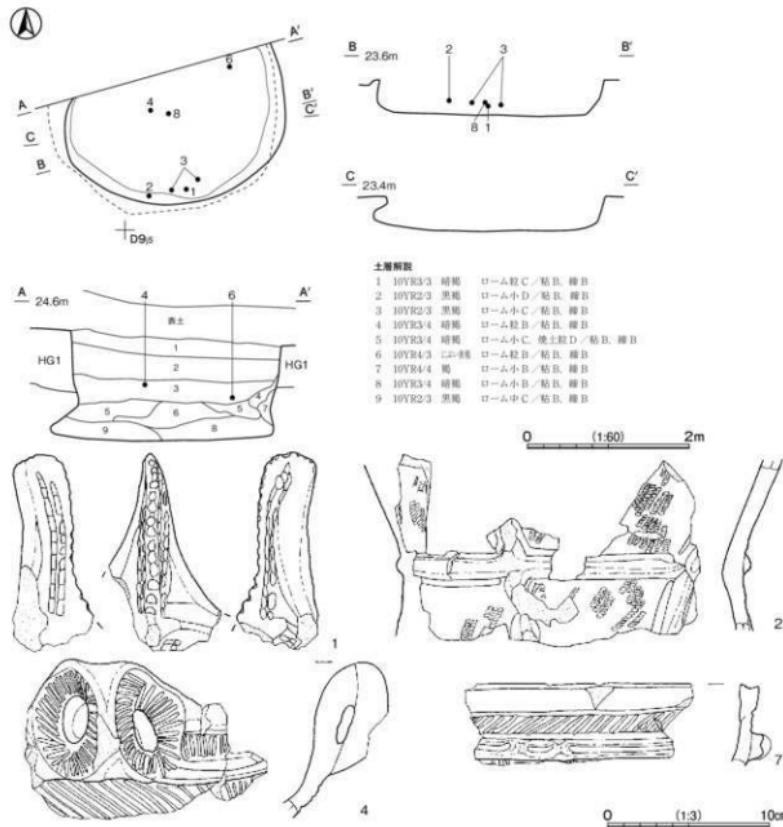
重複関係 第1号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びており、開口部は東西径273m、南北径1.65m、底面は東西径282m、南北径1.72mしか確認できなかった。平面形は円形又は梢円形と推定できる。底面は平坦で、確認面からの深さは132cmである。壁はオーバーハンジして袋状を呈している。

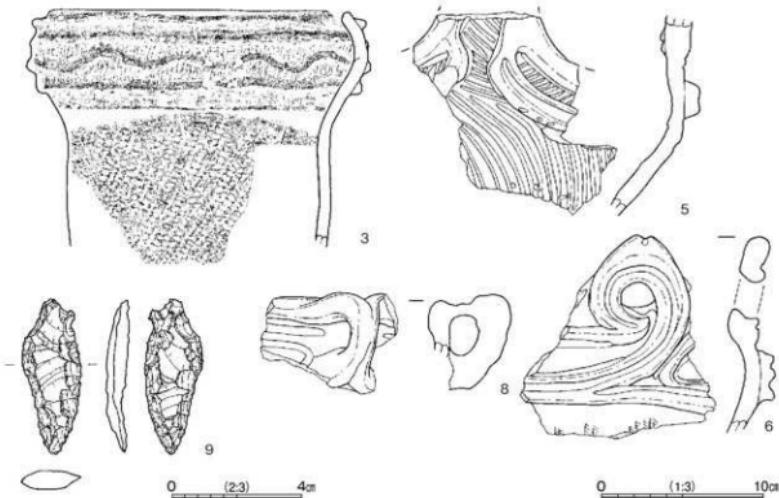
覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 繩文土器片338点（深鉢335、浅鉢3）、石器1点（石匙）が出土している。1～3は南部、8は中央部の覆土下層から、4は中央部、6は北東部の覆土中層から、5・7・9は覆土中から散乱した状態でそれぞれ出土している。これらは、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第33図 第54号土坑・出土遺物実測図



第34図 第54号土坑出土遺物実測図

第19表 第54号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(122)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	明褐	普通	口縁部に優美帯下、腹部上及び側面に三角刺突文の施文	覆土下層	
2	縄文土器	深鉢	-	(116)	-	長石・石英・雲母 細繩	灰黄褐	普通	口縁部と側面部を縦帶で区画。縫合に沿って比較文。両面部に網目状縦繩文RL(縦)の施文	覆土下層	5%
3	縄文土器	深鉢	[18.5]	(145)	-	長石・石英・雲母 細繩	にごい褐	普通	口縁部に優美帯下、側面部に網目状縦繩文及び波状縦繩文の施文。側面部に網目状縦繩文RL(縦)の施文	覆土下層	20% PL11
4	縄文土器	深鉢	-	(9.9)	-	長石・石英	明褐	普通	口縁部に優美帯下、側面部に網目状縦繩文。側面部に網目状縦繩文の施文	覆土中層	10% PL11
5	縄文土器	深鉢	-	(125)	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口縁部に優美帯下区画。口縁部内側を網目状縦繩文の施文。側面部に手取状縫合による波状縦繩文の施文	覆土中	5%
6	縄文土器	深鉢	-	(125)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	手取状縫合。把手下部から背面側縫合を貼付。縫合に沿って波状文。側部無施縫文(肩)	覆土中層	5%
7	縄文土器	深鉢	[22.5]	(5.0)	-	長石・石英・雲母 細繩	にごい褐	普通	背面側縫合を貼付し中央で縫合する。斜位の縫合の施文	覆土中	
8	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	縫合把手貼付。口縁部に横縫文の施文	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	石器	478	179	0.77	5.8	チャート	全体にていねいな押圧剥離 突出部や劈入	覆土中	PL13

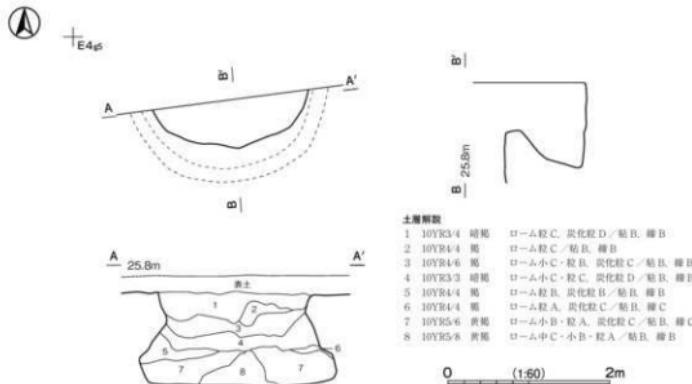
第61号土坑（第35図 PL.4）

位置 調査区西部のE 4 g5区、標高25 mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部の大半が調査区域外へ延びており、開口部は東西径1.91 m、南北径0.62 m、底面は東西径2.25 m、南北径1.02 mしか確認できなかった。平面形は円形又は梢円形と推定できる。底面は平坦で、確認面からの深さは112cmである。壁はオーバーハングして袋状を呈している。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられ、時期は他の土坑との配置状況から中期中葉と考えられる。



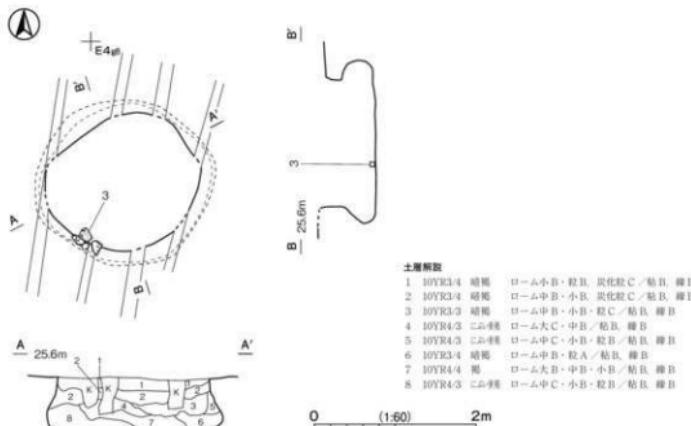
第35図 第61号土坑実測図

第101号土坑 (第36・37図 PL. 4)

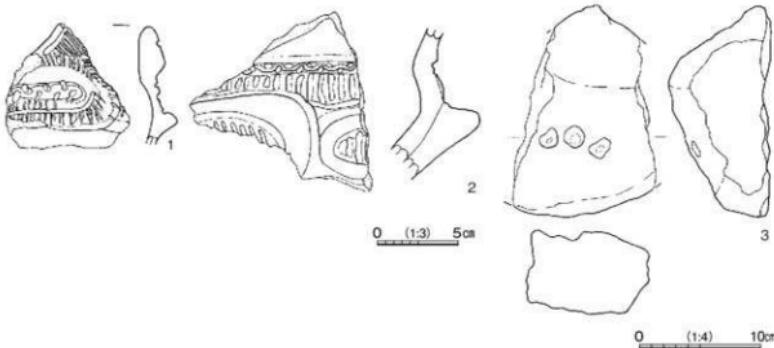
位置 調査区東部のE 4g8区、標高25mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は長径188m、短径164mの楕円形で、長径方向はN - 64° - Eである。底面は径2.18mほどの円形で平坦である。確認面からの深さは66cmである。壁はオーバーハングして袋状を呈している。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。



第36図 第101号土坑実測図



第37図 第101号土坑出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片 16点（深鉢）、石器 1点（凹石）、礫 1点（花崗岩）が出土している。1・2は覆土中から、3と花崗岩の礫は南西部の底面から出土しており、廃絶時に投棄されたものと考えられる。土器製作の際に粉碎し、粘土の混和材とした可能性がある。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第20表 第101号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	縦高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縩文土器	深鉢	-	(7.8)	-	長石・石英・黄母	明赤褐色	普通	口縁部半円形に目を有する縄文帶で区画した区画内交差する平行斜交文による漸純波状文の施文	覆土中	
2	縩文土器	深鉢	-	(9.1)	-	長石・石英	にぼい黄褐色	普通	頭部に交差斜交文による漸純波状文及び複数支分する平行斜交文による区画した区画内北側文	覆土中	5%
3	石器	凹石	17.2	(11.6)	8.4	(1.890)	花崗岩	凹み片面		底面	

第21表 縩文時代土坑一覧

番号	位置	未転方向	開口部 平圖面積	幾何学文様 (cm)		深さ 底径×縦径	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部	最大径 (cm)						
4	E 8a6	-	[円形]	2.26 × (1.56)	2.40 × (1.64)	74	平坦	内傾	人為	深鉢	
5	E 8a6	N - 16° - W	稍円形	194 × 1.64	2.20 × 2.08	122	平坦	内傾	人為	深鉢、磨石、削片	
6	D 8a9	-	[円形]	2.07 × (0.84)	2.53 × (1.04)	(68)	平坦	内傾	人為	深鉢、凹石	
7	E 8a9	-	円形	180 × 1.74	-	46	平坦	外傾	人為	深鉢、削片	
9	E 8e7	-	不整円形	103 × 0.95	2.12 × 2.05	110	平坦	内傾	人為	深鉢、磨石	
10	E 7a9	N - 30° - E	不整圓形	148 × 1.08	2.84 × 2.60	110	平坦	内傾	人為	深鉢、浅鉢、壺、磨製石斧	
11	E 7a9	N - 83° - E	稍円形	152 × 1.24	2.00 × 1.88	(48)	平坦	内傾	人為	深鉢、磨製石斧	
22	E 7a8	N - 79° - W	稍円形	114 × 0.92	2.18 × 2.02	135	平坦	内傾	人為	深鉢	
38	E 6e9	-	円形	109 × 1.05	2.76 × 2.60	146	平坦	内傾	人為	深鉢、浅鉢、打製石斧、敲石、石器	
44	E 7f1	N - 88° - E	稍円形	139 × 1.22	2.05 × 2.03	93	平坦	内傾	人為	深鉢、浅鉢、打製石斧、石器	
54	D 9a5	-	[円形-稍円形]	2.73 × (1.65)	2.82 × (1.72)	(132)	平坦	内傾	人為	深鉢、浅鉢、石器	HG 1 → 本跡
61	E 4g5	-	[円形-稍円形]	191 × (0.62)	2.25 × (1.02)	112	平坦	内傾	人為	-	
101	E 4g8	N - 64° - E	稍円形	1.88 × 1.64	2.18 × 2.12	66	平坦	内傾	人為	深鉢、凹石、礫	

(3) 遺物包含層

第1号遺物包含層（第38～43図 PL 1）

位置 調査区東部のD 9i3～E 10c1区、標高21～24mの台地斜面部に位置している。

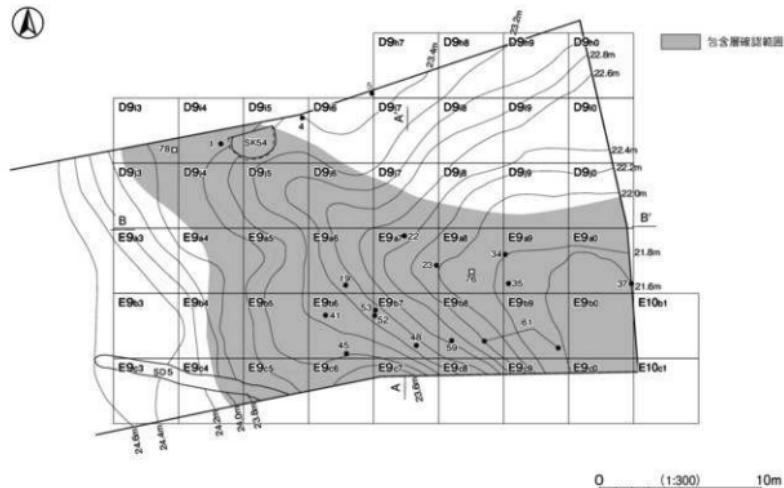
確認状況 調査区東部の緩斜面部から西部にかけて、等高線に直交するようにB-B'ラインの土層断面を確認する中央ベルトを設定して、遺物包含層の範囲を確認するとともに、その堆積状況の調査を行った。斜面上方で表土を約0.2m、下方で約1.8mの深さまで掘削したところ、暗褐色を呈し、遺物を多く含む包含層を確認した。この包含層は、斜面部に形成されていることから、上方では堆積が薄く、下方に行くに従い、厚い状況を呈していた。

重複関係 第54号土坑、第5号溝に掘り込まれている。

調査の方法 中央ベルトを残し、E10c1区を南東隅の起点として、確認範囲を4mの基本グリッドで覆った。層位については、グリッドごとに1xを深さ15cmとして、2x、3xと掘り下げて、遺物の取り上げを行った。

包含層の広がりと堆積状況 遺物の分布域は、北西から南東に向かって下っている斜面部に対し、弧状に広がる特徴を有していた。東西の幅は約32m、南北の長さは約17mである。高低差は約1.5mで、確認面での傾斜角は約5°である。全体では18層に分層でき、全体の層厚は0.2～1.5mである。第1・2層は再堆積ローム層、第3～18層は谷津堆積土である。第1層上面が包含層の上面で、第1～18層まで包含層となっている。

包含層はその色調や含有物から、上・中・下層に分けることができる。上層の暗褐色土を主体とする第1・2層は層厚10～70cmで、中央部から北部にかけて南北に帯状に広がっており、遺物の出土量が最も多い層である。中層の黒褐色土を主体とする第3～11層は層厚10～90cmで、中央部の暗褐色土の下位に堆積している層である。下層の暗褐色を呈する第12～18層は最も下位に堆積した層で、含まれる遺物は少ない。

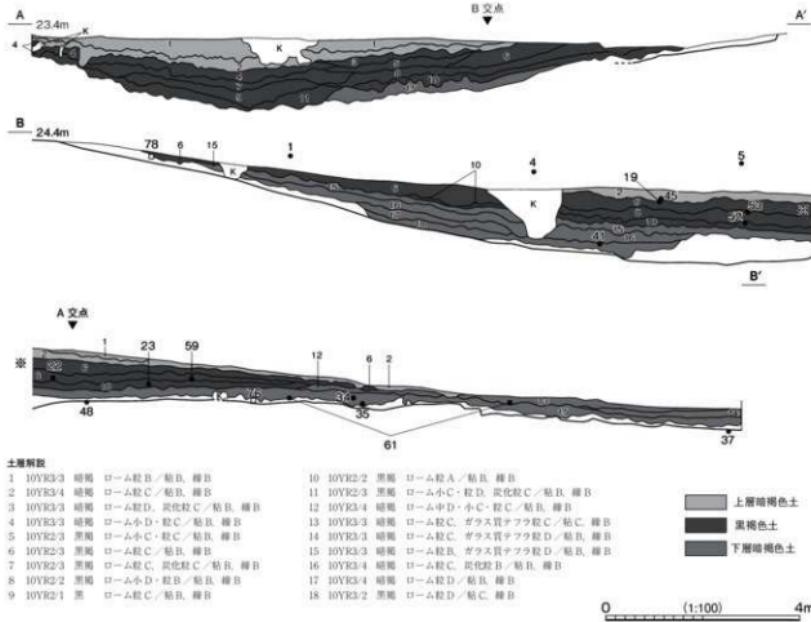


第38図 第1号遺物包含層実測図(1)

遺物出土状況 繩文土器を中心とする多量の遺物が出土している。縄文土器片 7,133 点 (108,805.5 g), 石器 26 点 (打製石斧 1, 磨製石斧 1, 磨石 10, 蔽石 3, スタンプ形石器 1, 剥片 10) のほか、土師器片 5 点 (坏), 陶器片 1 点 (碗) も出土している。

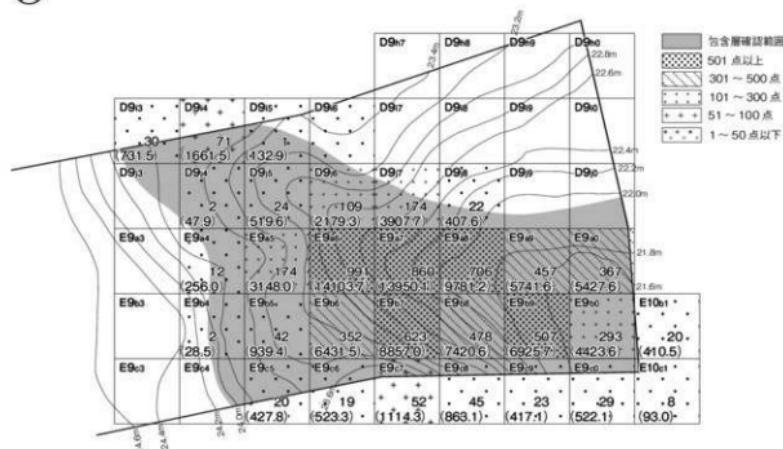
遺物は、本包含層中央部から南東部にかけて第 2 層上部から第 10 層上部に集中して出土している。土器の大半は小片であることから、上方から廃棄された土器の大半が碎け、集積したものとみられる。土器の形式は、各箇所・各層位ともに出土量の多寡はあるものの、早期前葉の稻荷台式～中期中葉の加曾利 E I 式まで確認できた。第 1・2 層からは、前期前葉の黒浜式～加曾利 E I 式の土器が混在して出土し、第 3～11 層からは、早期中葉の田戸下層式～前期後葉の浮島 II 式の土器が中心に出土していた。黒浜式～浮島 I a 式の土器が本包含層から出土した土器の大半を占めている。特に下層第 18 層からは三戸式の尖底土器がほぼ完形で出土している。これらの土器は台地上から縁辺部にかけて広がる早期前葉から中期中葉にかけての集落で、遺物の廃棄及び整地などの土地掘削が繰り返されていたことが想定される。しかし、黒浜式土器と諸磯 a 式土器、浮島 I a 式土器が一定量出土しているが、調査区域内からはこれらの時期に伴う構造は確認されていない。

所見 斜面上部では、台地上の施設構築時の掘削土を土器などの遺物とともに廃棄することによって形成され、下部では、上部の包含層の土砂が流入し、遺物が集積したことによる自然堆積による埋没過程で形成されたものと考えられる。時期は、早期前葉から中期中葉までの土器片が検出されていることから、この期間に断続的に形成されたものと推定できる。

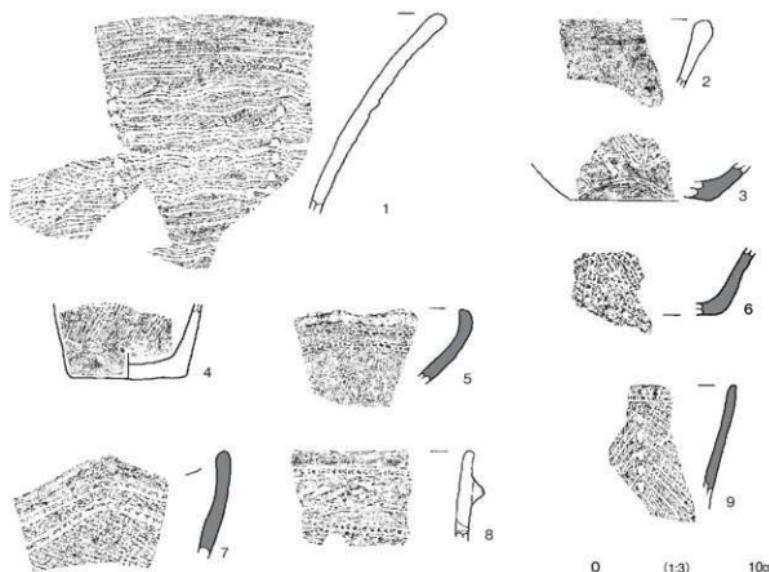


第 39 図 第 1 号遺物包含層実測図(2)

Ⓐ

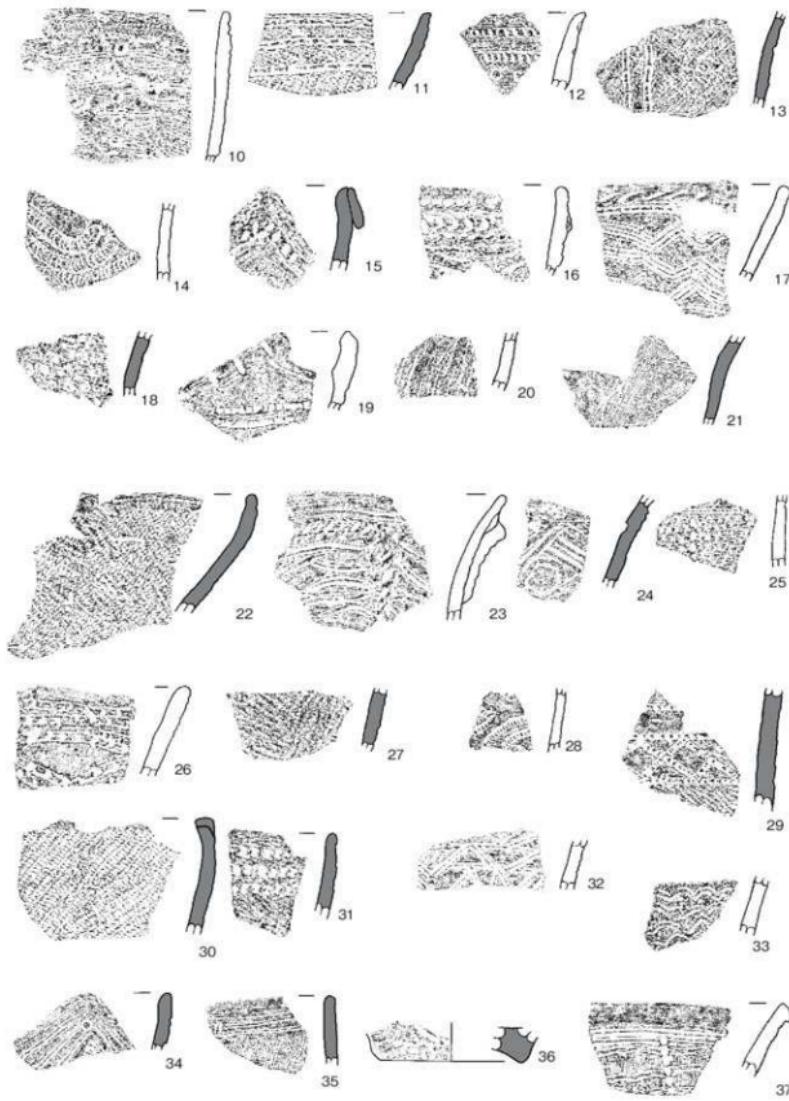


0 (1:300) 10m

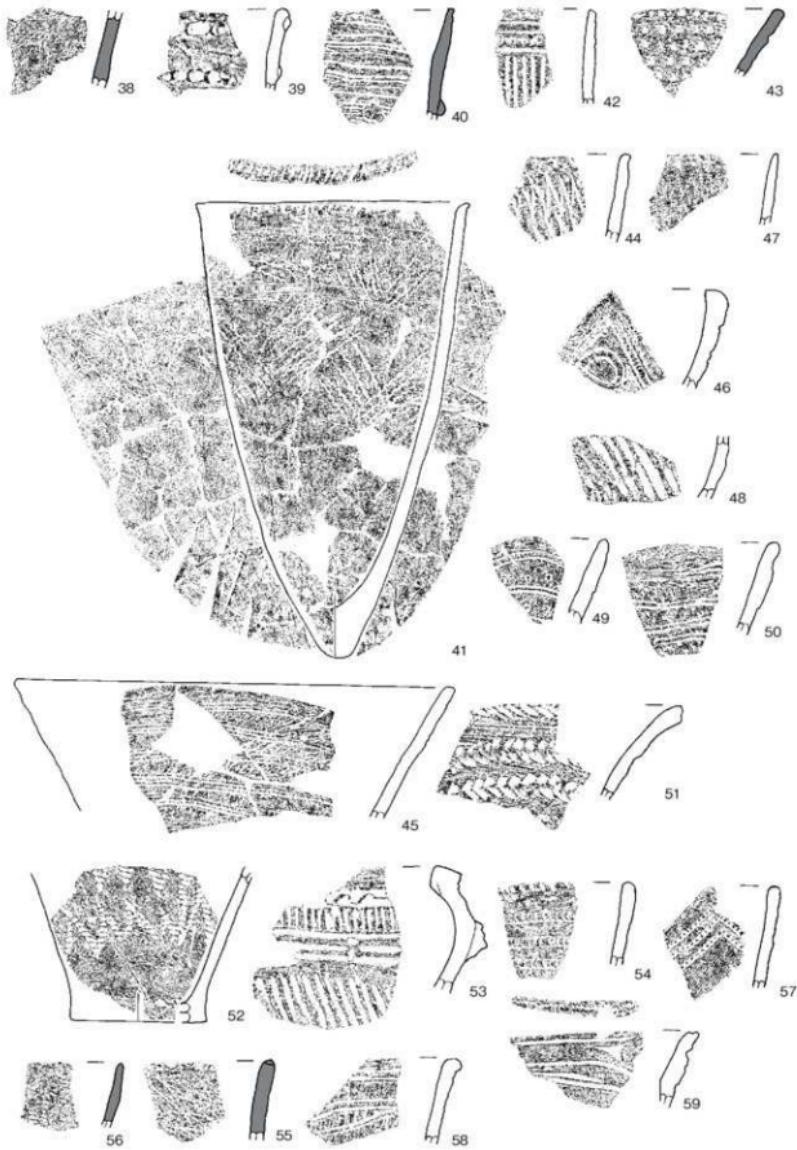


0 (1:3) 10cm

第40図 第1号遺物包含層・出土遺物実測図

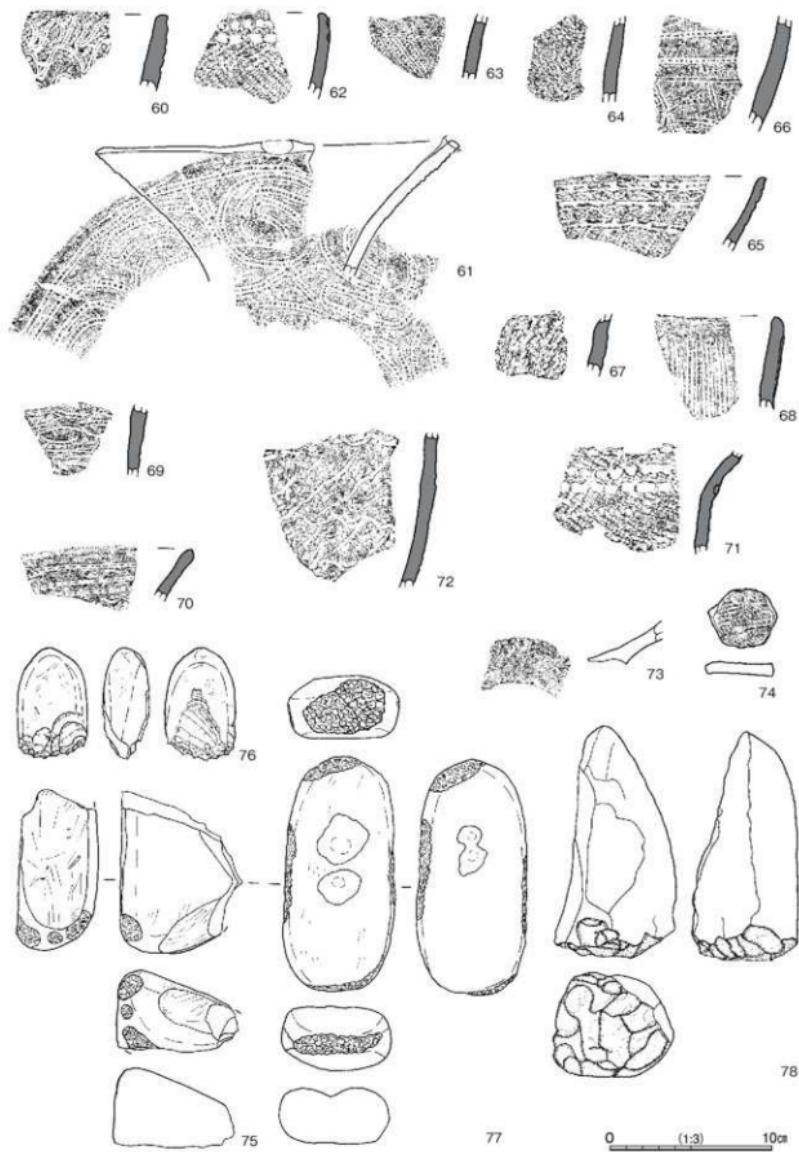


第41図 第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)



第42図 第1号遺物包含層出土遺物実測図(2)

0 (1:3) 10cm



第43図 第1号遺物包含層出土遺物実測図(3)

第22表 第1号遺物包含層出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[221]	(126)	-	長石・石英・雲母 に赤色粒子	に赤い鉄 普通	半截竹管による変形丸形容、木葉状支と三角刺突 及文部縦縫文LR(縦)	D 9/4 上層頭部土中 浮島 I a式	5% PL12	
2	縄文土器	深鉢	-	(42)	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	普通	口部膨肥厚 捺糸文	D 9/4 覆土中 PL12	5% PL12	
3	縄文土器	深鉢	-	(23)	[86]	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	半截竹管による筋骨文 底部上底	D 9/4 覆土中 PL12	5% PL12	
4	縄文土器	深鉢	-	(47)	72	長石・石英・雲母 に赤い鉄	普通	地文無縫彌文R(縦)	D 9/5 上層頭部土中 浮島 I a式	浮島 I a式	
5	縄文土器	深鉢	-	(47)	-	長石・石英・雲母・ 織維	橙	キャビラ式 地文まばらな燃点文	D 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
6	縄文土器	深鉢	-	(42)	[100]	雲母・織維 に赤い鉄	普通	半截竹管による筋骨文 地文彌文	D 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
7	縄文土器	深鉢	-	(66)	-	雲母・赤色粒子・ 織維	に赤い鉄 普通	キャビラ式 地文附加条半縫縫文 RL(縦・横)	D 9/7 覆土中 PL12	5% PL12	
8	縄文土器	深鉢	-	(55)	-	長石・石英・雲母 赤黄褐	良好	彌文型 陰唇貼付	D 9/7 覆土中 PL12	5% PL12	
9	縄文土器	深鉢	-	(77)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	半截竹管による山形沈縫文 神引き文	D 9/8 覆土中 諸島 a式	諸島 a式	
10	縄文土器	深鉢	-	(92)	-	長石・石英・雲母・ 織維	に赤い鉄 普通	变形爪彌文 木葉文と円形刺突文	E 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
11	縄文土器	深鉢	-	(50)	-	長石・石英・赤色粒子・ 織維	に赤い鉄 普通	キャビラ式 地文附加条の羽状縫文	E 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
12	縄文土器	深鉢	-	(47)	-	長石・石英・赤色粒子 に赤い鉄	普通	彌文型 円形刺突文	E 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
13	縄文土器	深鉢	-	(60)	-	長石・石英・雲母・ 織維	に赤い鉄 普通	キャビラ式 神引き文 流支付加条半縫縫文 RL(縦)	E 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
14	縄文土器	深鉢	-	(48)	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	高畠 普通	高畠きさくに爪彌文	E 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
15	縄文土器	深鉢	-	(61)	-	長石・石英・雲母・ 織維	に赤い鉄 普通	波紋口縁 陰唇貼付	E 9/6 覆土中 浮島 I a式	浮島 I a式	
16	縄文土器	深鉢	-	(53)	-	長石・石英・赤色粒子 に赤い鉄	橙	普通 变形爪彌文 地文上に三角刺突文	E 9/6 覆土中 PL12 (浮島 I b式)	5% PL12 5% PL12	
17	縄文土器	深鉢	-	(60)	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	普通	キャビラ式 地文半縫縫文 RL(縦)	E 9/6 覆土中 浮島 I a式	浮島 I a式	
18	縄文土器	深鉢	-	(39)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	相撲な押引き文	E 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
19	縄文土器	深鉢	-	(48)	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	普通	波紋口縁 半截竹管による押引き文	E 9/6 上層頭部土中 浮島 I a式 河原台 I a式	浮島 I a式 河原台 I a式	
20	縄文土器	深鉢	-	(37)	-	長石・石英 に赤い鉄	普通	半截竹管波状文	E 9/6 覆土中 PL12	5% PL12	
21	縄文土器	深鉢	-	(55)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	彌文	E 9/6 覆土中 植付房	5% PL12	
22	縄文土器	深鉢	-	(74)	-	長石・石英・雲母・ 織維	普通	キャビラ式 地文半縫縫文 RL(縦)	E 9/7 黒褐色土中 PL12	5% PL12	
23	縄文土器	深鉢	[176]	(77)	-	長石 に赤い鉄	良好	覆土上にキザミ目 木葉文	E 9/7 黒褐色土中 PL12	5% PL12	
24	縄文土器	深鉢	-	(58)	-	長石・石英・雲母・ 織維	に赤い鉄	半截竹管による斜斜と円形状彌文	E 9/7 覆土中 PL12	5% PL12	
25	縄文土器	深鉢	-	(45)	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	灰褐	普通 变形爪彌文 三角刺突文	E 9/7 覆土中 浮島 I a式	浮島 I a式	
26	縄文土器	深鉢	-	(60)	-	長石・石英・赤色粒子 に赤い鉄	普通	キャビラ式 地文半縫縫文 RL(横)	E 9/7 覆土中 PL12 (浮島 I b式)	5% PL12 5% PL12	
27	縄文土器	深鉢	-	(41)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	明黄褐	普通 变形爪彌文	E 9/7 覆土中 PL12	5% PL12	
28	縄文土器	深鉢	-	(40)	-	長石・石英 に赤い鉄	普通	変形爪彌文 文様の周りに磨削し	E 9/7 覆土中 諸島 a式	諸島 a式	
29	縄文土器	深鉢	-	(76)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	半截竹管によるキャビラ式 附加条縫文	E 9/7 覆土中 PL12	5% PL12	
30	縄文土器	深鉢	-	(72)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	灰褐	普通 波紋口縁 附加条縫文	E 9/8 覆土中 PL12	5% PL12	
31	縄文土器	深鉢	-	(53)	-	長石・石英・雲母・ 織維	に赤い鉄 普通	刺突文 地文半縫縫文 RL(横)	E 9/8 覆土中 PL12	5% PL12	
32	縄文土器	深鉢	-	(30)	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	橙	普通 半截竹管による山形沈縫文	E 9/8 覆土中 諸島 a式	諸島 a式	
33	縄文土器	深鉢	-	(37)	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	普通	半截竹管による波状沈縫文	E 9/8 覆土中 PL12	5% PL12	
34	縄文土器	深鉢	-	(36)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	波紋口縁 半截竹管による沈縫文と円形刺突文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
35	縄文土器	深鉢	-	(43)	-	長石・石英・赤色粒子 に赤い鉄	普通	半截竹管による沈縫文と斜面状文	E 9/9 下層頭部土中 浮島 I a式	浮島 I a式	
36	縄文土器	深鉢	-	(22)	[87]	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	底部上底	E 9/9 浮島 I a式	浮島 I a式	
37	縄文土器	深鉢	-	(45)	-	長石・石英・赤色粒子 に赤い鉄	普通	半截竹管による沈縫文 下部に押引き文 地文ま ばら燃点文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
38	縄文土器	深鉢	-	(48)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	半截竹管による刺突文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
39	縄文土器	深鉢	-	(51)	-	長石・石英・赤色粒子 に赤い鉄	普通	半截竹管による刺突文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
40	縄文土器	深鉢	-	(70)	-	雲母・織維 に赤い鉄	普通	半截竹管による波状沈縫文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
41	縄文土器	深鉢	[166]	283	-	長石・石英・雲母 に赤い鉄	普通	口部斜めY字目 彩沈縫と目錬縫に斜面状 及文部重刻山彌文 褐付着 部底尖底	E 9/9 F下層頭部土中 PL12	5% PL12	
42	縄文土器	深鉢	-	(57)	-	長石・石英・黒色粒子 に赤い鉄	普通	並行沈縫の区画内に三角刺突文 幅位に沈縫文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
43	縄文土器	深鉢	-	(41)	-	長石・石英・織維 に赤い鉄	普通	半截竹管による刺突文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
44	縄文土器	深鉢	-	(55)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通 半截竹管波状文	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	
45	縄文土器	深鉢	[264]	(88)	-	長石・石英・赤色粒子 に赤い鉄	普通	沈縫文 地文彌文系	E 9/9 覆土中 PL12	5% PL12	

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
46	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・非開	普通	波状口縁・手裁竹管による変形爪彫文と沈綱文	E 9.66 覆土中	PL12 浮島1a式
47	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母	櫻	普通	貝殻腹縁波状文	E 9.66 覆土中	浮島1b式
48	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい・櫻	普通	変形爪彫文と円形網突文	下端面南側上中	三ノ式
49	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英	にぶい・櫻	普通	変形爪彫文と円形網突文	E 9.67 覆土中	PL12 5% PL12 黒浜a式
50	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英	にぶい・櫻	普通	沈綱文 地文まばらな貝殻腹縁波状文	E 9.67 覆土中	5% PL12 黒浜b式
51	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英	櫻	普通	口唇部キザミ目 爪彫文	E 9.67 覆土中	5% PL12 浮島2式
52	縄文土器	深鉢	-	(9.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい・櫻	普通	貝殻腹縁波状文	E 9.67 黒浜a式	10% PL12 黒浜b式
53	縄文土器	深鉢	[22.0]	(7.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・櫻	普通	文刀網突文による連続波状文と条綱文 背削れ	E 9.67 覆土中	加曾利1式
54	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい・櫻	普通	手裁竹管によるキャビリヤ文	E 9.67 黒浜a式	諸磯a式
55	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英・繊維	にぶい・櫻	普通	口唇部指頭部・貝殻腹縁波状文	E 9.68 覆土中	5% PL12 黒浜式
56	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・繊維	にぶい・櫻	普通	手裁竹管によるキャビリヤ文	E 9.68 覆土中	5% PL12 黒浜式
57	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母	灰闇	普通	手裁竹管によるキャビリヤ文 地文單筋綱文LR(横)	E 9.68 覆土中	諸磯a式
58	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい・櫻	普通	手裁竹管による水草文 地文燃系文	E 9.68 覆土中	5% PL12 浮島1a式
59	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい・非開	普通	波状口縁 三叉文と沈綱文	下端面南側上中	PL12 5% PL12 黒浜a式
60	縄文土器	深鉢	-	(4.7)	-	反石・赤色粒子	にぶい・櫻	普通	波状沈綱文 地文附加条の半筋綱文LR(横)	E 9.69 覆土中	5% PL12 黒浜式
61	縄文土器	深鉢	[22.6]	(8.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・櫻	普通	変形爪彫文 地文燃系文	下端面南側上中	PL8
62	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・繊維	櫻	普通	口縁に沿って網突文 貼附加条の羽状綱文	E 9.70 覆土中	諸磯a式
63	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・繊維	にぶい・黄桜	普通	手裁竹管による波状沈綱文 キャビリヤ文 貼附加	E 9.70 覆土中	5% PL12 黒浜式
64	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・雲母・繊維	にぶい・櫻	普通	貝殻腹縁波状文	E 9.70 覆土中	PL12 黒浜式
65	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英・繊維	にぶい・櫻	普通	キャビリヤ文 地文附加条の羽状綱文	E 9.71 覆土中	5% PL12 黒浜式
66	縄文土器	深鉢	-	(7.0)	-	長石・石英・繊維	にぶい・櫻	普通	手裁竹管による沈綱文と変形爪彫文	E 9.71 覆土中	5% PL12 黒浜式
67	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英・繊維	にぶい・櫻	普通	貝殻腹縁波状文	E 9.78 覆土中	諸磯a式
68	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・繊維	櫻	普通	口縁部外削り状 3条1単位肩幅の沈綱文	E 9.79 覆土中	5% PL12 浮島下層式
69	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・石英・雲母・繊維	にぶい・櫻	普通	手裁竹管による水草文	E 10.51 覆土中	5% PL12 浮島1a式
70	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英・繊維	にぶい・黄桜	普通	手裁竹管による網突文	覆土中	5% PL12 黒浜式
71	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・石英・繊維	にぶい・黄桜	普通	刺突文 地文結束羽状綱文	覆土中	5% PL12 黒浜式
72	縄文土器	深鉢	-	(9.5)	-	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい・櫻	普通	波状燃系文 地文附加条綱文	覆土中	5% PL12 黒浜式
73	縄文土器	浅鉢	-	(2.6)	-	長石・石英	にぶい・櫻	普通	地文燃系文	E 9.77 覆土中	諸磯a式
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考
74	土器片	47.3	4.2	0.7	142	長石・石英・雲母	にぶい・櫻	普通	周縁部粗面に研磨	E 9.77 覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質		特徴		出土位置	備考
75	磨石	(100)	(7.5)	(5.0)	(479.6)	砂岩			下端部微細な敲打痕 摩擦研磨 上端部及び表面欠損	E 9.77 覆土中	
76	磨石	7.0	4.4	2.8	27.2	チャート			精円錐の片端部に微細な敲打痕 摩擦部の一部研磨	E 9.78 下端面南側上中	
77	凹石	14.5	6.8	4.0	600.1	砂岩			表面面に凹み痕 周縁部に多方向からの研磨により棱をもつ	D 9.45 覆土中	PL13
78	ミンガ石	(142)	(7.5)	(6.5)	(736.0)	砂岩			下端部敲打痕 摩擦部欠損	D 9.45 下端面南側上中	PL13

2 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡 12 棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴建物跡

第 1 号堅穴建物跡 (第 44・45 図 PL 5)

位置 調査区中央部の E 6 h8 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 62 号土坑に掘り込まれている。

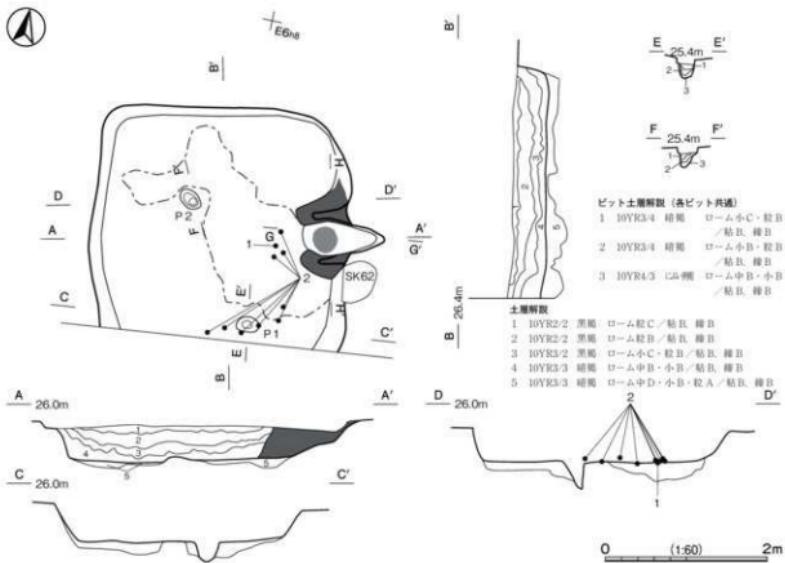
規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸 305 m、南北軸 2.80 m しか確認できなかった。主軸方向は N - 80° - E の隅丸長方形と推定される。壁は高さ 40 ~ 46 cm で、直立している。

床 平坦な貼床で、竈前面から北西部の P 2 周辺にかけて、踏み固められている。貼床は中央部を浅く北東・南東コーナー部を土坑状に、竈煙道部東側を半円状に掘り込み、ロームブロックを含む第 5 層を埋土して構築されている。

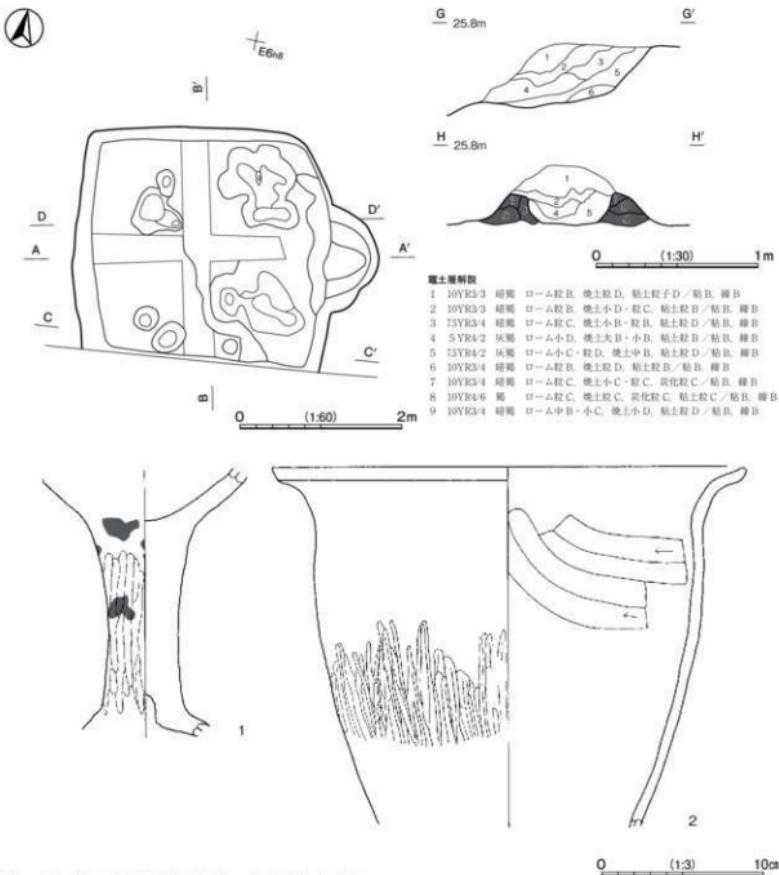
竈 東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部までは 101 cm、燃焼部幅は 32 cm である。袖部は地山の上に粘土粒子やローム粒子・焼土粒子などを含む第 7 ~ 9 層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 48 cm ほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第 2 ~ 4 層は、粘土粒子や焼土粒子などを含む天井部の崩落土である。

ピット 2か所。P 1・P 2 は深さ 26 cm で、性格は不明である。

覆土 4 層に分層できる。第 3・4 層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



第 44 図 第 1 号堅穴建物跡実測図



第45図 第1号竪穴建物跡掘方・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片7点（環3、高环1、甕類2、瓶1）、石器1点（剥片）のほか、炭化材3点、焼成粘土塊6点、鉄滓3点（179.87g）が出土している。この他に混入した縄文土器片14点が出土している。1は竪前の床面から、2は南壁際の床面と覆土下層から出土した破片が接合したものである。鉄滓は、建物内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。

第23表 第1号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	深度	底径	船土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
1	土師器	高环	-	(16.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	脚部外側へラ磨き	焼成粘土付着 支脚転用	床面	40%
2	土師器	瓶	[29.0]	(22.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口部底部・内面横ナナメ	体部外表面のヘラ磨き 体部内面へラナメ	覆土下層・床面	20%

第2号堅穴建物跡 (第46～48図 PL. 5)

位置 調査区中央部のE 6 d0区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

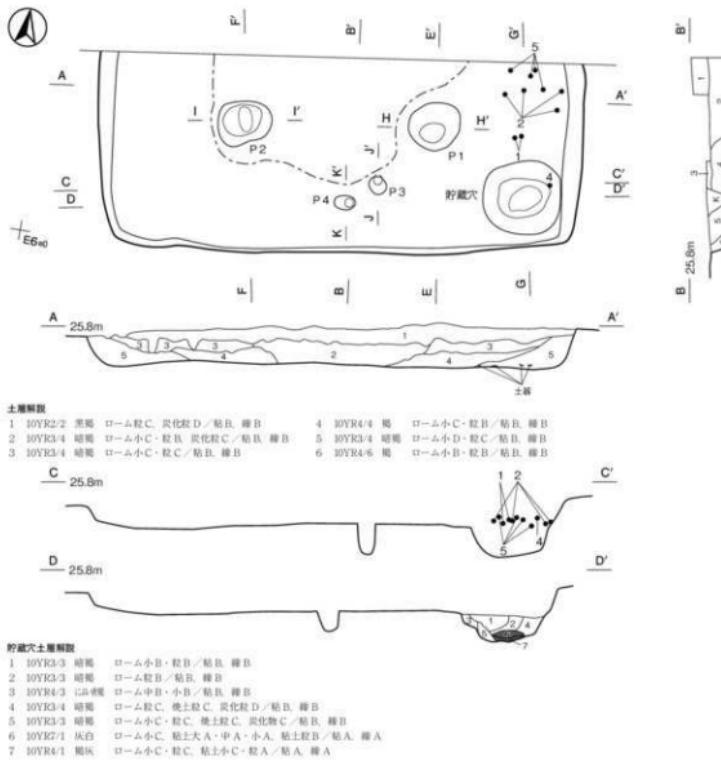
規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸600m、南北軸244mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-81°-Eと推定される。壁は高さ18～35cmで、外傾して立ち上がりっている。

床 平坦で、中央部から西部のP 2周辺にかけて、踏み固められている。

ピット 4か所。P 1・P 2はいずれも深さ40cmで、規模や配置から主柱穴である。P 3・P 4は深さ24cm・34cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P 1～P 4の第1～8層は柱抜き取り後の覆土である。

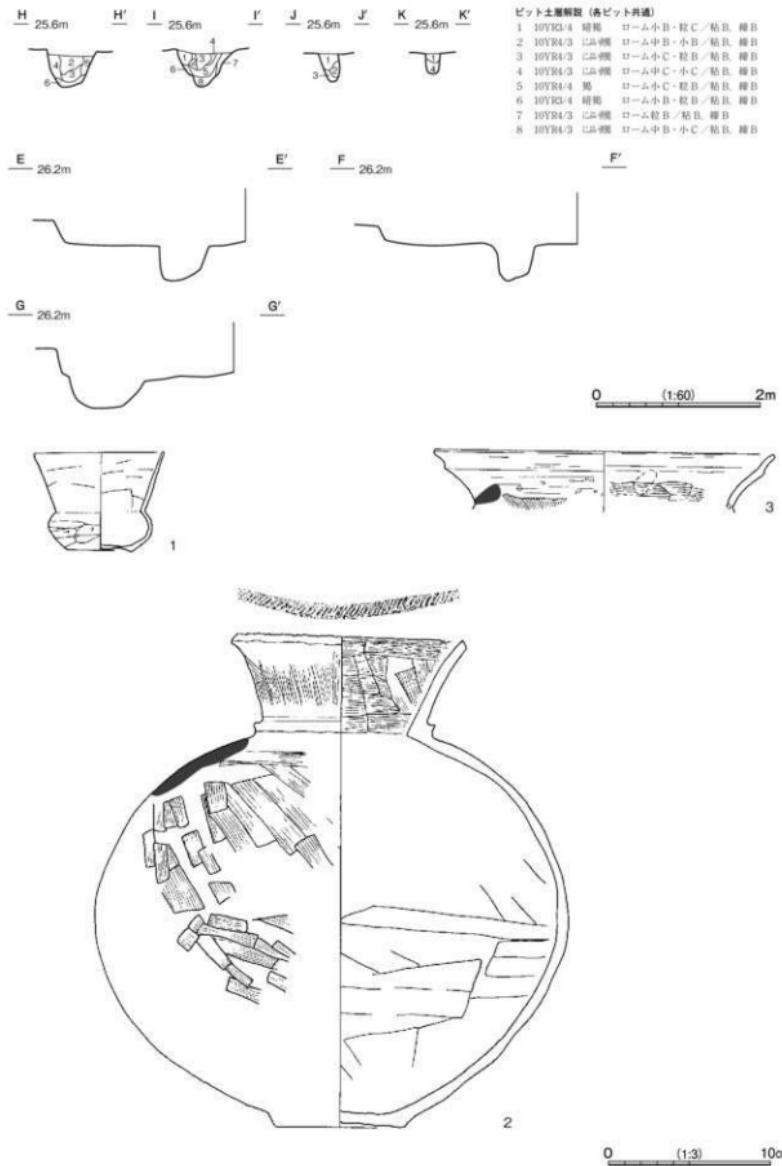
貯蔵穴 南東コーナー部に位置しており、長径95cm、短径89cmの不整梢円形である。深さは32cm、底面はU字状で、壁は外傾している。7層に分層でき、不規則な堆積状況から埋め戻されている。第6・7層は粘土を主とした塊である。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックなどが含まれ、不規則な堆積状況であることから、埋め戻されている。

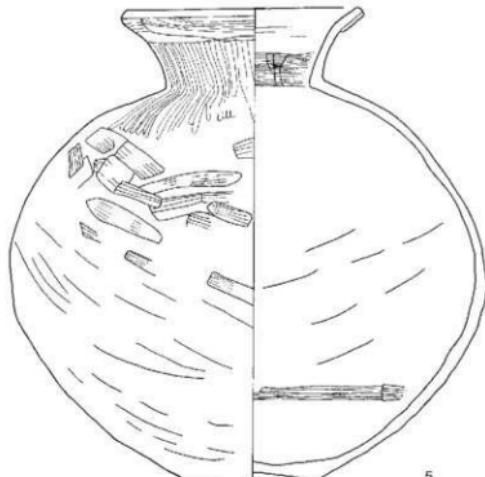
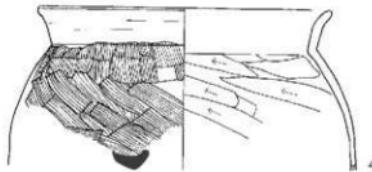


第46図 第2号堅穴建物跡実測図

0 (1:60) 2m



第47図 第2号堅穴建物跡・出土遺物実測図



5

0 (1:3) 10cm

第48図 第2号堅穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土器器片 154 点（壺 5、壙 2、器台 5、高壙 2、壺 26、甕類 114）。混入した縄文土器片 9 点が出土している。1 は貯蔵穴北側。2・5 は東壁際の覆土下層から出土した破片が接合したものである。4 は貯蔵穴の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀中葉と考えられる。

第24表 第2号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土器器	壙	7.9	6.1	3.8	長石・石英・雲母	浅黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外縁ハラ削り 内	覆土下層	95% PL14
2	土器器	壺	13.8	30.4	8.0	長石・石英・雲母	浅黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外縁ハラ削り 内	覆土下層	90% PL14
3	土器器	甕	[21.0]	[3.6]	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 下端ハラ削りハケ目調整後横	覆土下層	5% PL15
4	土器器	甕	[18.0]	(9.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外縁ハケ目調整 内縁ハラ削り	貯蔵穴 覆土上層	10%
5	土器器	壺	14.5	(29.8)	[8.4]	長石・石英・赤色粘土	にほい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外縁ハラ削き ハラ削り 覆土下層	覆土下層	70% PL14

第3号竪穴建物跡（第49・50図 PL 5）

位置 調査区中央部のE 717区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

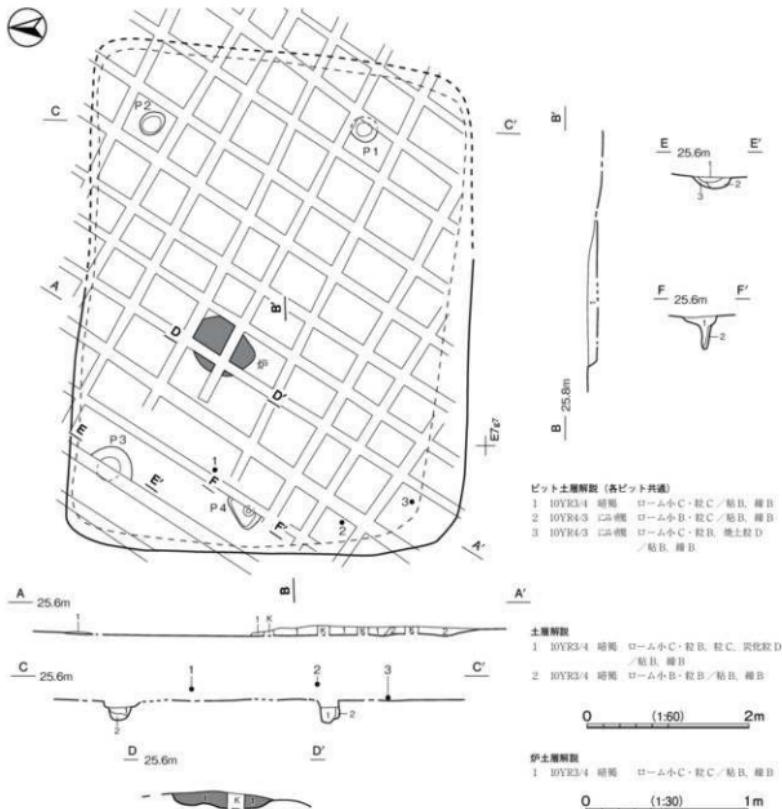
重複関係 第53号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 耕作により大部分が搅乱を受けている。短軸は4.72mで、長軸はピットの配置から6.20mほどと推定できる。形状は長方形で、長軸方向はN-93°-Eである。壁は高さ4~10cmで、外傾して立ち上がっている。

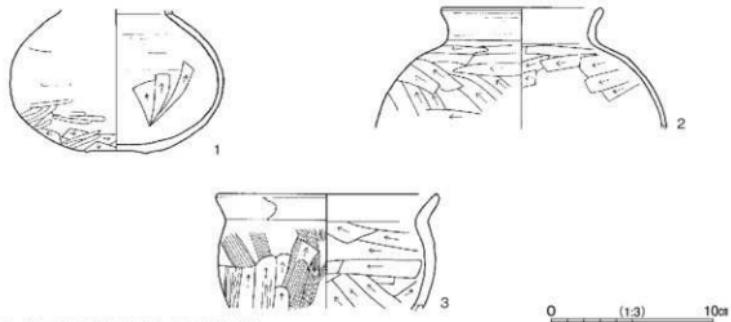
床 ほぼ平坦だが、大部分が搅乱を受けており、踏み固められた部分は確認できなかった。

ピット 4か所。P 1~P 3は深さ14~26cmで、性格は不明である。P 4は深さ40cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P 1~P 4の第1・2層は柱抜き取り後の覆土である。

炉 中央部やや北西側に付設されている。一部搅乱を受けているが、長径80cm、短径66cmの楕円形を呈する地床炉である。床面から深さ6cmほど掘りくぼめて構築されている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。



第49図 第3号竪穴建物跡実測図



第50図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。層厚が薄く、耕作による搅乱を受けているため堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片24点(壺1、壺1、甕類22)、混入した縄文土器片26点が出土している。3は南西コーナ部の床面から。1はP4北東側、2は西壁際の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀中葉と考えられる。

第25表 第3号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	壺	-	(88)	3.8	長石・石英・雲母 にぶい粒	普通	体部外面下端ハラ削り 中柱ヘラ削き 上笠模ナデ 内面下端ハラ削り 上笠模ナデ			覆土下層	30%
2	土師器	壺	[9.8]	(7.5)	-	長石・石英 にぶい粒	普通	1段部外・内面模ナデ 体部外端ハラ削り 内面 ハラ削り			覆土下層	5%
3	土師器	甕	[13.4]	(7.1)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	標準	普通	1段部外・内面模ナデ 体部外端ハケ目 内面 ハラナデ		床面	10%

第6号竪穴建物跡 (第51図 PL 5)

位置 調査区西部のE4g3区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸31.8m、短軸3.05mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁は高さ14~22cmで、外傾して立ち上がっている。

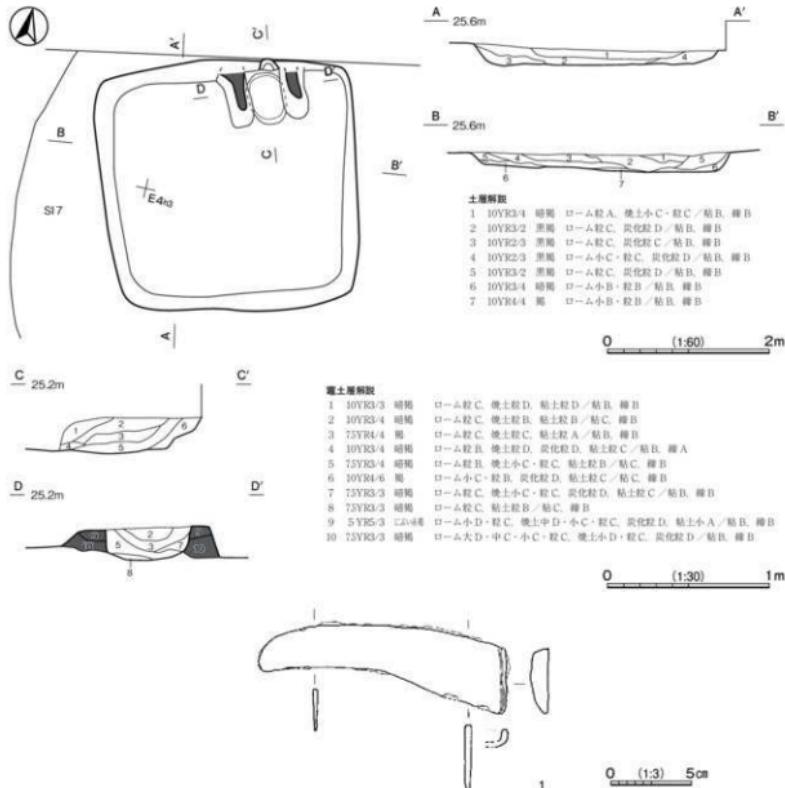
床 平坦で、踏み固められた部分は確認できなかった。

電 北壁のやや東側に付設されている。規模は焚口部から煙道部までは81cm、燃焼部幅は45cmである。袖部は地山の上にロームブロックや粘土粒子などを含む第9・10層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火床面は確認できなかった。煙道部は調査区域外へ延びているため確認できなかった。第2・3層は、粘土粒子や焼土粒子などを含む天井部の崩落土である。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む層があることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片7点(甕類)、須恵器片1点(甕類)、金属製品1点(鎌)、焼成粘土塊1点、鉄滓19点(653.32g)が出土している。この他に混入した縄文土器片22点が出土している。1は覆土中から出土した破片が接合されたものである。鉄滓は、建物内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期を決定できる土器は出土していないが、周囲の竪穴建物跡との関係や規模と形状から7世紀代と考えられる。



第51図 第6号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第26表 第6号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	鍔	15.3	4.1	0.3~0.4	(75.31)	鉄	刃部断面三角形 基部折り返し	覆土中	PL15

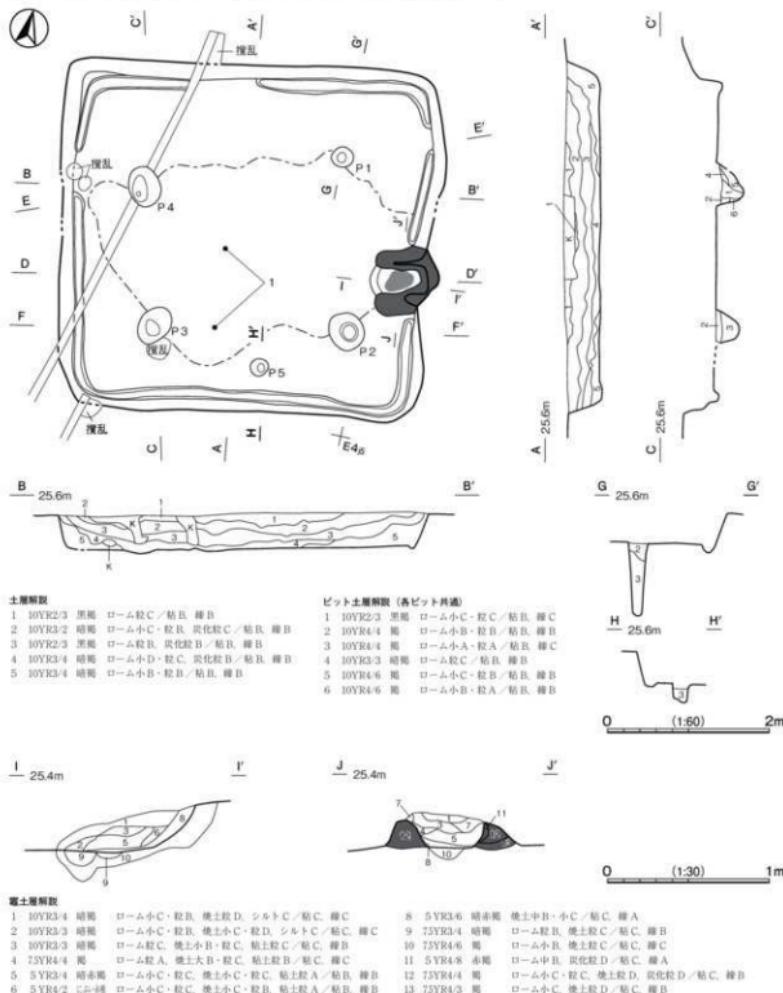
第8号堅穴建物跡（第52・53図 PL 5）

位置 調査区西部のE 44区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.69m、短軸4.25mの長方形で、主軸方向はN-78°-Eである。壁は高さ38~44cmで、直立している。

床 平坦で、竈前面から西部の壁際にかけて、踏み固められている。壁溝が北壁下と東壁下、西壁下の一部を除いて巡っている。

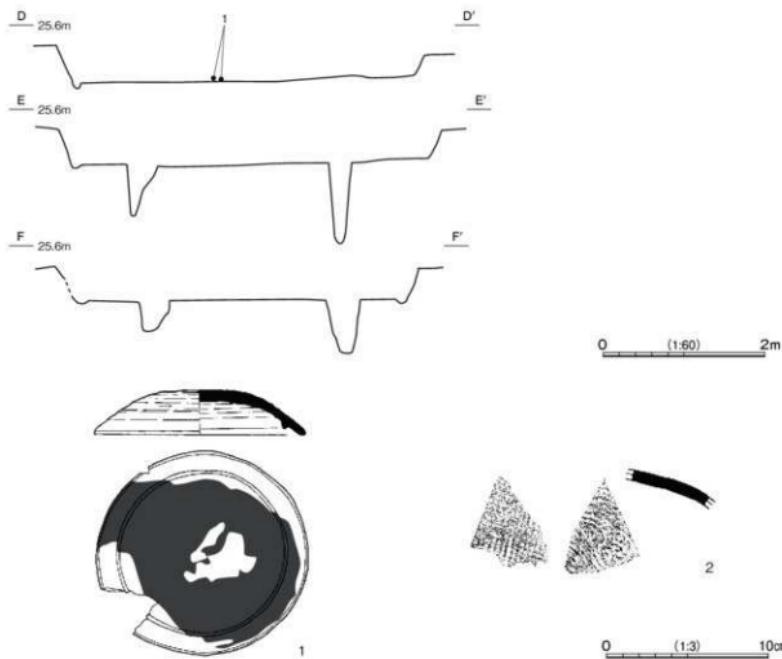
竈 東壁中央部のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部までは83cm、燃焼部の幅は39cmである。袖部は地山の上に粘土粒子やロームブロックなどを含む第11～13層を積み上げて構築されている。火床部は床面から18cmほど掘りくぼめ、第9・10層を埋土して構築されている。火床面は第9層の上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に20cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第3～7層は、粘土粒子や焼土粒子などを含む天井部の崩落土である。



第52図 第8号堅穴建物跡測定図

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ40～100cmで、規模や配置から主柱穴である。P 5は深さ22cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。第1層は柱抜き取り痕で、第2～6層は埋土である。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第53図 第8号堅穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 須恵器片2点（蓋、壺類）、土製品1点（土器片円盤）、焼成粘土塊6点、炉壁2点（102.64g）、鉄滓18点（1,004.19g）、製鍊滓（炉内滓）6点（1,044.01g）が出土している。この他に混入した繩文土器片101点が出土している。1は中央部から南部にかけて床面から、2は覆土中から出土している。製鉄関連遺物は、建物内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀後葉と考えられる。

第27表 第8号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	覆高	底径	船土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	壺	130	(29)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	天井部クロコ剥り 狹め打ち欠き 横軸用	床面	90% PL14
2	須恵器	壺	-	(25)	-	長石・石英	黒褐	普通	体部外縁格子目叩き 内面同心円状の当て具痕	覆土中	

第11号竪穴建物跡（第54～56図 PL 5・6）

位置 調査区西部のE 4j8区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第124号土坑を掘り込んでいる。

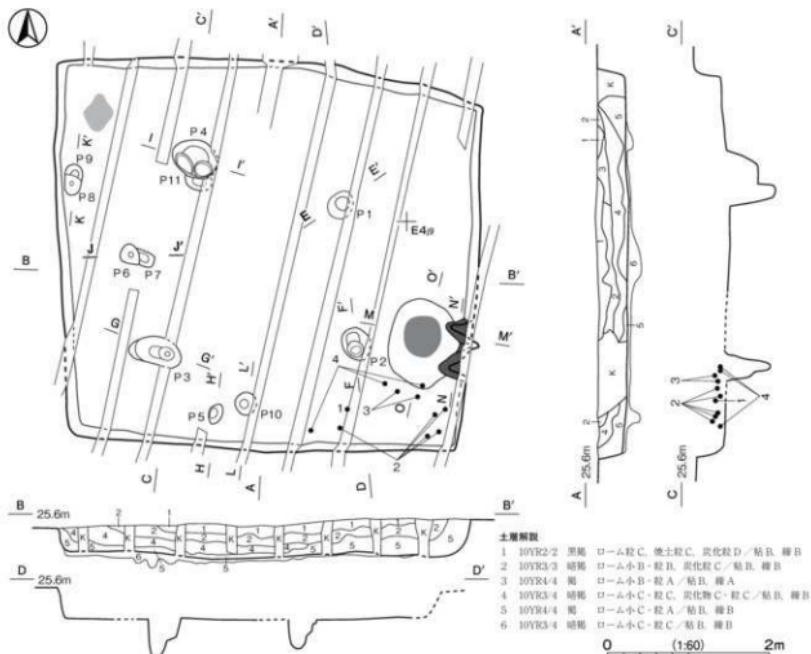
規模と形状 長軸5.18m、短軸4.76mの方形で、主軸方向はN-98°-Eである。壁は高さ34～39cmで、直立している。

床 平坦であるが、硬化面は確認できなかった。貼床は中央部と南東コーナー部を土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む第6層を埋土して構築されている。

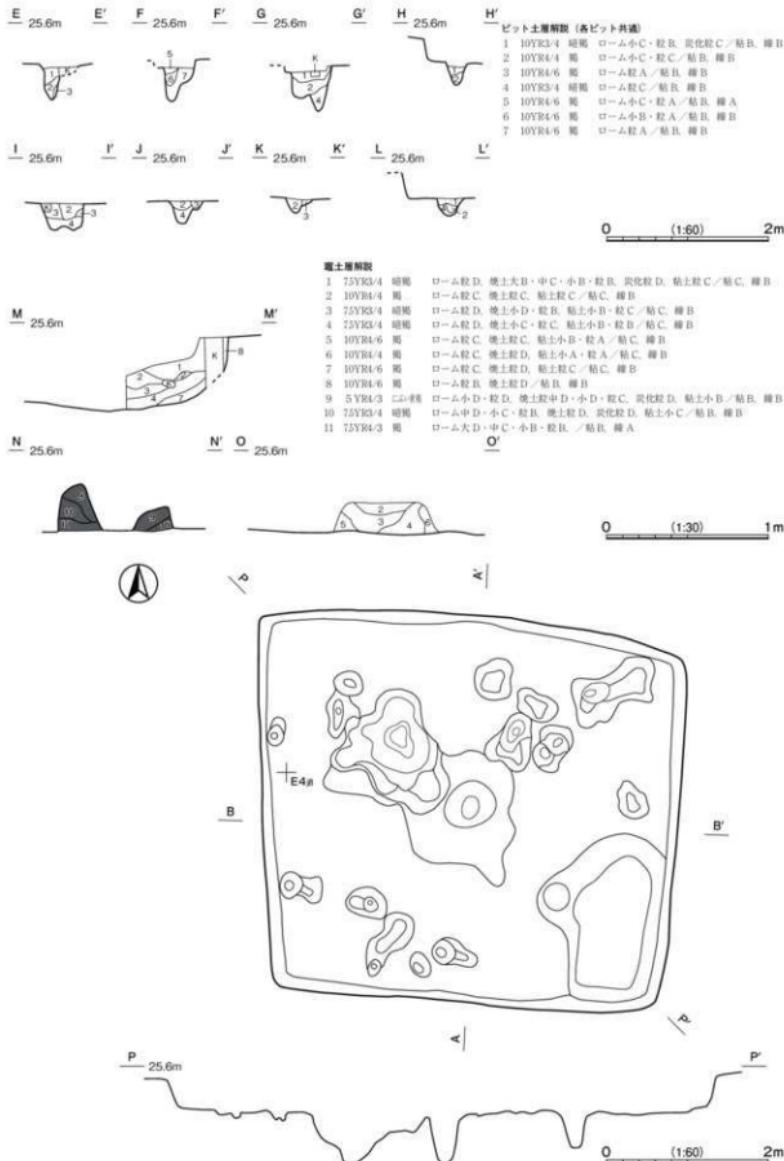
電 東壁のやや南部に付設されている。搅乱を受けており、確認できた規模は焚口部から煙道部まで110cm、燃焼部幅は108cmである。遺存している袖部は、床面の上にロームブロックや粘土ブロックなどを含む第9～11層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は一部が搅乱を受けているが、壁外に掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がり、奥壁で直立している。第2～6層は、焼土粒子や粘土粒子などを含む天井部の崩落土である。

ピット 11か所。P 1～P 4は深さ26～60cmで、規模や配置から主柱穴である。P 5・P 10は深さ21cm・22cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P 6～P 9・P 11は深さ8～34cmで、性格不明である。

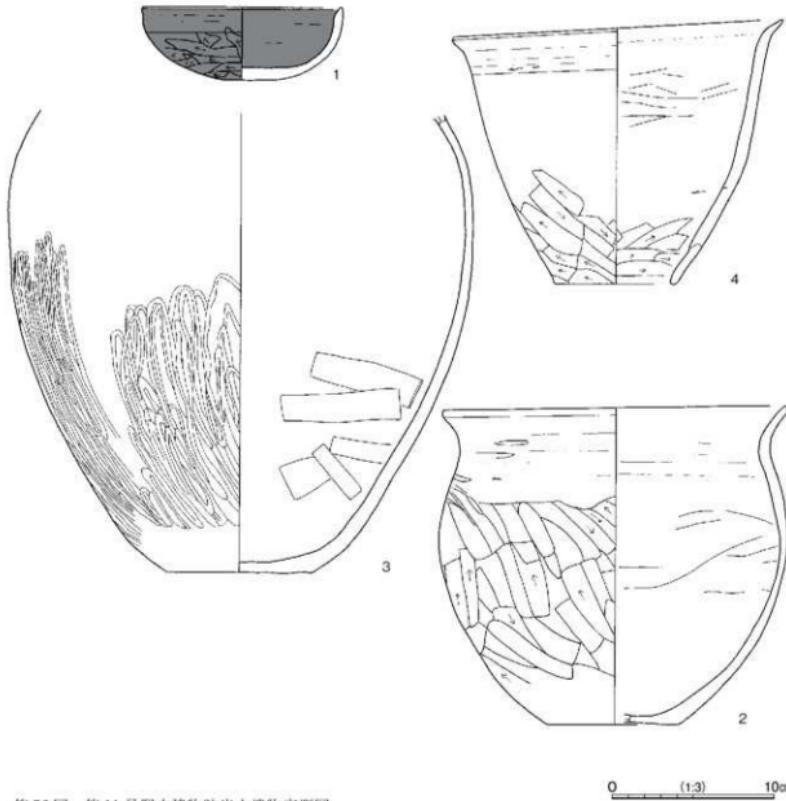
覆土 5層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第54図 第11号竪穴建物跡実測図



第55図 第11号堅穴建物跡掘方実測図



第 56 図 第 11 号竪穴建物跡出土遺物実測図

0 (1.3) 10cm

遺物出土状況 土師器片 8 点 (坏 3, 壺 4, 瓶 1), 焼成粘土塊 1 点, 石器 1 点 (磨石), 炉壁 3 点 (169.48g), 鉄滓 9 点 (1,265.09g), 製鍊滓 (炉内渣) 6 点 (3,354.67g) が出土している。この他に混入した縄文土器片 43 点が出土している。1 は南東部, 3 は竪南側の覆土中層から出土している。2 は南東コーナ部の覆土中層と下層から、4 は南部壁際と竪南側の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。製鉄関連遺物は、住居内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。

第 28 表 第 11 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	はか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[12.2]	4.5	—	長石・石英・雲母	黒	普通	口縁部外・内面横ナラ削り	体部外削ヘラ削り 内	覆土中層	(60%) PL14
2	土師器	壺	[21.1]	(19.7)	[8.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナラ削り	体部外削ヘラ削り 内	覆土中層・下層	(60%) PL15
3	土師器	壺	—	(28.5)	[9.0]	長石・石英・雲母	褐	普通	体部外削ヘラ削き	内面ヘラナラ削付着	覆土中層	40%
4	土師器	瓶	[20.1]	16.4	7.5	長石・石英・雲母 赤色粒子・細織	にい黄褐	普通	口縁部外・内面横ナラ削り	体部外削下端斜削のへ り削り 内面上端ヘラナラ削り 下端ヘラ削り	覆土下層	50%

第 12 号竪穴建物跡（第 57 図 PL 6）

位置 調査区西部の E 4f0 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため東西軸 4.02 m、南北軸 0.68 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向は不明である。壁は高さ 14 ~ 26 cm で、外傾して立ち上がっている。

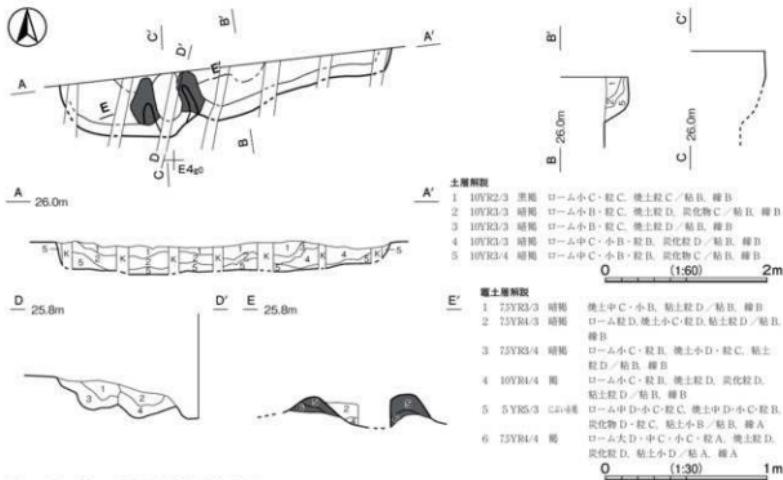
床 平坦で、南部の竪前にかけて、踏み固められている。

竪 南壁の西部に付設されている。確認できた規模は焚口部から煙道部までは 80 cm、燃焼部は搅乱を受けしており幅は 31 cm のみである。袖部は地山の上にロームブロックや焼土粒子、粘土ブロックなどを含む第 5 ~ 6 層を積み上げて構築されている。火床部は凹凸があり、火床面は確認できなかった。煙道部はわずかに壁外に掘り込まれ、段を有して緩やかに立ち上がっている。第 1 ~ 2 層は、粘土粒子や焼土粒子などを含む天井部の崩落土である。

覆土 5 層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片 1 点（壺類）、縄文土器片 3 点、鉄滓 2 点 (269.24g) が出土している。縄文土器片は混入である。鉄滓は、建物内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期を決定できる土器は出土していないが、周囲の竪穴建物跡との位置関係などから 7 世紀代と考えられる。



第 57 図 第 12 号竪穴建物跡実測図

第 14 号竪穴建物跡（第 58・59 図 PL 6）

位置 調査区西部の E 5h2 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 4.52 m、短軸 4.37 m の方形で、主軸方向は N - 12° - E である。壁は高さ 22 ~ 34 cm で、直立している。

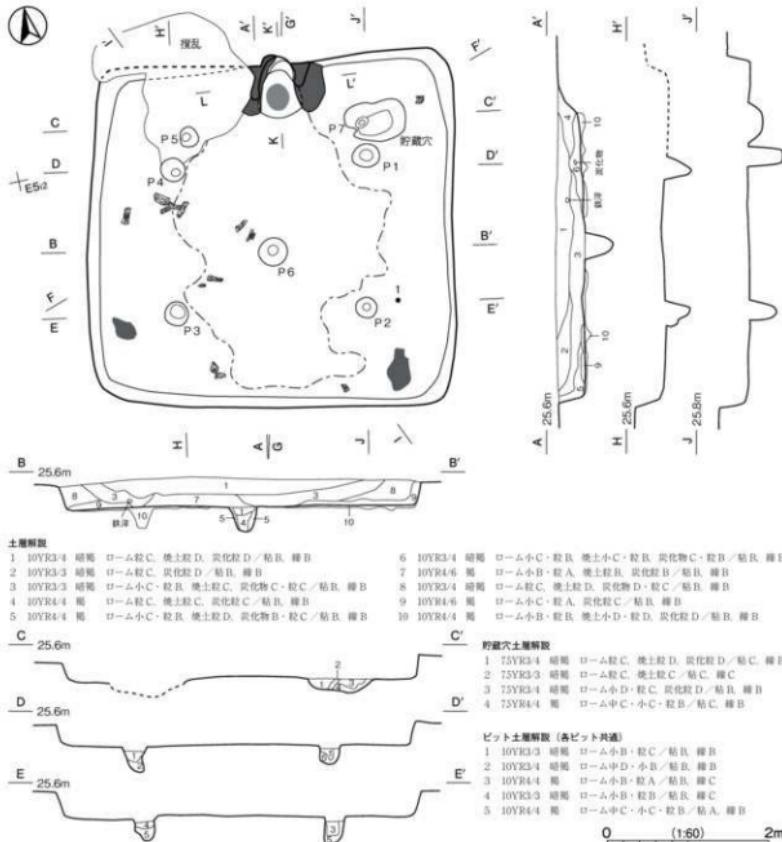
床 平坦で、竪前面から南壁にかけて踏み固められている。貼床はコーナー部を土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む第 10 層を埋土して構築されている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部までは74cm、燃焼部の幅は43cmである。袖部は床面の上にロームブロックや粘土粒子などを含む第8～11層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に10cmほど掘り込まれ、火床部から床面とほぼ同じ高さで、奥壁で直立している。第3～5層は、焼土ブロックや粘土ブロックなどを含む天井部の崩落土である。

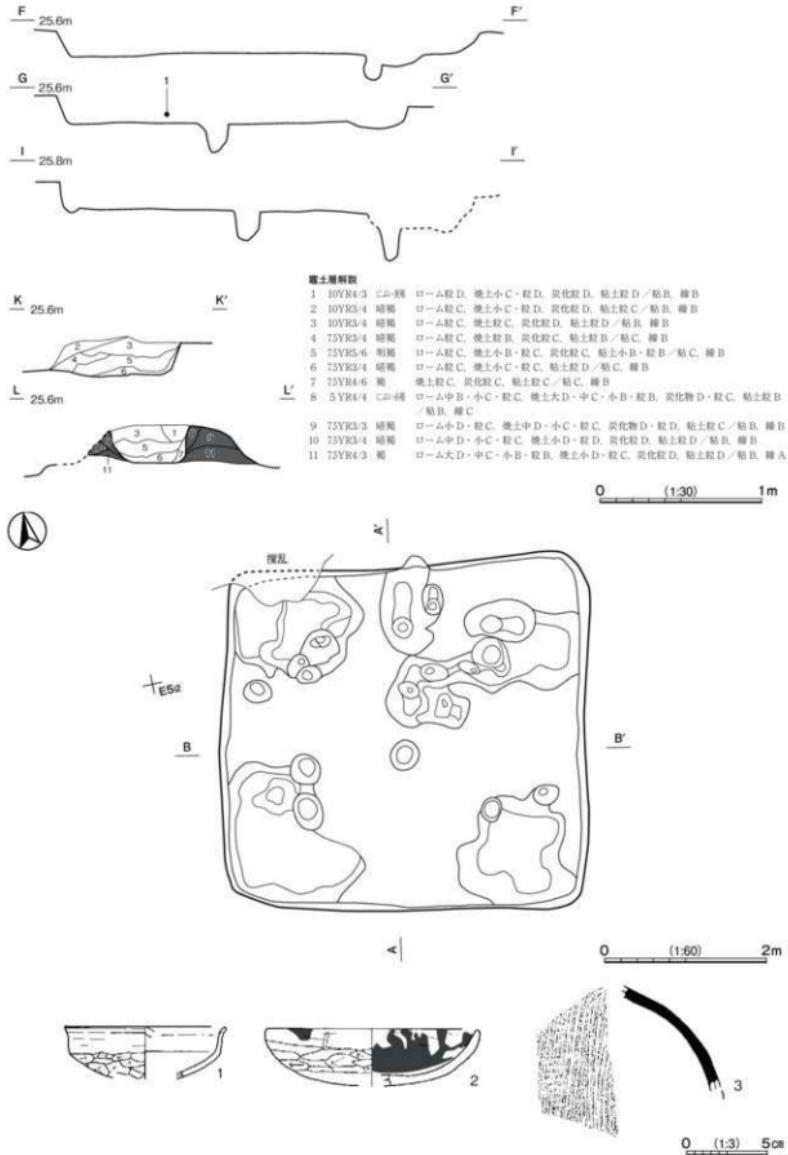
ピット 7か所。P1～P4は深さ12～18cmで、規模や配置から主柱穴である。P5～P7は深さ18～36cmで、性格不明である。P1～P7の第1～5層は柱抜き取り後の覆土である。

貯蔵穴 竈の東側に位置し、P7と重複している。長径78cm、短径50cmの不整梢円形で、深さは15cmである。壁は外傾して立ち上がりっている。4層に分層でき、不規則な堆積状況から埋め戻されている。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第58図 第14号竪穴建物跡実測図



第59図 第14号堅穴建物跡掘方・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 26 点（坏 11, 壺類 15), 須恵器片 2 点（提瓶, 壺類), 焼成粘土塊 16 点, 炭化材 1 点, 炉壁 7 点 (3.6785g), 製鍊滓 (炉内滓) 9 点 (2.31740g), 鉄滓 19 点 (2.74086g) が出土している。この他に混入した縄文土器片 41 点が出土している。1 は P 2 の南東側の覆土下層から、2・3 は覆土中から出土している。製鉄関連遺物は、建物内に製鉄に関する遺構がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。

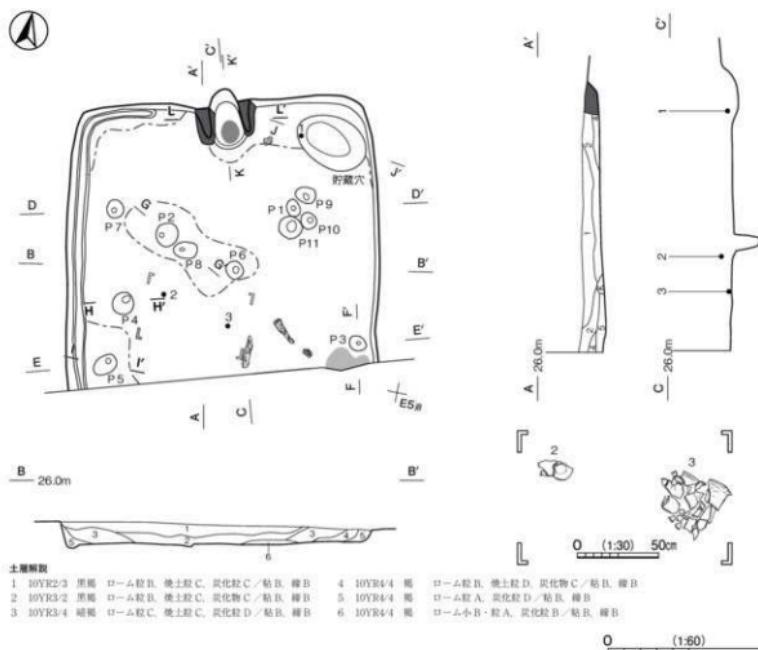
第 29 表 第 14 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	高さ	底様	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[99] (32)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通 直機ナゲ	口縁部外・内面機ナゲ 体部外面ヘラ削り 内 面機ナゲ	覆土下層	30%	
2	土師器	坏	[330] (35)	-	長石・石英・赤色斑子	棕	普通 直機ナゲ	口縁部外・内面機ナゲ 体部外面ヘラ削り 内 面機ナゲ	覆土中	20%	
3	須恵器	提瓶	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	灰灰	良好 体部外表面に並行カキ目 内面ナゲ	覆土中	5%	

第 15 号竪穴建物跡 (第 60 ~ 62 図 PL 6)

位置 調査区中央部の E 517 区, 标高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸 384 m, 南北軸 3.36 m しか確認できなかった。主軸方向は N - 11° - W の長方形と推定される。壁は高さ 12 ~ 32 cm で、外傾して立ち上がっている。



第 60 図 第 15 号竪穴建物跡実測図(1)

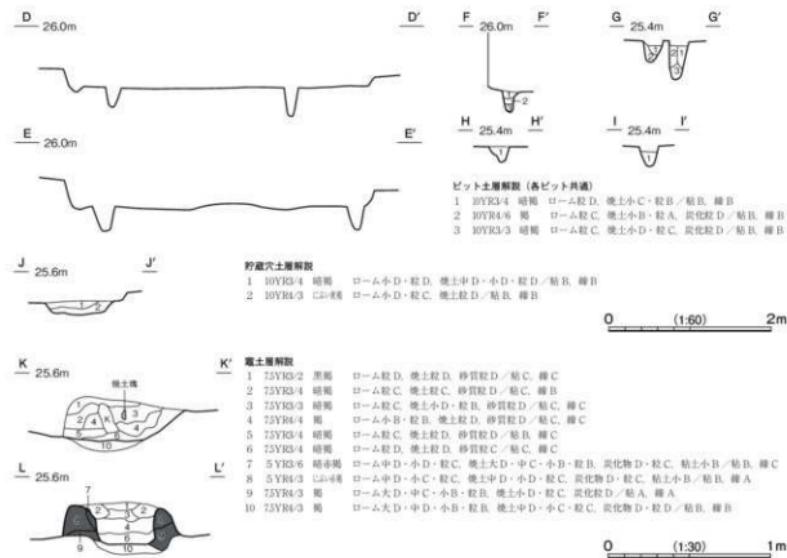
床 平坦で、中央部のP2・P6・P8の周辺を除いて、踏み固められている。壁溝が北壁から西壁下に巡っている。南東部で焼土、南部で炭化材と炭化物を確認した。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部までは74cm、燃焼部の幅は37cmである。竈は地山を15cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第10層を埋土して構築している。袖部はロームブロックや粘土ブロックなどを含む第7~9層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりややくぼんでおり、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に20cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第2~6層は、焼土粒子や砂質粒子などを含む天井部の崩落土である。

ピット 11か所。P1・P2は深さ32cm・36cmで、主柱穴である。P3~P11は深さ22~32cmで、性格不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径90cm、短径62cmの楕円形で、深さは14cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

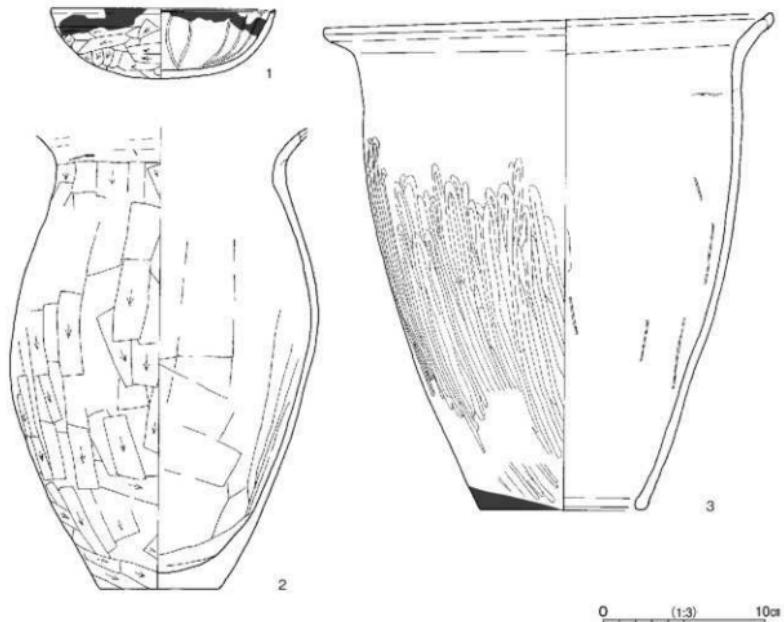
覆土 6層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第61図 第15号堅穴建物跡実測図(2)

遺物出土状況 土師器片43点(壺21、壺1、甕類20、瓶1)、炉壁2点(145.07g)、鉄滓16点(1.58203g)、製錬滓(炉内滓)2点(101.78g)が出土している。この他に混入した縄文土器片14点が出土している。3は南部の床面から、1は貯蔵穴西側の覆土下層から、2は南西部の覆土上層からそれぞれ出土している。製錬関連遺物は、建物内に製錬に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。焼土や炭化材、炭化物が南部から南東部にかけての床面から出土しており、焼失家屋とみられる。



第 62 図 第 15 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 30 表 第 15 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	壁高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考	
1	土器器	坪	138	43	-	灰石・石英・ 黄母・赤色粒子	に赤い粉	普通	口縁部外・内面横ナデ 直放射状のヘラ削き	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内	約縄穴 覆土下層	30%
2	土器器	甕	-	(286)	73	長石・石英・ 黄母	に赤い粉	普通	口縁部外・内面横ナデ 直放射状のヘラ削き	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内	覆土上層	60%
3	土器器	瓶	27.7	308	10.1	長石・石英・ 黄母・磁輝	に赤い黄粉	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半ヘラナデ 下半縁位のヘラ削き 内面ヘラナデ	床面	90% PL14	

第 16 号竪穴建物跡 (第 63 図 PL. 6)

位置 調査区中央部の E 58 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸 371 m、南北軸 3.68 m しか確認できなかった。主軸方向は N - 3° - W の長方形と推定でき、壁は高さ 5 ~ 10 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部から東側にかけて、踏み固められている。貼床は、ロームブロックを含む第 6 層を埋土して構築されている。

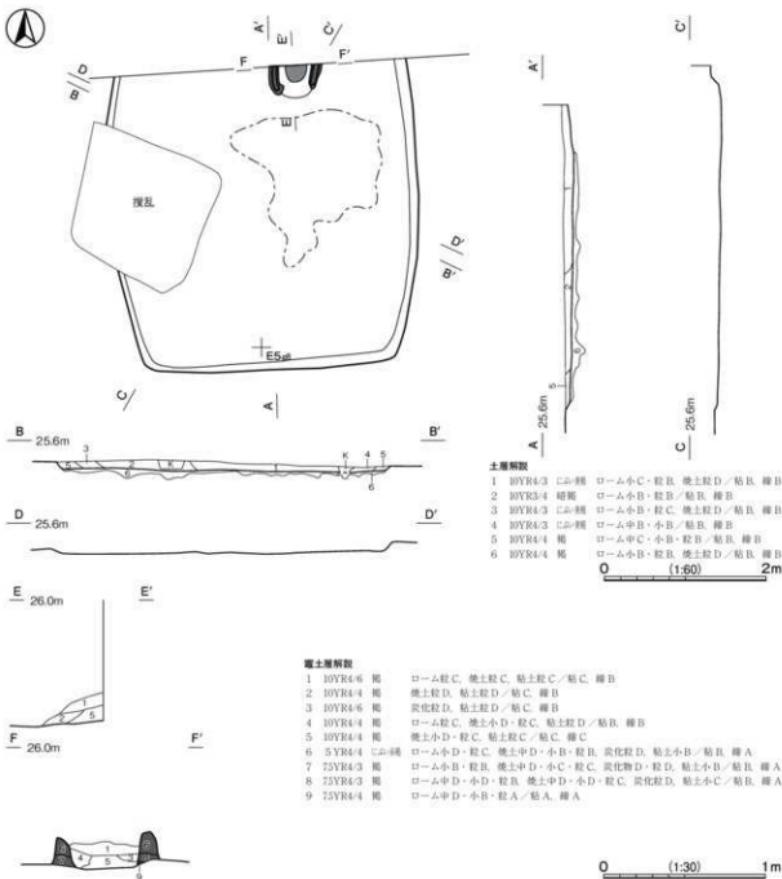
竈 北壁のほぼ中央部に付設されている。確認できた規模は、燃焼部幅 30 cm のみである。袖部は地山の上にロームブロックや粘土ブロックなどを含む第 6 ~ 9 層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さ

を使用し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。第1～5層は、焼土粒子や粘土粒子などを含む天井部の崩落土である。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片1点(甕頬)、焼成粘土塊2点、鉄滓3点(451.80g)、製鍊滓(炉内滓)2点(376.24g)が覆土中から出土している。この他に混入した縄文土器片3点が出土している。鉄滓及び製鍊滓は、建物内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期を決定できる土器は出土していないが、規模と形状や周囲の堅穴建物跡との関係から6世紀後葉と考えられる。



第63図 第16号堅穴建物跡実測図

第17号竪穴建物跡（第64・65図 PL 6）

位置 調査区西部のE 50区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

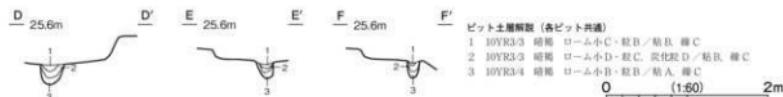
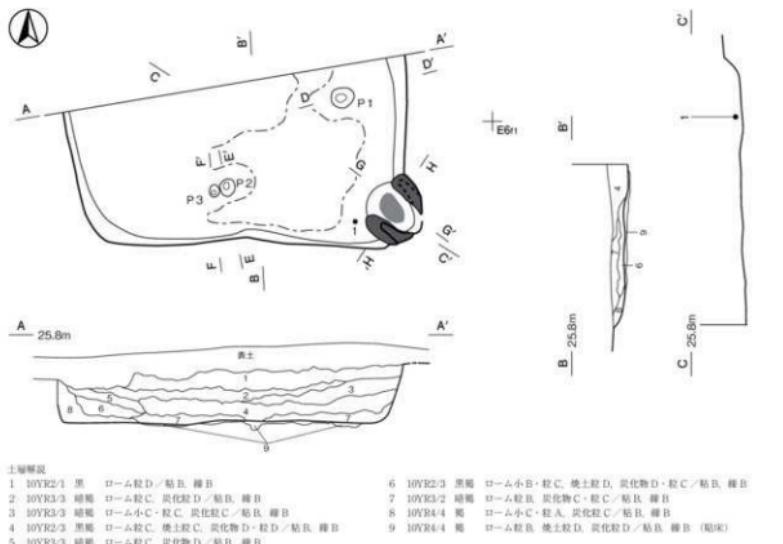
規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸410m、南北軸230mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-115°-Eと推定できる。壁は高さ15~70cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竪前から中央部にかけて、踏み固められている。貼床は南東・南西コーナー部を土坑状に掘り込み、ローム粒子と焼土粒子を含む第9層を埋土して構築されている。

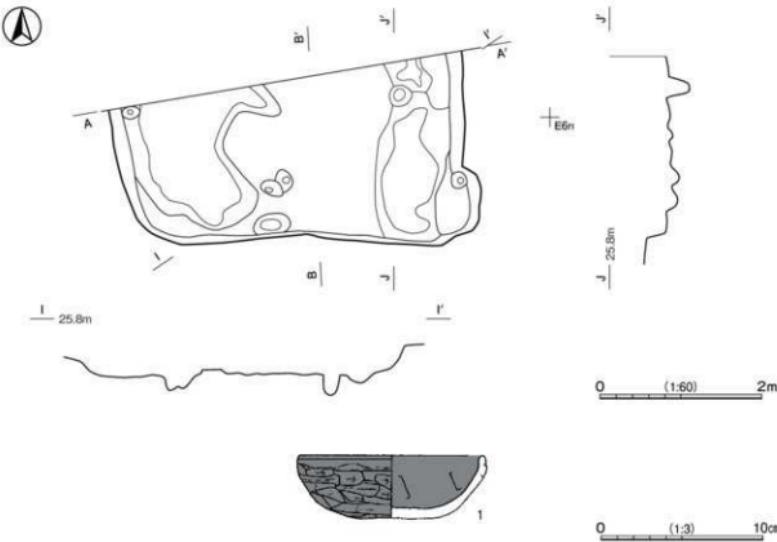
竪 南東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部までは71cm、燃焼部幅は40cmである。袖部は床面の上にローム粒子や焼土粒子、粘土粒子などを含む第7~10層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に20cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第2~6層は、粘土粒子や焼土粒子などを含む天井部の崩落土である。

ピット 3か所。P1~P3は深さ20~26cmで、性格不明である。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第64図 第17号竪穴建物跡実測図



第 65 図 第 17 号竪穴建物跡掘方・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 2 点（壺、甕類）、須恵器片 1 点（壺）、鐵滓 2 点（63.19g）、製鍊滓（炉内滓）7 点（2,444.78g）が出土している。この他に繩文土器片 3 点が出土している。1 は竈脇の覆土下層から完形で出土している。製鉄関連遺物は、建物内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 7 世紀後半と考えられる。

第 31 表 第 17 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種 別	器種	口径	高さ	底径	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備考
1	土師器	壺	113	40	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部外・内面横ナメ 体部外面横段のヘラ削 内面ナメ	覆土下層	100% PL14

第18号竪穴建物跡（第66図 PL 6）

位置 調査区中央部のE 6h5区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、東西軸332m、南北軸0.58mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-84°-Eと推定できる。壁は高さ12~16cmで、外傾して立ち上がりっている。

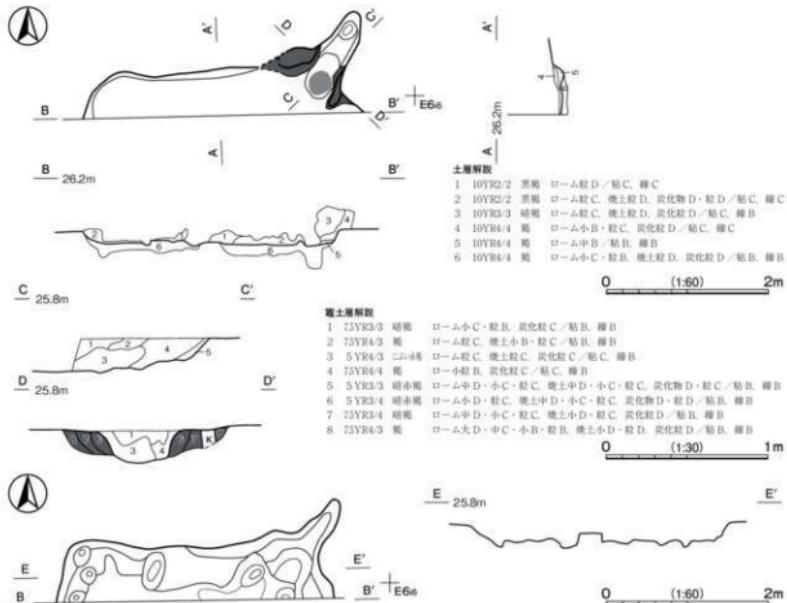
床 多少の凹凸が認められる。踏み固められた部分は確認できなかった。貼床は窓前を土坑状に、壁際を溝状に掘り込み、ロームブロックを含む第6層を埋土して構築されている。

電 北東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部までは117cm、燃焼部の幅は36cmである。袖部は地山を30cmほど掘りくぼめ、ローム粒子や焼土ブロックなどを含む第6~8層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に62cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。第1~5層は、焼土粒子や炭化粒子などを含む天井部の崩落土である。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片2点（壺類）、繩文土器片9点、鉄滓1点（114.83g）が出土し、繩文土器片は混入である。鉄滓は、建物内に製鉄に関する痕跡がないことから、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期を決定できる土器は出土していないが、周囲の竪穴建物跡との位置関係などから7世紀後半と考えられる。



第66図 第18号竪穴建物跡・掘方実測図

第32表 古墳時代竪穴建物跡一覧

番号	設置	主軸方向	平面形 長軸×短軸(m)	規模 (cm)	床面 横溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考		
						上柱穴	出入口	ピット	炉・壺						
1	E 6h8	N - 80° - E	横長方形	3.05 × (2.80)	40 ~ 46	平坦	-	-	2	東壁	-	人為 土師器、石器、出化材、燒成粘土塊、鐵滓	7世紀前葉	本跡→SK62	
2	E 6d0	N - 81° - E	[長方形]	6.00 × (2.44)	18 ~ 35	平坦	-	2	2	-	1	人為 土師器	4世紀中葉		
3	E 7.17	N - 93° - E	[長方形]	16.20 × 4.72	4 ~ 10	平坦	-	-	1	3 炉1	-	不明 土師器	4世紀中葉	SK53→本跡	
6	E 4g3	N - 12° - W	方形	3.18 × 3.05	14 ~ 22	平坦	-	-	-	北壁	-	人為 土師器、燒成粘土塊、金屬製品、燒成粘土塊、鐵滓	7世紀代	SI 7→本跡	
8	E 4.14	N - 78° - E	長方形	4.69 × 4.25	38 ~ 44	平坦	日付窓	4	1	-	東壁	-	人為 土師器、土器片円錐、鐵滓	7世紀後葉	
11	E 4j8	N - 98° - E	方形	5.18 × 4.76	34 ~ 39	平坦	-	4	2	5 東壁	-	人為 土師器、燒成粘土塊、鐵石、砂塊、鐵滓、燒成粘土塊	6世紀後葉	SK124→本跡	
12	E 4f0	不 明	[長方形]	4.02 × (0.68)	14 ~ 26	平坦	-	-	-	南壁	-	人為 土師器、鐵滓	7世紀代		
14	E 5h2	N - 12° - E	方形	4.52 × 4.37	22 ~ 34	平坦	-	4	-	3 北壁	1	人為 土器、燒成粘土塊、燒成粘土塊、砂塊、鐵器、燒成粘土塊	6世紀後葉		
15	E 5.67	N - 11° - W	[長方形]	3.84 × (3.36)	12 ~ 32	平坦	一部	2	-	9 北壁	1	人為 土師器、鐵滓、鐵	7世紀前葉		
16	E 5f8	N - 3° - W	[長方形]	(3.71) × 3.68	5 ~ 10	平坦	-	-	-	北壁	-	人為 土師器、燒成粘土塊、鐵滓、燒成粘土塊	6世紀後葉		
17	E 5f0	N - 115° - E	[長方形]	4.10 × (2.30)	15 ~ 70	平坦	-	-	-	3 南東	7-1	人為 土師器、燒成粘土塊、鐵滓、燒成粘土塊	7世紀後半		
18	E 6h5	N - 84° - E	[長方形]	3.32 × (0.58)	12 ~ 16	凹凸	-	-	-	北壁	7-1	人為 土師器、鐵滓	7世紀後半		

(2) 化学分析

製鉄関連遺物の化学分析

埋蔵文化財の保存処理いしかわ

はじめに

本分析調査では、古墳時代の第14号竪穴建物跡から複数出土した炉壁・鉄滓等の遺物について成分分析を実施し、鉄器生産に関する基礎資料とする。

1 試料

試料は古墳時代の第14号竪穴建物跡から出土した炉壁・製鍊滓（炉内滓）、含鉄鉄滓各1点である。表1に詳細と調査項目を示す。

表1 試料一覧及び調査項目

試料番号	出土位置	推定年代	遺物名称	計測値			金属検知		調査項目			備考
				大きさ (mm)	重量 (kg)	機械反応	マクロ組織	微細組織	EPMA	化学組成分析	耐火度	
1			炉壁	73 × 63 × 45	0.08	×	○		○	○	○	
2	第14号 竪穴建物	古墳時代	製鍊滓 (炉内滓)	116 × 86 × 68	0.6	×	○			○		
3			含鉄鉄滓	69 × 44 × 33	0.08	○	○	○	○			

2 分析方法

(1) 外観観察

調査対象とした遺物の外観上の特徴を記載した。

(2) マクロ組織

遺物外観の特徴から断面観察の位置を決めて、試料を切り出し、エメリーワイヤー研磨紙の#150, #240, #320, #600, #1000, 及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで順を追って研磨し、全体像を撮影した。

(3) 顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属組織の観察を目的とする。

金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。また、金属鉄の組織観察には3% ナイタル（硝酸アルコール）液を腐食に用いた。

(4) EPMA 調査

EPMA（日本電子製㈱ JXA-8230）を用いて、鉄滓の鉱物組成を調査した。測定条件は以下の通りである。
加速電圧：15kV、照射電流（分析電流）：200E-8A。

(5) 化学組成分析

出土遺物の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第1鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）：燃焼容量法、硫黄（S）：燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（ SiO_2 ）、酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（ TiO_2 ）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化磷（ P_2O_5 ）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

(6) 耐火度

炉材（炉壁）の耐軟化性を調査した。粘土から三角錐の試験片（ゼーゲルコーン）を作り、温度を10°C/minの速度で1000°Cまで上昇させる。以降は4°C/minに昇温速度を落し、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度（耐火度）を測定した。

3 結果

試料番号1：炉壁

(1) 外観観察

強い熱影響を受けて、内面表層が黒色ガラス質化した炉壁片である。ガラス質澤の表面は比較的滑らかで、着磁性はほとんどない。外側には淡褐色の炉壁粘土が残存する。粘土中にはごく短く切ったスサが多量に混和されている。以上の特徴から、製鉄炉の炉壁破片と推測される。

(2) 顕微鏡組織

図版1①～③に示す。①は炉壁内面表層部分で、素地（灰色部）は、ガラス質澤（非晶質硅酸塩）である。炉壁粘土の溶融物で、内部には粘土中に混和された石英等の砂粒が多数点在する。また②③は表層部の拡大で、白色針状結晶はイルメナイト（Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）と推定される。比較的高温下で砂鉄（含チタン鉄鉱）¹⁾を製鍊した際の反応副生物といえる²⁾。

(3) 化学組成分析

表2に示す。強熱減量（Ig loss）は2.21%であった。強い熱影響を受けて、結晶水が飛散した状態である。また軟化性成分の鉄分（Total Fe）は3.60%であった。一方、耐火性に有利なアルミナ（ Al_2O_3 ）は20.44%であった。通常の粘土の範囲（約15～18%）よりやや高めであった。

(4) 耐火度

<1120°Cであった。製鉄炉の炉壁としてはやや低めの耐火性状であった。

当炉壁は、内面表層にイルメナイト（Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）が確認されたことから、砂鉄（含チタン鉄鉱）

製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片と判断される。

試料番号2：製錬滓（炉内滓）

(1) 外観観察

大形で厚手の製錬滓（炉内滓）破片と推定される。下面は本来の表面で、他はほぼ破面である。滓の色調は暗灰色で、着磁性はごく弱い。表面には茶褐色の鉄鏽が点在するが、まとまった鉄部ではなく、金属探知器反応もみられない。破面には中小の気孔が多数点在するが、重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織

図版2①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel : $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）、白色針状結晶イルメナイト（Ilmenite : $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）が晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖といえる。

(3) 化学組成分析

表2に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は26.44%と低めで、このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.36%、酸化第1鉄（FeO）が28.86%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）52.1%であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）の割合は45.05%と高く、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は9.59%であった。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）は18.21%、バナジウム（V）が0.24%と高値であった。酸化マンガン（MnO）も0.73%と高めで、銅（Cu）は<0.01%と低値であった。

以上の鉱物・化学組成から、当鉄滓は砂鉄製錬滓に分類される。

試料番号3：含鉄鉄滓

(1) 外観観察

不定形の含鉄鉄滓である。表面は黄褐色～茶褐色の鉄鏽に覆われる。端部には鏽化に伴う剝れが生じている。また金属探知器反応があり、内部には金属鉄が残存すると考えられる。一方で表面には、細かい凹凸のある暗灰色の滓部も確認される。

(2) マクロ組織

図版3①に示す。素地の灰褐色部は砂鉄製錬滓。滓中の不定形明明白色部は金属鉄であった。

(3) 顕微鏡組織

図版3②③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel : $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）が晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。一方、金属鉄部はほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite : a 鉄）単相の組織であった。

(4) EPMA 調査

図版4④に金属鉄（上側明明白色部）と製錬滓（下側）の反射電子像（COMP）を示す。金属鉄中の微細な淡茶褐色結晶と、滓中の大形の淡茶褐色結晶は、特性X線像ではともに鉄（Fe）、チタン（Ti）に反応がある。定量分析値は51.5%FeO - 35.6% TiO_2 - 5.3%MgO - 3.0% Al_2O_3 - 1.4%MnO - 1.3% V_2O_3 （分析点1）、49.1%FeO - 34.6% TiO_2 - 6.0%MgO - 4.4% Al_2O_3 - 1.2%MnO - 3.1% V_2O_3 - 1.1% Cr_2O_3 （分析点2）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel : $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）に同定される。一方暗灰色部の定量分析値は40.7% SiO_2 - 7.4% Al_2O_3 - 16.5%CaO - 4.6%MgO - 3.1% K_2O - 15.6%FeO - 10.2% TiO_2 （分析点3）、42.2% SiO_2 - 8.9% Al_2O_3 - 17.8%CaO - 4.7%MgO - 2.1% K_2O - 15.9%FeO - 5.6% TiO_2 （分析点4）であった。非晶質珪酸塩である。

以上の調査結果から、当遺物は砂鉄を製錬してできた含鉄鉄滓と推定される。金属鉄部は滓との分離が

不十分な軟鉄であった。

表2 化学組成分析

試料番号	出土位置	推定年代	遺物名	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化鉄 (Fe ₂ O ₃)	硫酸鉄 (Fe ₂ (SO ₄) ₃)	硫酸鉄 (Al ₂ (SO ₄) ₃)	硫酸鉄 (CaO)	硫酸鉄 (MgO)	硫酸鉄 (K ₂ O)	硫酸鉄 (Na ₂ O)	硫酸鉄 (MnO ₂)	
1	第14号 堅穴建物跡	古墳時代	炉壁	36.0	13.0	0.79	241	6557	20.44	1.26	0.88	1.81	1.51	0.03
2			製錬窯 (内層)	26.44	0.36	28.86	5.21	26.35	7.26	4.86	4.73	1.35	0.49	0.73
% by mass														
	酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	六酸化錫 (Pb ₂ O ₃)	炭素 (C)	珪藻土 (V)	鋼 (Cu)	亜硫酸 (ZnO ₂)	耐火度 (℃)	耐火度 (℃)	耐火度 (℃)	造錬成分		
	0.71	0.05	0.015	0.07	#221	0.02	< 0.01	< 0.01	< 1120	< 1120	< 1120	91.48		
	18.21	0.08	0.03	0.35	0.17	0.24	< 0.01	0.18	-	-	-	45.04		

4まとめ

館野遺跡の第14号堅穴建物跡から出土した遺物3点は、いずれも砂鉄製鍊に伴う炉壁、炉内滓、含鉄鉢津であった。発掘調査地区の近接地で、鉄生産が行われていた可能性が高いと考えられる。ただし、東日本各地で製鉄炉が確認されるのは、7世紀後半以降であり、茨城県内でも、宮平遺跡（石岡市）³⁾、栗田かなくそ山遺跡（かすみがうら市）⁴⁾、後谷津遺跡（ひたちなか市）⁵⁾などで、古代の製鉄炉跡が検出されている。こうした状況を考えると、これらの製鉄関連遺物は堅穴建物跡の推定年代（6世紀後葉）と同時期のものではない可能性がある。当遺構が廃絶した後、廃滓坑として利用された可能性などが考えられ、この他の出土遺物も含めて検討する必要がある。

- 1) 炉壁（試料番号1）は、内部表層にイルメナイト（Ilmenite : FeO·TiO₂）が確認され、砂鉄製鍊に用いられたことが明らかとなった。耐火度は<1120℃で、製鉄炉の炉壁としてはやや低めの耐火性であった。
- 2) 製錬窯（試料番号2）は砂鉄製錬窯であった。二酸化チタン（TiO₂）の含有割合は18.21%と高く、製錬原料は高チタン砂鉄であったと判断される。
- 3) 含鉄鉢津（試料番号3）も素地は砂鉄製錬窯で、内部に不定形の金属鉄が確認された。金属鉄部はほとんど炭素を含まない軟鉄で、製錬窯との分離が悪く廃棄されたものと推測される。

註

1) 木下亀城・小川留太郎「岩石鉱物」保育社 1995

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。（中略）チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい網状構造を示すものとがある。

チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、網状のものとがある。（中略）このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。

2) J.B.Mac chesney and A. Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572

〔イルメナイト（Ilmenite : FeO·TiO₂）、シュードブルッカイト（Pseudobrookite : Fe₂O₃·TiO₂）の品出はFeO-TiO₂二元平衡状態図から高温化操業が推定される。〕

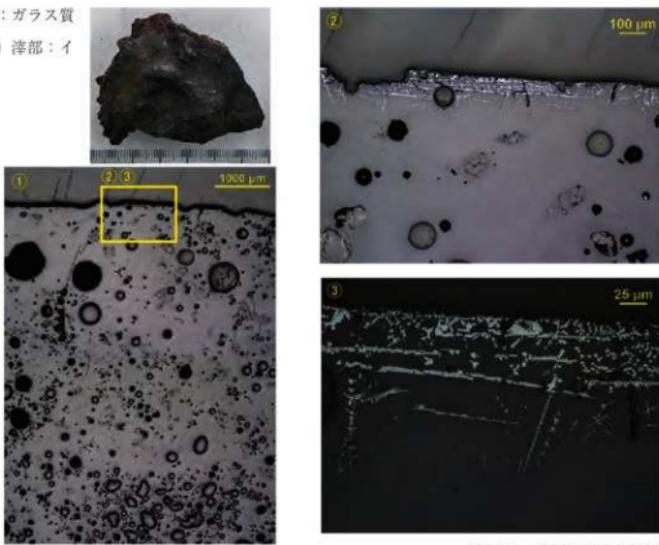
3) 佐々木義則「石岡市宮平遺跡製鉄遺構」「婆良岐考古」第12号 婆良岐考古同人会 1990

4) 茨城県新治部千代田村教育委員会編「栗田かなくそ山製鉄遺跡調査報告」千代田村教育委員会 1990

5) ひたちなか市教育委員会編「後谷津製鉄遺跡」ひたちなか市教育委員会 1996

1 炉壁

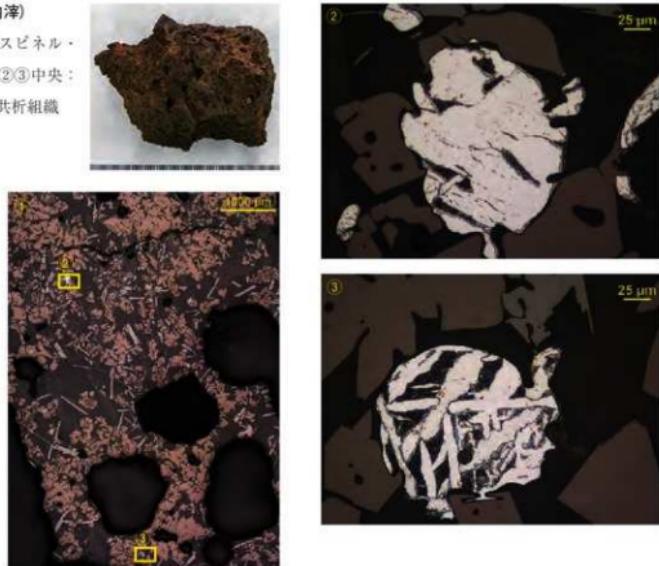
①～③内面表層：ガラス質
滓（石英粒混在）滓部：イ
ルメナイト



図版1 炉壁の顕微鏡組織

2 製鍊滓(炉内滓)

①滓部：ウルボスピニエル・
イルメナイト、②③中央：
微小金属粒、亜共析組織

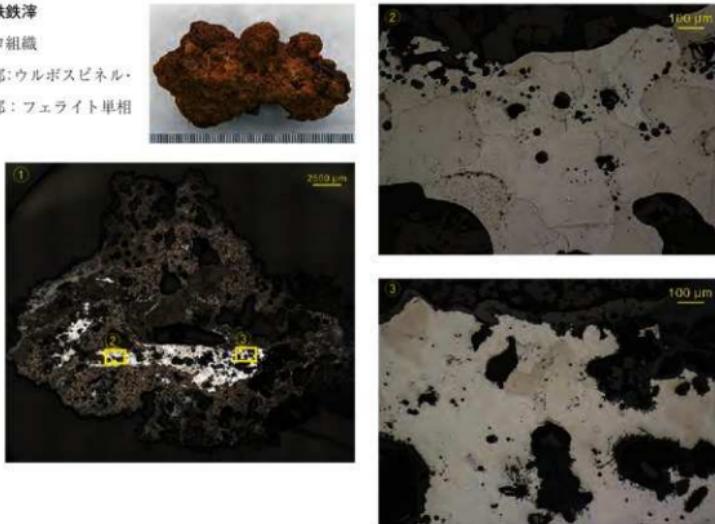


図版2 製鍊滓（炉内滓）の顕微鏡組織

3 含鉄鉄滓

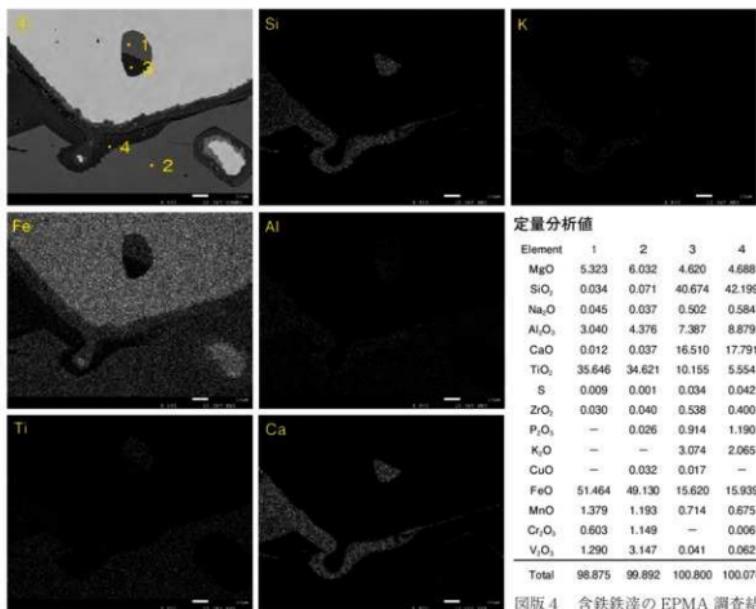
①マクロ組織

②③滓部:ウルボスピニエル・
金属鉄部:フェライト単相



図版3 含鉄鉄滓の顕微鏡組織

滓部の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像

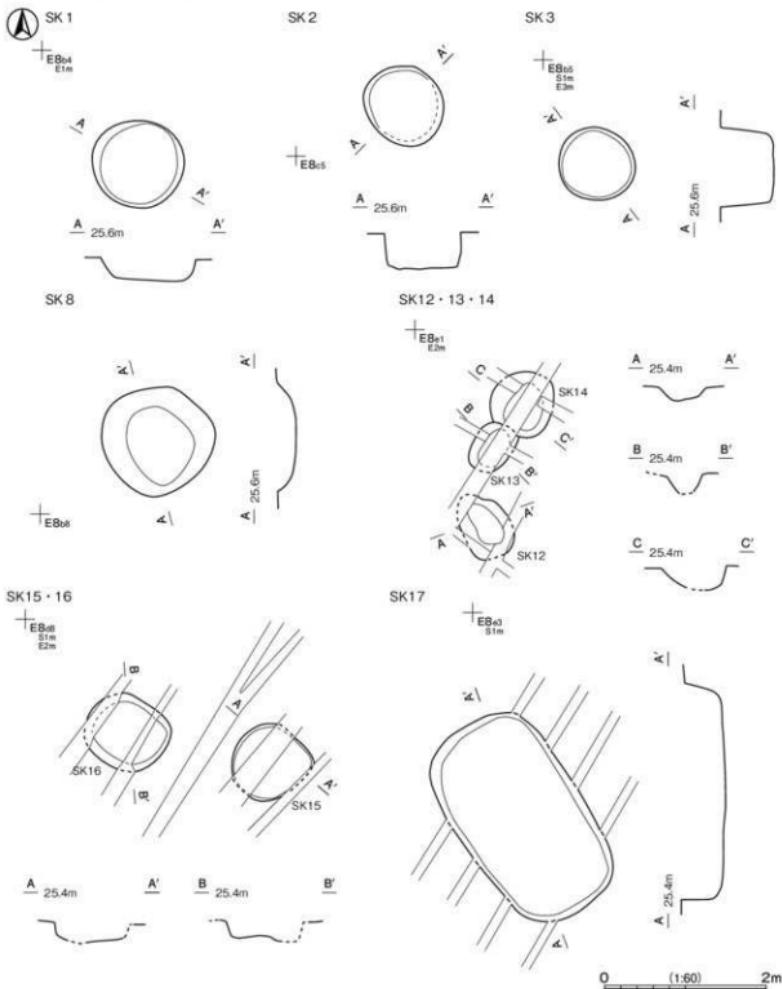


図版4 含鉄鉄滓のEPMA 調査結果

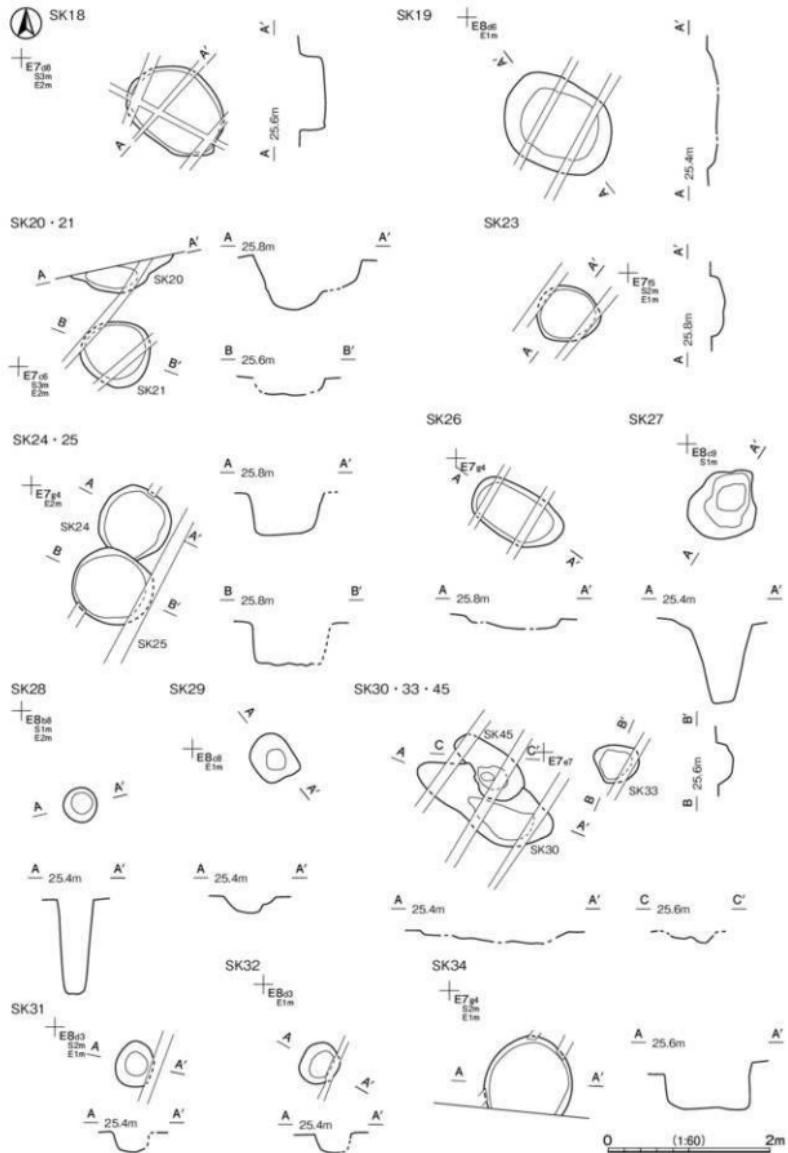
3 時期不明の遺構と遺物

ここでは、時期や性格の不明な土坑 108 基と溝跡 6 条、遺構外出土遺物について記述する。

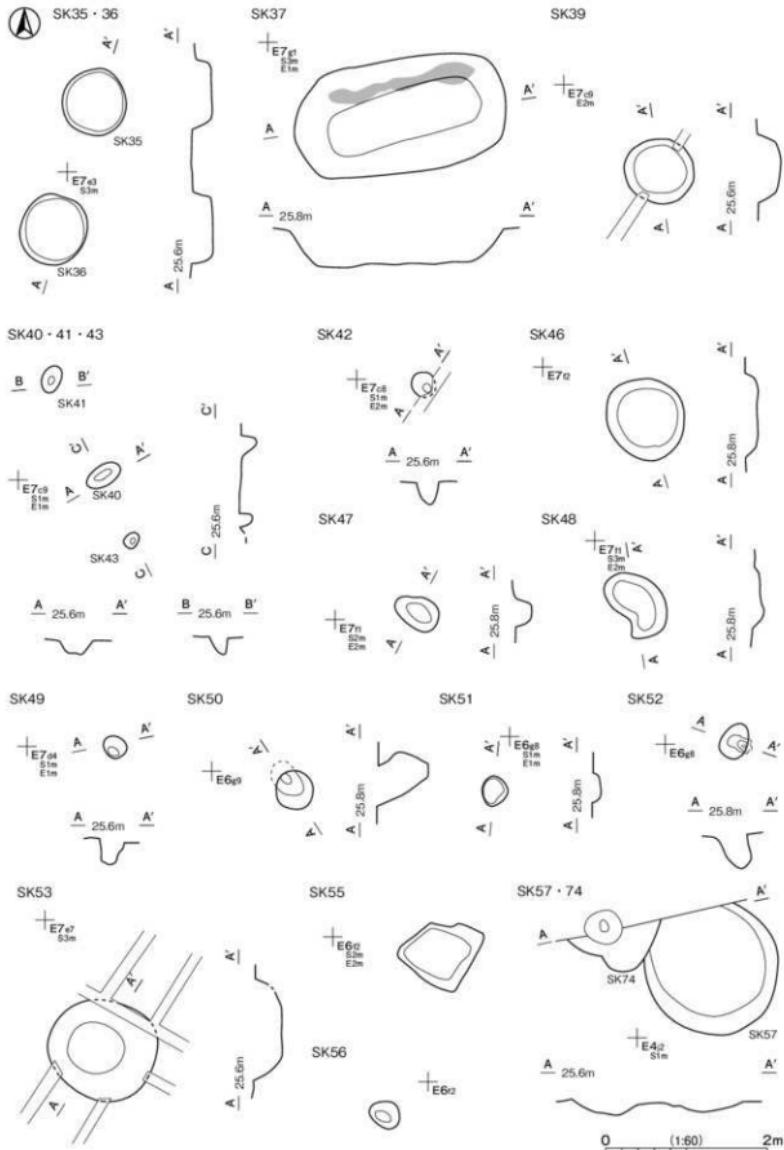
(1) 土坑(第 67 ~ 72 図)



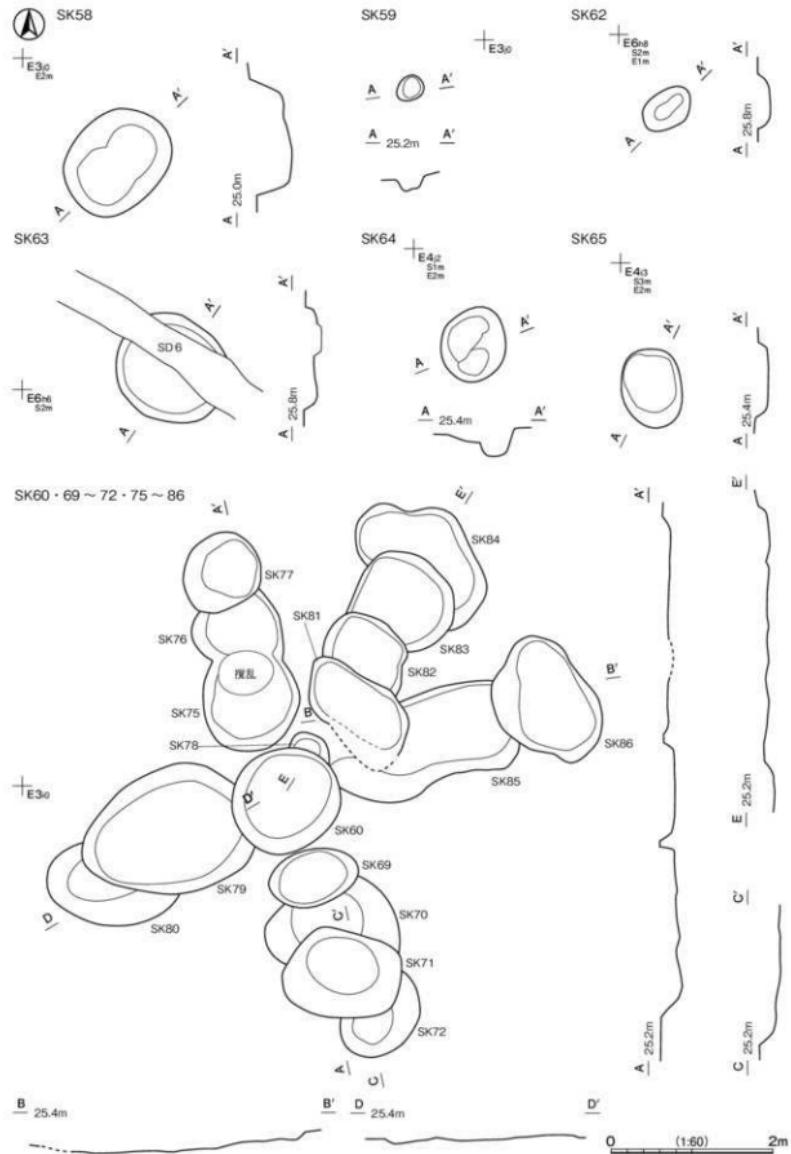
第 67 図 土坑実測図(1)



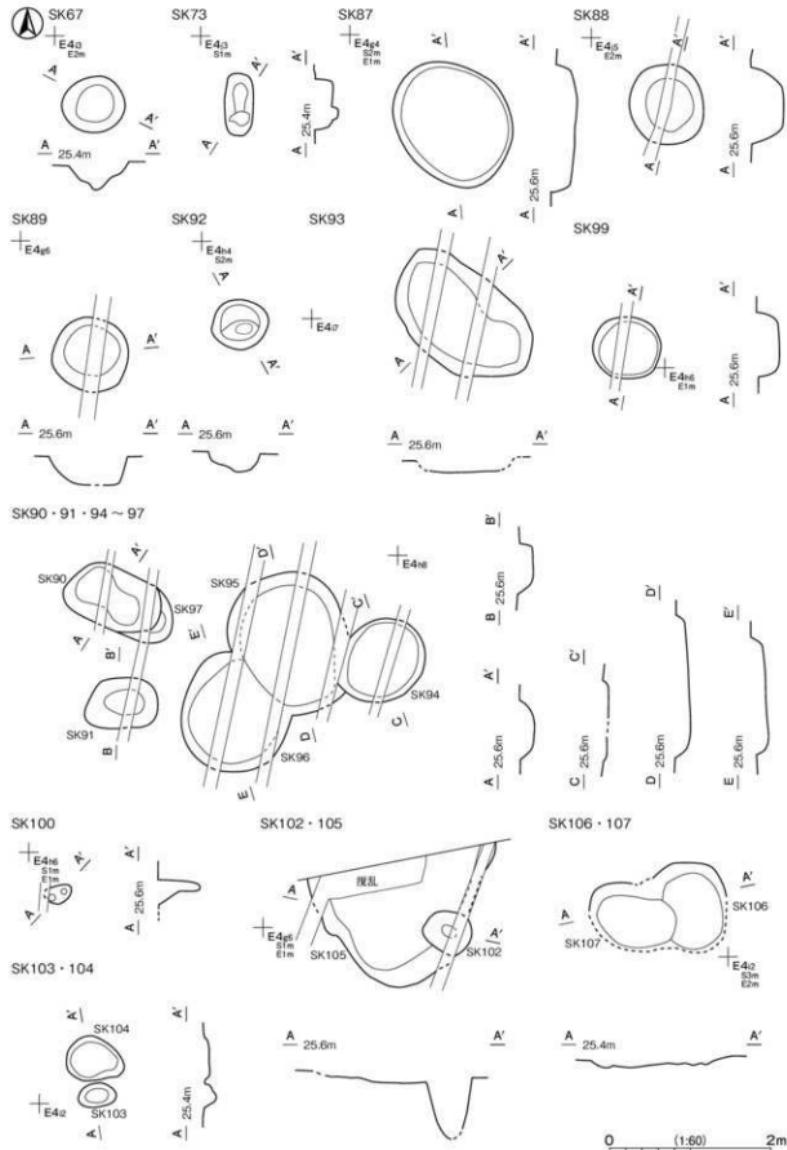
第 68 図 土坑実測図(2)



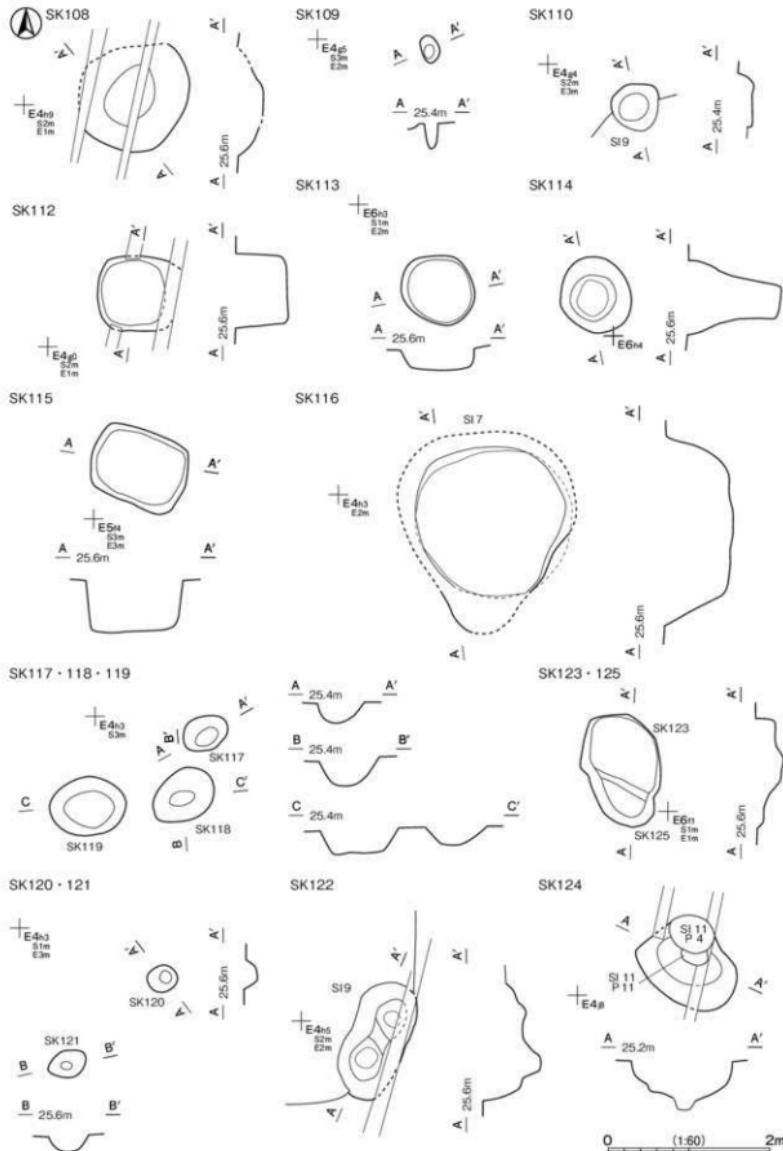
第69図 土坑実測図(3)



第70図 土坑実測図(4)



第 71 図 土坑実測図(5)



第72图 土坑实测图(6)

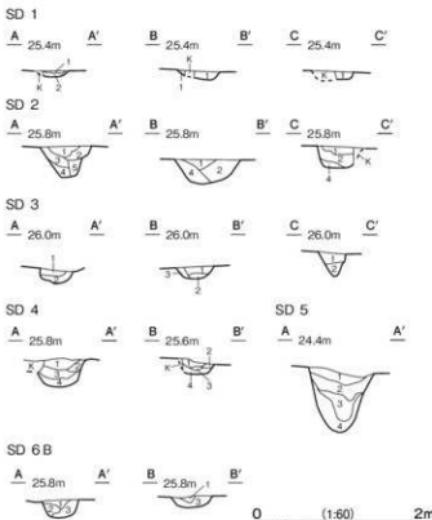
第33表 土坑一覧

番号	位置	長様方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	E 8b4	-	円形	1.12 × 1.10	24	直立	平坦	人為	-	
2	E 8b5	N - 54° - W	梢円形	1.02 × 0.92	44	直立	平坦	人為	縄文土器	
3	E 8b5	-	円形	0.96 × 0.88	64	直立	平坦	人為	縄文土器	
8	E 8a8	-	円形	1.42 × 1.32	26	外傾	皿状	自然	縄文土器	
12	E 8e1	N - 30° - W	【梢円形】	[0.88] × 0.64	16	外傾	皿状	人為	-	
13	E 8e1	N - 33° - E	【梢円形】	(0.62) × 0.44	23	外傾	皿状	人為	-	
14	E 8e1	N - 33° - E	【梢円形】	(0.80) × 0.29	30	外傾	皿状	人為	-	
15	E 8d8	-	円形	1.02 × 0.94	21	外傾	平坦	人為	縄文土器、土器	SD I → 本跡
16	E 8d8	N - 57° - W	梢円形	1.02 × 0.90	22	外傾	平坦	人為	-	
17	E 8e3	N - 33° - W	隅丸長方形	2.67 × 1.50	52	直立	平坦	人為	縄文土器	
18	E 7d8	N - 55° - W	梢円形	1.22 × 0.98	31	直立	平坦	人為	-	
19	E 8d6	N - 62° - W	梢円形	1.40 × 1.08	7	外傾	皿状	人為	-	
20	E 7e6	N - 78° - E	不定形	(1.32) × (0.32)	61	外傾	凹凸	人為	-	
21	E 7e6	-	円形	0.86 × 0.80	22	直立	平坦	人為	縄文土器、石器	
23	E 7d5	-	【円形】	[0.78] × 0.72	16	外傾・直立	平坦	人為	-	
24	E 7g4	-	円形	0.87 × 0.84	52	直立	平坦	人為	-	本跡 → SK25
25	E 7g4	N - 62° - W	梢円形	1.20 × 0.86	51	直立	平坦	人為	-	SK24 → 本跡
26	E 7g4	N - 58° - W	梢円形	1.17 × 0.65	13	外傾	平坦	人為	-	
27	E 8e9	N - 32° - E	不整梢円形	0.98 × 0.80	98	外傾	平坦	人為	縄文土器	
28	E 8b8	-	円形	0.43 × 0.41	115	直立	平坦	人為	縄文土器	
29	E 8c8	N - 53° - W	梢円形	0.60 × 0.50	18	外傾	皿状	人為	-	
30	E 7e6	N - 68° - W	不整梢円形	1.80 × 0.77	17	外傾	皿状	人為	-	SK45 → 本跡
31	E 8d3	N - 22° - E	梢円形	0.56 × 0.44	25	外傾	皿状	人為	-	
32	E 8d3	N - 6° - E	梢円形	0.52 × 0.46	24	外傾	平坦	人為	-	
33	E 7e7	-	不整円形	0.59 × 0.50	20	外傾	皿状	人為	-	
34	E 7g4	-	円形	1.10 × 1.10	58	直立	平坦	人為	縄文土器、須恵器	
35	E 7e3	-	円形	0.81 × 0.80	17	直立	平坦	人為	-	
36	E 7e2	-	円形	0.89 × 0.86	23	直立	平坦	人為	縄文土器	
37	E 7g1	N - 81° - E	梢円形	2.64 × 1.42	46	外傾	平坦	人為	炭化物	
39	E 7e9	N - 23° - E	梢円形	0.88 × 0.80	30	外傾	皿状	人為	-	SD 4 → 本跡
40	E 7e9	N - 62° - E	梢円形	0.48 × 0.36	18	外傾	皿状	人為	-	SD 4 → 本跡
41	E 7b9	N - 19° - E	梢円形	0.36 × 0.24	22	直立	皿状	自然	縄文土器	SK22 → 本跡
42	E 7c8	N - 56° - W	【梢円形】	[0.34] × 0.30	28	直立	皿状	人為	-	
43	E 7e9	N - 29° - E	梢円形	0.22 × 1.80	16	直立	皿状	-	-	SD 4 → 本跡
45	E 7e6	N - 51° - W	不整梢円形	1.00 × 0.60	14	外傾	凹凸	人為	-	本跡 → SK30
46	E 7z2	N - 57° - W	梢円形	1.04 × 0.94	16	外傾	平坦	人為	-	
47	E 7z3	N - 63° - W	梢円形	0.59 × 0.40	23	外傾	平坦	人為	-	
48	E 7f3	N - 45° - W	梢円形	0.91 × 0.52	15	外傾	平坦	人為	-	
49	E 7d4	-	円形	0.28 × 0.26	38	直立	皿状	人為	-	
50	E 8g9	-	円形	0.48 × 0.48	59	外傾・内傾	皿状	人為	-	
51	E 6g8	N - 13° - E	梢円形	0.37 × 0.32	11	直立	平坦	人為	-	
52	E 6g8	N - 30° - E	梢円形	0.45 × 0.33	42	外傾・内傾	皿状	人為	-	
53	E 7f7	-	円形	1.31 × 1.26	32	外傾	平坦	人為	-	SI 3 → 本跡
55	E 6z2	N - 37° - E	不整方形	0.80 × 0.80	-	-	-	-	-	SD 6 A → 本跡
56	E 6f1	N - 60° - W	梢円形	0.38 × 0.33	-	-	-	-	-	SD 6 A → 本跡

番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		縦 面	底 面	覆 土	主 な 出 土 道 物	備 考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
57	E 4j2	-	[円形]	1.62 × (1.56)	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SK74
58	E 3j0	N - 52° - E	椭円形	1.42 × 1.10	44	外傾	平坦	人為	縄文土器、須恵器、鉄滓	
59	E 3j9	N - 57° - E	椭円形	0.36 × 0.30	18	外傾	平坦	人為	-	
60	E 3j0	N - 24° - E	椭円形	1.38 × 1.29	11 ~ 18	外傾	平坦	-	縄文土器、石器	SK78・79・85 → 本跡
62	E 6j6	N - 46° - E	椭円形	0.70 × 0.52	30	外傾	圓状	人為	-	SI 1 → 本跡
63	E 6j6	N - 36° - W	椭円形	1.45 × 1.30	15	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SD 6 B
64	E 4j2	N - 23° - E	椭円形	0.94 × 0.82	30	外傾	凸凹	人為	縄文土器、鉄滓	
65	E 4j3	N - 16° - W	椭円形	0.98 × 0.74	16	外傾	平坦	人為	-	
67	E 4j3	N - 84° - W	椭円形	0.80 × 0.70	34	外傾	凸凹	人為	-	
69	E 3j0	N - 73° - E	椭円形	1.12 × (0.67)	15 ~ 23	直立	平坦	自然	-	SK70 → 本跡
70	E 3j0	N - 70° - E	[円形・椭円形]	1.62 × (0.34)	20	直立	凸凹	-	-	本跡→SK69・71
71	E 3j0	N - 81° - E	[椭円形]	1.50 × (1.00)	21	外傾	凸凹	人為	-	SK70・72 → 本跡
72	E 4j1	N - 26° - E	[椭円形]	1.18 × (0.72)	20	外傾	凸凹	人為	-	本跡→SK71
73	E 4j3	N - 8° - E	椭円形	0.78 × 0.36	30	外傾	凸凹	人為	縄文土器、炭化材、鉄滓	
74	E 4j1	-	[不定形]	1.12 × (0.79)	24	外傾	圓状	人為	-	SK57 → 本跡
75	E 3j0	N - 9° - W	椭円形	(1.21) × 1.20	15 ~ 30	外傾	平坦	-	-	SK76 → 本跡
76	E 3j0	N - 9° - W	[円形・椭円形]	1.05 × (0.62)	8	-	平坦	-	-	本跡→SK75・77
77	E 3j0	N - 9° - W	[円形・椭円形]	(1.00) × 0.83	11	外傾	平坦	-	-	SK76 → 本跡
78	E 3j0	N - 11° - W	[椭円形]	(0.51) × (0.12)	13	外傾	圓状	-	-	本跡→SK60
79	E 3j0	N - 64° - E	[椭円形]	(1.94) × 1.58	10 ~ 15	外傾	凸凹	-	-	SK80 → 本跡 → SK60
80	E 3j0	N - 73° - W	[椭円形]	1.64 × (0.50)	10	外傾	凸凹	-	-	本跡→SK79
81	E 4h1	N - 31° - W	不整椭円形	1.42 × (0.88)	12	直立	平坦	-	-	SK82・85 → 本跡
82	E 4h1	N - 28° - E	[円形・椭円形]	1.04 × (0.70)	12	直立	凸凹	-	-	SK83 → 本跡 → SK81
83	E 4h1	-	[円形]	1.22 × (0.94)	14 ~ 18	外傾	平坦	-	-	SK84 → 本跡 → SK82
84	E 4h1	N - 31° - W	不定形	1.83 × (0.58)	15	外傾	圓状	-	-	本跡→SK83
85	E 4h1	N - 22° - E	不定形	(1.50) × (1.12)	21	外傾	平坦	-	-	本跡→SK60・81・ 86
86	E 4h1	N - 18° - W	不定形	1.62 × 1.24	6 ~ 15	外傾	凸凹	-	-	SK85 → 本跡
87	E 4g4	N - 23° - W	椭円形	1.64 × 1.34	24	外傾	平坦	人為	-	
88	E 4j5	-	円形	0.98 × 0.94	36	外傾	平坦	人為	縄文土器、須恵器	
89	E 4g6	-	円形	0.95 × 0.86	40	外傾	平坦	人為	-	
90	E 4h7	N - 59° - W	椭円形	1.36 × 0.73	19	外傾	圓状	人為	-	SK97 → 本跡
91	E 4h7	N - 63° - E	椭円形	0.91 × 0.62	18	外傾	平坦	人為	-	
92	E 4h4	-	円形	0.70 × 0.64	22	外傾	圓状	人為	-	
93	E 4h7	N - 46° - W	椭円形	1.93 × 1.18	8	外傾	平坦	-	縄文土器	
94	E 4h7	N - 24° - E	[椭円形]	1.08 × (0.96)	8	外傾	平坦	-	-	SK95 → 本跡
95	E 4h7	N - 14° - W	[椭円形]	1.74 × (1.47)	14 ~ 18	外傾	平坦	-	縄文土器	SK96 → 本跡 → SK94
96	E 4h7	N - 30° - E	[椭円形]	1.48 × 1.32	14	外傾	平坦	-	縄文土器	本跡→SK95
97	E 4h7	N - 39° - W	[椭円形]	(0.29) × (0.18)	30	直立	圓状	-	縄文土器	本跡→SK90
99	E 4g6	N - 82° - W	椭円形	0.86 × 0.76	26	直立	平坦	人為	-	
100	E 4h6	N - 77° - E	椭円形	0.34 × 0.22	48	直立	凸凹	人為	-	
102	E 4g6	-	不定形	(2.36) × (1.32)	76	外傾	圓状	人為	-	SK105 → 本跡
103	E 4h2	N - 85° - E	椭円形	0.46 × 0.31	13	外傾	圓状	人為	-	
104	E 4h2	N - 80° - W	不整椭円形	0.72 × 0.54	12	外傾	平坦	人為	縄文土器	
105	E 4g5	N - 58° - W	椭円形	0.58 × 0.50	10	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK102
106	E 4j2	N - 14° - W	[椭円形]	1.12 × [0.80]	9	外傾	平坦	人為	石器(磨製石斧)	鉄滓 本跡→SK107
107	E 4j2	N - 82° - W	[椭円形]	[1.08] × 0.79	9	外傾	平坦	人為	-	SK106 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		東 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
108	E 4 b9	N - 34° - E	楕円形	1.48 × 1.30	30	外傾	皿状	人為	縄文土器	
109	E 4 g5	N - 10° - W	楕円形	0.35 × 0.21	33	直立	皿状	人為	-	
110	E 4 g5	-	円形	0.64 × 0.60	19	外傾	平坦	人為	-	本跡→SI 9
112	E 4 g0	-	円形	1.12 × 1.08	64	直立	平坦	人為	-	
113	E 6 h3	N - 52° - W	楕円形	0.94 × 0.84	26	直立	平坦	人為	-	
114	E 6 g3	-	円形	0.92 × 0.88	117	直立	平坦	人為	-	
115	E 5 f8	N - 72° - W	隅丸長方形	1.22 × 0.90	68	直立	平坦	人為	縄文土器	
116	E 4 h3	N - 3° - E	不整椭円形	2.48 × 2.18	36	外傾	平坦	人為	縄文土器、土器	SI 7 → 本跡
117	E 4 h3	N - 62° - E	楕円形	0.56 × 0.54	28	外傾	皿状	人為	-	
118	E 4 h3	N - 52° - E	楕円形	0.82 × 0.60	24	外傾	皿状	人為	-	
119	E 4 h2	N - 85° - E	楕円形	0.96 × 0.72	34	外傾	皿状	人為	-	
120	E 4 h4	N - 80° - W	楕円形	1.38 × 0.34	16	外傾	皿状	人為	-	
121	E 4 h3	N - 69° - E	楕円形	0.50 × 0.34	22	外傾	皿状	人為	-	
122	E 4 h5	N - 13° - E	楕円形	1.40 × 0.71	45	外傾	四凸	人為	縄文土器	本跡→SI 9
123	E 6 f3	N - 36° - W	楕円形	1.24 × 0.94	32	直立	平坦	人為	-	本跡→SK125
124	E 4 f8	N - 50° - W	楕円形	1.22 × 0.92	42	外傾	皿状	人為	-	本跡→SI 11
125	E 6 f3	-	不定形	0.68 × (0.48)	8	外傾	平坦	人為	-	SK123 → 本跡

(2) 溝跡(第73図 付図1)



第73図 溝跡実測図

第1号溝跡土層解説

- 1 10Y3d4/4 細層 ローム粒C・粒B・粘B・細B
2 10Y3d4/4 粗層 ローム小B・粒C・粘B・細B

第2号溝跡土層解説

- 1 10Y3d2/2 細層 ローム粒D・粘B・細B
2 10Y3d2/4 細層 ローム小C・粒C・粘B・細B
3 10Y3d2/4 粗層 ローム粒C・粘B・細B
4 10Y3d2/4 粗層 ローム小C・粒B・粘B・細B
5 10Y3d2/3 細層 ローム小C・粒C・粘B・細B

第3号溝跡土層解説

- 1 10Y3d3/4 細層 ローム粒C・粘B・細B
2 10Y3d4/4 粗層 ローム小C・粒B・粘B・細B
3 10Y3d3/3 細層 ローム小C・粒C・粘B・細B

第4号溝跡土層解説

- 1 10Y3d2/3 黒層 ローム粒C・炭化粒D・粘B・細B
2 10Y3d2/3 細層 ローム粒C・粘B・細B
3 10Y3d3/3 細層 ローム粒C・炭化粒C・粘B・細B
4 10Y3d3/3 粗層 ローム小B・粒C・炭化粒C・粘B・細B

第5号溝跡土層解説

- 1 10Y3d3/3 細層 ローム小C・粒B・粘B・細B
2 10Y3d3/3 細層 ローム小B・粒C・粘B・細B
3 10Y3d3/3 細層 ローム小C・燒土粒C・炭化粒C・粘B・細B
4 10Y3d2/4 細層 ローム中B・小B・粘B・細B

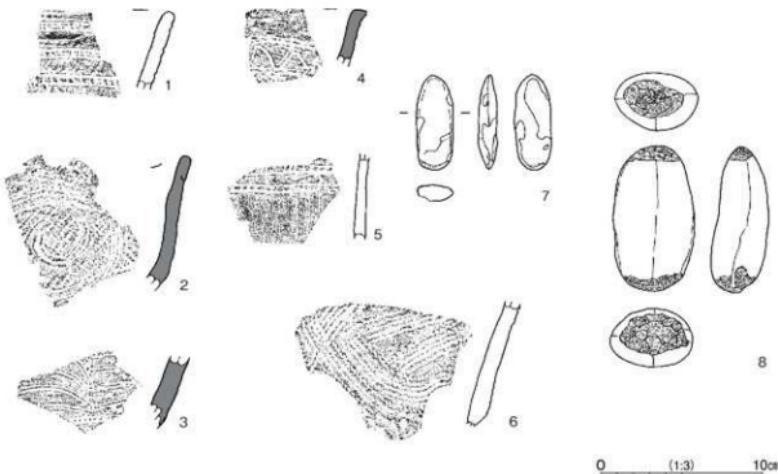
第6号溝跡土層解説

- 1 10Y3d3/3 細層 ローム小B・粒B・粘B・細B
2 10Y3d3/3 細層 ローム中B・小B・粒C・粘B・細B
3 10Y3d3/3 細層 ローム大B・中B・小B・粘B・細B

第34表 溝跡一覧

番号	位置	方向	平面形	規 模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	E 8c9 ~ E 8d9	N - 10° ~ E N - 90° ~ E	L字状	(6.62)	36 ~ 52	16 ~ 28	8 ~ 10	逆台形	外傾	人為	-	本跡→SK15
2	E 7f2 ~ E 7h5	N - 12° ~ W N - 80° ~ E	範状	(25.40)	38 ~ 78	13 ~ 37	10 ~ 42	逆台形	外傾	人為	縄文土器、土器器	本跡→SI 4
3	E 7e2 ~ E 7h2	N - 15° ~ E	直線状	(12.08)	28 ~ 50	13 ~ 29	30 ~ 58	U字状	外傾	人為	-	
4	E 7e2 ~ E 7h2	N - 8° ~ E N - 79° ~ E	コの字状	(8.18)	68	10	14 ~ 36	U字状	外傾	人為	-	本跡→SK39・40
5	E 9b2 ~ E 9c5	N - 95° ~ E	直線状	(12.60)	62 ~ 89	20 ~ 42	153	U字状	外傾	人為	-	HG 1 → 本跡
6A	E 6e1 ~ E 6g3	N - 60° ~ W	直線状	(0.88)	25 ~ 62	15 ~ 25	50	逆台形	外傾	-	-	本跡→SK55・56
6B	E 6g1 ~ E 6h6	N - 62° ~ W	直線状	(10.07)	30 ~ 59	15 ~ 48	28 ~ 43	逆台形	外傾	人為	-	SK63 → 本跡

(3) 遺構外出土遺物 (第74図)



第74図 遺構外出土遺物実測図

第35表 遺構外出土遺物一覧

番号	種 别	器種	口径	部高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
1	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	灰石・石英	褐	普通	半乾竹管による洗削文の上に刺突文	SI 4	5% 浮島 1a式
2	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	灰石・雲母・繊維	褐	普通	段状口縁・頭部斜尖文・棒状工具による溝引き文	SI 7	PL11 黒浜式
3	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	灰石・石英・赤色粒子・繊維	褐	普通	口部斜尖文・溝引き文・半乾竹管による肋骨文	SK54	5% 黒浜式
4	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	灰石・繊維	にぶい褐	普通	口部内そぎ・半乾竹管による押引き文と山形文	表土	黒浜式
5	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	灰石・雲母・黑色粒子	灰黄褐	普通	半乾竹管による押引き文・縦位の沈織文	表土	浮島 1a式
6	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	灰石・石英	にぶい褐	普通	半乾竹管による複数単位の押引き文	表土	PL11 浮島式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
7	磨製石斧	58	23	(1.0)	(21.84)	角閃岩	無小形 扁平な自然縁 刃部は表裏から研ぎ出す	SK60	
8	鉛石	89	53	35	227.0	砂岩	両端部に微細な敲打痕	表土	

第4節 総括

1はじめに

館野遺跡は、平成30年度に調査を行い、竪穴建物跡18棟（縄文時代6・古墳時代12）、土坑121基（縄文時代13・時期不明108）、溝跡6条（時期不明）、遺物包含層1か所（縄文時代）を確認した。当遺跡では、縄文時代早期から中期と古墳時代前・後期の人々の生活の痕跡をうかがい知ることができる。時期が確定できた遺構は、縄文時代中期の竪穴建物跡と土坑。早期から中期にかけて形成された遺物包含層、古墳時代前期と後期の竪穴建物跡である。本節では、縄文時代の遺物包含層と中期の遺構や土器様相、古墳時代の集落の変遷について概観し、総括とする。

2各時代の様相

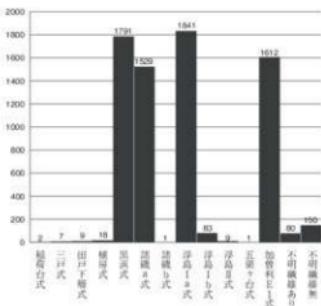
(1) 縄文時代

当該期の生活の痕跡は、第1号遺物包含層及び竪穴建物跡6棟（うち有段式竪穴建物跡2）と土坑13基（うち袋状土坑12）である。

当時代の中心時期は、中期前葉から中葉であり、土器様相は、鉢田市の吉十北遺跡¹⁾や石岡市の東田中遺跡²⁾から出土している土器群に類似している。よって、遺構の時期決定にあたっては、吉十北遺跡を参考にし、中期の時期区分を五領ヶ台式を初頭、阿玉台式I a・I b・II式を前葉、阿玉台III・IV式・加曾利E 1式を中葉、加曾利E 2・E 3式を後葉、加曾利E 4式を末葉の5期区分とする。

① 遺物包含層の形成時期について

第1号遺物包含層は、調査区東部の台地斜面部に形成され、斜面部下は湧水が流れる低湿地である。本包含層から出土した縄文土器片の総数は7,133点(108,805.5g)であり、出土量は早期の土器は少なく、前葉の稲荷台式、中葉の三戸式、戸田下層式が出土している。前期の土器は多く、前期前葉から後葉の黒浜式、諸磯a式、浮島I a式が最も多い。このほか、前葉の植房式、中葉の諸磯b式、後葉の浮島I b式、浮島II式も若干出土している。中期の土器も比較的多く、初頭は五領ヶ台式、中葉は阿玉台IV式と加曾利E 1式が多く出土している。土器型式の判別がつかない小片については、胎土に含まれている纖維の有無で分別を行った。出土量の多寡はあるが、早期前葉から中期中葉までの土器片が検出されていることから、本包含層は3期にわたって形成されたことが判明した。第1期は早期前葉に始まり、中葉まで継続して形成されたものと推測される。第2期は前期前葉から後葉にかけて形成され、本包含層の時期は最盛期を迎える。第3期は中期前葉から中葉までで、今回の調査で確認されている縄文時代中期の遺構と合致する。この時期の東日本では、土器の文様を新しいものに変える目的で廃棄する習慣が見られる³⁾ことから集落に付随する廃棄のための「捨て場」として利用していたものと考えられる。

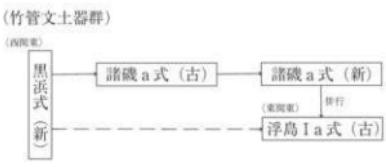


グラフ 第1号遺物包含層出土土器点数

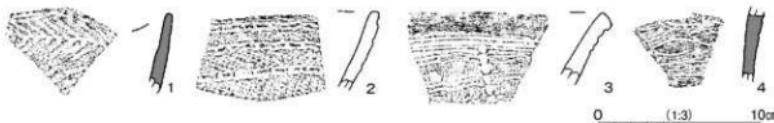
② 第1号遺物包含層の前期の土器様相について

前述したように、本包含層からは前期前葉から後葉の土器片が多く出土しており、特に黒浜式と浮島Ia式が多い。黒浜式と諸磯a式は、胎土の纖維の有無をもとに竹管工具を使用した黒浜式の肋骨文から諸磯a式にみられる木葉文への変化など文様構成の相違によって系統化される⁴⁾。小美玉市の八幡脇遺跡⁵⁾から出土した幅の狭い爪形文や平行沈線文の区画内に肋骨文や木葉文などが描出された浮島Ia式古段階は、竹管文による文様構成に体系的な類似がみられる諸磯a式新段階に併行した土器型式である。

本包含層から出土している黒浜式は、羽状縞文の施文と胎土に纖維を含むもの（第76図1）が特徴的で、半截竹管の工具を使用した押引き文が多用される黒浜式新段階のもの（第76図2）も多い。浮島Ia式は地文に撻糸文が施文され、半截竹管による平行沈線文や爪形文の文様構成（第76図3）が目立つ。また、胎土に砂粒が含まれておらず、纖維を含まないものが一般的ではあるが、本包含層からは、胎土中に纖維が含まれているもの（第76図4）が多く出土しており、稲敷市の所作貝塚から出土している胎土に纖維を含み、竹管文や爪形文を施文した文様構成の土器と類似している。当遺跡からは黒浜式、諸磯a式、浮島Ia式の土器片がほぼ同量出土しており、霞ヶ浦周辺の遺跡から本包含層と近似する土器が確認されていることから、胎土の纖維の有無による土器型式の時期差ではなく、前葉から後葉の転換期に3型式が共存していた可能性がうかがい知れる。



第75図 前期前葉から後葉の土器編年図



第76図 前期前葉から後葉の土器

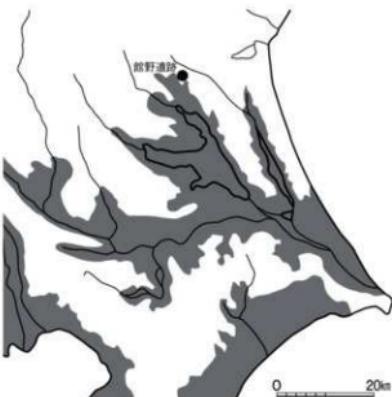
③ 中期の竪穴建物跡について

今回の調査によって詳細な時期が確定できたのは6棟あり。出土土器は阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期から加曾利E1式期の所産である。調査区中央部の平坦部から西部の緩斜面部に位置しており、形状は、第7・10号竪穴建物跡が有段式竪穴建物跡、第4・5号竪穴建物跡が隅丸長方形の竪穴建物跡である。そのほかの2棟は楕円形の平面形である。第9号竪穴建物跡には土器埋設炉が、第13号竪穴建物跡には地床炉が付設されていることが確認できた。

特に有段式竪穴建物跡である第10号竪穴建物跡は、平面形は上段が隅丸長方形、下段が長方形を呈している。上段と下段に部分的に壁溝が廻り、炉が付設されていない。出土遺物は多くが下段の覆土中層で、阿玉台Ⅳ式期を含む土器片であることから、廃絶後埋め戻された凹地状の部分に投棄されたものと考えられる。規模や形状、出土遺物などから本県における有段式竪穴建物跡の様相の阿玉台Ⅲ式期に相当する⁶⁾。第7号竪穴建物跡は北部が調査区域外へ及びており平面形が完全ではないが、上段はやや円形で主柱穴をもたない。出土遺物には加曾利E1式の土器片を含まないことから第10号竪穴建物跡と同時期であるか、

やや古段階の阿玉台Ⅲ式期に比定される。隅丸長方形の平面形の第4・5号堅穴建物跡は、4本の主柱穴を確認しているが、炉が付設されていない。主な遺物は、覆土中層から阿玉台Ⅳ式期と加曾利E1式期の土器片が出土地している。塙田氏によると、「四辺形住居は前期末から顯著になって来た土地の隆起即ち海岸線の後退につれて、前期まで広い生活圏をもっていた関東平野部の漁撈生活民は主に関東の北東部霞ヶ浦縁辺におしやられ、…方形住居の伝統はわずかに阿玉台式土器の文化の中に残存し、…⁷⁾」と述べており、團部川と霞ヶ浦の合流点から北西約9kmの距離に位置している当遺跡は、當時さに水辺に近く、方形または長方形の平面形の住居構造が存在していた地域であったと考えられる。(第77図参照)

また、塙田氏は、「前期には中部地方にのみ盛行していた円形住居は中期の前葉に自然的環境の変化も手伝ってその生活圏を更に拡張し、関東地方の大部分を覆うようになったのである⁸⁾。」と述べている。初頭の五領ヶ台式期の堅穴建物跡では、平面形が不整円形を呈し、土器埋設炉の付設が確認されており、加曾利E1式期になると平面形が梢円形の堅穴建物跡が多く見られる。第9・13号堅穴建物跡は梢円形の平面形で、土器埋設炉と地床炉が付設されていることから、加曾利E1式期に比定されるものと思われる。



第77図 中期の海岸線の様子 (第9集 冬木A貝塚・冬木B貝塚別冊 冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動 第2図改編)



第78図 中期中葉の堅穴建物跡

④ 中期の土坑について

中期の土坑は13基あり、うち12基が袋状土坑である。調査区の東部に10基、西部に2基を確認した。また、中期の堅穴建物跡6棟のうち東部に1棟、西部に5棟確認されていることから、東部は貯蔵域として、西部を居住域としていたことが想定できる⁹⁾。

出土土器は、中葉の阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期から加曾利E 1式期が主体である。第38号土坑から出土している阿玉台式土器の口縁部には、平口縁と波状口縁があり、口縁部と胴部に隆帯による区画がされ、それに沿って押引き文が巡り、区画内は波状沈線文が施されている（第29図1）。波状口縁で口縁部文様帶には区画文が配され、隆帯に沿って爪形文が施され、胴部が無文のもの（第30図2）も見られる。口縁部に押引き文をもつ渦巻き状の把手が貼付された大木8a式土器との関係を示すもの（第31図7）もあり、このような土器の様相から大木8a式の影響を受け始める阿玉台Ⅲ式期と判断することができる。第9号土坑からは、波状口縁にV字状の貼付文があり、隆帯に沿って沈線文が施されたもの（第23図2）が出土しており、関東地方東部を中心に分布する阿玉台Ⅳ式期の特徴をもつものである。第6号土坑からは、口縁部が膨らむキャリバー形を呈し、地文の上に隆帯が貼付されたもの（第20図2）や、中空把手と区画文の内側に沈線文が施されたもの（第21図3）が出土している。また、口縁部に交互刺突文による連続コの字文を有する中峠式土器の様相をもつもの（第20図1）もある。第54号土坑からは、口縁部に波状の貼付文の上下に条線文が施されたもの（第34図3）が出土しており、これらの土器の様相から渦巻文が施される加曾利E 1式期よりも古い段階であるものと考えられる。

確認された12基の袋状土坑は人為的に埋め戻されており、土坑の廃絶にあたって危険防止と儀礼的な行為の可能性が考えられる¹⁰。第38号土坑から出土した深鉢は底面に伏せた状態で出土しており、集落内で土坑の廃絶に伴う儀礼的な行為が行われていた様子もうかがい知れる。

(2) 古墳時代の集落の変遷について

当該期の遺構は、竪穴建物跡12棟を確認している。竪穴建物跡の形状や出土している遺物などから、集落が形成された時期については前期の4世紀中葉と後期の6世紀後葉から7世紀代とした。また、竪穴建物跡の規模を便宜上、床面積によって大型（51～80m²）・中型（21～50m²）・小型（20m²以下）に分類した。

① 古墳時代前期（4世紀中葉）

竪穴建物跡2棟が確認できた。第2・3号竪穴建物跡が該当する。近隣では同時期に形成された竹原小学校遺跡と羽黒遺跡があり、当該地域において最大規模の集落であったことが指摘されている¹¹。竪穴建物跡の規模は第3号竪穴建物跡が中型で、遺構が調査区域外に延びている第2号竪穴建物跡も中型と推定される。いずれも当調査区の中央部に位置しており、東西約200mある調査区の東部と南部からは同時期の竪穴建物跡は確認されていない。このことから、調査区域外の北部から南部にかけて比較的小規模で集落が形成されていたと推測する。

出土している遺物は土師器の壺、罐、器台、高壺、壺、甕である。

② 古墳時代後期（6世紀後葉～7世紀代）

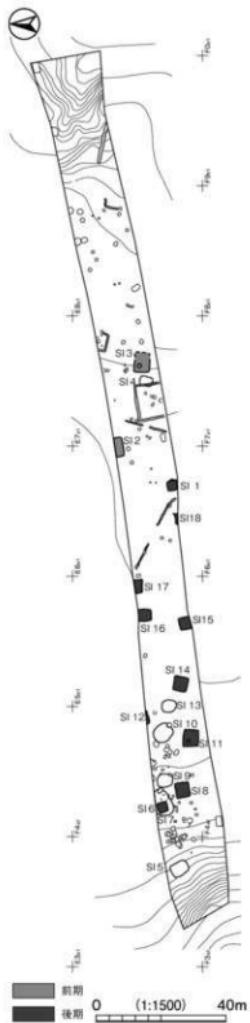
この時期に集落は拡大し、竪穴建物跡10棟を確認した。第11・14・16号竪穴建物跡は6世紀後葉、第1・15号竪穴建物跡は7世紀前葉、第8号竪穴建物跡は7世紀後葉、第17・18号竪穴建物跡は7世紀後半、第6・12号竪穴建物跡は7世紀代に該当する。当調査区の中央部から西部にかけて広がっており、東部では同時期の竪穴建物跡は確認されていない。竪穴建物跡の規模は中型が第11号竪穴建物跡の1棟、小型が第1・6・8・14～16・17号竪穴建物跡の7棟で、大型は確認されていない。第12・18号竪穴建物跡の床面積は不明である。主軸方向は真北から東へ振れているものが6棟、西に振れているものが4棟である。竪穴建物跡に付設された窓は、北壁が4棟、東壁が3棟、南壁が1棟、南東コーナー部が1棟、北東コーナー部が1棟である。南壁に窓が付設された第12号竪穴建物

跡と南東コーナー部に竪を持つ第17号竪穴建物跡、北東コーナー部に竪を持つ第18号竪穴建物跡は調査区域外に遺構が延びているため、竪が併設されている可能性も考えられる。

出土している遺物は土師器の壺、高壺、壺、甕、瓶と須恵器の蓋、提瓶、甕などである。その他に覆土中から製鉄関連の遺物が出土している。化学分析の結果から砂鉄製錬に伴う炉壁、炉内滓、含鉄鉄滓で、竪穴建物跡と同時期のものではない可能性があると指摘されている。また、覆土上層の暗褐色土から出土していることから、廃絶した後の窯地を磨漆坑として利用していたものと考えられる。小美玉市は、良質の砂鉄が豊富にあったことや燃料になる桟炭などが多い量にあったこと、さらに製鉄を必要とする国府が置かれていた石岡市に近いことなどから、古代から中世にかけて砂鉄によるたら製鉄遺跡が数多く確認されている。市内で確認された製鉄遺跡は、炉壁に含まれている成分から製鉄が行われていた時期を分けており、初殻を含む炉壁と甕と砂を含む炉壁を持つ製鉄遺跡を奈良時代から平安時代初期頃、石英の碎石と甕を含む炉壁を持つ製鉄遺跡を室町時代頃としている。当遺跡がある台地でも製鉄が行われていた痕跡が確認されており、炉壁の内側に黒いタール状で甕の痕跡がある炉壁片や炉外に多量の流出した鉛色の不純物の塊が発見されていることから、奈良時代から平安時代初期頃に製鉄が行われていたと推定されている¹²。こうした状況から、今回の調査区域外において、奈良時代から平安時代の製鉄関連遺構が存在する可能性があることを指摘しておきたい。

3 おわりに

館野遺跡は、霞ヶ浦に注ぐ園部川流域に位置する遺跡群の一つである。霞ヶ浦周辺では縄文時代前期末葉の海岸線の後退により、小規模河川を基点とした集落が形成され、縄文時代中期に集落が増加した傾向がうかがえる。また、当遺跡では古墳時代に一世代程度の短期間で集落が廃絶され、時代を経て再び集落が営まれるようになった様子を垣間見ることができた。今後は資料の増加を待ち、当地域の人々の生活様相や集落の変遷について解明できることを期待したい。



第79図 古墳時代の竪穴建物跡配置図

註

- 1) 清水哲・内田勇樹・海老澤稔・仙波亨『吉十北遺跡 勝十郎塚跡 東関東自動車道水戸線（鉾田～茨城空港北間）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第419集 2017年3月
- 2) 木村光輝・海老澤稔「東田中遺跡 中津川遺跡2 一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書8」茨城県教育財団文化財調査報告第407集 2016年3月
- 3) 阿部芳郎「縄文のくらしを掘る」岩波ジュニア新書 2002年12月
- 4) 麻生優・白石浩之「縄文土器の知識 I 草創・早・前期」『考古学シリーズ14』東京美術 1986年6月
- 5) 高橋清文「浮島式の型式間交渉」『第29回縄文セミナー 縄文前期後半の型式間交渉の諸問題』縄文セミナーの会 2016年2月
- 6) 縄文時代研究班「関東地方における縄文時代中期の「有段式竪穴造構」について」『研究ノート』5号 財團法人茨城県教育財団 1996年6月
- 7) 塚田光「縄文時代の基礎研究」縄文時代の基礎研究刊行会 1982年3月
- 8) 註7)に同じ
- 9) 谷口康浩「環状集落と縄文社会構造」学生社 2005年3月
- 10) 楠田義弘「新善光寺跡 宮戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告第256集 2006年3月
- 11) 井博之「竹原小学校遺跡出土の古墳時代前期の埴輪と土師器」『小美玉市史料館報 第4号』小美玉市玉里史料館 2010年3月
- 12) 美野里町史編さん委員会『美野里町史 上』美野里町 1989年3月

第4章 並木新田台北遺跡

第1節 調査の概要

当遺跡は、小美玉市の南西部に位置し、園部川左岸の標高約24mの台地の縁辺部に立地している。調査は、平成29年度に第1期5月1日～6月30日、第2期1月22日～3月31日の5か月間に渡って実施された。調査面積は、第1期2,755m²、第2期820m²、合計3,575m²である。調査前の現況は畠地、山林である。

調査の結果、堅穴建物跡12棟（弥生時代1・古墳時代11）、土坑41基（縄文時代7・時期不明34）、遺物集中地点1か所（縄文時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に35箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢)、弥生土器(広口壺)、土師器(壺・皿・器台)、装飾器台、高杯・鉢・壺・小型壺・台付壺・甕・小型甕・炉器台・ミニチュア土器)、土製品(土玉・支脚)、石器(石礫・石核・剥片・磨石・砥石)、木製品(部材)、金属製品(鐵錐・鍵)、錢貨(寛永通寶)などである。

第2節 基本層序

調査区東部(C2b7区)の斜面部にテストピットを設定し、基本土層(第80図)の堆積状況の観察を行った。第1層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は24～46cmである。第2層は、黄橙色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりはやや強く、層厚は4～28cmである。第3層は、黄橙色を呈する鹿沼軽石層である。黄白色粒子を含み、粘性は弱く、締まりは強く、層厚は4～10cmである。

第4層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりはやや強く、層厚は4～12cmである。

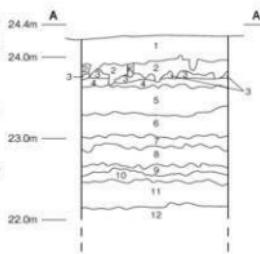
第5層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は22～38cmである。第6層は、ぶい黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は23～38cmである。第7層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりはやや弱く、層厚は6～20cmである。第8層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりはやや強く、層厚は15～29cmである。第9層は、白色粘土ブロックを少量含むぶい黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は4～15cmである。

第10層は、白色粘土ブロックを中量含むぶい黄褐色を呈する白色粘土層への漸移層である。マンガン鉄を中量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は4～18cmである。

第11層は、灰色を呈する白色粘土層である。砂質粒子を少量とマンガン鉄を中量含み、粘性はやや強く、締まりは強い。層厚は24～35cmである。

第12層は、オリーブ黄色を呈する白色粘土層である。砂質粒子とマンガン鉄を多量含み、粘性・締まりともに強い。第12層の下層は未掘のため、層厚は不明である。

遺構は、第1層の上面で確認した。



第80図 基本土層図



第81図 並木新台北遺跡調査区設定図（小美玉市都市計画図2,500分の1）

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑7基、遺物集中地点1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

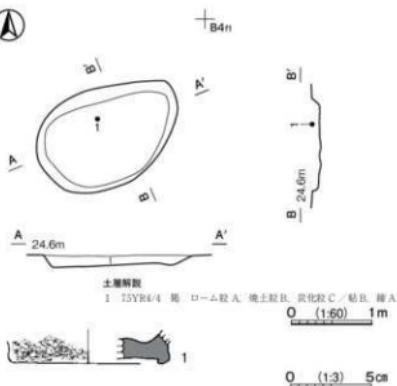
第1号土坑（第82図 PL17）

位置 調査区中央部のB3a0区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.95m、短径1.23mの楕円形で、長径方向はN-70°-Eである。深さは12cm、底面は凹凸しており、壁は外傾して立ち上がっている。
覆土 単一層である。焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 繩文土器片12点（深鉢）が出土している。1は北部の覆土中層から破片の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第82図 第1号土坑・出土遺物実測図

第36表 第1号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	頂高	底径	胎土	色調	施成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	C2.1	D1.03	石英・赤色粒子 混在	にふ・黄褐	滑溜	単周縄文LR(縦)	底部上位	覆土中層

第8号土坑（第83図 PL17）

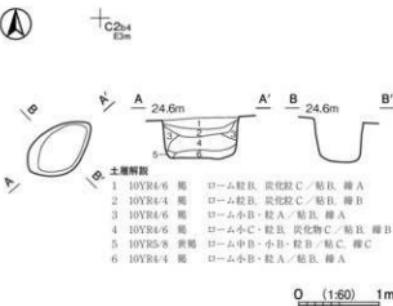
位置 調査区西部のC2b4区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

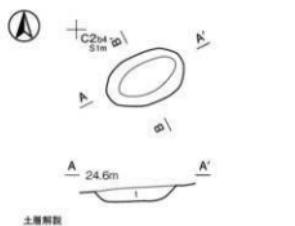
規模と形状 長径0.98m、短径0.57mの楕円形で、長径方向はN-50°-Eである。深さは54cm、底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックや炭化物などが不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。第83図 第8号土坑実測図





第84図 第9号土坑実測図

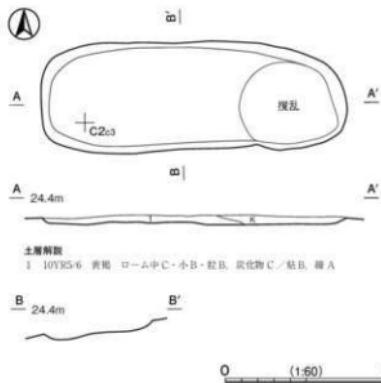
第9号土坑 (第84図 PL17)

位置 調査区西部のC 2 b4区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.00m、短径0.62mの楕円形で、長径方向はN-62°-Eである。深さは18cm。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

所見 時期が決定できる遺物は出土していないが、形状から縄文時代と考えられる。



第85図 第10号土坑・出土遺物実測図

第37表 第10号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	文様の有無	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(4D)	-	石美・鐵錆	にぶい橙	普通	無施釉	半截竹管による沈縄文	覆土中

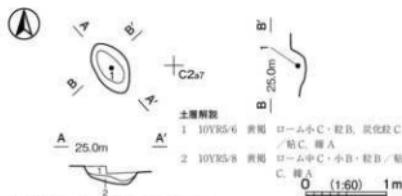
第17号土坑 (第86・87図 PL17)

位置 調査区西部のC 2 a6区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号遺物集中地点を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.70m、短径0.40mの楕円形で、長径方向はN-42°-Wである。深さは19cm。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックや炭化粒



第86図 第17号土坑実測図

子などが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 繩文土器片2点（深鉢）が出土している。1は中央部の覆土中層から破片の状態で出土していることから、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第87図 第17号土坑出土遺物実測図

第38表 第17号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[192]	(106)	-	灰白・石英・長石・赤色粒子・褐色	にぶい橙	普通	単節縄文LRの羽状縄文	覆土中層	10%

第18号土坑（第88図 PL17）

位置 調査区西部のC 2 b7区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

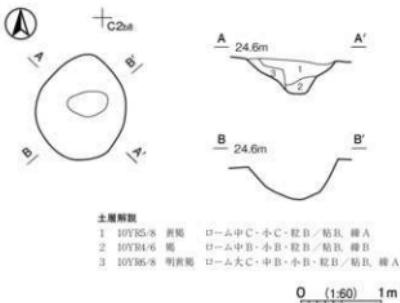
重複関係 第1号遺物集中地点を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.30m、短径1.06mの楕円形で、長径方向はN-4°-Eである。深さは45cm、底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片7点（深鉢）、石器1点（剥片）が出土している。土器が破片の状態で出土していることから、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第88図 第18号土坑実測図

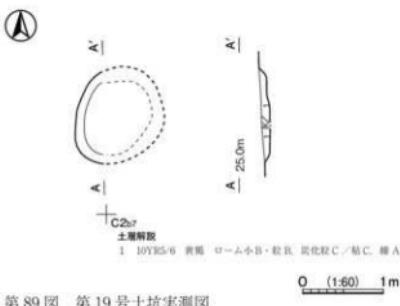
第19号土坑（第89図 PL17）

位置 調査区西部のC 2 a6区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号遺物集中地点を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が削平されているため確認できたのは、南北径1.12m、東西径0.35mのみである。平面形は楕円形で、長径方向はN-32°-Eと推定できる。深さは9cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。



第89図 第19号土坑実測図

所見 時期が決定できる遺物は出土していないが、他の土坑の時期から前期と考えられる。

第39表 繩文時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		横面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	B 3.10	N - 70° - E	椭円形	1.95 × 1.23	12	外傾	凹凸	人馬	深鉢	
8	C 2.b4	N - 30° - E	椭円形	0.98 × 0.57	54	直立	ほぼ平坦	人馬	深鉢	
9	C 2.b5	N - 62° - E	椭円形	1.00 × 0.62	18	外傾	ほぼ平坦	人馬	-	
10	C 2.b3	N - 90°	椭円形	3.76 × 1.30	8	外傾	平坦	不明	深鉢	
17	C 2.a6	N - 42° - W	椭円形	0.70 × 0.40	19	外傾	圓状	人馬	深鉢	第1号遺物集中地点→本路
18	C 2.b7	N - 4° - E	椭円形	1.30 × 1.06	45	外傾	圓状	人馬	深鉢、網片	第1号遺物集中地点→本路
19	C 2.a6	[N - 32° - E]	[椭円形]	(1.12) × (0.35)	9	外傾	平坦	人馬	-	第1号遺物集中地点→本路

(2) 遺物集中地点

第1号遺物集中地点 (第90・91図 PL17)

位置 調査区西部のC 2a6～C 2b7区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

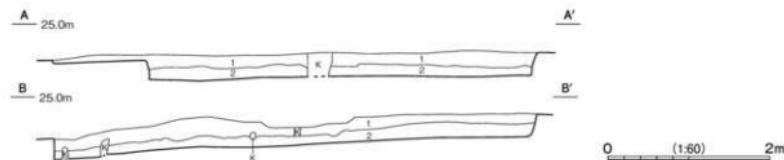
確認状況 調査区西部で、土器片などが集中して出土している範囲を確認した。遺物の出土状況が周囲の様相と異なることから、遺物集中地点として取り上げた。

重複関係 第17～19号土坑に掘り込まれている。

遺物の広がりと覆土 本地点は、調査区西部の調査区域のC 2a7区を中心に、東西6m、南北6mの広がりを示す。覆土は2層に分層できる。上方から流入した自然堆積土に土器片や石器、自然礫が含まれた状況である。

遺物出土状況 繩文土器片29点(深鉢)、石器7点(剥片)、自然礫23点(1,526.83g)が出土している。1は中央部の覆土中層から、2は南西部の覆土下層から破片の状態でそれぞれ出土している。石器を含むすべての石類はチャート・砂岩・瑪瑙であることを確認した。自然礫のうち被熱礫6点(607.61g)を確認している。破碎されたものが接合する破片があることから、投棄されたものと考えられる。

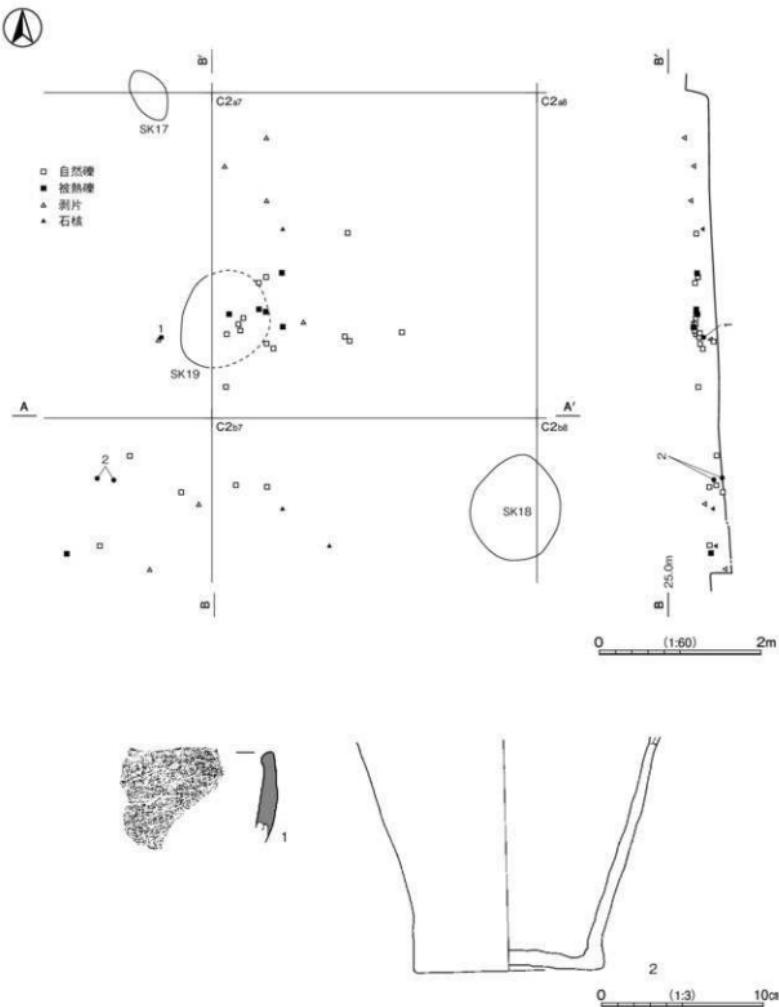
所見 時期は、出土土器の特徴や重複している前期前葉の第17・18号土坑から出土している遺物との時期差がないことから、前期と推測できる。破碎され不要となった土器や被熱礫の捨て場として利用されたと考えられる。



土層解説

- 1 10YES-N 黄褐色 ローム小B・段A／粘B・繩B
- 2 10YES-4 こみ地帯 ローム中C・小B・段A／粘B・繩A

第90図 第1号遺物集中地点実測図



第91図 第1号遺物集中地点・出土遺物実測図

第40表 第1号遺物集中地点出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	陶文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・石英・赤色粘子 細繩	棕	普通	波状口縁 口縁部無文	覆土中層	
2	陶文土器	深鉢	-	(14.2)	11.6	長石・石英・雲母	棕	普通	鋸齿口縁部無文 底部上底	覆土下層	20%

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡1棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

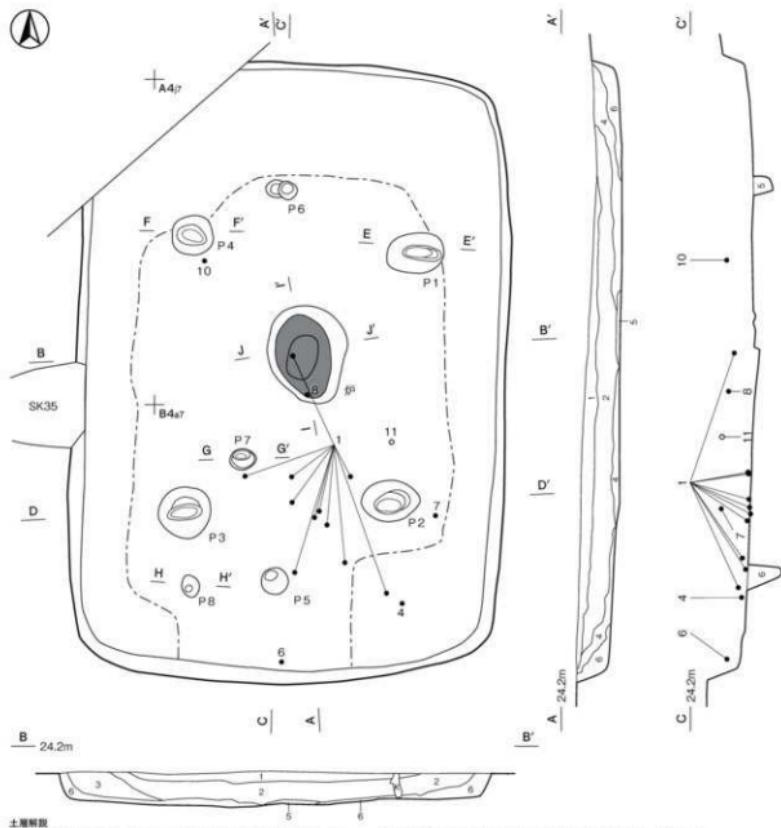
堅穴建物跡

第9号堅穴建物跡（第92～94図 PL18）

位置 調査区北東部のA 4j7区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第35号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 北西コーナー部が調査区域外へ延びている。長軸7.61m、短軸5.29mの隅丸長方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ38～41cmで、外傾して立ち上がっている。



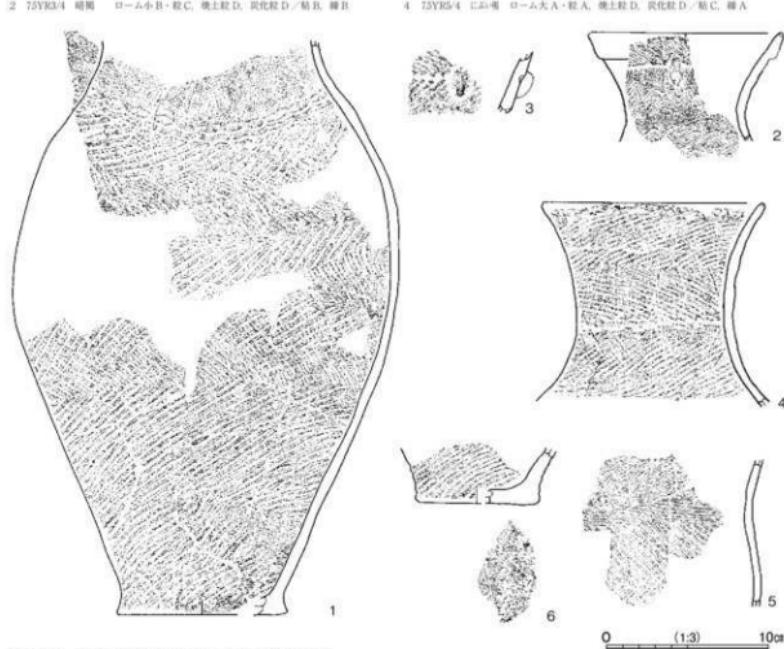
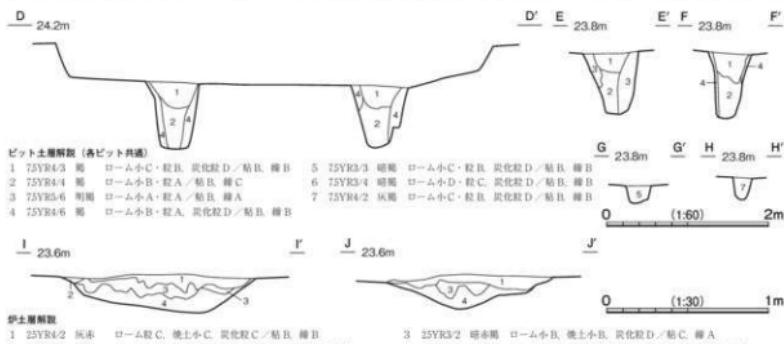
第92図 第9号堅穴建物跡実測図

床 平坦で、中央部から南部にかけて、踏み固められている。

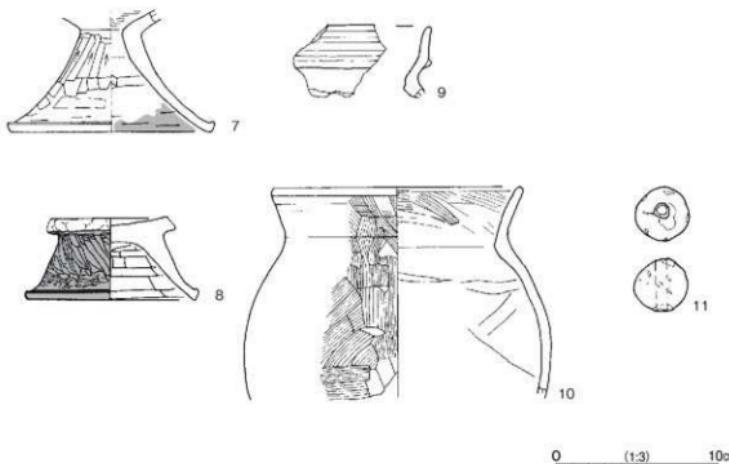
炉 中央部に付設されている。長径124cm、短径100cmの楕円形で、床面を22cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変種化している。

ピット 8か所。P 1～P 4は深さ74～82cmで、規模や配置から主柱穴である。P 5は深さ42cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P 6～P 8は深さ24～26cmで、性格は不明である。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。



第93図 第9号堅穴建物跡・出土遺物実測図



第94図 第9号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片 341点（広口壺）、土師器片 464点（壺6、皿1、器台6、高杯3、壺125、小型壺9、甕類314）、土製品2点（土玉）、炭化材2点が出土している。この他に混入した縄文土器片9点が出土している。1は中央部から南部の床面と覆土下層から出土した破片が接合したものである。4は南東コーナー部の覆土下層から、6は南部、8は中央部、10は西部の覆土中層、7は南東部、11は東部の覆土上層から、2・3・5・9は覆土中からそれぞれ出土している。7～10を含む土師器片は窪地状に堆積した埋土の中から散在した状態で出土しており、廃絶後に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。

第41表 第9号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(35.6)	(10.5)	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	頭部無文、胴部横筋文、附加条一種（附加2条） 縄文による羽状模様成	覆土下層・床面	50% PL20
2	弥生土器	広口壺	[116]	(67)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部複合二行単筋縦文R（横） 脇瘤矢張 縄文無釉表面工具（6本）による波状文	覆土中	5%
3	弥生土器	広口壺	-	(40)	-	長石・石英	赤褐	普通	口縁部附加条一種（附加2条） 縄文と貼瘤 交叉する羽状模様成	覆土中	5%
4	弥生土器	広口壺	136	(12.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	頭部無文、口縁部から腹部附加条一種 （附加2条） 縄文による波状文	覆土下層	20%
5	弥生土器	広口壺	-	(8.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	頭部無釉工具（6本）による波状文、腹部附加条一種（附加2条） 縄文による波状模様成で施文	覆土中	
6	弥生土器	広口壺	-	(34)	[7.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	頭部附加条一種（附加2条） 縄文、底部木葉模	覆土中層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	土師器	器台	-	(7.5)	124	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	脚部前面下部ヘラ削り、下端ハケ目調整後横ナ ダ 内面ハケ目調整後横ナダ	覆土上層	30%
8	土師器	脚付鉢	-	(5.1)	107	長石・石英・赤色粒子 赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙	良好	脚部外側ヘラ削り、内面ヘラナダ り人為的形状大きさ	覆土中層	40% PL20
9	土師器	壺	-	(4.3)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	口縁部外・内面横ナダ	覆土中	5%
10	土師器	甕	[15.2]	(13.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナダ 調整 体部外面ハケ目調整 内面ヘラナダ	覆土中層	10%

番号	種別	径	高さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
11	土玉	33～34	33	0.7	31.67	長石・石英	一方孔からの穿孔 外面ナダ	覆土上層	PL26

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡 11 棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴建物跡

第 1 号堅穴建物跡 (第 95・96 図 PL18)

位置 調査区中央部の B26 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸 4.88 m、南北軸 3.00 m しか確認できなかった。主軸方向は N - 65° - E の方角または長方形と推定される。壁は高さ 34 ~ 40 cm で、直立している。

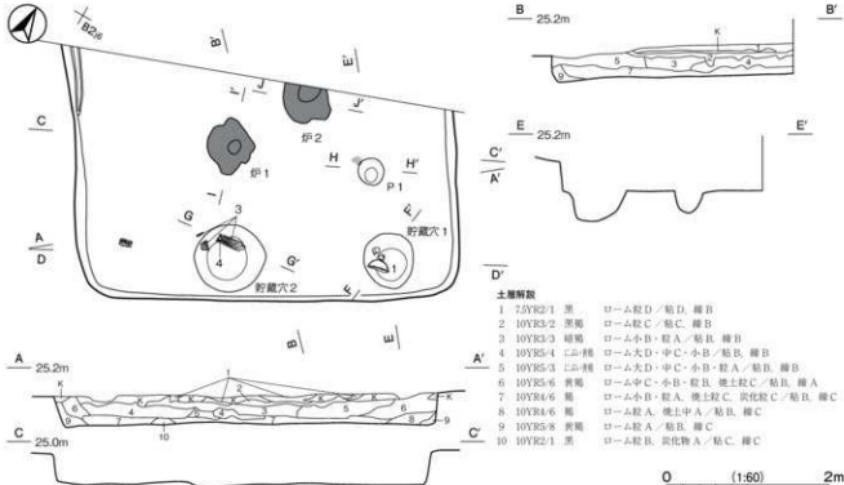
床 平坦で、硬化面は確認できなかった。北西壁際中央部で壠溝を一部確認した。

炉 2か所。炉 1 は中央部やや南西寄り、炉 2 は東寄りに付設されている。炉 1 は、長径 70 cm、短径 60 cm の不整橢円形の地床炉である。床面から深さ 11 cm ほど掘りくぼめて構築されている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉 2 は、北部が調査区域外へ延びているため、東西軸 76 cm、南北軸 55 cm しか確認できなかった。床面から深さ 8 cm ほど掘りくぼめられた地床炉である。炉床面は火熱を受けたローム面が一部検出されたのみである。炉 1 と炉 2 の新旧関係は不明である。

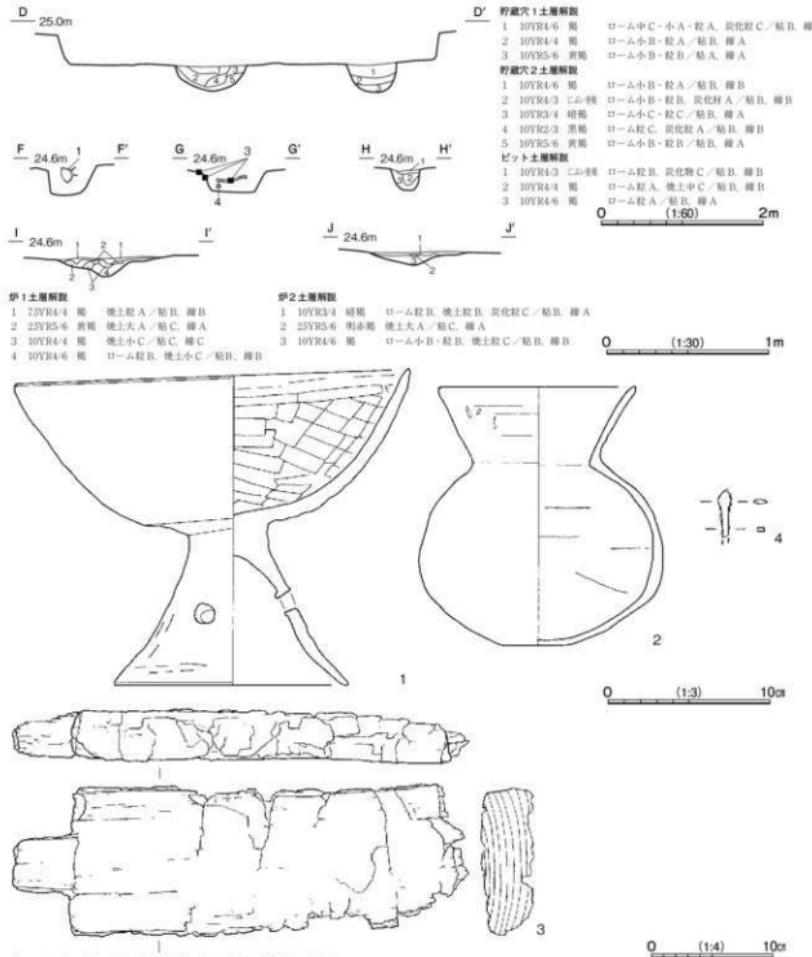
ピット P 1 は深さ 24 cm で、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴 1 は南東コーナー部に位置している。長径 69 cm、短径 62 cm の橢円形で、深さは 35 cm である。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。3 層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。貯蔵穴 2 は南部に位置している。長径 90 cm、短径 84 cm の橢円形で、深さは 32 cm である。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。5 層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。貯蔵穴 1 と貯蔵穴 2 の新旧関係は不明である。

覆土 10 層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第 95 図 第 1 号堅穴建物跡実測図



第 96 図 第 1 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土器片 252 点（器台 6、高环 1、小型壺 2、壺 3、甌類 240）、土製品 1 点（土玉）、石器 3 点（剥片 2、敲石 1）、金属製品 1 点（鉄軌）、木製品 2 点（部材）、炭化材 1 点が出土している。この他に混入した縄文土器片 38 点、弥生土器片 4 点が出土している。1 は貯蔵穴 1 の覆土中層から、2 は覆土中から出土している。3・4 は貯蔵穴 2 の覆土中層から出土している。3 は樹種同定した結果、ブナ科クリ属のクリと同定された。また、炭化した状態で貯蔵穴 2 の覆土から出土しており、建築部材の一部と考えられるが用途は不明である。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀前葉と考えられる。

第42表 第1号堅穴建物跡出土遺物一覧

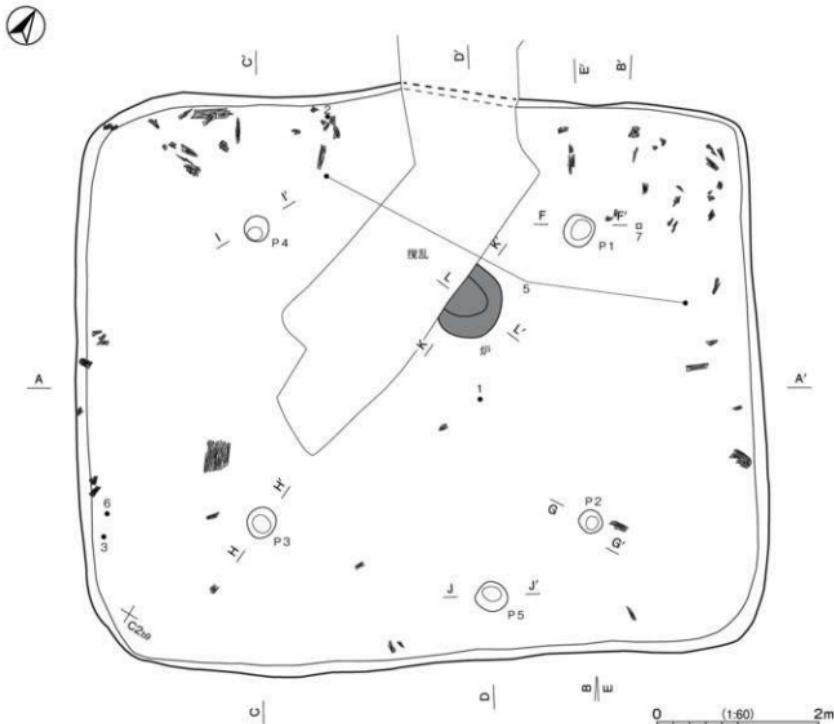
番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
1	土師器	高杯	24.1	19.5	14.4	長石・石英	に赤い帯	普通	口縁部内・内面横ナデ 底部外面横ナデ下端横ナデ 底部横ナデ	内面ヘラナデ 円孔3ヶ所	堅穴1 竪土中層	90% PL21
2	土師器	小型盤	[120]	16.1	[4.2]	長石・石英	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面横ナデ		覆土中	70% PL22
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質			特徴	出土位置	備考	
3	不明部材	(37.1)	12.5	4.3	(453.6)	クリ	板目	はぞ部削り加工	前面長方形 尻化	堅穴2 竪土中層	PL26	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質			特徴	出土位置	備考	
4	鉄錠	(3.0)	(0.8)	0.18~0.2	(1.04)	鉄	鍛身部断面格円形 頭部断面長方形 端部欠損			堅穴2 竪土中層	PL26	

第2号堅穴建物跡（第97～99図 PL18）

位置 調査区中央部のC 2a9区。標高24mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸8.40m、短軸7.10mの長方形で、主軸方向はN-33°-Wである。壁は高さ32~47cmで、直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

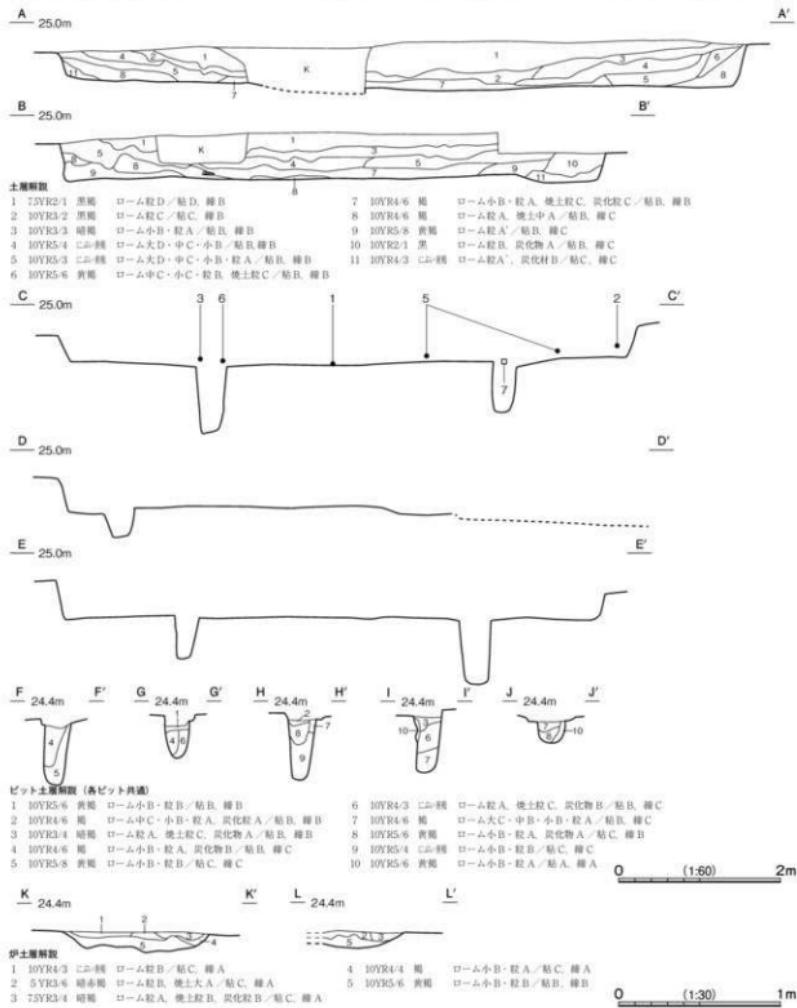


第97図 第2号堅穴建物跡実測図(1)

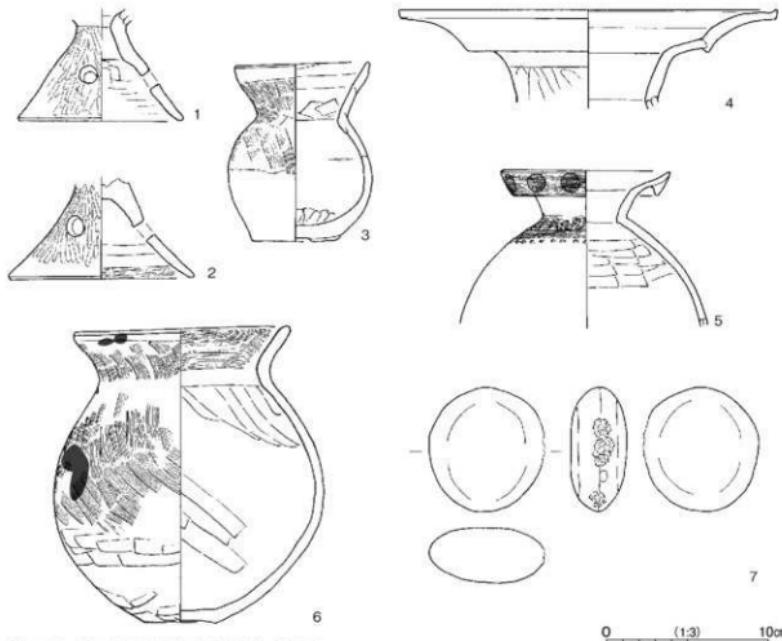
炉 中央部やや北寄りに付設されている。搅乱を受けており、南北径89cm、東西径61cmで不整梢円形と推定される。床面を深さ12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 5か所。P1～P4は深さ53～91cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ26cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。

覆土 11層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第98図 第2号堅穴建物跡測定図(2)



第99図 第2号堅穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 1,359点 (坏2, 槌9, 器台24, 高坏14, 鉢1, 壺6, 小型壺8, 台付壺3, 壺類1,292), 土製品3点 (土玉), 石器12点 (剥片4, 磨製石斧1, 磨石6, 敲石1), 炭化材33点が出土している。この他に混入した繩文土器片12点, 弥生土器片36点が出土している。1は中央部の床面から, 2は北部, 3・6は南西部, 5は北部と北東部, 7は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。4は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。焼土や炭化材・炭化物が北部から南部にかけての床面付近から出土しており、焼失家屋とみられる。

第43表 第2号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	壺合	-	(6.9)	[10.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	台把外縁へラ削り 内面土手へラ削り 下端機 テーブル式底部外縁 円孔3か所	床面	20%
2	土師器	高坏	-	(6.3)	11.5	長石・石英・雲母・ 細繊維	橙	普通	脚部外縁へラ削り 内面横ナギ 円孔3か所	覆土下層	50%
3	土師器	小型壺	8.8	11.1	5.5	長石・石英・雲母・ 細繊維	灰青褐	良好	口縁部外・内面横ナギ 脚部ハケ目調整 体部 外縁へラナギ 内面へラナギ	覆土下層	90% PI.22
4	土師器	壺	[23.4]	(6.1)	-	長石・石英・雲母・ 赤鉄粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナギ 脚部へラ削り	覆土中	10%
5	土師器	壺	[10.4]	(9.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外側へラ削り 内面横ナギ 体部外縁 上半部へラ削り 刃削り 面研磨仕立て 内面へラナギ	覆土下層	30% PI.22
6	土師器	壺	13.1	18.4	4.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外側へラ削り 内面ハケ目調整 体部外縁 下半部へラ削り 内面へラナギ	覆土下層	95% PI.22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	磨石	7.6	7.2	3.4	2586	砂岩	全面磨り調整 舞踊部及び中央部に微細な敲打痕	覆土下層	

第3号竪穴建物跡（第100・101図 PL18）

位置 調査区中央部のB 3h5区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

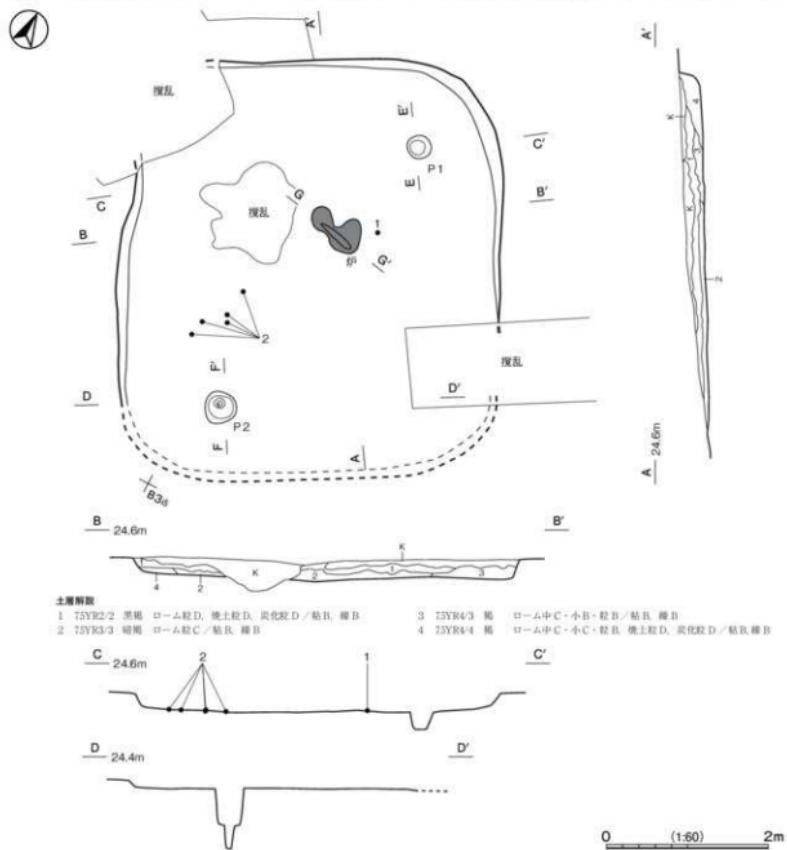
規模と形状 南壁が削平されているため、東西軸475m、南北軸430mほどしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-28°-Wと推定できる。壁は高さ10~17cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

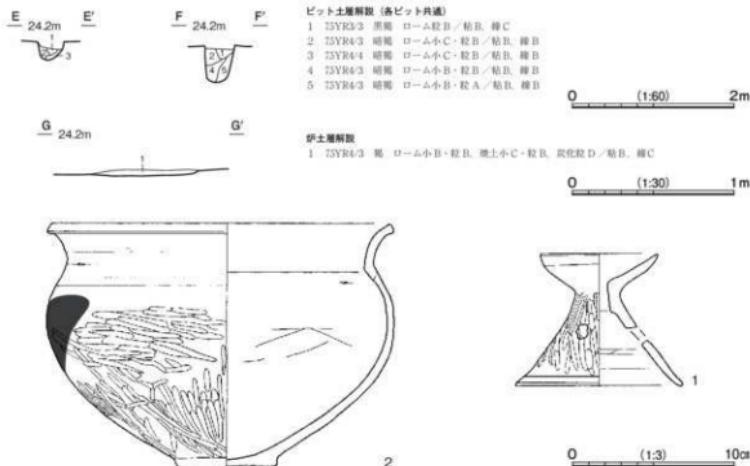
炉 中央部や北寄りに付設されている。長径72cm、短径45cmの不定形で、床面を2cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 2か所。P 1・P 2は深さ22cm・45cmで、性格は不明である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることや不規則な堆積状況から、埋め戻されている。



第100図 第3号竪穴建物跡実測図



第101図 第3号堅穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 105点（器台1、鉢1、小型壺1、甕類102）、石器1点（磨石）が出土している。この他に混入した繩文土器片95点と弥生土器片10点が出土している。1は中央部、2は南部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。

第44表 第3号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	断 土	色 調	地成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	土師器	器台	7.3	8.1	10.3	長石・石英・岩粉・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	外部・内面横ナメ 白堊外面部脱色のヘラ磨き	床面	80% PL21
2	土師器	鉢	[20.9]	15.1	6.2	長石・石英・岩粉・赤色粒子	にぶい橙	普通	外部・内面横ナメ 内側3か所 頭部外側ヘラ磨き 内 頭部ナメ	床面	50% PL23

第4号堅穴建物跡（第102図 PL18）

位置 調査区中央部のB 3g6 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

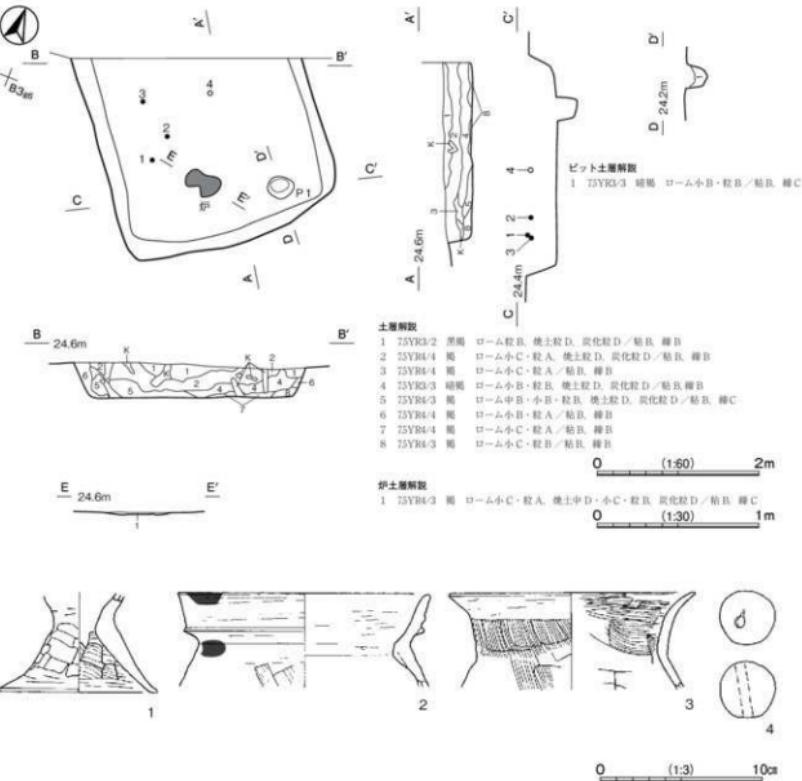
規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、東西軸 2.72 m、南北軸 2.52 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向は N - 33° - W と推定される。壁は高さ 30 ~ 38 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

炉 中央部南寄りに付設されている。長径 46 cm、短径 16 cm の不定形である。床面を 2 cm ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット P 1 は深さ 25 cm で、性格は不明である。

覆土 8 層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。



第102図 第4号竪穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片50点(壺1、器台2、高杯3、壺1、壺類43)、土製品1点(土玉)が出土している。この他に混入した縄文土器片25点、弥生土器片19点が出土している。1・2・3は西部、4は中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。

第45表 第4号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土地点	備考
1	土師器	器台	-	(6.1)	(9.9)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面外面上手ヘラナダ・下端横ナダ 内面土手	覆土上層	40%
2	土師器	壺	[15.4]	(5.7)	-	長石・石英・青母	にぶい橙	普通	ハサクナダ・内面横ナダ 体部外沿ハサク目調整後	覆土上層	10% PL25
3	土師器	壺	[15.0]	(6.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	「J」字型外沿横ナダ 内面ハサク目調整 体部外沿ハサク目調整 内面ヘラナダ	覆土上層	5%

番号	器種	径	高さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土地点	備考
4	土玉	33~34	3.4	0.6	36.56	長石・石英	一方向からの穿孔 外面ナダ	PL25	

第5号堅穴建物跡（第103・104図 PL19）

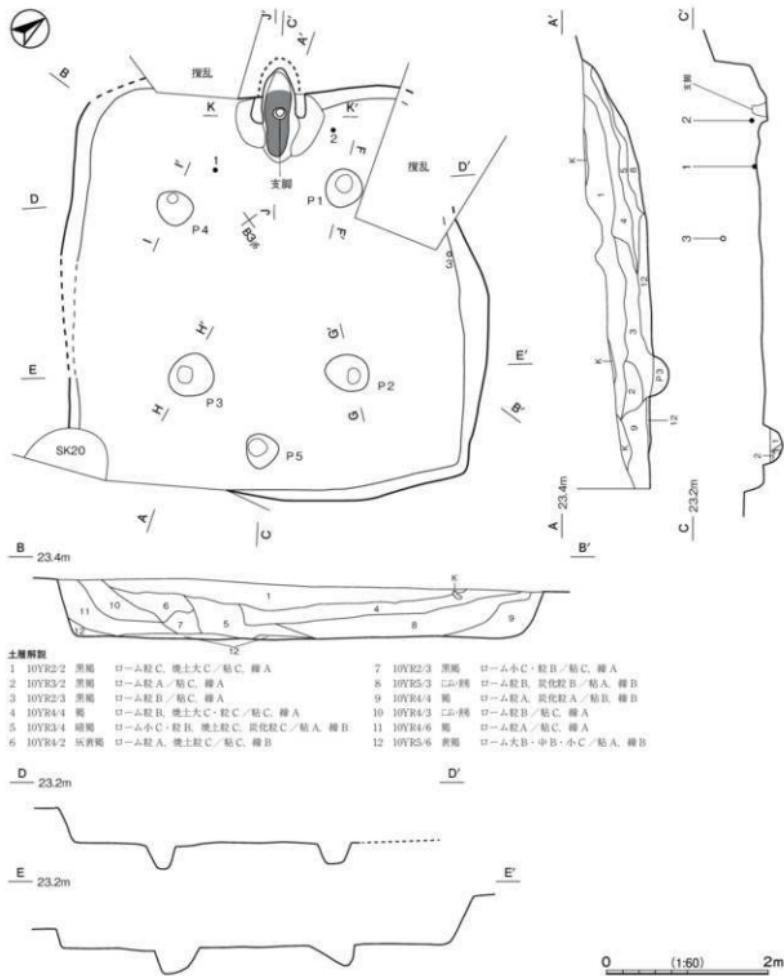
位置 調査区西部のB3J6区、標高24mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.18m、短軸5.05mの方形で、主軸方向はN-51°-Wである。壁は高さ22~65cmで、

ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

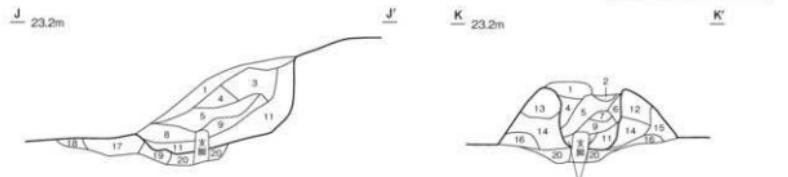
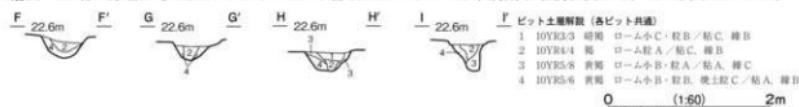


第103図 第5号堅穴建物跡実測図

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部までは117cm、燃焼部の幅は46cmである。竈は地山を皿状に5cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第17～20層を埋土して構築している。袖部はロームブロックや粘土粒子などを含む第12～16層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。中央部には支脚が据えられた状態で遺存している。煙道部は壁外に33cmほど掘り込まれ、火床部は床面よりやや下がっており、奥壁で直立している。第3～8層は、焼土ブロックや粘土ブロックなどを含む天井部の崩落土である。

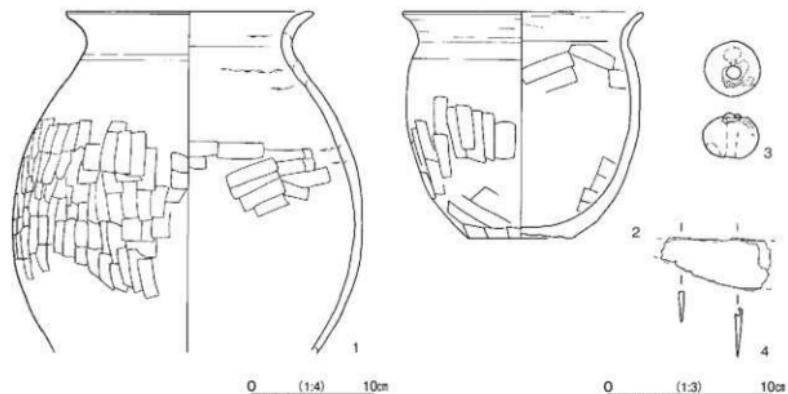
ピット 5か所。P 1～P 4は深さ25～40cmで、規模や配置から主柱穴である。P 5は深さ25cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。

覆土 12層に分層できる。ロームブロックが含まれていることや不規則な堆積状況から、埋め戻されている。



竈土断面図

1 IOYR3/3 C-2層	ローム粒A、粘土粒C／粘B、繩A	12 IOYR5/4 ごみ堆	ローム小C・粘C、炭化粒B／粘B、繩B
2 IOYR4/3 C-2層	ローム粒A、粘土粒C／粘B、繩B	13 IOYR5/8 黄褐	ローム小C・粘B、地土大C、炭化材C・粘B、粘土小C／繩B、繩B
3 IOYR5/3 C-2層	ローム粒A、炭化粒B、粘土粒D／粘C、繩C	14 IOYR5/6 黄褐	ローム粒B、地土大C、炭化粒B、粘土小C／粘B、繩B
4 IOYR4/4 無	ローム粒B、地土粒C、粘土粒C／粘C、繩B	15 IOYR4/4 無	ローム粒E、粘土小C／粘A、繩B
5 IOYR4/6 無	ローム粒B、炭化物C、粘土粒C／粘C、繩B	16 IOYR4/6 無	ローム粒E、粘土小C／粘A、繩B
6 IOYR4/6 無	ローム粒B、炭化物C、粘土粒C／粘C、繩B	17 IOYR4/6 無	ローム小B・粘E、粘土小C／粘A、繩A
7 IOYR4/4 無	ローム粒B、地土大C、粘土粒C／粘C、繩A	18 IOYR5/8 黄褐	ローム小C・粘E、粘土小C／粘B、繩B
8 23YR3/3 埋廻	ローム粒B、地土粒B、粘土粒C／粘C、繩B	19 5YR4/6 本開	ローム粒E、地土粒A、粘土小C／粘B、繩B
9 23YR4/6 埋廻	ローム粒B、地土粒B、炭化物C、粘土粒C／粘C、繩B	20 IOYR4/6 無	ローム大A／粘B、繩B
10 23YR4/6 埋廻	ローム粒B、地土粒B、炭化物C、粘土粒C／粘A、繩A		
11 23YR4/4 無	ローム粒B、地土粒B、炭化物C、粘土粒C／粘C、繩B		



第104図 第5号竖穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 165 点（壺 1、壺 2、甕類 162）、土製品 3 点（支脚 1、土玉 2）、石器 2 点（剥片）、金属製品 2 点（鎌）。粘土塊 1 点が出土している。この他に混入した繩文土器片 44 点と弥生土器片 7 点が出土している。1 は竪南西側、2 は竪東側の覆土下層から、3 は東壁際の覆土上層から、4 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。

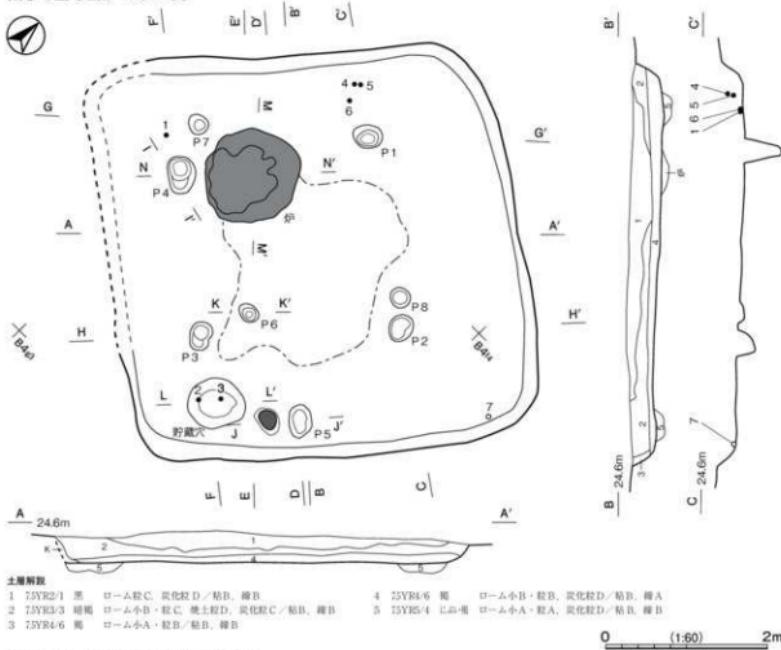
第 46 表 第 5 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	[20.2]	[27.8]	-	灰褐色・石粉・素胎 施釉・黒色粒子	灰褐色	普通	口縁部・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	35% PL24
2	土師器	小型甕	[14.8]	14.0	6.3	長石・石英・雲母 にぶい青緑	青緑	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ 底部水痕	覆土下層	50%
番号	器種	径	高さ	底径	重量	胎土			特徴	出土位置	備考
3	土玉	3.5	2.8	0.8	(27.09)	長石・石英	一方向からの穿孔	外面ナデ 指彫		覆土上層	PL26
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質			特徴	出土位置	備考
4	鎌	(6.7)	3.2	0.1~0.3	(16.79)	鉄	刃部断面三角形	鍔部欠損		覆土中	PL26

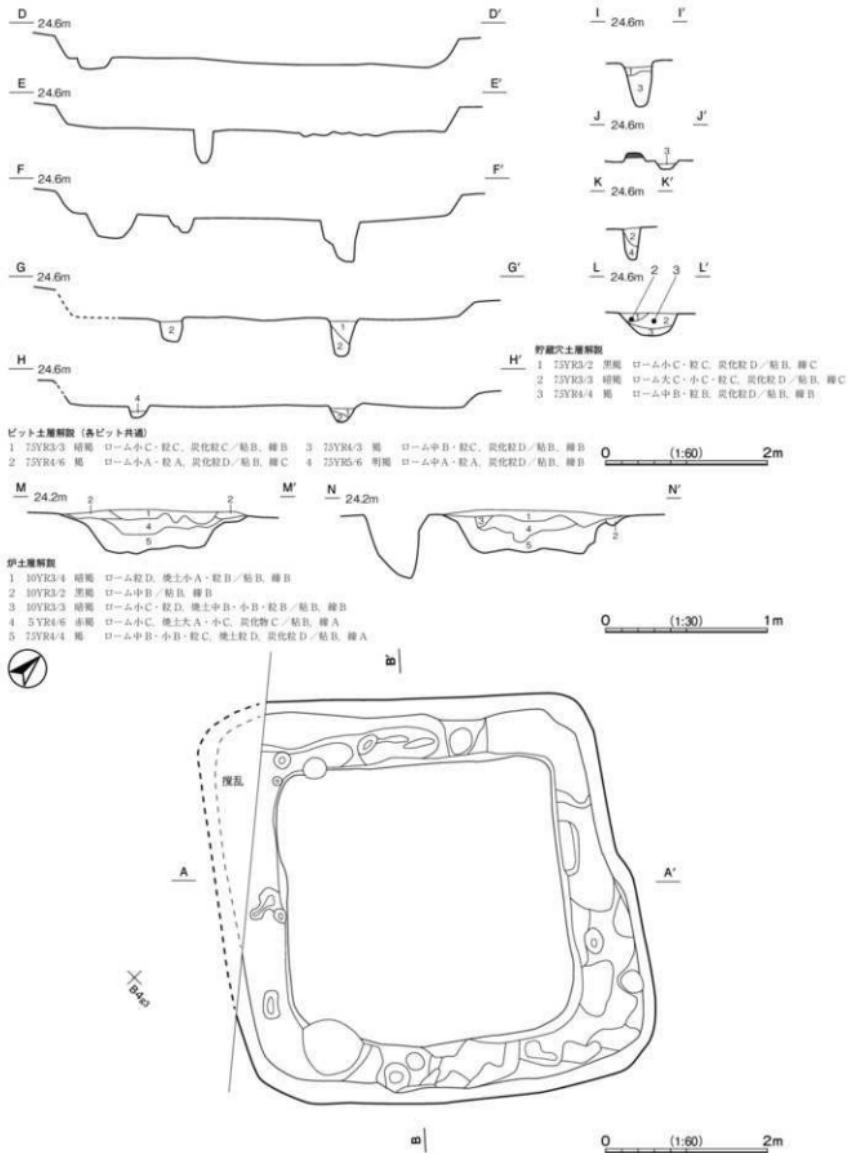
第 6 号竪穴建物跡（第 105 ~ 107 図 PL19）

位置 調査区中央部の B 4 F3 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.14 m、短軸 4.92 m の方形で、主軸方向は N - 43° - E である。壁は高さ 23 ~ 32 cm で、外傾して立ち上がっている。



第 105 図 第 6 号竪穴建物跡実測図



第 106 図 第 6 号竖穴建物跡掘方実測図

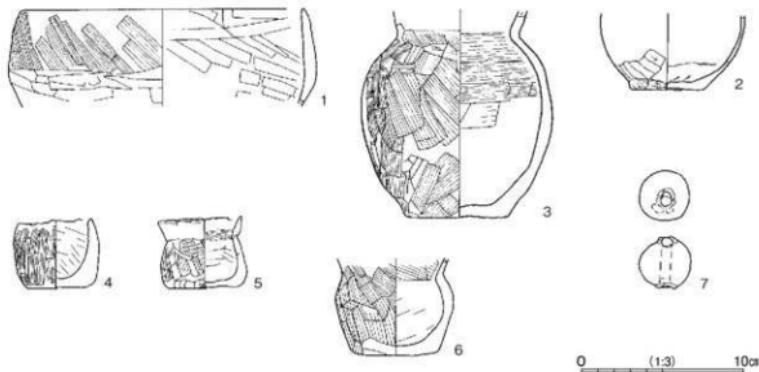
床 平坦で、中央部が踏み固められている。南部壁際に灰白色粘土塊を確認した。貼床は壁面に沿って溝状に掘り込まれ、ロームブロックと炭化粒子を含む第5層を埋土して構築されている。

炉 中央部やや西寄りに付設されている。長径128cm、短径118cmの円形である。床面を28cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤茶硬化している。

ピット 8か所。P 1～P 4は深さ16～52cmで、規模や配置から主柱穴である。P 5は深さ14cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P 6～P 8は深さ8～42cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部に位置している。長径72cm、短径65cmの楕円形で、深さは28cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっており、3層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。

覆土 4層に分層できる。第2～4層はロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。第1層はレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積である。



第107図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片274点（器台5、高杯5、鉢1、壺5、小型壺12、甕類243、ミニチュア土器3）、土製品1点（土玉）が出土している。この他に混入した縄文土器片6点、弥生土器片17点が出土している。1は北部、6は東部の床面から、2・3は貯蔵穴覆土上層から、4・5は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。

第47表 第6号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	鉢	[174]	6.0	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外側上半ハケ目調整 体部ヘラナデ 内底ハナデ	床面	10% PL25
2	土師器	小型壺	—	(47)	4.5	長石・石英・葉緑・黒色粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面下半ハラ崩り 内部ヘラナデ	貯蔵穴 覆土上層	30%
3	土師器	壺	—	(129)	(6.0)	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整 内部ヘラナデ	貯蔵穴 覆土上層	80%
4	土師器	ミニチュア 土器	4.4	4.3	3.9	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目調整 内部ヘラナデ	覆土下層	95% PL25
5	土師器	ミニチュア 土器	5.0	4.4	4.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部外面ハケ目調整 内部ナデ	覆土下層	95% PL25
6	土師器	ミニチュア 土器	—	(6.1)	5.3	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ハケ目調整 体部外面ハケ目調 整 内部ヘラナデ	床面	90% PL25

番号	器種	径	高さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
7	土玉	3.1	3.2	0.5～0.9	28.88	長石・雲母・矽岩	一方向からの穿孔 外面ナデ	床面	PL25

第7号竪穴建物跡（第108～112図 PL19）

位置 調査区中央部のB 4 d5 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 一辯 4.60 m の方形で、主軸方向は N - 6° - W である。壁は高さ 26 ~ 39 cm で、外傾して立ち上がりっている。

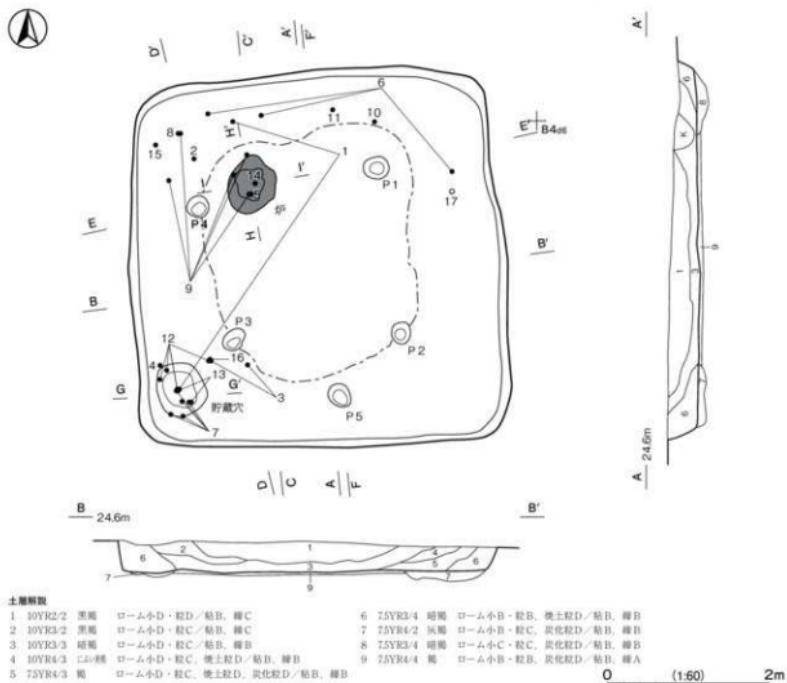
床 平坦で、中央部が踏み固められている。貼床は壁面に沿って溝状に掘り込まれ、ロームブロックと炭化粒子を含む第7～9層を埋土して構築されている。

炉 中央部や北西寄りに付設されている。長径 75 cm、短径 60 cm の不整梢円形である。床面を 20 cm ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

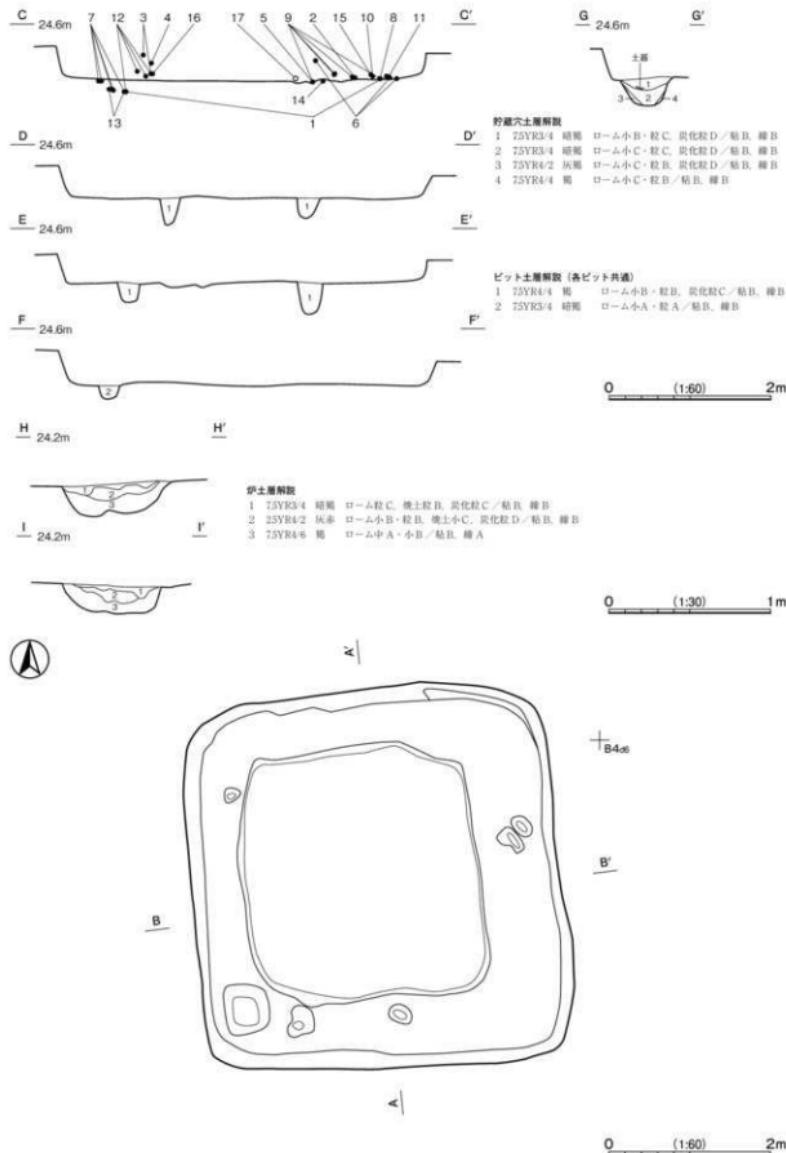
ピット 5か所。P 1～P 4 は深さ 25 ~ 41 cm で、規模や配置から主柱穴である。P 5 は深さ 18 cm で、配置から出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径 68 cm、短径 62 cm の梢円形で、深さは 33 cm である。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。4 層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。

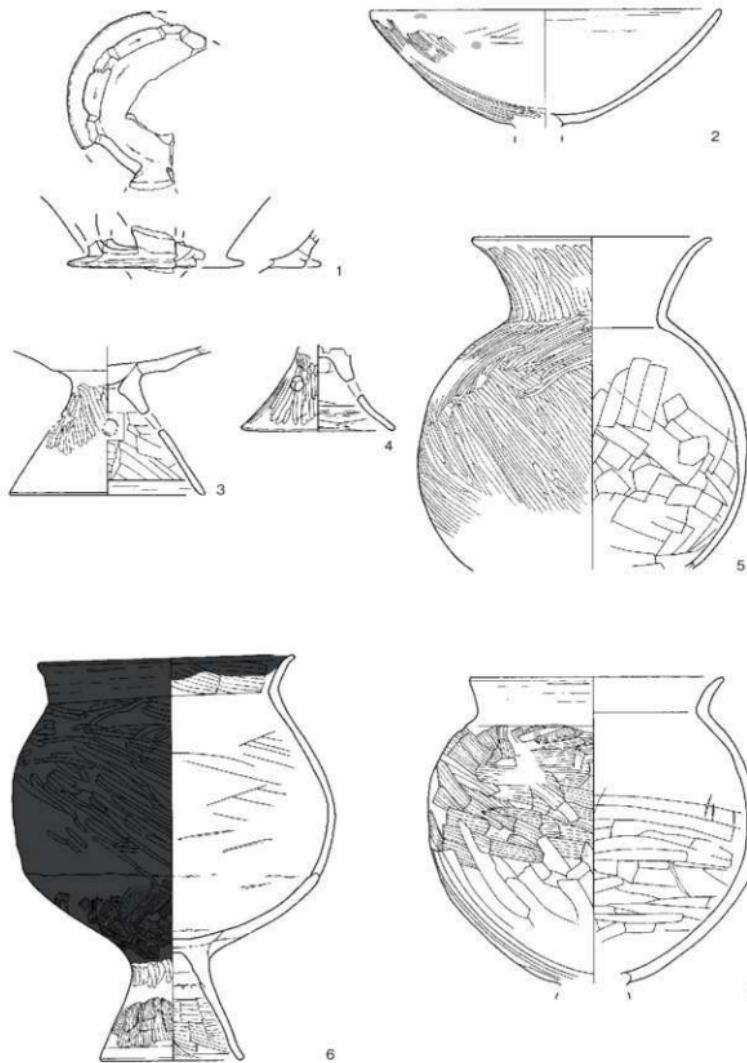
覆土 6 層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。



第108図 第7号竪穴建物跡実測図

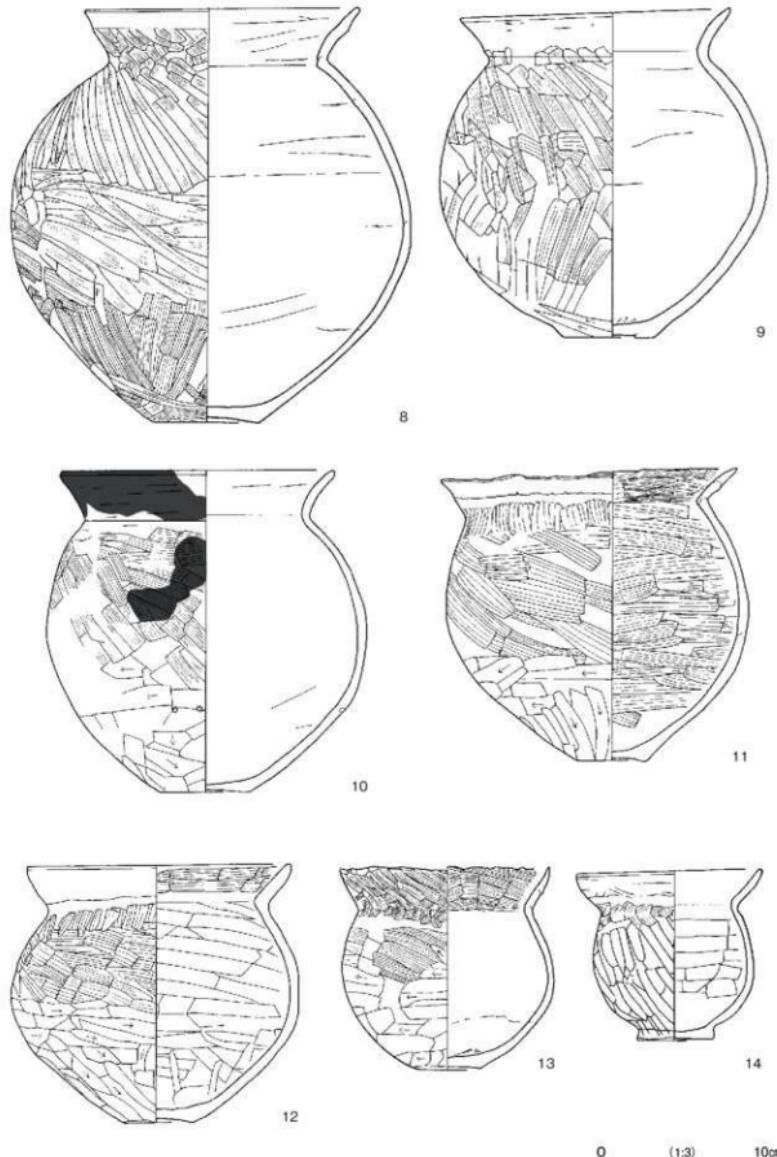


第 109 図 第 7 号堅穴建物跡掘方実測図

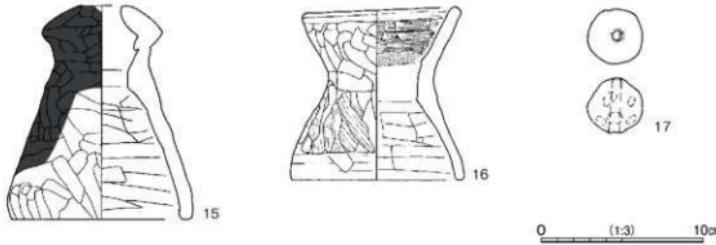


0 (1:3) 10cm

第110図 第7号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



第111図 第7号堅穴建物跡出土物実測図(2)



第112図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

遺物出土状況 土師器片 225点 (器台1, 装飾器台1, 高坏6, 鉢1, 壺13, 小型壺3, 斧194, 台付壺2, 小型壺2, 炊器台2), 土製品1点 (土玉), 石器1点 (砥石) が出土している。この他に混入した縄文土器片5点, 弥生土器片12点が出土している。1は貯蔵穴の覆土中層と西部の床面にかけて出土した破片が接合されたものである。2・8・15は北西コーナー部の床面から出土している。3・16は南西部の覆土下層, 4は覆土中層から出土している。5・14は炉底面から出土している。6は北部の床面と東部の覆土中層にかけて出土した破片が接合されたものである。7は貯蔵穴の覆土上層と中層から, 9は炉周辺の床面と覆土下層にかけて出土した破片が接合されたものである。10・11は北部の覆土下層から出土している。12は貯蔵穴の覆土中層と貯蔵穴北東部の覆土下層から出土している。13は貯蔵穴の覆土中層にかけて出土した破片が接合されたものである。17は東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。

第48表 第7号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	貯蔵台	11.0	(24)	-	灰石・雲母	灰褐色	良好	脚部受部6か所の透かし。	貯蔵穴 中層・床面	30% PL25
2	土師器	高坏	21.5	(7.2)	-	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ハラ焼き 内面 ナデ	床面	40%
3	土師器	高坏	(9.2)	[11.9]	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外・内面ハラナデ 体部外側ハラ焼き 内面 ナデ	覆土下層	40% PL21	
4	土師器	高坏	-	(5.3)	9.6	長石・石英・雲母 黒色粒子	にふい痕	良好	脚部外側ハラ焼き 内面横ナデ 口縫孔3か所	覆土中層	40%
5	土師器	壺	[14.5]	(20.6)	-	灰石・石英・雲母	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 脚部ハラ焼き 体部外 側ハラ焼き 内面ハラナデ	炉底面	70% PL22
6	土師器	台付壺	15.6	25.2	8.8	灰石・石英・雲母	黒褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ハラ焼き 下 部外側ハケ日調整 台部外・内面ハラナデ	覆土中層・床面	70% PL23
7	土師器	台付壺	15.6	(19.0)	-	灰石・石英・赤色粒子	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ハラナデ 下ハケ日調整 脚部外・内面横ナデ 内面ハラナデ	貯蔵穴 中層	90% PL23
8	土師器	壺	16.7	25.7	6.6	長石・石英・雲母 黒褐色	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ハケ日調整 脚部外・内面横ナデ	床面	90% PL24
9	土師器	壺	16.6	20.4	5.4	長石・石英・赤色粒子	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ハケ日調整 脚部外・内面横ナデ 体部外側ハラ焼き 内面ハラナデ	覆土下層・床面	90%
10	土師器	壺	16.6	20.0	5.7	灰石・石英・雲母 黒褐色	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ハラナデ 下半 部外側ハラ焼き 内面ハラナデ 亂孔近心の直孔2か所	覆土下層	90%
11	土師器	壺	18.3	18.1	4.2	長石・石英・雲母 黒褐色	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ハケ日調整 体部外側上 部外側ハラナデ 下ハケ日調整	覆土下層	90%
12	土師器	壺	16.2	16.0	4.7	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ハケ日調整 体部外側上 部外側ハラナデ 下ハケ日調整 下ハラナデ	脚部受部中層 下部	90% PL23
13	土師器	小型壺	12.9	12.5	4.2	長石・石英・雲母 黒色粒子	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側上半ハラナデ 下ハラナデ 内面ハラナデ	貯蔵穴 中層	80% PL24
14	土師器	小型壺	11.2	10.7	4.8	長石・石英	にふい痕	普通	口縁部外・内面横ナデ 脚部ハケ日調整 体部 外側ハラナデ	炉底面	95% PL24
15	土師器	炉取台	(7.4)	13.2	11.0	長石・石英・赤色粒子	にふい痕	普通	口縁部外・内面ナデ 台部外側ハラナデ 内面 ハラナデ	床面	95% PL24
16	土師器	炉取台	9.3	10.7	10.5	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 口縫孔1ハケ日調整 下ハラナデ	覆土下層	90% PL24

番号	種別	径	高さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
17	土玉	3.4	3.3	0.6	38.89	長石・雲母	一方向からの穿孔 外面ナデ 指頭痕	覆土下層	PL26

第8号竪穴建物跡（第113図 PL19）

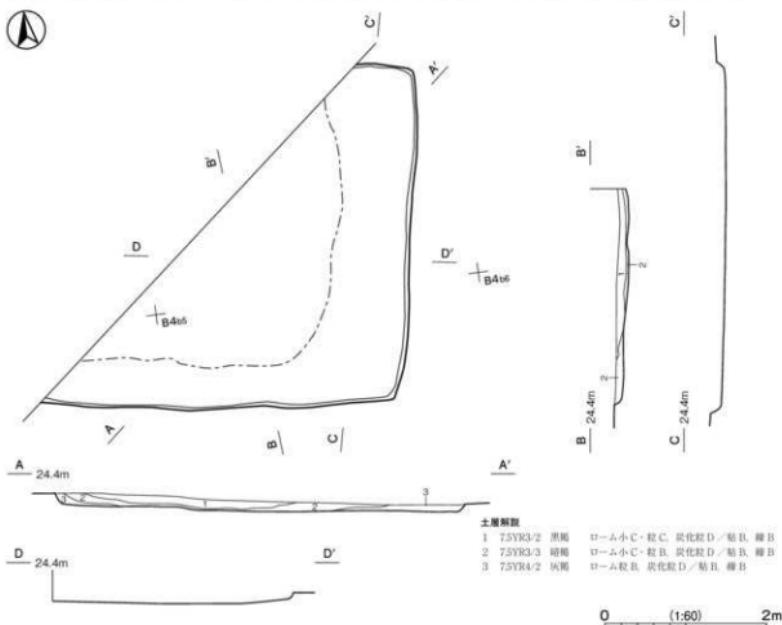
位置 調査区中央部のB 4 a5 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が調査区域外へ延びているため、東西軸 4.40 m、南北軸 4.26 m しか確認できなかった。

主軸方向は N - 8° - E の長方形と推定される。壁は高さ 12 ~ 17 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

覆土 3 層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。



第113図 第8号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 47 点（高环 5、壺 1、甕類 41）、石器 1 点（石鏃）が出土している。この他に混入した弥生土器片 8 点が出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀と考えられる。

第10号竪穴建物跡（第114～116図 PL19）

位置 調査区中央部のA 4 h9 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.92 m、短軸 5.48 m の方形で、主軸方向は N - 35° - W である。壁は高さ 6 ~ 18 cm で、外傾して立ち上がっている。

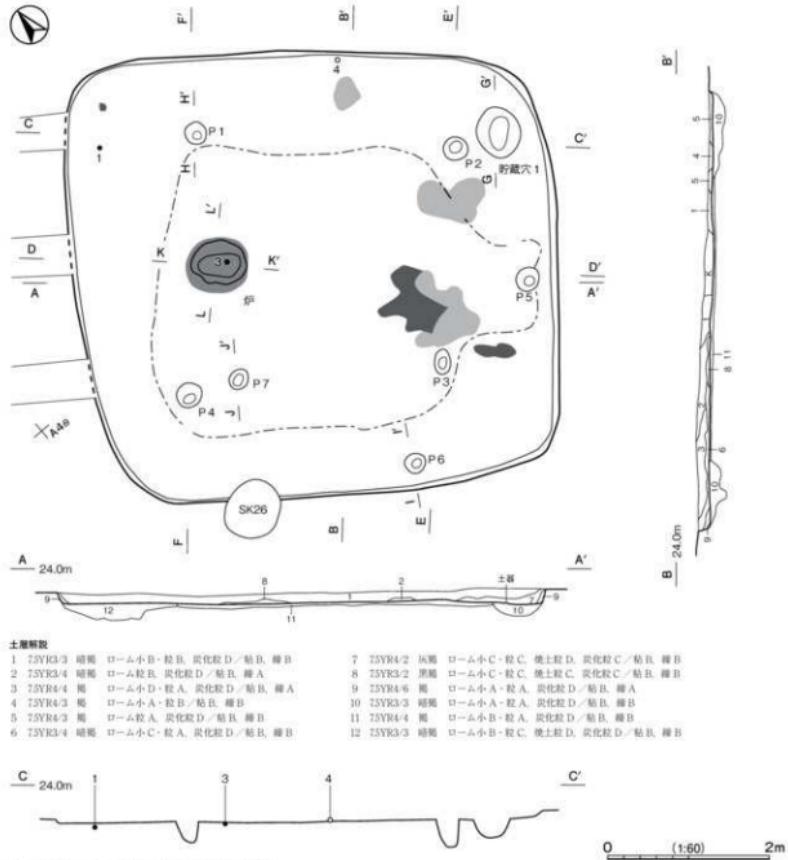
床 平坦で、中央部が踏み固められている。貼床は壁面に沿って溝状に掘り込まれ、ロームブロックと炭化粒子などを含む第 10 ~ 12 層を埋土して構築されている。

炉 中央部やや北西寄りに付設されている。長径 80cm、短径 70cm の楕円形である。床面を 21cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤茶硬化している。

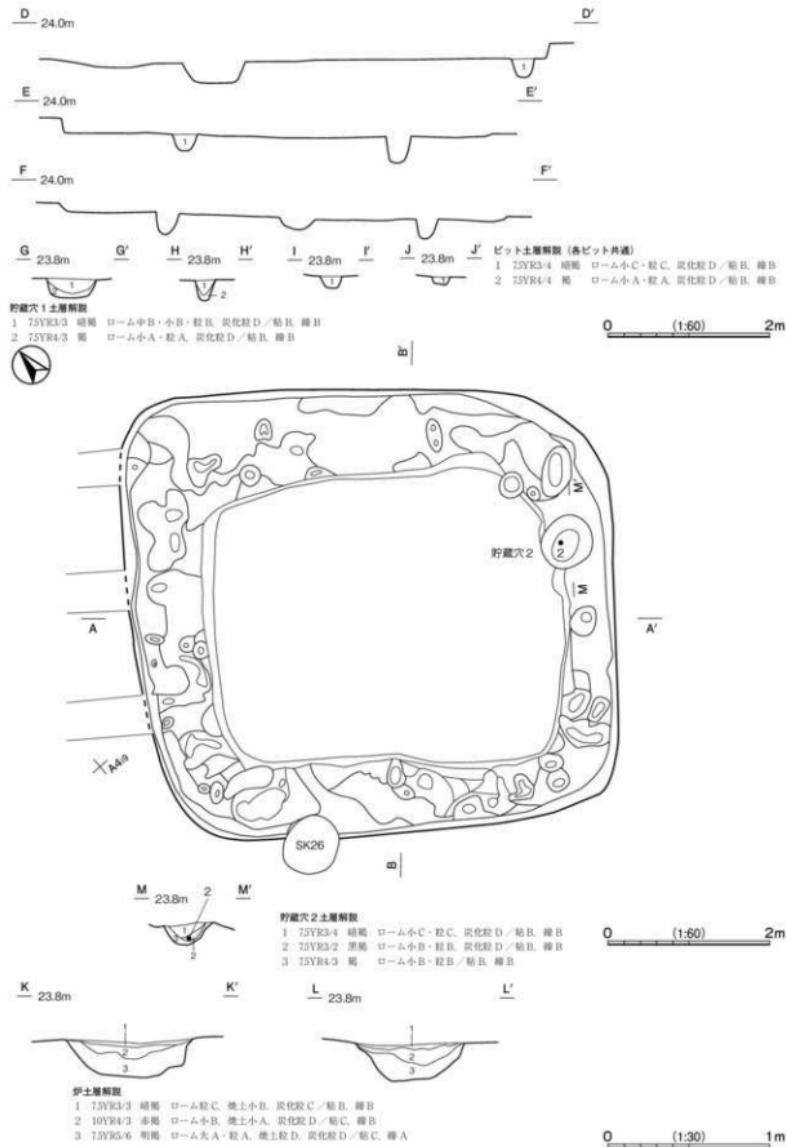
ピット 7か所。P1～P4は深さ 22～33cmで、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ 24cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P6・P7は深さ 15cm・11cmで、性格不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は東コーナー部に位置している。長径 63cm、短径 55cm の楕円形で、深さは 26cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。2層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。貯蔵穴2は長径 70cm、短径 65cm の楕円形で、掘方調査の際に確認したもので、床面の作りかえが行われた可能性がある。南東部に位置し、深さは 26cm。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。3層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。

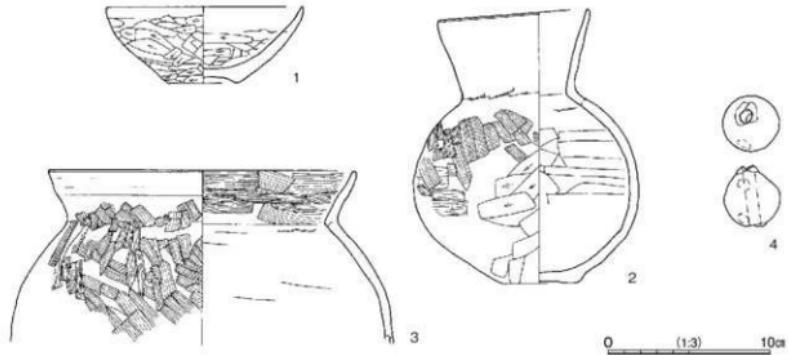
覆土 9層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。



第114図 第10号竪穴建物跡実測図



第 115 図 第 10 号竪穴建物跡掘方実測図



第116図 第10号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 83点（鉢2、壺2、小型壺2、炉器台1、壺類76）、土製品1点（土玉）、石器1点（砥石）、粘土塊5点が出土している。この他に混入した弥生土器片9点が出土している。1は北部の床面、3は炉の覆土上層、4は東部の覆土下層から出土している。2は貯蔵穴2の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。焼土や炭化物が北部から南東部にかけての床面付近から出土しており、焼失家屋とみられる。

第49表 第10号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	鉢	122	47	42	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ハラ削り 内側ハラナデ	床面 60% PL23	
2	土師器	小型壺	92	170	50	長石・石英・細繊維・黒色粒子	灰白・黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半ハケ目調整 下半ハラ削り 内側ハラナデ	貯蔵穴2 覆土下層 90% PL22	
3	土師器	小型壺	[186]	[107]	-	長石・石英・雲母	灰白・黄褐色	普通	口縁部外側横ナデ 内面ハケ目調整 体部外側ハケ目調整 内面ナデ	か覆土上層 30%	
番号	器種	径	高さ	孔径	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
4	土玉	34~35	36	0.7	38.24	長石・石英	一方向からの穿孔 外面ナデ 指頭痕			覆土下層	PL26

第11号竪穴建物跡（第117図 PL19）

位置 調査区中央部のA 5 h1 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

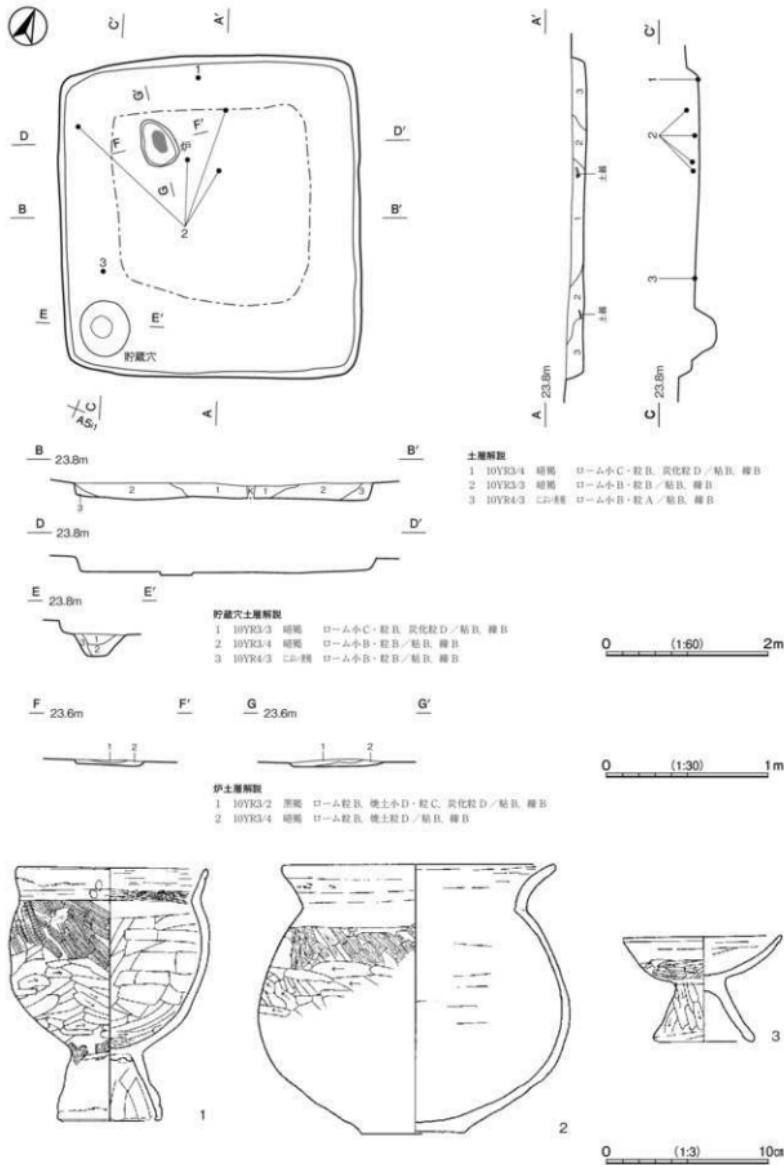
規模と形状 長軸 3.98 m、短軸 3.70 m の方形で、主軸方向は N - 22° - W である。壁は高さ 13 ~ 20 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部や北西寄りに付設されている。長径 64 cm、短径 44 cm の楕円形である。床面を 10 cm ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変化している。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径 70 cm、短径 61 cm の楕円形で、深さは 28 cm である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。3 層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。

覆土 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



遺物出土状況 土師器片 28 点（高坏 1, 壺 1, 壺 24, 台付壺 1, ミニチュア土器 1), 混入した弥生土器片 7 点が出土している。1 は北部, 3 は南西部の床面から, 2 は北部から北西の覆土中層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀前葉と考えられる。

第 50 表 第 11 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	土師器	台付壺	11.7	15.8	6.4	灰白・石英・雲母・ 粗粒	にい黄褐	普通	櫛目縞模様 内面横十字・内面ハナテ・台唇外縁上半ハケ目調整	床面	95% PL23
2	土師器	壺	16.6	16.6	6.3	灰石・石英・雲母	にい黄褐	普通	口縁部外・内面横十字・体部外縁上半ハケ目調整	覆土中層	70%
3	土師器	壺	9.8	6.5	6.0	灰石・石英・赤色粒子	にい黄褐	普通	口縁部外・内面横十字・内面ハナテ・脚部外縁ハケ削り	床面	95% PL25

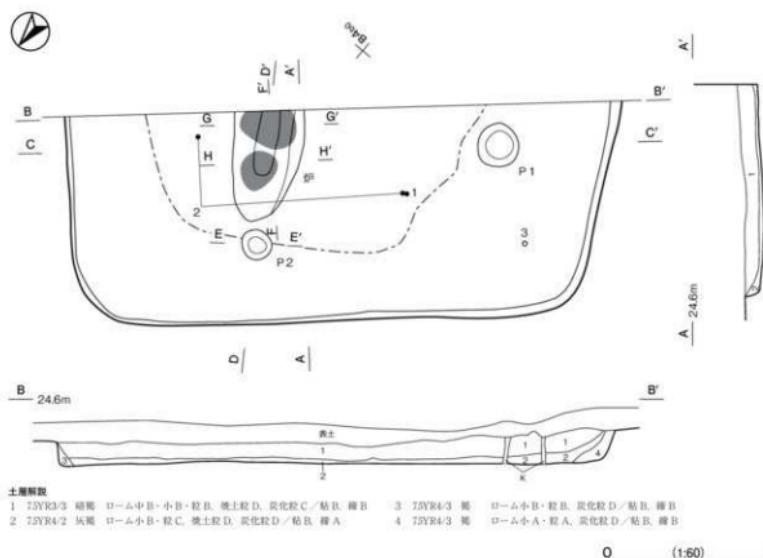
第 12 号竪穴建物跡（第 118・119 図 PL19）

位置 調査区中央部の B 4 a9 区, 標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外へ延びているため, 東西軸 682 m, 南北軸 2.62 m しか確認できなかった。主軸方向は N - 39° - W の方角または長方形と推定できる。壁は高さ 15 ~ 30cm で, 直立している。

床 平坦で, 中央部から炉周辺にかけて, 踏み固められている。

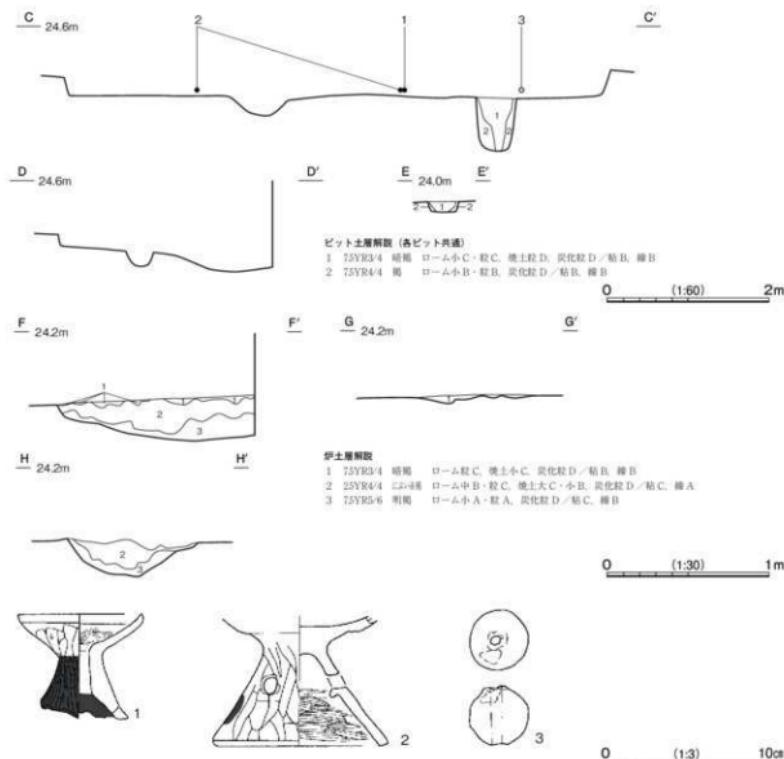
炉 北コーナ部寄りに付設されている。南北軸 140cm, 東西軸 76cm しか確認できなかった。床面から深さ 26 cm ほど掘りくぼめられた地床炉である。2か所の炉床面を確認し, いずれも火熱を受けて赤変硬化している。



第 118 図 第 12 号竪穴建物跡実測図

ピット 2か所。P 1・P 2は深さ67cm・14cmで、性格は不明である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。



第119図 第12号堅穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片74点（器台6、高环12、壺49、甕類7）、土製品1点（土玉）が出土している。この他に混入した縄文土器片2点、弥生土器片22点が出土している。1・2は中央部、3は北西部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。

第51表 第12号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	文様	特徴	ほか	出土位置	備考
1	土師器	器台	7.7	6.5	—	長石・石英、雲母	にない・黄褐色	普遍	器外表面へナナデ	内面へ2箇所	白部外側へ	覆土下層	60% PL21
2	土師器	高環	—	(7.8)	10.0	長石・石英、赤色粘土	にない・赤褐色	普通	器外表面へナナデ	内面へ2箇所	内面へ3箇所	覆土下層	40% PL21
3	土玉	36~37	3.6	06~07	45.09	長石・石英	—	—	—	—	指頭痕	覆土下層	PL36

第52表 古墳時代堅穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		壁高 (cm)	床面	壁構	内 部 施 設				主な出土遺物	時 期	備 考	
				長軸×短軸 (m)	柱穴				人口	ピット	砂・量	若狭穴				
1	B 2.6	N - 65° - E	長方形	4.88 × (3.00)	34 - 40	平坦	一部	-	-	1	卯2	2	人為	土師器、土製品、石器、金屬製品、木製品	4世紀前葉	
2	C 2.9	N - 33° - W	長方形	8.40 × 7.10	32 - 47	平坦	-	4	1	-	卯1	-	人為	土師器、土製品、石器、炭化材	4世紀前葉	
3	B 3.5	N - 28° - W	長方形	(4.75) × 4.30	10 - 17	平坦	-	-	-	2	卯1	-	人為	土師器、石器	4世紀前葉	
4	B 3.6	N - 33° - W	長方形	2.72 × (2.32)	30 - 38	平坦	-	-	-	1	卯1	-	人為	土師器、石製品	4世紀前葉	
5	B 3.6	N - 51° - W	方形	5.18 × 5.05	22 - 65	平坦	-	4	1	-	卯1	-	人為	土師器、土製品、石器、金屬製品	6世紀後葉	本跡→SK20
6	B 4.0	N - 43° - E	方形	5.14 × 4.92	23 - 32	平坦	-	4	1	3	卯1	1	人為	土師器、土製品	4世紀前葉	
7	B 4.0	N - 6° - W	方形	4.60 × 4.60	26 - 39	平坦	-	4	1	-	卯1	1	人為	土師器、土製品、石器	4世紀前葉	
8	B 4.5	N - 8° - E	長方形	4.40 × (4.26)	12 - 17	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師器、石器	4世紀	
10	A 4.9	N - 35° - W	方形	5.92 × 5.48	6 - 18	平坦	-	4	1	2	卯1	2	人為	土師器、土製品、石器	4世紀後葉	本跡→SK26
11	A 5.1	N - 22° - W	方形	3.98 × 3.70	13 - 20	平坦	-	-	-	-	卯1	1	人為	土師器	4世紀前葉	
12	B 4.9	N - 39° - W	長方形	6.82 × (2.62)	15 - 30	平坦	-	-	-	2	卯1	-	人為	土師器、土製品	4世紀前葉	

(2) 樹種同定

炭化木製品の樹種

埋蔵文化財の保存処理いしかわ

はじめに

本分析調査では、古墳時代の第1号堅穴建物跡の土器類に混じって出土した炭化木製品について樹種同定を実施した。

1 試料

試料は、第1号堅穴建物跡から炭化した状態で出土した木製品1点である。取上時に多数の破片に割れている。破片の一部は接合関係が確認されているが、多くの破片が接合関係不明の状態であった。

試料は、接合関係不明の破片の中から加工痕の不明瞭な破片1点を抽出した。破片は板目板状で2年分の年輪を持ち、樹皮は認められない。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 結果

炭化木製品は、広葉樹のクリに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。

4 考察

第1号堅穴建物跡から出土した炭化木製品は板状を呈し、一方の端部にはほど離ぎの凸部が残り、櫂や鍔の身部分に形状が似ている。取上時に細かな破片となってしまっているが、一部接合・復元できた破片の形状と木取りから、板目取りであった可能性が高い。この炭化木製品は広葉樹のクリに同定された。クリは二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。クリ材の強靱で腐りにくい材質が利用の背景に考えられる。

伊東・山田（2012）のデータベースには、茨城県内で古墳時代の櫂や鍔について樹種同定を実施した例が掲載されていない。一方、東北地方から関東地方にかけての資料をみると、市川橋遺跡（宮城県多賀城市）から出土した古墳時代中期～後期の櫂にクリが確認された例がある。また、元總社寺田遺跡（群馬県前橋市）では、古墳時代前期～後期の組合せ鍔身にクリが確認された例がある。参考までに、茨城県内で古墳時代の資料にクリが確認された例としては、豊郷条里遺跡（鹿島市）の古墳時代中期～後期とされる舟形木製品、武田遺跡群、半分山遺跡、船塚遺跡（ひたちなか市）以上、南小割遺跡（茨城町）の古墳時代中期～後期とされる堅穴建物跡出土炭化材がある。

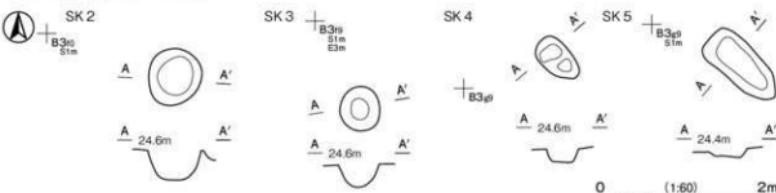
引用文献

- 林 昭三. 1991. 日本産木材 顯微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫. 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31. 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊東隆夫. 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32. 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫. 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33. 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊東隆夫. 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34. 京都大学木質科学研究所. 30-166.
- 伊東隆夫. 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35. 京都大学木質科学研究所. 47-216.
- 鳥地 謙・伊東隆夫. 1982. 図説木材組織. 地球社. 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編). 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修). 海青社. 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

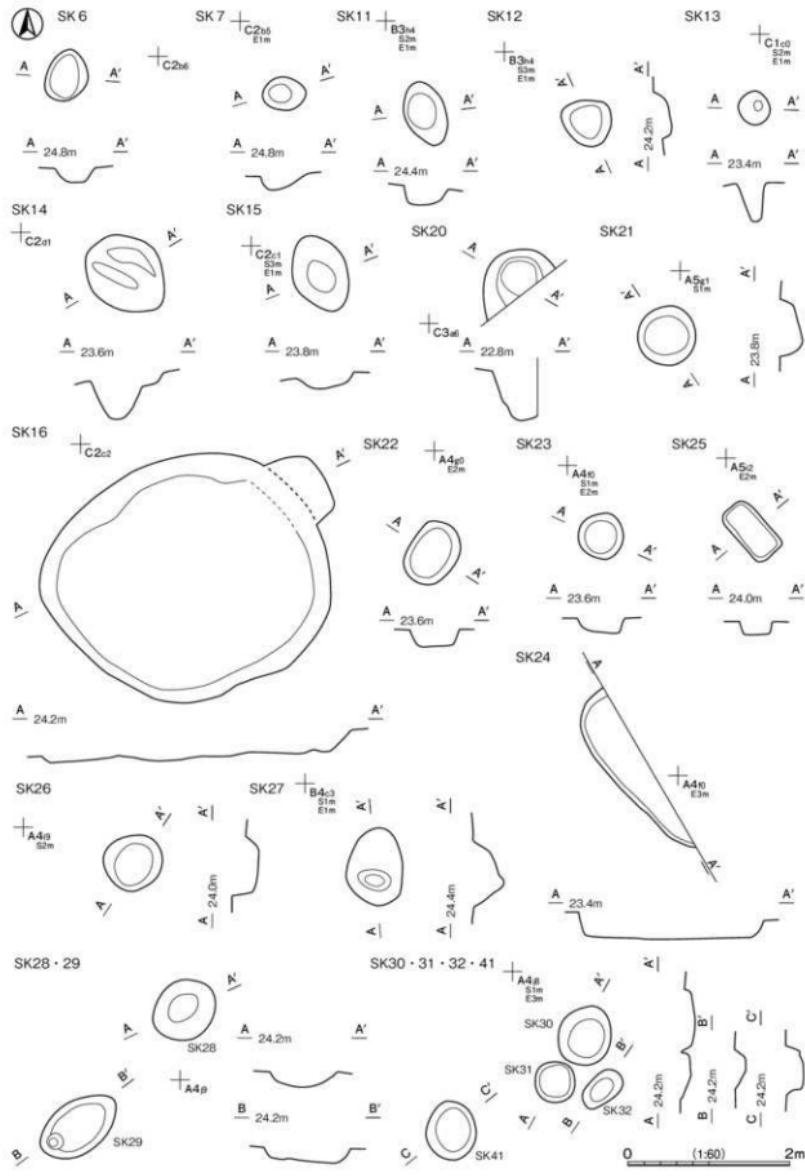
4 時期不明の遺構と遺物

今回の調査で時期や性格が不明な土坑34基を確認した。以下、遺構外出土遺物について記述する。

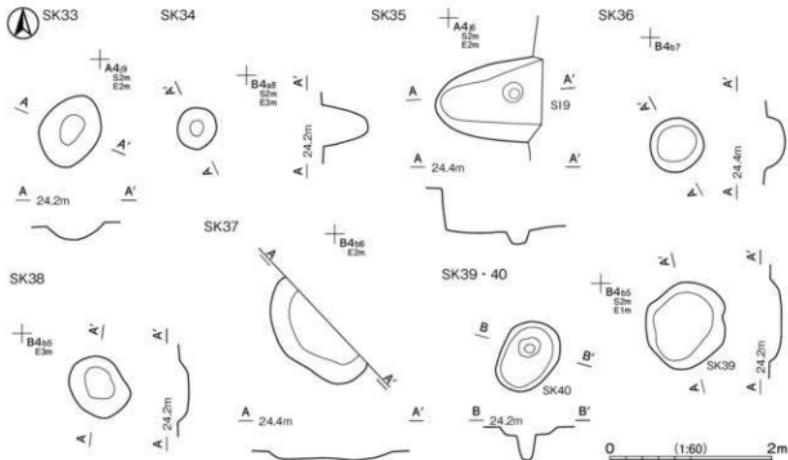
(1) 土坑(第120～122図)



第120図 土坑実測図(1)



第121図 土坑実測図(2)



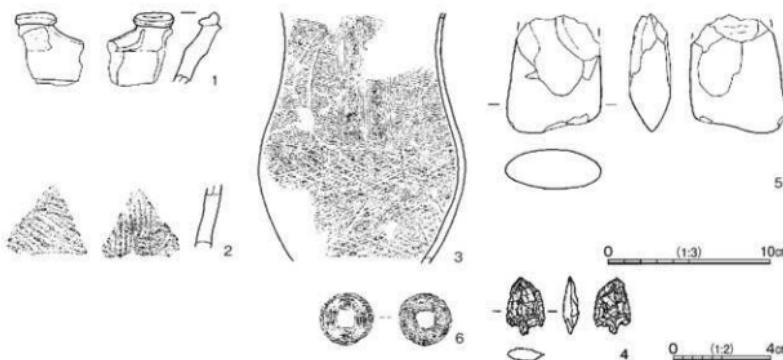
第122図 土坑実測図(3)

第53表 土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	B 3.0	N - 31° - E	椭円形	0.73 × 0.65	34	外傾	皿状	人為	-	
3	B 3.0	N - 11° - W	椭円形	0.55 × 0.49	26	外傾	皿状	人為	-	
4	B 3.9	N - 50° - W	椭円形	0.61 × 0.37	17	外傾	平坦	人為	土師器	
5	B 3.9	N - 45° - W	椭円形	1.06 × 0.45	9	外傾	平坦	人為	-	
6	C 2.65	N - 9° - E	椭円形	0.62 × 0.52	17	外傾	平坦	人為	土師器	
7	C 2.65	N - 71° - E	椭円形	0.53 × 0.40	17	外傾	皿状	人為	绳文土器	
11	B 3.64	N - 16° - W	椭円形	0.81 × 0.52	19 - 23	外傾	平坦	人為	-	
12	B 3.64	-	不整椭円形	0.64 × 0.53	16	外傾	平坦	人為	-	
13	C 1.e0	-	円形	0.40 × 0.39	44	外傾	皿状	人為	土師器	
14	C 2.d1	N - 50° - W	椭円形	1.12 × 0.88	42	外傾	皿状	人為	-	
15	C 2.c1	N - 25° - W	椭円形	1.00 × 0.67	18	外傾	皿状	人為	土師器	
16	C 2.e2	N - 66° - E	不整椭円形	3.78 × 2.90	25	外傾	平坦	人為	绳文土器、土師器、土玉	
20	B 3.6	-	[椭円形]	1.03 × (0.57)	61	外傾	平坦	人為	绳文土器、敲石	SI 5 → 本跡
21	A 4.g0	-	円形	0.75 × 0.73	28	外傾	平坦	人為	土師器	
22	A 4.g0	N - 30° - E	椭円形	0.83 × 0.58	19	外傾	平坦	自然	-	
23	A 4.e0	-	円形	0.56 × 0.57	17	外傾	平坦	自然	洪生土器	
24	A 4.e0	N - 40° - W	[長方瓶]	(2.18) × (0.54)	16	直立	平坦	人為	洪生土器	
25	A 5.12	N - 40° - W	長方形	0.76 × 0.39	15	直立	平坦	人為	-	
26	A 4.19	-	円形	0.72 × 0.69	20 - 23	外傾	平坦	人為	土師器	SI 10 → 本跡
27	B 4.e3	N - 4° - W	椭円形	0.98 × 0.69	38	外傾	皿状	人為	-	
28	A 4.18	N - 26° - E	椭円形	0.83 × 0.72	18	外傾	皿状	自然	-	
29	A 4.18	N - 54° - E	椭円形	1.08 × 0.63	7 - 16	外傾	平坦	人為	-	
30	A 4.18	N - 22° - E	椭円形	0.74 × 0.68	15	外傾	平坦	自然	-	
31	A 4.18	-	円形	0.50 × 0.48	12	外傾	皿状	自然	-	

番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
32	A 4j8	N - 43° - E	椭円形	0.57 × 0.32	13	外傾	凸状	人為	-	
33	A 4j9	N - 22° - E	椭円形	0.90 × 0.72	19	外傾	圓状	自然	-	
34	B 4a8	-	円形	0.52 × 0.50	56	外傾	圓状	人為	-	
35	B 3j6	N - 94° - W	【椭円形】	(1.32) × 0.94	50	直立	平坦	人為	-	SI 9との新旧不明
36	B 4b7	-	円形	0.67 × 0.69	24	外傾	圓状	人為	-	
37	B 4b6	N - 38° - W	【椭円形】	1.52 × (0.68)	11	外傾	平坦	人為	-	
38	B 4b5	N - 31° - W	椭円形	0.78 × 0.63	12	外傾	平坦	人為	-	
39	B 4b5	N - 25° - E	椭円形	1.06 × 1.02	14	外傾	圓状	人為	-	
40	B 4b5	N - 29° - E	椭円形	0.89 × 0.70	30	外傾	平坦	人為	-	
41	A 4j8	N - 6° - W	椭円形	0.72 × 0.64	22	外傾	平坦	人為	弦生土器、土器	

(2) 遺構外出土遺物(第 123 図)



第 123 図 遺構外出土遺物実測図

第 54 表 遺構外出土遺物一覧

番号	種 别	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	繩文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母 に粘・赤褐色	普通	波状C線	円形突起 三叉文	SI 2 覆土中	
2	繩文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面貝殻捺条文	SI 2 覆土中	
3	弦生土器	広口壺	-	(15.4)	-	長石・石英・雲母	普通	波状 水垢 鋸部割加条二種(附加1条)	圓区画 波状文 縫合	SI 1 覆土中 30% PL20	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
4	石鏡	2.34	1.53	0.62	1.83	チャート	両面研磨調整	表土	PL26
5	磨製石斧	(7.3)	(5.9)	(2.5)	(68.25)	緑色岩	刃部は表裏から研ぎ出し一部欠損 表面研磨 基部欠損	表土	

番号	器種	径	孔幅	厚さ	重量	材 質	初鑄年	特 徴	出土位置	備 考
6	瓦永油漬	2.19	0.72	0.09	(1.51)	陶	1636年	断面水	表土	PL26

第4節 総括

1はじめに

並木新田台北遺跡は、平成29年度に調査を行い、竪穴建物跡12棟（弥生時代1・古墳時代11）、土坑41基（縄文時代7・時期不明34）、遺物集中地点1か所（縄文時代）を確認した。当遺跡では、縄文時代前期と弥生時代後期、古墳時代前・後期にかけての人々の生活痕跡をうかがい知ることができた。時期が確定できた遺構は、縄文時代前期の土坑と遺物集中地点、弥生時代後期から古墳時代前・後期の竪穴建物跡であった。本節では、当遺跡が形成された各時期の遺構や遺物の特徴を概観するとともに、古墳時代前期の竪穴建物跡や土器様相と他地域との関わりについて若干の考察を加え、総括とする。

2各時代の様相

(1) 縄文時代

当該期の遺構は土坑7基、生活の痕跡は遺物集中地点1か所を確認した。時期は第1・8・10・17・18号土坑が前期前葉、第19号土坑と遺物集中地点は前期、第9号土坑は詳細な時期は不明である。第1号土坑は調査区の中央部、第8～10・17～19号土坑と第1号遺物集中地点は西部に位置している。出土遺物は黒浜式土器である。第1号遺物集中地点からは被熱窯がまとった状態で出土しており、不要となつた土器や被熱窯の捨て場として利用された場所と考えられる。

(2) 弥生時代

竪穴建物跡1棟を確認した。第9号竪穴建物跡の規模は長軸7.61m、短軸5.29mの隅丸長方形である。床面の中央部から南部にかけて硬化面を確認した。主柱穴は4か所で、南側中央で建物の内部方向へ傾斜して掘り込まれた出入口施設に伴う柱穴も確認した。また、主柱穴の形状が建物跡の主軸方向と直交する楕円形を呈しており、つくば市明石遺跡¹⁾や東茨城郡大洗町毘釜遺跡²⁾、千天遺跡³⁾で確認されている形狀と酷似している。この特徴は、後期の大型の竪穴建物跡に比較的見られる傾向がある。

出土土器は、頭部下端が無文で胴部に附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成が施されたもの（第93図1）や複合口縁で頭部に櫛歯状工具による波状文が施文されたもの（第93図2）、口縁部に附加条一種（附加2条）縄文と2列の刺突文の間に貼瘤を持つもの（第93図3）が確認されている。口縁部に貼瘤を持つものは、土浦市原田北遺跡や根鹿北遺跡から出土している上稻吉式の系譜の土器に類似している。羽状縄文と櫛文の構成は、県西地域で出土例が多い二軒屋式の影響を受けた土器で、胎土に長石と石英が多く含まれていることから在地で作られたものと考えられる。時期は、後期後半である。

(3) 古墳時代

当該期の遺構は、前期の竪穴建物跡10棟と後期の竪穴建物跡1棟を確認している。隣接する並木新田台遺跡では、旧美野里町教育委員会が昭和61年（1986）に発掘調査を行っており、前期の竪穴建物跡8棟と後期の竪穴建物跡2棟を確認している⁴⁾。当遺跡の集落が形成された時期は、並木新田台遺跡と同時期と推定される。

ここでは、前期の4世紀前葉、後期の6世紀後葉の2期の竪穴建物跡の特徴と土器様相を中心に概観する。また、竪穴建物跡の規模を便宜上、床面積によって大型（51～80m²）・中型（21～50m²）・小型（20m²以下）に分類した。

① 古墳時代前期（4世紀前葉）

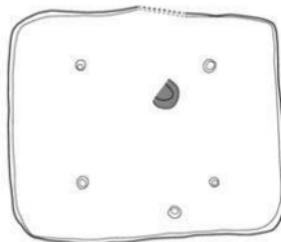
当該期の堅穴建物跡は、第1～4・6～8・10～12号堅穴建物跡が該当する。同一の台地上に形成された並木新田台遺跡においても同時期の堅穴建物跡8棟を確認しており、この時期に当遺跡一帯において集落が拡大したものと思われる。

堅穴建物跡の規模は大型が第2号堅穴建物跡の1棟、中型が第3・6・7・10号堅穴建物跡の4棟、小型が第11号堅穴建物跡の1棟である。造構が調査区域外に延びている第1・8・12号堅穴建物跡は中型、第4号堅穴建物跡は小型と推定される。平面形は第2号堅穴建物跡が長方形、第7・11号堅穴建物跡が方形で、その他は方形または長方形と推定できる。前葉以降になるとコーナー部の丸みが無くなり、方形ないし長方形の平面形となる傾向がある。主軸方向は、真北から東へ振れているものが第1・6・8号堅穴建物跡の3棟で、その他の7棟は西に振れている。炉は9棟で確認でき、いずれも中央部やや壁寄りに位置している。貯蔵穴は第1・6・7・10・11号堅穴建物跡の5棟に備わっている。当遺跡の堅穴建物跡は、規模が小型から大型で炉と貯蔵穴を備えたものと、規模が小型で炉のみのものであり、この特徴は稲敷郡阿見町薬師入遺跡の中葉の堅穴建物跡の様相と合致している⁵⁾。また、市内の並木新田台遺跡や出崎遺跡⁶⁾では明確な柱穴を持たない堅穴建物跡が確認されており、当遺跡でも6棟が該当している。さらに、床面が貼床で構築されていた第6・7・10号堅穴建物跡は、主柱穴から壁際にかけて溝状に回る掘方であるのが構造上の特徴である。坂東市宮内遺跡からも類似したものが確認されている⁷⁾。

古墳時代前期前葉



SI 2



古墳時代前期中葉



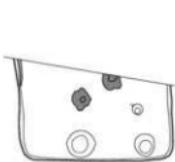
SI 1



SI 3

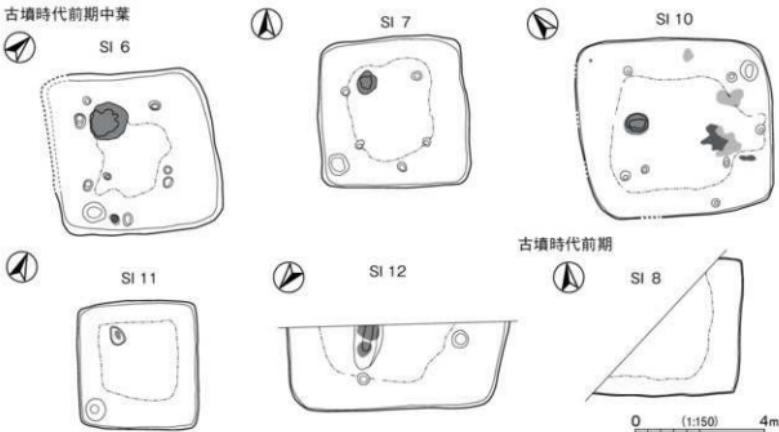


SI 4



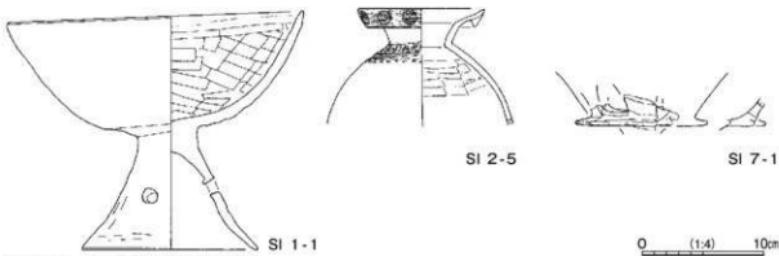
0 (1:150) 4m

第124図 前期の堅穴建物跡(1)



第125図 前期の堅穴建物跡(2)

当該期の堅穴建物跡からは、特徴のある遺物が出土している。第1号堅穴建物跡の土師器の高坏（第126図SI 1-1）は、坏部が大きく、下端に稜を有したもので、第7号堅穴建物跡からも下端に稜を有し、一部赤彩痕がある土師器の高坏の坏部のみが出土している。いずれも器形の特徴から元屋敷系のもの⁸⁾と思われる。並木新田台遺跡の第1号堅穴建物跡からも同様の高坏が出土し、第9号堅穴建物跡からは下端に稜を有した高坏の坏部のみが出土している⁹⁾。第2号堅穴建物跡からはバレススタイル壺（第126図SI 2-5）が出土している。口唇部を折り返し、口縁部に櫛描文が施され、円状に赤彩されている。体部上端に櫛描直線、流水文、列点文が横位に連なる。並木新田台遺跡の第9号堅穴建物跡から出土した土師器の壺の口縁部の破片にも同様の特徴が見られる¹⁰⁾。2遺跡で確認された高坏と壺はいずれも東海地方の土器の様相¹¹⁾を示しており、模倣したものと考えられる。また、第7号堅穴建物跡からは器受部上端と台部が欠損した装飾器台（第126図SI 7-1）が出土している。並木新田台遺跡の第10号堅穴建物跡からも装飾器台¹²⁾が出土し、透かし孔の形状は異なるが、器受部下端が張り出す形状が類似していることから同時期に使用されていたと推測される。いずれも北陸系の特徴がある器台¹³⁾である。出土している土器様相から、当地域においては他地域からの影響を受けた生活様式の痕跡をうかがい知ることができる。



第126図 前期前葉から中葉の土器

② 古墳時代後期（6世紀後葉）

第5号竪穴建物跡が該当する。当調査区の中央部に位置しており、規模は中型である。隣接する並木新田台遺跡からは同時期の竪穴建物跡2棟が確認されている。2棟は南東に約250m離れた同一の台地上に位置していることから、集落が南東へ広がっていたものと推定できる。

主な出土遺物は土師器の壺、壺、甕、土製品の支脚、土玉のほか、金属製品の鎌が出土している。

3 おわりに

並木新台北遺跡は、隣接する並木新田台遺跡と同じ台地上に位置する遺跡である。縄文時代前期から当地域で人々が生活を始めた痕跡がうかがえる。弥生時代後期後葉に集落が形成され、古墳時代前期に集落が最盛期を迎えた後に集落が廃絶されたが、古墳時代後期に再び集落が営まれるようになった。当地域は弥生時代後期から他地域の文化の影響を受けた人々によって集落が形成され、古墳時代前期以降も他地域の人々との交流が行われながら生活が営まれていたことが分かった。今後は資料の増加を待ち、当地域の人々の生活様相や集落の変遷についてさらなる解明ができるることを期待したい。

註

- 1) 江原美奈子『明石遺跡2 主要地方道路つくば真岡線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第413集 2016年3月
- 2) 天野早苗『鉢釜遺跡 行人塚遺跡 都市計画道路駅前海岸線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第421集 2018年3月
- 3) 寺内久永『千天遺跡 主要地方道大洗友部線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第384集 2014年3月
- 4) 海老沢稔・佐々木義則・野坂後之『並木新田台遺跡』美野里町教育委員会 1988年3月
- 5) 駒澤悦郎『樂師入道跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第239集 2005年3月
- 6) 駒澤悦郎『出崎遺跡 一般県道上総古宮間線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第236集 2005年3月
- 7) 小林和彦・宮崎剛『宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第359集 2012年3月
- 8) 土本典生『元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』一宮市埋蔵文化財調査報告4 2004年3月
- 9) 註4) に同じ
- 10) 註4) に同じ
- 11) 比田井克仁『関東における古墳出現期の変革』雄山閣 2001年7月
- 12) 註4) に同じ
- 13) 比田井克仁『古墳出現期の土器交流とその原理』雄山閣 2004年8月

写 真 図 版

館 野 遺 跡
並木新田台北遺跡



館野遺跡出土土器（繩文時代中期）

PL1



調査区遠景（北西から）



第1号遺物包含層



第4号竖穴建物跡



第5号竖穴建物跡



第7号竖穴建物跡



第9号竖穴建物跡 炉遺物出土状況



第9号竖穴建物跡



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況



第10号竖穴建物跡



第13号竖穴建物跡

PL3



第4号土坑 遺物出土状況



第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第9号土坑 土層断面



第9号土坑



第10号土坑 遺物出土状況（1）



第10号土坑 遺物出土状況（2）



第11号土坑



第22号土坑



第38号土坑 遗物出土状况



第38号土坑



第44号土坑



第54号土坑 遗物出土状况



第61号土坑



第101号土坑 遗物出土状况

PL5



第1号竪穴建物跡 遺物出土状況



第1号竪穴建物跡



第2号竪穴建物跡 遺物出土状況



第2号竪穴建物跡



第3号竪穴建物跡



第6号竪穴建物跡 窑



第8号竪穴建物跡



第11号竪穴建物跡 遺物出土状況



第11号竪穴建物跡



第12号竪穴建物跡



第14号竪穴建物跡 遺物出土状況



第14号竪穴建物跡



第15号竪穴建物跡



第16号竪穴建物跡



第17号竪穴建物跡



第18号竪穴建物跡

PL7



第10号竪穴建物跡、第38号土坑出土土器

PL8



SK10-3



HG 1-61



SI 10-8



SI 10-6



SI 10-1



SI 10-2

第10号竖穴建物跡，第10号土坑，第1号遗物包含層出土土器

PL9



SK5-1



HG1-41



SK38-2



SK6-2

第5・6・38号土坑，第1号遺物包含層出土土器



SI 9-3



SI 7-2



SI 5-2



SI 9-1



SI 7-3



SI 4-1



SI 5-4



SI 5-1



SI 10-11



SI 4-3



SI 10-9

PL11



第4・6・9・11・38・54号土坑、遺構外出土土器

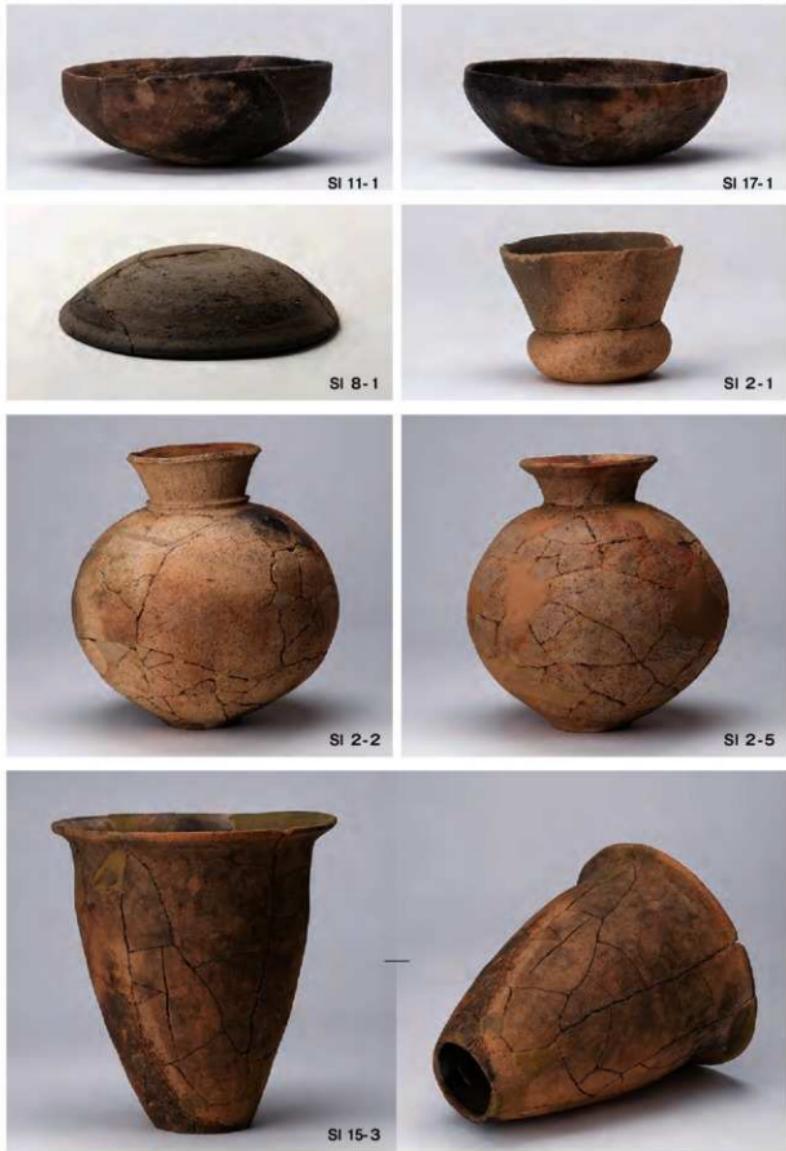


第1号遗物包含层出土土器

PL13



第5・9・10号竪穴建物跡、第6・10・54号土坑、第1号遺物包含層出土遺物



第2·8·11·15·17号竖穴建物跡出土土器

PL15



SI 2-3



SI 11-2



SI 1-2



SI 6-1

第1・2・6・11号竪穴建物跡出土遺物

PL16



調査区遠景（北西から）



調査区全景

PL17



第1号土坑 遺物出土狀況



第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第17号土坑



第18号土坑



第19号土坑



第1号遺物集中地点 遺物出土狀況



第9号竖穴建物跡 遺物出土状況



第9号竖穴建物跡



第1号竖穴建物跡 遺物出土状況



第1号竖穴建物跡



第2号竖穴建物跡 遺物出土状況



第2号竖穴建物跡



第3号竖穴建物跡



第4号竖穴建物跡

PL19



第5号竪穴建物跡



第6号竪穴建物跡



第7号竪穴建物跡 遺物出土状況



第7号竪穴建物跡



第8号竪穴建物跡



第10号竪穴建物跡



第11号竪穴建物跡



第12号竪穴建物跡

PL20



第9号竪穴建物跡、遺構外出土土器、古墳時代前期土器集合

PL21



SI 12-1



SI 3-1



SI 12-2



SI 7-3



SI 1-1

第1・3・7・12号竪穴建物跡出土土器



SI 2-3



SI 2-5



SI 10-2



SI 7-5



SI 1-2



SI 2-6

第1·2·7·10号竖穴建物跡出土土器

PL23



SI 10-1



SI 7-7



SI 7-6



SI 11-1



SI 3-2



SI 7-12

第3・7・10・11号竪穴建物跡出土土器

PL24



SI 7-14



SI 7-13



SI 7-8



SI 5-1



SI 7-16



SI 7-15

第5·7号竖穴建物跡出土土器

PL25



SI 6-4



SI 6-5



SI 6-6



SI 11-3



SI 4-2



SI 7-1



SI 6-1



第4・6・7・11号竪穴建物跡出土土器



第1・4~7・9・10・12号竪穴建物跡、遺構外出土遺物

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 OS Microsoft Windows 10 Pro
編集 Adobe InDesign CC
図版作成 Adobe Illustrator CC
写真調整 Adobe Photoshop CC
Scanning EPSON DS-G2000
使用Font OpenType リュウミンPro L-KL, 太ゴB101 Pro Bold
見出ミンMA31 Pro, 太ミンA101 Pro Bold
中ゴシックBBB Pro Medium
写 真 線数 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CCでレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第451集

小美玉市

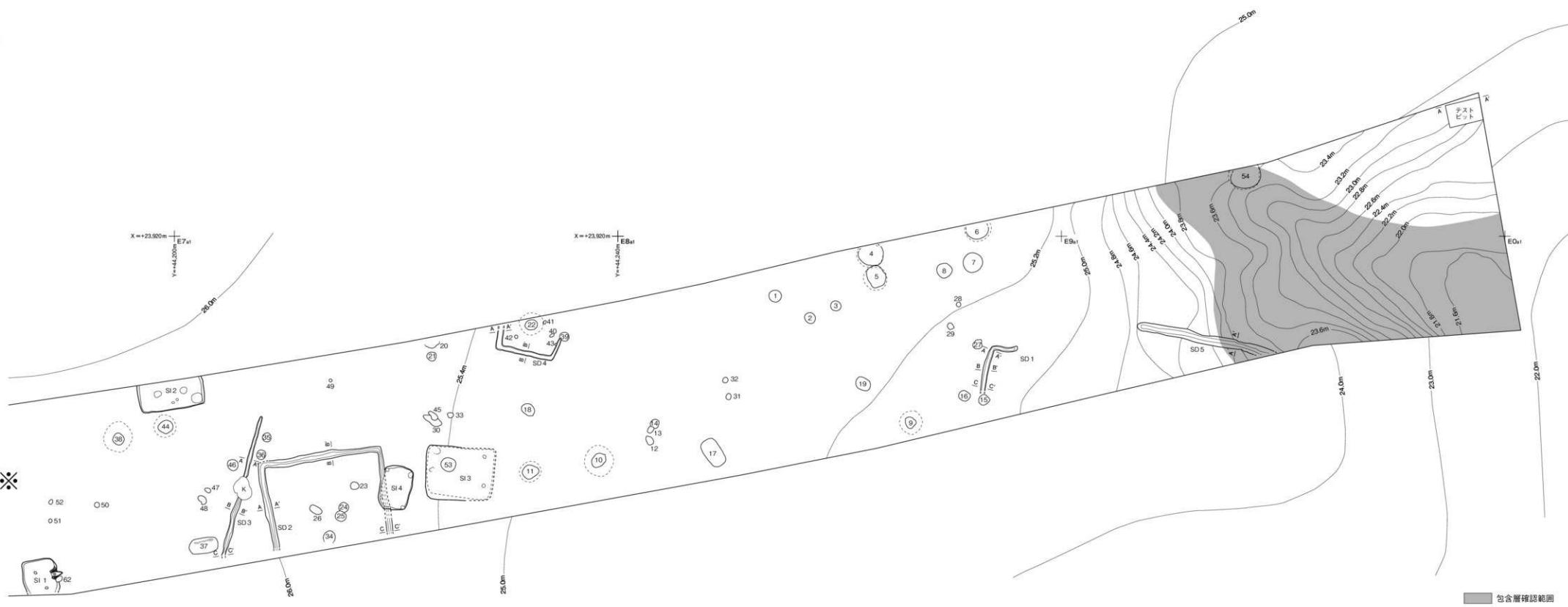
館 野 遺 跡 並木新田台北遺跡

(仮)常磐道石岡小美玉スマートICと
茨城空港を結ぶ道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

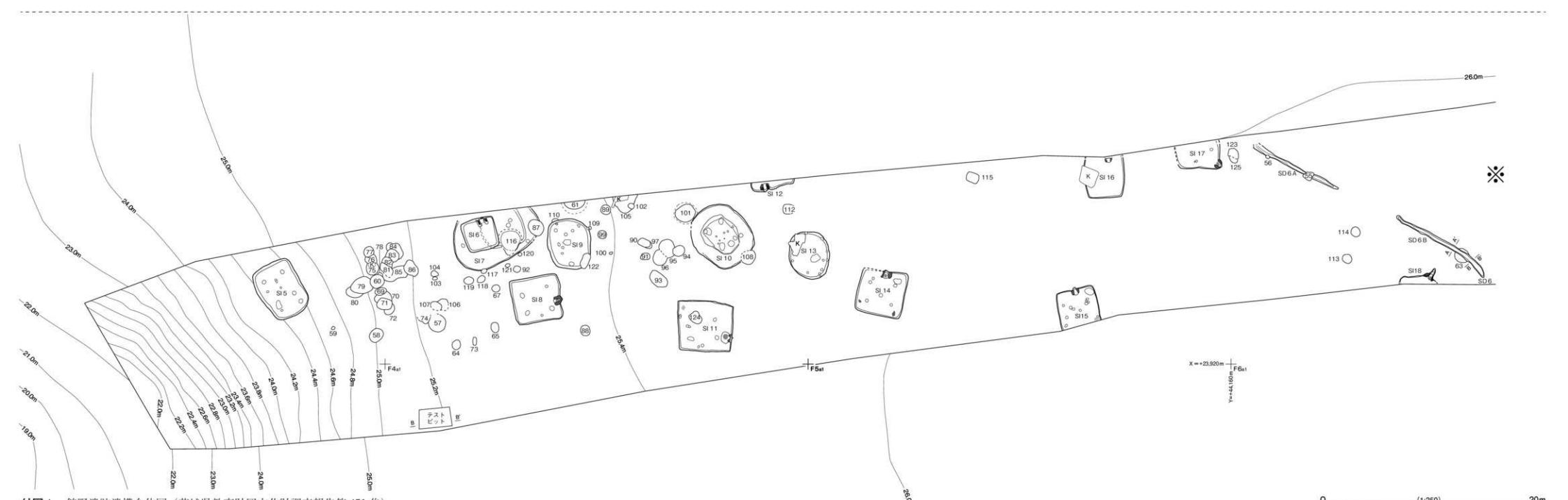
令和3(2021)年3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

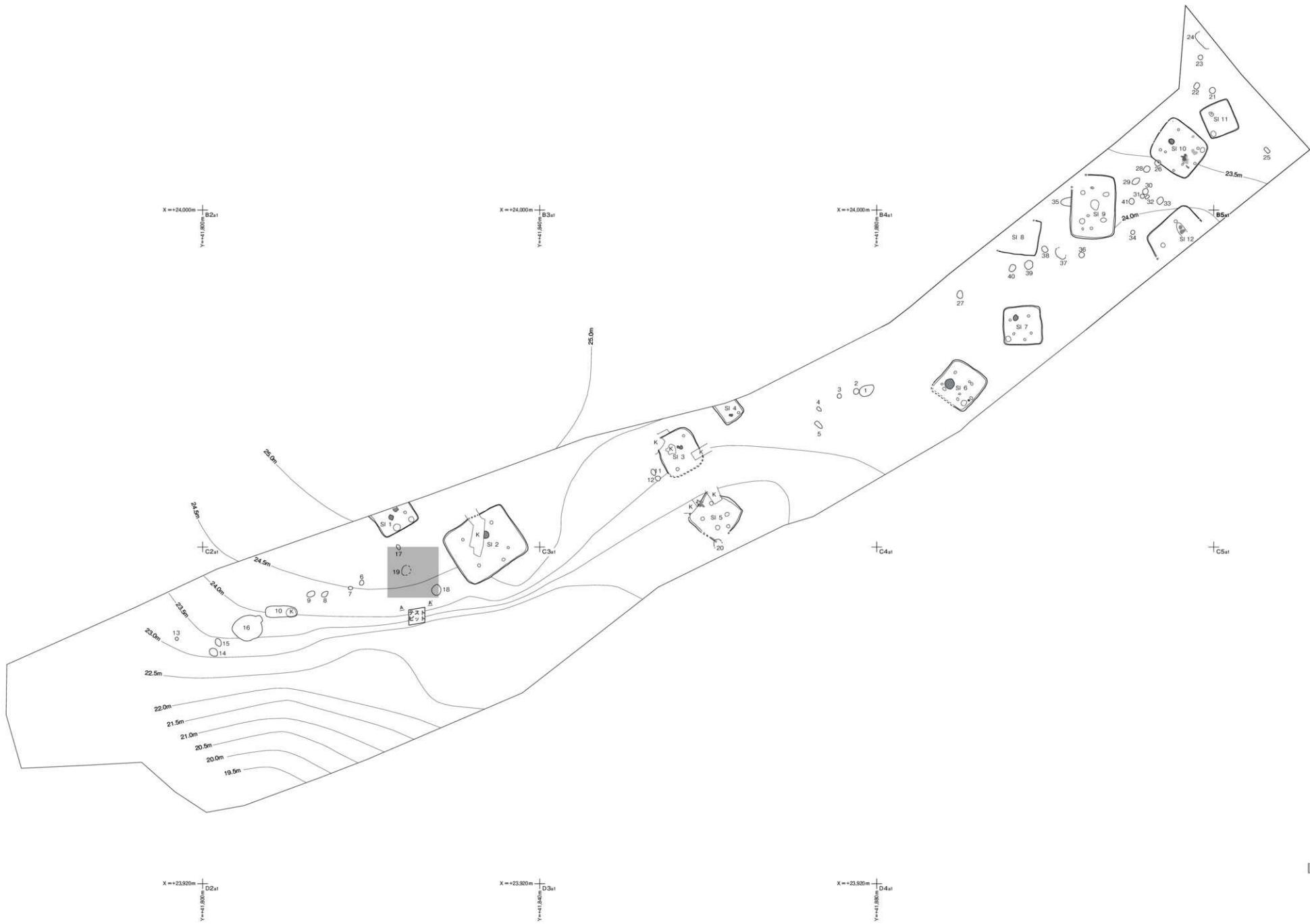
印刷 八幡印刷株式会社
〒310-0911 水戸市見和3丁目1528-38
TEL 0120-23-1473



包含層確認範囲



付図1 館野遺跡遺構全体図（茨城県教育財團文化財調査報告第451集）



付図2 並木新台北遺跡遺構全体図（茨城県教育財团文化財調査報告第451集）